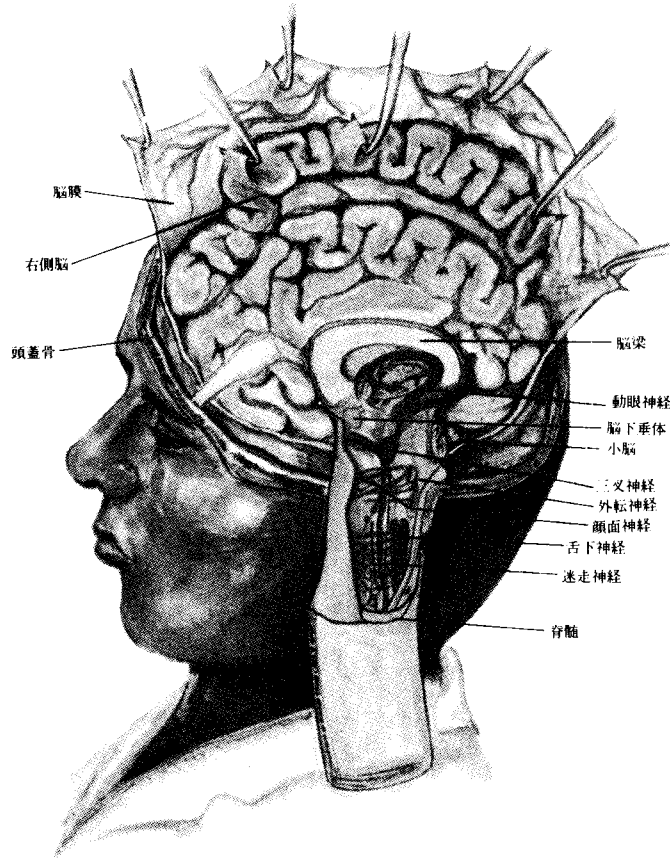
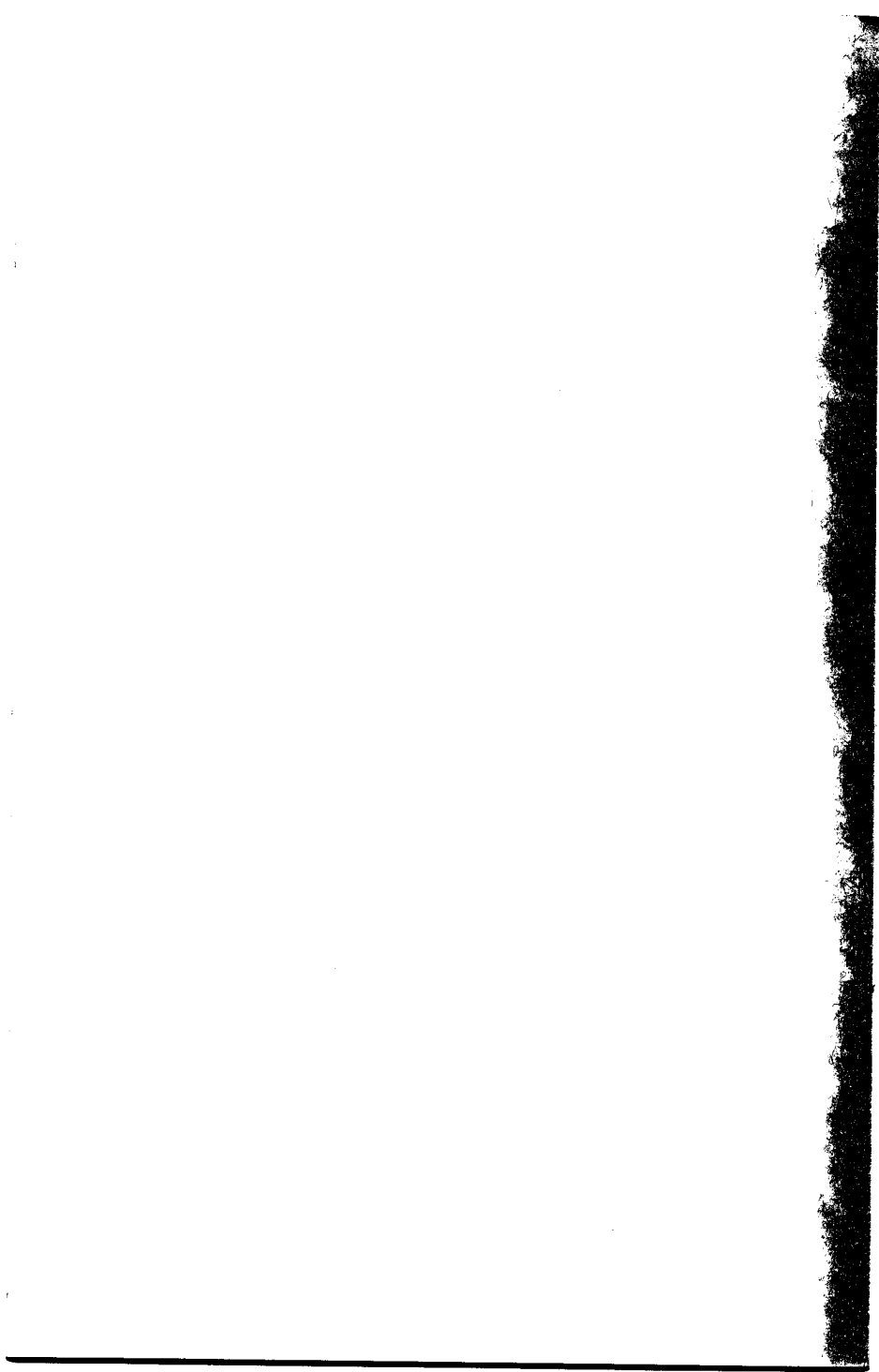


薬も注射も使わない西洋医学の治療法

「登校拒否・出勤不能」



日本癒導医学研究所・所長  
富永 修侃著



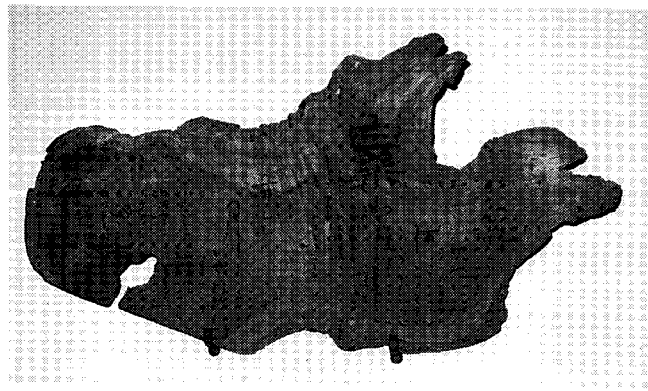


癒導医学（自律神経活性化療法）創始者・講道館柔道八段・祖父今村喜太郎・先生





岩倉 具視 翁



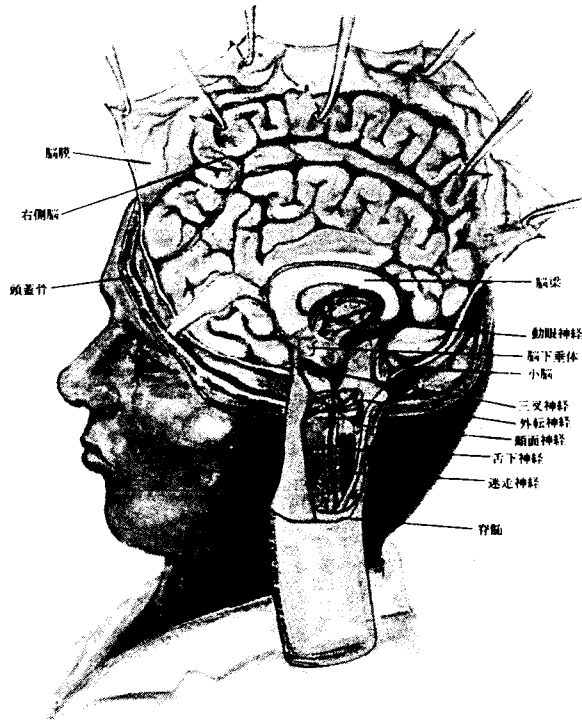
岩倉具視翁より今村喜太郎先生へ贈られたもの

(生前、今村整骨院の診療室にかけられていたもの。長女房江氏より贈る)

---

— 薬も注射も使わない西洋医学の治療法 —

「登校拒否・出勤不能」



富永修侃 著

---

目次

まえがき..... 11

序 章 現代人の憂うつ

企業戦士も病んでいる..... 16  
子供を取り巻く社会全体に責任が..... 19

第一章 実例集

▼登校拒否 ケース1 奇妙な声が止まらない..... 24  
「こんな病気でも治るんでしょっか?」..... 24  
癒導医学は薬を使わない西洋医学..... 27  
原因は友達夫婦の両親に..... 32

▼就業拒否 ケース1 強迫神経症のオーナー..... 35  
薬の効果もなくなつて..... 35  
交感神経緊張の症状とは..... 40  
病気を克服する覚悟と心構え..... 44  
経営者も労働基準法を厳守..... 47

▼出社拒否 ケース1 ベテラン銀行員のうつ病..... 54  
自分を管理できない娘さん..... 54

窓口業務と嫉の違い……………	60
社会生活の作法を教える嫉……………	64
治すためのルール……………	68
▼登校拒否 ケース2 幻聴を聞く初期の精神分裂病……………	75
独り言を言う小学生のS君……………	75
「我慢」の嫉からの逃避……………	79
▼登校拒否 ケース3 受験戦争中の青年期精神障害……………	84
喜怒哀楽が感じられない……………	84
三ヶ月で改善……………	90
親のエゴが選択の道を閉ざす……………	94
▼登校拒否 ケース4 自閉症の母親を持った子……………	98
男の子は口数が少ない……………	98
自宅治療は父親も参加して……………	102
上手な親離れ子離れ……………	105
▼登校拒否 ケース5 精神の安定が図れない思春期精神病……………	109
そう状態とうつ状態がくると交替……………	109
暗示にかかりやすいのが特徴……………	114
親の生き方が問われる病気……………	119
▼登校拒否 ケース6 医者のおの進路を変えさせた自律神経の機能低下……………	127
せっかく国家試験をパスしたのに……………	127



生涯を通じた健康管理が必要	132
▼登校拒否 ケース7 スポーツのやりすぎで自律神経の機能低下	136
目が座った少年	140
筋肉を酷使すれば神経も	143
▼登校拒否 ケース8 塾での詰め込み教育が分裂病の引きがねに	143
出口なしの完全主義者	147
ビリで卒業するつもりで	151
横並びの価値観は変換が必要	154
▼就業拒否 ケース2 父親に依存し過ぎた農家の跡継ぎ	154
心に凶暴な感情が渦巻いて	161
再発の防止のための癒導医学とおつき合い	164
▼会話拒否 ケース1 まったく喋らない子	164
父親のストレスが子供に	167
治療が必要なのは父親	171
▼登校拒否 ケース9 元氣過ぎる子は親がチェックを	171
交感神経を興奮させ続けると	174
言葉を取り戻すために	178
言葉のリハビリ	182
▼就業拒否 ケース3 支配的、自己中心的な性格で自律神経失調症に	182
優越感では病人は救えない	182

医療もサービスマン業……………	187
▼就業拒否 ケース4 過剰な期待が心身症をもたらした 背伸びした二代目社長の受難……………	192
症状が消えただけでは完治ではない……………	197
▼登校拒否 ケース10 父性欠如が子供の精神障害をつくる 人生の偏食……………	204
父親の教育のポイント……………	211
▼出社拒否 ケース2 自律神経失調症の母親のもとでの教育 若いときの自律神経失調症を放置すると……………	216
思春期精神病と両親との関わり……………	222
▼登校拒否 ケース11 自己治癒能力もない心の病 目に見える変化がないだけに……………	229
心の病気が治りにくいわけ……………	233
▼出社拒否 ケース3 手指は頭脳に接続された優秀な治療機器 一筋縄ではいかない心の病……………	240
癒導医学は原因を徹底的に取る原因療法……………	248
<b>第二章 登校拒否、出社拒否の背景と原因</b>	
▼夫婦の軋轢が子供に向けられて……………	254
子供に起因する場合……………	255

親に起因する場合.....	258
▼「 <b>特殊人</b> 」の躰と教育.....	263
ピーターパン症候群をつくる躰.....	263
「 <b>特殊人</b> 」がつくる登校拒否.....	269
▼「 <b>特殊人</b> 」とは.....	274
全般的特性.....	275
特殊人のタイプ.....	276
▼「 <b>特殊人</b> 」をつくる不満の構造.....	280
不満は社会の原動力.....	281
生れつきの不満.....	282
年齢による不満.....	284
職業による不満.....	285
国内の南北問題.....	287
夫婦間の不満.....	288
<b>第三章 心と体の接点</b>	
▼心と体のバランスのために.....	294
健康は自律神経の働き.....	294
大脳皮質は直接の自己表現.....	296
社会のルールづくりをする大脳皮質.....	297

大脑皮質の働きが低下したとき.....	300
▼ <b>癒導医学とは</b> .....	304
自律神経失調症のメカニズム.....	304
自律神経強化のために.....	307
自然治癒能力を引き出す癒導医学.....	310
▼ <b>カルテより</b> .....	315
園芸農家を経営する四十八歳の男性.....	316
うつ病と言われ薬を飲んでいる三十五歳の主婦.....	319
十四歳の娘さん.....	327
大きな会社のエンジンを開発している三十二歳の男性.....	333
日本料理店の二代目、二十六歳の青年.....	338
店員を二年程でやめた二十六歳の女性.....	341
役所に勤める二十九歳の男性.....	345
二十六歳の男性.....	348
建設機械のオペレーターをやっている三十四歳の男性.....	352
不規則な交通関係の乗務員をしている男性.....	356
北陸地方のある県庁に勤める男性.....	361
命あるかぎり付き人をやりたい.....	365

## まえがき

一般に「登校拒否」といわれる長期欠席児童は、「登校不能」「不登校」といった方が正しい。学校へ行きたくても行けない長期欠席児童は年々増加の一途をたどっている。それに加えて青年層の情緒障害、働き盛りの出社拒否、定年間近の仮面うつ病など、過剰なストレスや不安が引き起こす心の病気が大きな問題になっている。

ともあれ、子供にとって本来学校は楽しい場所であるはずである。それは友達がいるからで、勉強することができるから楽しいという子はほとんどいないだろう。

人間にとって、心を許せる友達がいない人生など考えられない。とくに、子供は目の前の喜びや目標が大切で、大人のように五年、十年先の計画や目標を考えることはない毎日毎日、友達と面白おかしく遊べればそれで満足する。そういう楽しい学校へ行けなくなるといふからは、相当大きな原因が潜んでいるはずである。

登校拒否の子供を見ると、親に対する反発、教師に対する反発が最も多いことが分かる。反発される親や教師の態度に何か病気をつくる原因があるのではないか、と考えるのが当然であろう。それは一体何か。

登校拒否は心の病気である。それを口に出せずに一人で悩み、体調を崩して楽しめるべき学校に登校したくてもできない。それが登校不能、不登校の正体である。心の病気は一見したところ変わったところもなければ、体にも異常は認められない。そのために最初は病気とは信じてもらえないだろう。原因をつくるのが親や教師といった身近な存在だけに、なおつらい病気である。

一方、大人の世界でも「出社拒否」「就業拒否」が問題になっているが、こちらも「不出社」「不就業」の場合がほとんどである。仕事がいやで出社しないのではなく、出社できないのである。かろうじて会社には行けたとしても、会議に出席することができない、人前で意見を発表するのが怖い、営業の仕事なのに人と会うのが気が進まないといった悩みを抱えている。

こうした出社拒否のサラリーマンにしても、最初からこうだったわけではない。それどころか、この病気にかかる人のほとんどが五年、十年のキャリアを持つ有能な社員なのである。それに、もともといやな職種なら最初から他の仕事を選んでいたはずである。

こうした登校拒否、出社拒否、就業拒否などはあたかも本人の怠けぐせのようにいわれ、本人に病気の原因があるというように誤解されてきた部分も多い。しかし、これは心の病気で、ストレス社会では誰がかかってもおかしくない病気であり、また、周囲の一人一人が病気の原

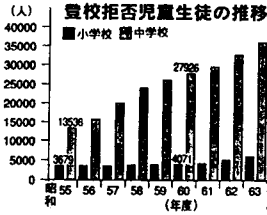
困をつくっているともいえるのである。いわれなき誤解を解き、登校拒否、出社拒否、就業拒否は実は不登校、不出社、不就業であることをはっきりさせるために、この本を出版することにした。

以前から私は心の病気や自律神経失調症の病気について何冊かの本を出版してきた。

そうした患者さんを持つ親御さん、兄弟の方から、今度本書の実例集に掲載したケースが病気に当たるかどうかの相談を多数受けた。

心の病気や自律神経失調症という題名では分かりにくい部分も多いので、本書では具体的な題名で、個々のケースを見ながら解説することにした。本来なら「不登校」「不出社」「不就業」とした病気なのだが、通常使われている「登校拒否」「出社拒否」「就業拒否」という分かりやすい言葉を使ったのは、悩んでいる人たちの目に触れやすくしたいからである。ひいてはこの病気を正しく理解し、患者さんの周囲の人たちの理解を得たいと思ったからである。

# 登校拒否 4万8000人



## 小中学校 史上最多

### 「30日以上」なら倍にも

### 友人関係原因14.5%

小・中学校の登校拒否が急増している。文部省が二十五年度から平成二十一年度の「生徒拒否上の諸問題」の現状調査で、年々増え続ける登校拒否児童・生徒の重症化が明らかになった。学校がいやで登校しないだけでなく、同級生や友人関係が原因で拒否するケースも増えている。調査対象となった「拒否期間が三十日以上」の児童生徒は、二十五年度は前年度より倍増する見込みで、拒否期間が長くなる傾向が顕著である。

平成二十一年度の調査開始から、拒否期間が長くなる傾向が顕著である。調査対象となった「拒否期間が三十日以上」の児童生徒は、二十五年度は前年度より倍増する見込みで、拒否期間が長くなる傾向が顕著である。

拒否期間が長くなる傾向が顕著である。調査対象となった「拒否期間が三十日以上」の児童生徒は、二十五年度は前年度より倍増する見込みで、拒否期間が長くなる傾向が顕著である。

拒否期間が長くなる傾向が顕著である。調査対象となった「拒否期間が三十日以上」の児童生徒は、二十五年度は前年度より倍増する見込みで、拒否期間が長くなる傾向が顕著である。

拒否期間が長くなる傾向が顕著である。調査対象となった「拒否期間が三十日以上」の児童生徒は、二十五年度は前年度より倍増する見込みで、拒否期間が長くなる傾向が顕著である。

拒否期間が長くなる傾向が顕著である。調査対象となった「拒否期間が三十日以上」の児童生徒は、二十五年度は前年度より倍増する見込みで、拒否期間が長くなる傾向が顕著である。

拒否期間が長くなる傾向が顕著である。調査対象となった「拒否期間が三十日以上」の児童生徒は、二十五年度は前年度より倍増する見込みで、拒否期間が長くなる傾向が顕著である。



序  
章

現代人の憂うつ



## ※ 企業戦士も病んでいる

企業戦士たちはいかに職場のストレスに悩まされているかということとはなかなか数字では表されていないが、こんな調査結果が発表されている。社団法人・日本看護協会が上場企業を中心に五十社で「ストレス社会と健康」について調査したのだが、結果は二十歳代の新人社員から五十歳代の管理職までを含めた二百二十三人からの回答で、そのうちの八割が男性である。質問の中で朝起きたときに出勤したくないと思ったことが「よくある」のは一五%、「ときどきある」を含めると七七%に達するという。出社拒否までいなくても、そうした症状は八割の人が経験している。また、死にたいほど悩んだことがあるのは二四%で、四人に一人である。

心に不満を感じたときに精神科を「受診できる」と答えたのはわずかに一七%で、八二%が「できない」と回答している。また、受診した場合、それを「誰にも言わない」のは二七%、「職場の仲間話して理解を求める」は七%である。

職場で心の病について相談できる人が「いる」のは三五%で「いない」が六四%である。次に部下が心の病で入院したら退院後「積極的に受け入れる」上司は一二%で、「大変だが受



「入れなければならぬだろう」が七五%、「できれば戻ってきてほしくない」が一三%である。

また、部下が精神分裂病と診断されたら、他の部下に病名を「隠す」が七〇%、「知らせず」が三〇%。しかし、上司に対しては「知らせる」が八七%で、「隠す」が一%となっている。

大手企業では激しいライバル意識と心の病に対する職場の理解がないために病気を隠さなければならぬし、かといって相談もできない、精神科にも行けない孤独なサラリーマン像が浮かびあがってくる。

こうしたサラリーマン生活を続けた後、いよいよ定年を迎えようとする時期に発症する心の病として最近注目を集めるようになったのが定年前の「仮面うつ病」である。

胃痛、頭痛、めまい、下痢、不眠などの体の不調を訴えて病院に通うサラリーマンが多いのだという。血圧やCTスキャンにも異常が認められず、がん癌や潰瘍かいようの検査にも不審な点が見つからず、精神科の診断を受けてようやく心の病であることに気がつくケースである。

家庭も顧みず、猛烈に仕事をしてきたが定年を前にしてストレスや不安に陥ってしまっている。部下たちは定年前の自分からは離れていき、さりとて帰るべき家庭でも自分の居

場所がない。気がふさがるが、それを気づかれないように無理に明るくふるまっているうちにストレスが溜まり、不定愁訴ふていしゅうそが現れてくる。

こうした背景には肩書きがなくなってしまえばただのおじさん。周囲の受け入れてもらうには病人になるしかないという甘えがいろんな症状をつくり出すといわれている。妻たちは積極的に社会参加したり、趣味や稽古ごとで自分の生きがいをもって生活しているが、置いてきぼりをくった夫たちの居場所がないのである。こうしたストレスがどんどん新しい病気を生み出しているのである。

### ※ 子供を取り巻く社会全体に責任が

学校に行きたくても行けない子供たちも年々増加の一途をたどっている。文部省調査では「学校がらい」で年間五十日以上欠席した児童や生徒の数は一九九〇年度で約四万八千人に達し、うち中学生は四万人を超え、七八年度の約四倍と増え続けていると報告している。生徒全体の一％近い数字である。

文部省の学校不応対策調査研究協力者介護は九〇年には登校拒否は「特定の子の問題」で

はなく、「どの子にも起こりうる問題だ」と、登校拒否などの原因をその子に求めるだけでなく、学校や社会の関わりを踏まえた対策が必要だとしている。

だが、登校拒否は一向に減る気配はない。それどころか、より深刻な状況も見られる。かつての登校拒否から就業拒否となり、自宅に閉じこもって家族とさえ人間関係を絶つ人間拒否の「とじこもり」が問題化してきたからである。

こうした状況を聞いていると、十年前の夏に起こった「戸塚ヨットスクール事件」も起きるべくして起きた事件ということもできるだろう。一九七六年、愛知県知多郡美浜町に開設したヨットスクールの訓練で訓練生三人が死亡、二人が行方不明になった。このスクールでは学校や社会に押しつぶされない精神をつくるためには体罰を伴う厳しい訓練が必要という戸塚校長の主張のもとに、登校拒否や家庭内暴力などの情緒障害児をスパルタ訓練でしごいてきた。

子供たちを否定的に見て、立ち直らせるために強制的にでも治すことに徹してきた矯正訓練きようせいが教育か単なる暴行かをめぐって論議を呼んだ。その後、強制的な教育から規則も時間割りもない自由な私塾で、あるがままの受容の教育を施す施設もできてきた。戸塚ヨットスクールのような体罰がいいのか、自由なあるがままの教育がいいのか、受け入れる側も試行錯誤と模索が続いている。

こうした動きは私の経験から見ても、大変不幸なことだと思う。後に述べるように、子供本人に起因する登校拒否は数えるほどしかないのである。それを子供にだけ矯正を強要してヨットスクールにあずけても、自由な施設に通わせても根本的な解決にはならないのである。

親の生き方、考え方が子供に大きな影響を及ぼすことは周知の事実である。従って、登校拒否は本人の治療はもちろんのこと、子供を取り巻く親、学校、社会が同時に変わっていかなくてはならないものである。家庭内における父親も多くのストレスを抱えて必死に社会に適應しようともがいているのが現状だが、少なくとも、親が口をぬぐって解決する問題ではないことを十分に認識してほしいものである。そのために、私を訪ねてくれた患者さんの実例を紹介しながら、その背景にあるものをつかんでいただきたいと思います。

# 庭とくらし

学校に行かない小中学生の数が年々増え、昨年度は四万人を超えたとこのほど文部省は調査結果を発表した。学力不振や友人関係が主な理由で、生活がきつくなつていってしまうのが四割を占めている。学校の関係者をもとに調査されたもののだが、拒校拒登の子供たちは自らをどのように見ているのだろうか。質問に答えた子供は、拒校拒登の制作によって子供たちの苦悩がリアルに表現された。年齢はさまざまだが、多くは小学校低学年の子供たちだ。

## 登校拒否は「怠け」と違う

拒否の子供たち自身が全国調査



### 「苦しみを知ってほしい」

アンケートを行ったので、各地のリソースを、いじめ拒校拒登の子供たちが受けている。拒校拒登を促進する要因は①体罰・言葉遣い②学力不振③友人関係④生活がきつくなる⑤多動性⑥発達障害⑦認知症⑧身体的障害⑨経済的困難⑩その他(拒校拒登)⑪生活習慣⑫メンタルヘルス⑬その他(拒校拒登)⑭その他(拒校拒登)⑮その他(拒校拒登)⑯その他(拒校拒登)⑰その他(拒校拒登)⑱その他(拒校拒登)⑲その他(拒校拒登)⑳その他(拒校拒登)㉑その他(拒校拒登)㉒その他(拒校拒登)㉓その他(拒校拒登)㉔その他(拒校拒登)㉕その他(拒校拒登)㉖その他(拒校拒登)㉗その他(拒校拒登)㉘その他(拒校拒登)㉙その他(拒校拒登)㉚その他(拒校拒登)㉛その他(拒校拒登)㉜その他(拒校拒登)㉝その他(拒校拒登)㉞その他(拒校拒登)㉟その他(拒校拒登)㊱その他(拒校拒登)㊲その他(拒校拒登)㊳その他(拒校拒登)㊴その他(拒校拒登)㊵その他(拒校拒登)㊶その他(拒校拒登)㊷その他(拒校拒登)㊸その他(拒校拒登)㊹その他(拒校拒登)㊺その他(拒校拒登)㊻その他(拒校拒登)㊼その他(拒校拒登)㊽その他(拒校拒登)㊾その他(拒校拒登)㊿その他(拒校拒登)

「拒校拒登の子どもは、自分自身を苦悩していると感じています。それは、怠けや態度の問題ではなく、苦しみを知ってほしいです。拒校拒登の子供たちは、自分自身を苦悩していると感じています。それは、怠けや態度の問題ではなく、苦しみを知ってほしいです。拒校拒登の子供たちは、自分自身を苦悩していると感じています。それは、怠けや態度の問題ではなく、苦しみを知ってほしいです。」

### 拒校拒登の子どもは半々

「拒校拒登の子どもは、半々です。半分は、苦しみを知ってほしいです。半分は、苦しみを知ってほしいです。拒校拒登の子どもは、半々です。半分は、苦しみを知ってほしいです。半分は、苦しみを知ってほしいです。拒校拒登の子どもは、半々です。半分は、苦しみを知ってほしいです。半分は、苦しみを知ってほしいです。」

### 「苦しみを知ってほしい」

「拒校拒登の子どもは、半々です。半分は、苦しみを知ってほしいです。半分は、苦しみを知ってほしいです。拒校拒登の子どもは、半々です。半分は、苦しみを知ってほしいです。半分は、苦しみを知ってほしいです。拒校拒登の子どもは、半々です。半分は、苦しみを知ってほしいです。半分は、苦しみを知ってほしいです。」

### 悟る

「拒校拒登の子どもは、半々です。半分は、苦しみを知ってほしいです。半分は、苦しみを知ってほしいです。拒校拒登の子どもは、半々です。半分は、苦しみを知ってほしいです。半分は、苦しみを知ってほしいです。拒校拒登の子どもは、半々です。半分は、苦しみを知ってほしいです。半分は、苦しみを知ってほしいです。」

### 非

「拒校拒登の子どもは、半々です。半分は、苦しみを知ってほしいです。半分は、苦しみを知ってほしいです。拒校拒登の子どもは、半々です。半分は、苦しみを知ってほしいです。半分は、苦しみを知ってほしいです。拒校拒登の子どもは、半々です。半分は、苦しみを知ってほしいです。半分は、苦しみを知ってほしいです。」



第一章

実例集



## 奇妙な声が止まらない

※「こんな病気でも治るんでしょうか？」

十二歳、小学校二年生のA君は登校拒否ではなく、はっきりとした登校不能である。それと  
いうのも、A君は奇妙な声が出て止まらないため、学校側からうるさくて授業の妨げになるの  
で、来てもらっては困ると断られているからである。A君もクラスメイトに迷惑がかかるから  
と、学校へは行きたくても行けない状態にあった。A君は学校へ行く意思もあるし、勉強する  
ことも可能なのだが、周囲の人たちへの遠慮から登校できないのだという。A君の学校の成績  
は良い。

その奇妙な声とは三十秒おきくらいに発せられる「キャッ、キャッ」というかん高い声で、  
耳をふさぎたくなる。とても一緒にはいられない。ひどいときには五秒おき、三秒おきに出る。

A君も真っ赤な顔をして一生懸命にこらえようと努力するのだが、止まらない。相談に見えたときも待合室にいると他の患者さんの邪魔になるので、入り口の階段の下の方で、マスクをして待っててもらった。

私の所に相談に見えるまでには、あちこちの大学病院で診察を受けた。だが、治療しても変化はないし、原因も分からなかった。親御さんは「こんな病気も先生の所で治るのでしょうか？」と不安そうに聞かれた。

両親は高校時代の同級生で、非常に仲が良い。今流行りの友達夫婦である。父親は大手テレビ会社の技術畑を歩いてきた人で、物腰の柔らかな、いわゆるお利口さんタイプである。母親は良く気がつく世話やきタイプで、目がクリクリ動いて良くしゃべる。かんだかい声で笑い、非常に明るい感じを受けた。A君は父親似で、奇妙な声を除けば態度は物静かで、落ち着いている。一家は中部地方で社宅住まいをしているという。

私の診たところではA君は自律神経失調症で、体の一部の筋肉が痙攣している状態である。ちよつと痙攣するのと似た現象だといえは分かってもらえるだろうか。現状ではここへ通うにしても、新幹線の車内で乗客の迷惑になることは目に見えている。そこで五、六回の治療が終わるまで車で通ってもらうこと、治療時には一泊してもらうこと、治療を承諾

した。大変であるが、夫婦は交替で車を運転して付き添って来られた。

治療はまず自律神経を鎮めるところから始めた。三回目までは一週間に一度の割合で通ってもらったが、特別な変化はない。それで両親もA君も不安になつたらしい。「本当に治るものでしょうか？」とおそろおそろ聞かれた。しかし、三回目の治療の後で少しでも変化が起きたかどうかを聞いてみた。すると、「そういわれれば夜中に奇妙な声を発することが少なくなつた」といわれた。しかし、昼間は同じだとのこと。ほんのわずかだが、確実に変化してきている。

ここで今度は五日に一度通つて来てもらうようにして、家にいるときは母親に毎日、器具を使って首の部分を治療してやるように指示した。思ったよりも頑固で治りが遅いからである。治療六回目でようやく奇声を発する間隔が一分おきくらいに延びた。A君も両親も効果を認めて「これで救われます」と期待し、感謝された。

これくらい改善されれば、タオルを口にくわえて声を小さくするよう努力してもらえば待合室で待つてもらえたし、かん高い声も多少低くなって耳にキンキン響くようなことはなくなつた。

治療を開始して十二、三回目くらいになると、家ではほとんど声が出なくなった。それでも

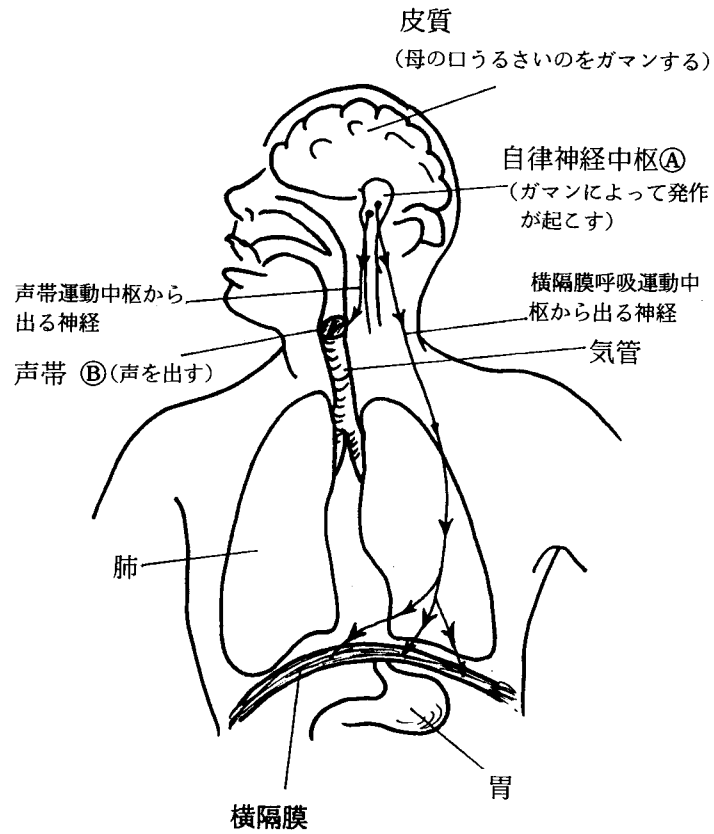
まだ、学校では一時間に数回くらい声が出た。この段階で自毛治療を増やし、一週間に一度通ってもらうことにした。二十回目くらいになるとほとんど奇声を発することもなくなった。A君も呼吸が楽になり、顔の赤味も取れてきた。これで一段落である。親御さんは「非常に助かりました。もう癒導医学しかないと思ってお伺いしたんですが、どこが悪かったんでしょね」と改めて聞かれた。

### ※ 癒導医学は薬を使わない西洋医学

「癒導医学の理論は簡単なことですよ。自律神経系というのは、私たちの意思とは関係なく内臓の働きを自動的に調節して、生命や栄養のバランスをつかさどっています。この自律神経は、一定の間隔で常に信号を発していますが、その信号とは、ちょうど<sup>また</sup>瞼を開け閉めするようなものです。人間の体は、この自律神経系とともに、自分の意思によって体を動かすための神経系があり、同時に大脳皮質からの命令を筋肉に伝えて自由に体を動かせるような仕組みになっています。

声を出す仕組みも同じです。息を吸い込むときは自動的に声帯が広がり、空気の流通を妨げ

# 奇妙な声が止まらない



横隔膜  
正常は収縮、緩むで肺を動かす  
①の発作的電気信号で、けいれんをおこし、  
しゃっくり様に呼吸を押し出すと  
②の連動的収縮で奇妙な声が出る、

ないようになっていきます。しかし、喉の奥や気管に埃が入ったり、急に冷たい空気が入ったりすれば声帯は大変な刺激を受けて急に閉まってしまうです。それに、埃を吐き出そうとして、横隔膜や肺を動かす呼吸の筋肉が急激に収縮痙攣して、反射的に咳が出るし、くしゃみが出るわけです。

A君の場合も自律神経失調のために、埃や冷たい空気が入ったときと同じような痙攣の命令信号が発せられ、声帯が急に閉まってしまうんです。それと同時に、呼吸をする筋肉が急に収縮して空気を吐き出したり吸い込んでいたりしているんです。そのときに奇妙な声が出るわけです。だから、自律神経の働きを正常に戻せば症状も取れて楽になります。こうした症状では、病院の薬で治そうとしても無理だということがお分かりになるでしょう」

「まったくその通りです。いや、不思議ですね。これだけ医学が発達し、薬万能の世の中で、薬で治せない病気があるなんて考えられないことです」

「いえいえそれは違います。先端医療とは何を指すかです。医学にも流行があって、高価な医療機器を駆使した医療だけが脚光を浴びて、地道な研究をして病気を治す人たちにスポットが当たらないだけなのです。それに薬で病気を治すことだけが医学と考えることは大きな間違いです。薬を使わなくてもきちっとした医療ができる病気もありますし、薬を使わない方が良

い場合もあるんです。

私が実施している癩導医学は、昔ながらの医療でもなければ、漢方的や按摩あんま、マッサージ的な医療でもありません。西洋医学の中でも、薬を使わないで治す理学療法といわれるものなのです。日本では明治政府が西洋医学を取り入れたとき、薬を使った薬学療法だけしか取り入れなかったのが、知られる機会がなかっただけで、れっきとした西洋医学なのです。

当時の日本は結核、コレラ、腸チフスといった伝染病が流行し、人の命をどんどん奪っていききました。そうした中で薬の研究がされ、特効薬も開発されました。お陰でこれらの病気も今では恐れられることもなくなりました。大変ありがたいことで、これも薬の威力です。しかし、その当時でもA君のような病気はあつたはずなのですが、命を奪う病気を治すことが先決だったわけです。つまり、命を落とす病気に比べれば、病気とはいえないなかったわけですね。こうした命に関わる病気が一掃された後、ようやく精神的な病気が注目されるようになっただけです。こうした心の病気も将来は薬で治るようになるかもしれませんが、現時点では薬はまったく効果が無いのと同じなのです。

私は薬を否定するわけではありませんし、癩導医学が全ての病気に有効といっているわけでもありません。有効なものであれば何でも使えば良いわけです。ただ、今のところ癩導医学で



しか心の病気は治せないんだということを知ってほしいわけです」

「なるほど、そういうわけですか。ウーン参りましたね。私の知らないことがこの世に存在するということ、それも手品でもなければ何でもない。よく心霊治療とかありますが、あれは頭から手品かトリックだと思っておりましたが、癒導医学も何だかそんな感じがしていたもので…」

「そうかもしれません、全然理屈を知らない人から見れば…。しかし、マジックでごまかしているなら一回、二回の施療で効果が出なければ困るでしょう。マジックかどうかは息子さんに聞いてください」

そんな会話をA君の父親と交わした。

### ＊原因は友達夫婦の両親に

こうしてA君の施療は一段落し、後は自宅施療に切り替えて当初は一日おき、二、三ヵ月後には二日おきに施療してもらうことにした。それから約半年が過ぎた。A君の母親は「運動会するとき、気をつけることは何かあるでしょうか」とか、「遠足するとき気をつけることはあるでしょうか」と、再発を心配して度々質問の電話をかけてこられた。それについてのアドバイスをしながら、何とか一年近くが過ぎた。

ところが夏休みの終わり頃、「また時々声が出るようになったんですが…」という電話を母親からもらった。そこで私は体に負担がかかるような、きついことをしたのではないかと尋ねてみた。すると「そうなんです。夏休みはちょっと具合が良かったものですから、海水浴に行ったりして、人並みなことをやりました。それに勉強が好きなので、遅れを取り戻そうと勉強に力を入れたんです。それで再発したのではないかと思えます」と話された。

私は三回ほど通ってこられるように指導した。自宅施療の方法もこれまでのものと変えてもらった。三回でA君の症状は治まった。

その後、「二年たって特別な変化がなければ完全に治ったと思ってよろしい」とお話した。今年で三年目だが、特別変化はない。再発もしない。ただ、こちらとの連絡を密にして、その後也十分に健康管理に気を配るようにご指導し、A君にもそれなりの注意をするように話した。

A君が心の病気になった大きな原因は両親にある。友達のような夫婦関係は当人たちにとっては良くて、子供の教育にどんな影響を与えるかである。父親はA君に父親としての権威や男の子として指導を適確に行えなかった。また、母親は非常におしゃべりなうえ、子供の先回りをして何でもやってしまう一種の神経症に近い性格を持っている。A君はおとなしい子で、そうした母親をわずらわしいと思って反発していたが、あるときから黙ってイヤイヤながら従うようになった。納得したわけではないが、反発しても仕方ないと諦めたのである。

A君はこうした継続的なストレスが溜まり、くつろぐことができなくなってしまった。ものごとくに過剰に反応するようになり、最終的にはそれが原因で自律神経の失調を起こし、部分的に痙攣発作まで起こすようになってしまったわけである。

治療に見えている間、母親を別室に呼んで夫婦関係のあり方と、子供に対する教育について十分な知識とアドバイスを与えた。父親に対しても夫婦二人だけのときは友達夫婦でもいいが、A君の前では男としての権威をはっきり示すように指導した。その後、A君に両親の様子を聞

いてみたら、「何だかお父さんが強くなったような気がするし、お母さんはおしゃべりが少なくなっような気がする」と答えてくれた。そのうえでA君にはわずらわしい人との上手なつき合い方を話した。

子供にとって、いやなことがあってもストレスを発散する場がない。大人のように大酒を飲むこともできないし、旅行に行くこともできない。ただ、嵐が過ぎるのをジッと待つしかないのである。金魚鉢の金魚が病気になるのは金魚に原因があるのではない。餌のやり方、水の取替え方、日光の当て方、酸素の供給の仕方を管理する人間、つまり親が原因をつくっているのである。それなのに親は自分の管理方法が間違っていたのではないかと反省することもなく、簡単に「この金魚は駄目だ」といってしまう。そこに大きな誤りがあるのである。

就業拒否 ケース1

## 強迫神経症のオーナー

### ※薬の効果もなくなつて

相談には二人でお見えになった。二人が兄弟だと聞くまでは、てっきり親子だと信じ込んでいた。それほど患者さんである三十歳のMさんは老け込んでおられた。それにひきかえ、三つ年下の弟さんは多少丸顔ということもあるが、若々しく見えた。具合の悪いMさんの方は白髪が所々に交じり、少し長めの顔には非常にしわが多く、痩せこけていた。見た目には四十四、五歳だと思われた。

三人兄弟の長兄に当たるMさんは中学生の頃、父親を事故で亡くし、以来、父親代わりということもあって、二人の弟の面倒を見てきた。現金収入は、母親への交通事故の補償金などがあつたが、精神的な一家の拠り所として、家族は長男であるMさんを大黒柱と頼ってきた。

1. 姓名	2. 性别	3. 年龄	4. 民族	5. 籍贯	6. 出生地	7. 文化程度	8. 职业	9. 婚姻状况	10. 政治面貌	11. 宗教信仰	12. 健康状况	13. 特长	14. 其他

本人于 1980 年 10 月 10 日出生，汉族，初中文化，现就读于... 家庭经济状况良好，父母均为务农人员。本人性格开朗，乐于助人，有较强的集体荣誉感。在校期间成绩优异，多次获得校级奖学金。爱好阅读、运动，具备良好的心理素质。特此声明。

姓名: [ ] 性别: [ ] 年龄: [ ] 民族: [ ] 籍贯: [ ] 出生地: [ ] 文化程度: [ ] 职业: [ ] 婚姻状况: [ ] 政治面貌: [ ] 宗教信仰: [ ] 健康状况: [ ] 特长: [ ] 其他: [ ]

本人于 1980 年 10 月 10 日出生，汉族，初中文化，现就读于... 家庭经济状况良好，父母均为务农人员。本人性格开朗，乐于助人，有较强的集体荣誉感。在校期间成绩优异，多次获得校级奖学金。爱好阅读、运动，具备良好的心理素质。特此声明。

特此声明

自定

高等学校を出て以来、Mさんは職場を転々と変えてきたが自分に合う仕事が少ないこと、また、たとえあったとしても、学歴からあまり優遇されなかったことから、自分で商売を始めることになった。

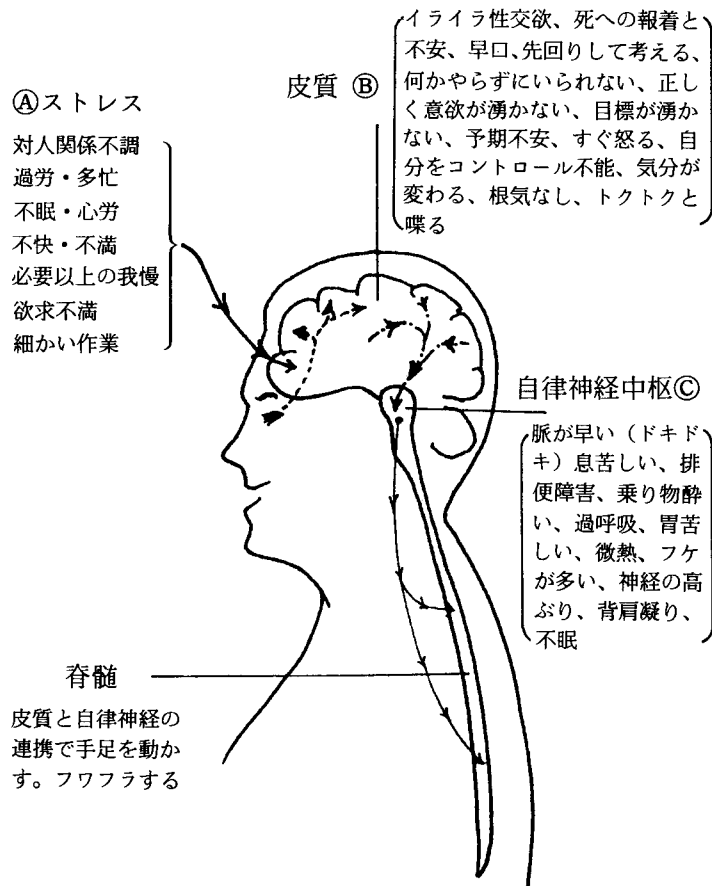
五年が経ってMさんは従業員五、六人の小さな不動産業会社を経営するようになった。経営方針、営業、社員教育、その他もろもろの会社運営のために時間を取られ、それこそ寝食を忘れて一生懸命、舵取り役を果たしてきた。体は頑丈な方で、これまで病氣らしいものは経験したことがないという。

しかし、六十二年の十月頃から何だか体の調子が悪いことを自覚し始めた。六十二年といえば自分で商売を始めた直後に当たる。体調が悪いときは、毎日あった排便が二日ほどなくなったり、これまでになく重い疲労感があったりというものである。会社創設当時なので、当然ながらストレスも多かったはずだ。しかし、上手なストレス発散法も見つからず、それが性生活の場に持ち込まれて、性交は非常に激しいものになったとMさんは言う。しかも、性交の最中にこのまま自分が死んだら家族はどうなるんだろう？ 会社は？ 従業員の生活は？ というように、とりとめのない不安がいつも頭をよぎった。

こうなるとすぐに胸のドキドキが始まり、息苦しくなる。脈を測ってみると百十くらいある。

# 脳が勝手に働くので仕事にならない

(強迫神経症のオーナー)



①の原因で②が疲労、過敏になり、勝手にいろいろ思いついたり、湧いてきたり、何かしたくなったりが生じ③へ影響を来し自律神経に失調が生じる。

②は心や精神状態をつくり③は体の調子、一般に言う健康状態をつくり出す



そして一日中その頻脈が気になり、寝ても起きてもられない状態になった。当然会社にも行けず、仕事も手につかない。

経営者として社員の手前、体の不調を明らかにすることもできず、かといって創設したばかりの会社なので仕事の進行具合も気になる。Mさんは時々様子を見に会社に出かけていた。

Mさんしてみれば、自分が出て行けばまとまると分かっている話も、社員に任せ切りではまとまらない。苛立てば苛立つだけ症状も悪化する。とうとう見るに見かねて弟さんが自分の勤めの傍ら、Mさんの仕事を手伝い始めた。しかし、それも無理がある。一方的にお兄さんの世話になってきた弟さんしてみれば、何とか苦境に立たされたお兄さんの役に立ちたい、手伝えたいとは思っても、二足のわらじでは限界がある。どうにもならないので、一端会社を休業にしようかと迷っている状態だということで相談に来られた。

「お医者様には行かれたんですか？」

「ハイ、もちろんです」

「どのくらいの期間お医者様にかかっておられますか？」

「具合が悪くなって以来、三、四年通院しています」

「飲んでいる薬はどういうものですか？」

「交感神経遮断剤こうかんしんけいしだんざいで、イライラや緊張を鎮めるような薬を飲んでいきます。それから精神安定剤です。眠れないときには睡眠薬も飲んでいきます。この薬も最初のうちは効いていたんですが、最近では飲んでも飲まなくても、何の変化もないので非常に困っています」

Mさんはそう訴えた。そこで弟さんにMさんの症状を聞いてみると、「外からは以前の兄と何の変化もないように思えるんです。とても病気だとは思えません。良く動くし、良く気がつくし、毎日走り回っています」というお話だった。

### ※ 交感神経緊張の症状とは

「交感神経緊張症状の人は、非常に働き者で、早口で、ものごとの先回りをして良く気がつくものです。さらには強迫神経症、つまり何かをやらずにはおれないという精神状態になり、必要でないことにまで手を出してやってしまうものなのです」

そこまでお二人に説明をした後で、弟さんを別の部屋に呼んで質問してみた。

「お兄さんを客観的に見たとき、今説明したような徴候はありませんか？」

「なるほど、そういう目で見ればピタリ当てはまります。しかし、今までは働き者だとい

うふうにしか見ておりませんでしたから、心の病気の一つの症状だとは分かりませんでした。本人も当然、分かっていないと思います」

こうした交感神経緊張症の患者さんには、次のような症状が見られる。

- 1、胸がドキドキして非常に脈が速い。しかし、心電図では何等異常はない。
  - 2、乗り物酔いがひどく、乗り物に乗ると非常に不安になる。
  - 3、過呼吸の発作が生じ、いつもハラハラ、ソワソワ、ドキドキする。
  - 4、歩いているときフワフワして真っ直ぐ歩けない。
  - 5、食事をとった後、胃が非常に苦しくて息ができなくなる。
  - 6、風邪などで熱が出ると、必ず発作が起きる。
  - 7、非常にフケが出る。いくらフケ落としをしても、朝にはフケが出るし、いつも背広の肩にフケが乗っている。
  - 8、コーヒーやお茶を飲むと異常に神経が高ぶる。
  - 9、少し運動しただけで、極端に脈が上がり、首、肩、背中が凝ってくる。
  - 10、全体的に疲労感があり、体力が無くなってくる。
- また、そんなときの心の状態はというと、

- 1、以前に比べて極端に意欲が湧かない。
- 2、将来の目標が出てこない。
- 3、何かしようとする<sup>と</sup>まず心臓がドキドキしないかが気になり、ものごとが手につかない。
- 4、ささいなことで興奮しやすく、すぐ怒り出す。
- 5、自分でも、どうしてこうなんだろうと思いつながら、そういう自分を押さえることができない。

Mさんも、人と会うとまず緊張する。社内の人間関係には支障はないが、緊張感を要求されるセールスや営業、その他の対人折衝<sup>たいじんせつしょう</sup>がまったくできなくなってしまう。いつもソワワ、ドキドキしていて非常に困るという。そのうえ、自分は何のための生まれてきて、何のため死んでいくのかといったつまらないことをいつも考えていて人生を楽しめない。また、遠くへ行くときは非常に不安になり、必ず付き添い<sup>つきずき</sup>を必要とする。買い物などに行くとき、とくにデパートや地下商店街など、人込みの中に入るとすぐ気分が悪くなると訴えた。

さらに、最近は寝つきが悪く、眠りも浅く、そのために疲れが取れない。ちょっとしたことですぐ気分が変わるが、自分でも何故そうなのかは分からない。しかし、総合的に自分を判断してみると、自分のものの考え方や方向性には間違いがなく、正常だと思っていると話される。ただ、こうした判断をする前に体調も、気分もおかしくなるので、まともな考え方をすると

めには大変な努力が必要であって、以前はこういうことはなかったと訴えられた。

私と相談中でも、Mさんは自分がいかに苦しいか、どのように努力して病氣と闘っているかということ、私が質問するまでもなく、とくとくと話される。

私はMさんの目の前にして、弟さんにこう説明した。

「普通、こうした相談の際には聞かれたことのみ患者さんは答えるものです。しかし、お兄さんは聞かれないことまでもベラベラと話しているでしょう。これが交感神経緊張状態における症状なのです。このように理解してください」

弟さんの方を向いてそう話すと、「なるほどそうです。今まではそれを不思議とも考えませんでした。確かにいわれてみればそうですね」と、答えられた。

次にMさんの方を向いて質問した。

「あなたはじっと黙っていられないでしょう。そうなんです。喋らずにいられないんです。それがあなたの病氣だと理解してください。それでも、あなたは私が『あなたは病氣だ』と説明すれば、自分は普通ではないんだと理解できます。その程度ならばお引き受けできますから、これを機会に治してください。そのための方法を私から弟さんに指示しておきますから、弟さんのいわれることは私のいうことだと思って、その指示を守ってください。病氣が重くなると

患者さん自身に説明しておいても、それを実行することができません。そのために、あなたに代わって弟さんに全部お話ししておきます。弟さんの指示に従うことができますか」と、強い口調でMさんに念を押した。

### ※ 病気を克服する覚悟と心構え

さらに、この病気を克服するための覚悟と心構えについて、お二人にお話しした。

「この病気が痛みがあるわけではありません。だからこそ、現にこうして何年も生活してこられたわけです。仕事もできたし、生活もできます。命を落とすことはありません。ということは、無理をして治す必要がない病気ともいえます。それをあえて治すのは、ある意味では贅沢ぜいたくなんだということを忘れないでください。

例えていうと、サラリーマンはバスや電車、地下鉄を乗り継いで通勤しています。通勤地獄という最低の条件であっても、努力すれば何とか目的は達することができます。しかし、雨の日もあれば風の日もあります。また、雪や酷暑こくしよの日もあります。時間通りに来ないバスを待つて早くからバス停に並ばなければならぬ人もありますし、長距離通勤を余儀なくされる人も

います。こうしたいろんな不便があるからこそ、人は車を欲しがります。車を入手できる余裕のある人は、それで通勤しているわけです。しかし、それは贅沢ぜいたくというものでしょう。会社に行く手段は他にもあり、ほとんどのサラリーマンがバスや電車、地下鉄で通勤しているんです。わざわざ自分でお金を出して、さらには借金までして車で通勤するわけですからね。

心の病気や自律神経失調症は、そういう状態に似ています。心の躍動やうどうはないにしても、生きていくにはまったく差し支えないのです。しかし、人並以上に人生を楽しみたい、今まで以上の喜怒哀楽を持ち、人間らしい楽しい生活をしたと願うには、お金と暇をかけて自分を修繕しなければなりません。

国で定めた医療機関は、本来の目的が命を救う、つまり救命です。放置すれば確実に死に至る病気や、他人に伝染する伝染病、交通事故といった場合には保険の適用もあります。しかし、それ以前の病気の場合は自分のお金で、時間をかけて治していかねばならないのです。

警察も同様です。国の税金を使うのは殺人や恐喝、誘拐といった事件が起こってからです。事件が起こる前に捜査を開始するのは、よほどの確証がある場合に限られています。ですから、自分のお金を奪われる心配があるなら、自分でガードマンを雇わなければなりません。同様に、自律神経失調症や心の病気は救命といった性質の病気ではないのです。

心の病が重くなると精神病として診断を下されます。新聞記事を賑わすようなこうした事件は枚挙にいとまがありません。飛行機を故意に落としてみたり、道行く人を何の理由もなく叩いてみたり、信号待ちをしているまったく関係ない他人を次々と刺し殺したりという異常な事件がそれです。こうなると警察は犯人を逮捕して、国のお金で精神病の治療を施すのです。

しかし、そうした犯人の予備軍になりうる可能性があったとしても、そうならないように努力する段階では、他人は何もしてくれないのです。そのへんを理解されるなら、私は治療をお引き受け致しますがどうですか」とお聞きした。

「なるほど、おっしゃることはもっともです。生きては行けるのですから、治さなくて命の危険はありません。しかし、本人は苦しがついて、人間らしい楽しみも何もないのです。仕事をしても、それも一生懸命お金を稼いでいながら、何のために自分が生きているのか、まったく分からなくなってしまっているのです。こんな不幸なことはないと思います。だから、この状態から救ってほしいのです。治りたい一心でお医者へ行っても好転しないし、薬はこれまで効いていたものも効かなくなってしまったのです」

「そうです、薬で治る段階の人はここにはいらっしゃいません。薬で治らなくなった方が半信半疑でいらっしゃるのです。例えばそれがお医者さんの息子さんであってもです。医学部の学



生さんもお見えになります。かえって医学関係の方が薬の限界を知っておられますし、薬以外の方法で治ることがあるということも知っておられます。頭では承知していることでも、それを実際に自分の病気で体験し、完治したときに本当に理解されるのです。あなたも今は当然疑ってかかっていらっしゃるでしょう。それでいいのです。治ったときにこそ信じてください」

「分かりました。それでは治療をお願いします」とお二人は納得され、治療が始まった。私はこの病気に立ち向かうための覚悟と心構えを、きちんと確認しておきたかった。

### ※ 経営者も労働基準法を厳守

手始めは三日間自宅治療の講習で、三日間弟さんにみっちりMさんに対する治療の方法や指示の方法を教え、最終日にこうつけ加えた。

「本人は非常に体が楽になって、何だか別の人の体のようにだとおっしゃっています。しかし、あなた方は三日間の集中治療で病気を治しにいらっしゃったわけではないのです。自宅で治療する際の方法をお教えしただけなのです。三日間で体の具合が相当よくなったのは儲けものだと思います。今後はきちっと本人が私の指示した通りに六ヶ月間生活し、最低でも月に

一度は本人が報告にいらっしゃるか、手紙で状況を知らせていただくかして治療していったときに、初めて良くなっています」とお話し、了解いただいた。

この強迫神経症を持つ心の病気は、私にとっては非常にわずらわしいし、面倒でもある。できることなら治療を断りたいくらいである。以前こんなことがあった。

一年ほど前、高崎に出張したことがある。患者の治療を引き受けるかどうかの判断をするための出張であった。患者は三十歳の主婦で、過去に水商売の経験をもっているが、現在は結婚して小学六年生の子供もいる。

訪問を告げ、部屋に通された途端、患者は座布団を取りにバタバタと走り、次にお茶を入れ、お菓子を並べ、息つく間もなく座りこんで自分の状態をまくし立てた。

それを見たとき、これは大部ひどい状態だな、何も六畳ほどの台所を走り回らなくてもいいのと思った。家の中の調度品は黒と白で統一しており、神経質に整頓してある。

その場でしばらくお話をしたが、私は治療をお断りして帰ってきた。その理由は、治療中にもかかわらずしさを考えたからである。症状が進んでも治せないことはない。しかし、治るまでの間が非常にわずらわしい。しきりに電話をかけてきたり、「まだ治らない」「まだ治らない」とせついたり、苦情めいたことをいってくる。これが強迫神経症的症状と、心の病気の困る

ところである。

こうしたわずらわしさから、Mさんも当初は断ろうと思った。だが、弟さんが今まで面倒を見てくれた恩のある兄が、苦勞し過ぎてこうした病気で苦しんでいる。それを何とかしてやりたいと、じっと目に涙を溜めてお話になるので、私も断りきれず、「あまりわずらわしいと断りますよ」という条件つきでお引き受けることにした。

案の定、心配した通り一日おきに電話がかかってきた。それも本人からで、「心臓がドキドキするのは治るでしょうか?」「今不安で仕方がないんです。どうなんでしょうか?」といった具合で、とにかくわずらわしい。他の患者さんの相談や施療にも影響する。そこで弟さんに電話を代わってもらい、以前の症状と比較して、良くなったと思う項目を挙げて書き出すように指示した。そうすると、Mさんも以前から見ても症状が軽くなったことが一杯あることに気がつくのである。胸のドキドキも少なくなった、肩凝りもなくなった、フワフワしなくなったと、Mさんは客観的に自分の症状を確認していくことができる。

だが、強迫神経症の患者さんの特徴は症状が改善されたことはすっかり忘れて、今現在の症状にこだわり、それをいちいち話さずにはおられない。心の病気はとくに、目に見えるような改善は期待できないものである。気長に養生しなければならぬのに、すぐ結果が出なければ

承知できないといったように、せっついてくる。

そこで、電話は一週間に一度にすること、日記として一日の行動を書きとめておくよう勧めた。

そうこうしているうちに三ヶ月がたち、手紙が届いた。Mさんくらい症状が重いと、三ヶ月くらいが一区切りである。その報告がこの手紙で、大分良くなってきたことが書かれてあった。そこで、弟さんにMさんに一度私の所にきてもらおうようお話した。

手紙の内容は次の通りであった。

1、食欲が出てきたこと。

2、脈が気にならなくなってきたこと。実際、気にしなくても、脈搏は七十五から八十の間に落ち着いてきた。

3、イライラ、ソワソワがなくなったこと。

その他、全体的に見て八〇から九〇%くらい症状が消失したように思うこと。また、新たな症状として不眠があるので、そのための指導をお願いしたいという内容であった。

さらにつけ加えて、病院の検査でA型肝炎ウイルスが陽性と出たこと、それも母子感染であることが報告されていた。

一人立ちできるくらいまで回復してきたとき、注意しなければならぬことがある。患者はそれまでの苦痛がなくなるせいなのか、つい仕事に熱を入れがちで、せっかく改善された症状を悪化させてしまう場合があるからである。大事を取らなければならない。そこで釘を差すために、再度、本人に厳密なご指導を行った。

経営者といえども労働基準法を守ること。仕事は九時から五時までとし、残業はやってはならないこと。また、昼休みは一時間半の休憩を必ず取ること。週休二日制を守ること。

こうした条件をクリアしたうえで、仕事の段取りをするよう指示した。

つまり、労働基準法は何のためにあるのかということである。健康の維持・管理と、能率等を勘案して制定された法律である。それを守れないのは段取りが悪く、能率的な仕事が成されていないということである。裏返せば経営者としての勉強が足りないという証拠でもある。従って、仕事時間を守るよう、考え方の方向転換をしてほしいと伝えた。このことは全ての経営者に申しあげている。

経営者だからといって、労働基準法を守らなくていいということはない。特にオーナーは二十四時間、頭から仕事が離れない。そうした条件の中でも時間を上手に使い分け、ストレスを解消しないといずれ体調を崩し、病気を抱え込むはめになりかねない。

こうしてMさんからは六ヶ月を経過した段階で、すっかり良くなったという報告を受けた。それでも「時々先生の声を聞かないと、でたらめをしそうだから」と、月に一度は「元気でやっております」という電話をいただいている。

労働基準法

(昭和三四七)

第一章 総則

第一条 労働条件の原則

労働者が人たるに値する生活を営むための必要を充たすものでなければならぬ。

第二条 労働条件の最低限度

この法律で定める労働条件の基準は最低のものであり、労働者を保護するに足りぬものとする。

第三条 労働条件の決定

労働条件は、労働者と使用者が、対等の立場において決定するものとする。

第四条 労働者の権利

労働者は、労働法に定められた権利を行使し、義務を履行し、健康に有害な業務を拒否し、労働条件の改善を要求する権利を有する。

第二章 労働者の権利

第五条 労働者の団結

労働者は、労働法に定められた権利を行使し、労働条件の改善を要求する権利を有する。

第六条 労働者の団結

労働者は、労働法に定められた権利を行使し、労働条件の改善を要求する権利を有する。

第七条 労働者の団結

労働者は、労働法に定められた権利を行使し、労働条件の改善を要求する権利を有する。

第八条 労働者の団結

労働者は、労働法に定められた権利を行使し、労働条件の改善を要求する権利を有する。

第三章 労働者の義務

第九条 労働者の義務

労働者は、労働法に定められた義務を履行し、労働条件の改善を要求する権利を有する。

第十条 労働者の義務

労働者は、労働法に定められた義務を履行し、労働条件の改善を要求する権利を有する。

第十一条 労働者の義務

労働者は、労働法に定められた義務を履行し、労働条件の改善を要求する権利を有する。

第十二条 労働者の義務

労働者は、労働法に定められた義務を履行し、労働条件の改善を要求する権利を有する。

第四章 労働者の保護

第十三条 労働者の保護

労働者は、労働法に定められた保護を受け、労働条件の改善を要求する権利を有する。

第十四条 労働者の保護

労働者は、労働法に定められた保護を受け、労働条件の改善を要求する権利を有する。

第十五条 労働者の保護

労働者は、労働法に定められた保護を受け、労働条件の改善を要求する権利を有する。

第十六条 労働者の保護

労働者は、労働法に定められた保護を受け、労働条件の改善を要求する権利を有する。

出社拒否 ケース1

## ベテラン女性銀行員のうつ病

### ※自分を管理できない娘さん

父親と相談に来られた娘の〇さんは三十代半ばである。十年ほど前に銀行へ就職し、以来、窓口業務一筋というベテラン行員である。しかし、しばらく前に馴れないコンピューター業務に移行してから、体の変調を起こしたという。現代の企業戦士たちは、ようやく仕事を覚えたと思ったら別の仕事へと回されることは日常茶飯事である。いつも緊張状態を強いられる現状では、いつ体の変調を起こしたとしても不思議ではない。

〇さんの症状は、精神的には不安感が強くて何もできない状態だし、肉体的には感覚器官が麻痺しているようで、刺激に対する感覚が鈍くなっている。さらに、頭の回転が悪くなって、体中が堅くなっている感じがするというのである。





私は父親に付き添われてきたOさんが、私に向かって自分の症状を話せるかどうか観察した。Oさんは「うつ病のようだ」「お医者でも、うつ病といわれ、その薬を飲んでる」「一日中黙っている」と頭が締め付けられて、だんだん痛くなってくる」と間断なく話しかけてくる。

父親に話を聞いてみると、Oさんが物心ついた頃、遠い親戚から養女に来てもらったので、小さいときから家で養育していたわけではないこと、将来は家をとってもらおうつもりなのだと話された。

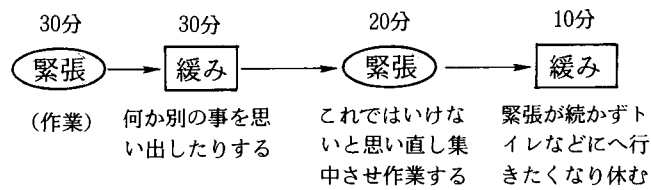
Oさんは、とにかく止めどなくダラダラと話す。切れ目が無い。つまり、頭に湧いてくることを整理することもなく、そのままダラダラと、しゃべり続けているのである。

うつ病なら内面にこもって沈黙しがちで、このようにしゃべることはない。そこで、血筋の人の中にこうした病気の方があるかどうか聞いてみた。すると、もう亡くなったが、Oさんの実の母親がうつ病的な傾向が見られ、生前は家の中がゴタゴタして、親戚同士の人間関係もうまくいっていなかったと話された。うつ病や神経症といった心の病気をもつ家族を抱えると、どうしてもうまくいかないことが多いものである。

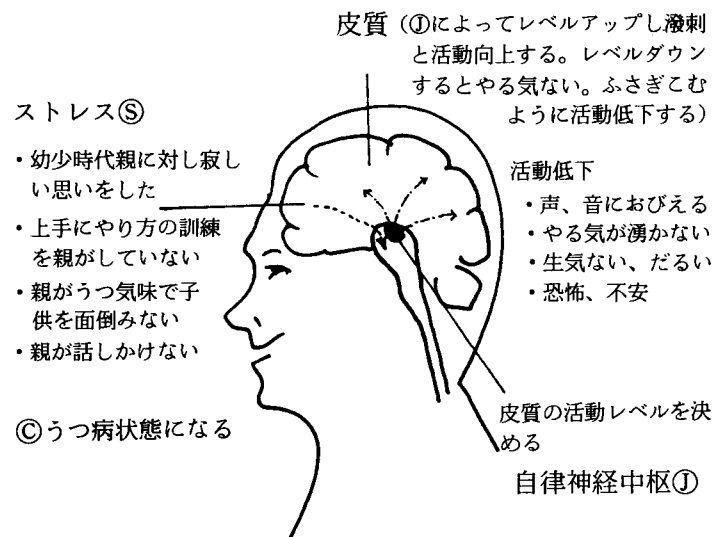
二回目からOさんは一人で治療を受けにこられたが、五、六回目くらいからは笑顔で話せるようになってきた。その頃、父親が直接私に会って話を聞きたいというので、Oさんとは別に

## ベテラン銀行員のうつ病

- ① 正常な脳は **緊張**、**緩み** の繰り返し、緊張時間が次第に少なくなり、休み（緩み）の時間が長くなって、緊張、緩みの交替で就業し、緩みの時世間話が出る。



- ② 幼少から世間話をする訓練がされてないと、**緩み** の時無駄話、世間話ができないため、意識的に作業を連続して行うようになる。それで緊張の連続となり、脳が過労に陥る。



お会いした。

父親はこの病気についての疑問点をこう話した。「どのくらい通ってくれば人並みになるでしょうか。それとも、この病気はある程度の限度があって、そこまでしか改善しないものなのでしょうか」

私が「それは病院で説明を受けられたんではないのですか？」と尋ねると、特別時間をとって聞いたことがなく、この病気は自分から進んで行動を起こすことができない病気だということくらいしか聞いていないとのこと。それで、うつ病になりやすい人の遺伝的特性についてお話をした。

一口にうつの症状といっても、そのきっかけと内容にはかなりの違いがある。一般的なうつ病の症状は、気力が減退してやる気が出ない、憂鬱ゆううつな気分になる、自分は価値のない人間なので死にたいと思う、悪いことは全て自分のせいだと自分を責める、と言った消極的な面ばかり見せることは誰にでも知られている。そうした症状は病院に通院した人の問診で導き出された答えである。

しかし、うつ病的な症状を見せる人もそうなる下地があって、決断力が鈍り、最初のうちは一人で何とかできていたことが、やろうという意欲が湧かなくなつて放棄してしまう。そうい

う場合、うつ病に似てはいるが、分裂病の一症状である場合がある。しかし、私にとってはうつ病であれ、分裂病であれ、神経症であれ、病名などどうでも良いのである。治療法こそ問題なのである。

ただ、病気のパターンというものがある。うつ病と診断され、その薬を飲んでいる人たちの中にも、自分をきちっと管理して日常生活ができる人と、自分を管理できない人の二通りがある。自分を管理してきちんとした生活できるにもかかわらず、疲れやすいとか、やる気が起らないとかいう場合は一般に言う、うつ病の系統だと私は考えている。

自分を管理できない人は、家の中がどんなに散らかっていても片づけようとしないうし、自分から計画して何かをやるうなどということは一切ない。汚いものをそのままにしているも平気で、不潔感を感じないという人もいる。しかし、もう一方で自分が好きなことだけは積極的に進んでやる人もいる。例えば自分の体につけるものに対しては、潔癖症かと思えばかなりの極端な清潔好きの人もいる。この二種類のパターンがある。

○さんの場合には、前者の自分のことを全くしないタイプである。それは父親の話の内容から分かった。

養女にもらって以来、自分の部屋を足の踏み場もないほど散乱させても、ちっとも片づけよ

うとしない。妻が少し口うるさいこともあるが、叱るとその言葉におびえ、過剰な反応をするような面もある。

しかし、片づけるよう注意され、叱られてもOさんに見れば、片づけるという行為そのものが、具体的にどのようなことなのか理解できないのである。従って、片づける方法が分からないし、片づいた状態を見たことがないのである。つまり、他の部屋はきちんと片づいていても、あみちんとなっているな、とか、綺麗になっているな、という見方をしていないのである。つまり、何も見ていないのである。

### ※ 窓口業務と賤しづけの違い

例えば犬の場合を見てみよう。目の前には餌、駐車中の車、子供、猫、建物があるとすると、犬はまず自分の欲求を満たす餌を見る。さらに、自分に危害を加えないもので、動いているものに注意を向ける。従って子供、猫に視線が注がれる。しかし、動かない車や建物は全然見えない。それがある意味で視野が狭いといういい方をする。

人間も同様で、聞くものでも、見るものでも、自分が対象としていないものは聞こえないし、

見えない。そのように体の構造ができているのである。よく例に出すのが踏切近くに住んでいる人たちの感覚である。この人たちの耳には、電車の轟音や踏切のチンカンという音は普段聞こえていない。しかし、目の前にいる人の会話はちゃんと聞き取っている。ところが、その家を訪ねてきた人たちにとっては、踏切の音や電車の音がうるさくて、よほど注意しないと相手の言葉を聞き取ることができない。その違いは何かというところ、これらの音に馴らされ、訓練された結果、音を聞き分け、そのように選択するよう自律神経が働いているからである。

涙を流しながら父親が話されるには、私がOさんの現在の生活状況の一部始終をいい当てるので、「先生は私の家に来られて、見たようなことをはおっしゃいますね。まったくその通りなんですよ」と、涙をハンカチでふかれた。

「そうです。うつ病には社会人としてきちっとした仕事ができ、身の回りもほどほどに片づけて普通の生活をしている人もいます。しかし、そういう人でも、これでいいのかという疑問と自責に苦しむ人もいます。一方、身の回りのことが何もできないのに、自分の仕事である銀行の窓口業務といった単純な繰り返し作業だけできるといふ人もいます。

しかし、外見は普通の人と変わらないのに、世間話といった、判断を必要とすることにはまったく反応しません。世間話というのは相手の言葉にどう反応するか、使って良い言葉か悪い言

葉か、そうした判断をしながら話すことですが、この病気はまずそうしたことが分からないのです。狭い範囲で繰り返し繰り返しやるようなことはできません。そのへんを考えると三歳、四歳児と同じなんですよ。

三歳、四歳児は机の上に散乱している鉛筆を片づけなさいといわれれば、ひとまとめにしてそこに置くだけかもしれません。しかし、大人の行動としては不十分でしょう。では、片づけるということは、具体的にどうすることなのか、娘さんにとってみれば手順を追って説明してやらなければ、何をどうすればいいのか分からないのです」

それなのに銀行の窓口業務ができたということは、会社が新入社員に対して子どもと同じように手とり足とりで仕事の手順を教えこんで教育した成果である。伝票の書き方、数字の書き方、伝票の仕分け方といったように、小児にボタンかけや紐の結び方を教えるように、根気よく教えこむ。繰り返し返しのパターンを覚えこませたからなのである。

仕事場ではそうしたきめ細かい教育が行われるが、家庭ではどうか。このOさんの場合、実の母親がうつ状態だったという。一般的に言って、親がうつ状態や失調状態にあると、躰をしなければならぬ幼児期にきめ細かい教育ができていない。また、母親にとって育てるという意識がないため、教えるのが面倒だったり、親がやった方が早いとばかりに、全部



自分でパッパッとやって結果だけをハイと子供に与えてしまう。こうした傾向は何も親がうつ状態や失調症の状態でなくても、最近では珍しいことではない。

最近の子供はりんごの皮むきが下手だといわれるが、子供にナイフや包丁を持たせない家庭が多くては無理もない。年頃の娘さんでも、りんごの皮をむいたことがないという人は意外と多いものである。

まして、危なくない庖丁の持ち方を根気よく教えたり、皮をむいたり、りんごをどう切って、どう芯を抜き、どう皿に盛りつけたら良いのか、さらに、楊子や果物フォークを置いてという、食べるまでの細かい手順や指示をして教える親はまれである。

面倒だから親がパッパッと皮をむいて、自分で盛り付けてポンと出し、楊子に果物を差してハイと子供に握らせる。それでは例え子供にやる気があったとしても、子供は大人がやる手さばきでは早すぎて理解できないだろうし、親がやってくれるなら、自分からやる気を起こさないうちも当然といえば当然である。

ここまで極端でなくても、親のやっていることに興味をもっている観察力の鋭い子供なら、親のやり方を見ていて、真似をしたがるものである。また、親の方でも興味をもっている子供に教えようという気持ちがあれば、おぼつかない手つきでも、根気よく教えようとするだろう。

りんごの芯の上下に皮が少し残って、子どもがどうしても自分ではできないなら「お母さんこれはどうすれば残らないようにできるの?」と質問するだろうし、親は、「どれどれ貸してごらん。こうすれば残らないよ、やってみな」とやらせてみる。そうした繰り返しによって親と子は生活の知恵や方法を習得していく。

ところが、親は自分の体の具合が悪いと、「どれどれかしてごらん。もういいよ」とばかり自分でやってしまう。根気よく教えるだけの気力がないのである。そうすると、子供はもう、その手順を聞かないだろうし、教えてもらってないからできないということになる。

### ※ 社会生活の作法を教える躰

○さんの場合、銀行の窓口業務は繰り返し繰り返し教えこまれ訓練されて、考えることもなく機械的にできるようになった仕事である。ところが、窓口業務からコンピュータールームに移動させられたとき、とまどいが生じた。

それというのも、仕事はコンピューターがやってしまったって、人間はせいぜい機械がうまく動いているかどうか、伝票の補充はしなくていいのかどうか、あるいは、スイッチを入れたり切っ

たりを監視しているだけの役目である。そうなると、周りの人たりは世間話に興じ、たわいもないことを話ながら、チラチラとメーターを見たり機械の動き具合を見たりしながら、仕事をこなしていける。

しかし、うつ病の人は前述したように、世間話に加わろうという意識がない。自分の世界だけに生きていて、人とどう関わったらいのかさえも分からない。例えば人と関わったとしても、自分より小さな子供たちというごく限られた人に対してのみであり、「ああしなさい、こうしなさい」と、自分の知識の及ぶ範囲で命令口調で世話をやく。

自分と同等、あるいはそれ以上の大人のつき合いということになると、周囲の人と同化していくだけの知識も意識もない。従って自分から話しかけたりすることもない。

〇さんはコンピュータールームにいるとき、同僚に囲まれていても非常に孤独であつたろうし、さりとて何を話していいか分からない状態に陥ってしまって、毎日が重い疲労感を感じていたはずである。言い換えれば、何人同じ部屋にいても、うつ病の人間にとっては自分一人であるのと同じことである。健康な人間にしても、一日中自分一人で機械相手の仕事を強いられたら、精神的におかしくなってしまうだろう。

しかし、一般の人は周りの人たちとのコミュニケーションを図る知恵や方法を知っているの

で、孤独感や寂しさは感じないですむ。そこへいくと、うつ病の人はたとえ多くの人が周囲にいたとしても自分とは関わりのない人間で、コミュニケーションが図れない。つまり、相手が話しかけても返事ができない。もちろん、自分から話しかけることは皆無である。

少々話は飛躍するが、私が患者さんの両親から預かっているうつ病の二人の女性がいる。二人は一定の条件つきで預かっているのだが、二人を住ませるとき、困ったことがあった。それというのは、神経症の人と、うつ病の人と一緒に住ませる場合はうまくいく。お互いの生活を見ながら欠点を補う形で生活していくために、施療上からも良い。ところが、うつ病二人と一緒に住んだり、神経症と一緒に住んだりすると相乗効果でお互いの症状を悪化させてしまい、しかも、お互いを非常に疲れさせる。その結果、二人とも意欲をなくして何もしないのである。

話を〇さんに戻すことにする。私は父親に、〇さんを本当に治すために必要な施療法としての躰についてよくお話をした。

具体的には、二歳児三歳児に紐の結び方や、後片づけの方法を教えるような躰から始めてもらうことにした。片づけるといのは、まず物を置く場所を決め、そこを定位置として使ったら戻すという行為から始まる。その過程で要らないものは捨て、必要なものは取っておく。さ

らに、新しいものを買ったら古いものは捨てる。

並べ方としては、平行に並べると片付いた感じを受ける。ものを置くときには中央に空間を作るように、壁際に置くことできれいに片づいたという清涼感を与えるのである。こういうふうに、一つ一つ手をとって教えないとできないのである。

例えば、工場を経営しておられる人なら、プレス機にまったくの素人を従事させるとき、事前に危険を避ける方法を教えるだろう。指を挟まないための材料の持ち方、裏表の見方、機械のボタン操作、あるいは油切れの場合の補充法といったように、プレス機を上手に操作する方法をきちっと教えるだろう。人間もそのように、小さいときから生活方法を教わっていないと、うまく生活できないものなのである。

「掃除機をかけなさい」といっても、掃除機を使ったことのない人には、埃を吸い込む機械だということは知っていても、使い方を知らない。畳にかけるときは目に添ってブラシをこすりつけるようにし、目の間の埃を出して取ることを教えなければならぬ。さらに、ジュウタンならジュウタンの表示に合わせてスイッチを入れることを教える。理由はブラシをジュウタンに密着させ、強力に吸い取らないと埃が中から吸い出されてこないからである。

さらにまた、埃というのは部屋の奥や部屋の隅に溜まりやすく、部屋の真ん中には溜まらな

いものであること。従って、まず四隅や家具の下から掃除機をかけることを教えなければならぬ。ただ漫然と掃除機をかけてもきれいにはならないし、効率のよい掃除もできないのである。

こうした躰は生活全般にわたるもので、箸の持ち方、ご飯の食べ方、噛み方、飲みものの飲み方というように、生きるために必要なあらゆる面に目配りをして、社会生活をする上で必要な作法を教えていくもので、それが躰である。

そうした躰がなされなかった患者さんは、周りの人が何なくできることが自分にはできないことで引け目を感じることになる。次に、人は年齢相当という尺度をもって人と対峙<sup>たいじ</sup>しているものなので、当然その尺度を持ってつき合いをしている。それができないということになると、周囲の人は無視するようになる。こうして疎外感が生まれ、多くの人の中にいても、孤独をかこつようになってしまうのである。

### ※ 治すためのルール

病氣治療の根本を父親にご説明すると「なるほど、先生の仕事は根氣のある大変な仕事です

ね」といわれた。「私にとっては毎日、何人もおいでになる患者さんの一人一人に、そのようにお話をしているんですよ。それがこの精神病を治す難しさなんです。金儲けとか、興味本位ではできません。本当に治してあげなければならないという気持ちがあれば、できない仕事ですよ」とお答えした。

〇さんに、テレビをあまり見ないようにと指導をしたら、「何分くらいならいいのですか」と聞いてくる。そこで、「そう、あなたの場合は連続で二十分くらいですね」とお話しした。ここまでは普通の人と何ら変わらない会話である。

しかし、これ以降が違ってくる。「自分の好きな三十分ものの番組があるんです。じゃあ、十分間見ないようにしたらいいんでしょうか？」と聞く。次に、「じゃあ、二十五分くらいならどうなんでしょうか？」と重ねて聞いてくる。そのうえ、「あまり見ないようにということは具体的に何分でしょうか？」と、さらにダメ押しをするのである。

こうなると、相談も漫才になってしまう。笑わない人を相手に、必死に笑わせようと喋っているような滑稽さである。いちいちしゃくにさわるとばかり腹を立てたり、なぜなんだろうと考え込んでいたのはやめてゆけない。

そういうお話ししたとき、「なるほどこの病気の本质がようやく分かってきました。それでは

自分もやり方を少し考えて、三十四歳の娘ではなく、三歳の娘と向き合っているのだと考えて、すべての生活のパターンを分解して克明に教えていくことにしましょう」とおっしゃった。

「そうです、私たちが日常使っている行動のパターンは二十か三十といったところです。また、日常会話に使う言葉も、五十くらいの単語にしか過ぎません。それ以上のものを要求されたときにうまく適応できないとしても、そんなに不自然ではないんです。だからその二十くらいの日常の行動パターン、例えば歯の磨き方、顔の洗いか、部屋の片づけ方といったことをきちっと教えてあげてください。それも急いで教え込むのではなく、一つ覚えたら次をやるというようにです。

さらに、うつ病的、分裂病的な病気をもつ人の特徴は、マルチワーク、つまり一つのことをやりながら別のことを重ねてやることができないことです。例えば洗濯機を回しながら風呂の水を入れ、さらにはお勝手仕事をするといった同時進行は絶対に不可能です。これはもう生まれつきですから、できないからといって怒ってはいけません。洗濯機が回っているときは止まるまでじっと洗濯機の前に座っているでしょう」

私はOさんの躰に対するアドバイスを細く指示した。

一般の人がマルチワークをするときは、自分から気を利かせて効率よく動こうとすると自然



にマルチワークになる。しかし、この病気の人は自分からは思いつくことはない。だからこそ、そのやり方を教えればいいのである。マルチワークは何も特殊なことではない。社会的な仕事についている人なら誰でもやっていることで、プレス機械を操作している人なら、手元の仕事をしながら、周囲の人の動きを見て、効率よく動く。ワンマンバスの運転手なら運転しながらテープで次の停留所を案内し、さらにはマイクで足元に気をつけるよう乗客に注意を促している。

こうした一人何役もの仕事は、バスの運転操作が自分の手足を動かすように、無意識のうちに行なうことができるようになったとき、初めてできるのと同じである。そこを急がないようにとお話した。

つまり会社に行けない、人間関係がうまくいかない、という理由で退社してしまった人は、会社を変えればうまくいくだろうと簡単に考えがちで、転々と仕事を変わって行く。こういう人たちは、うつ病的な要因をもっていたり、見習い行動ができないことに原因があるのである。

しかし、人間の神経は常に芽を出して新しい回路をつくり、繰り返し行われる良い刺激に順応し、ものごとに対処する習慣ができていく。その習慣が無意識にできるようになったとき、その人の行動パターンが決まってくるのである。

少なくとも、日本人は時間を守るよう訓練されるし、集団生活では年長者、あるいは熟練者

の言葉に従うように訓練され、社会生活では警察や裁判所の決定に従うように訓練されてきている。社会生活をする上でのルールづくりが確立されている国だからである。

ところが、そうした社会のルールづくりも国によって異なり、それが不幸な結果を生む場合もある。現在の日本の交通事故の犠牲者の中には、中国から帰還した残留孤児とその子供たち、あるいは東南アジアや発展途上国からの出稼ぎの人たちがいる。こうした国々では、信号機をきちっと守るといふ習慣がなかったり、信号機を必要としない環境に馴れて警戒心のないまま車に轢かれる。これが非常に多いのである。

同じように、うつ病の人については生まれつきの遺伝的要素はあるにしても、訓練によって相当数軽減できるものなのである。いってみれば、虫歯にかかりやすい体質を持った人と何ら変わらない。ただ、虫歯にかかりやすい体質で生まれてきた人は、歯の磨き方に注意して、正しく磨くように努力することである。食後は必ず磨くよう心がけて、それを生涯続ければあまり虫歯にはならないし、虫歯になりにくい人とはほぼ同じような生活ができるわけである。

うつ病の娘さんもあまり高望みせず、きちっとルールを教えてやりさえすれば自信がつき、同僚と一緒にやっていけるようになるのである。

さらに、うつ病的な人の特徴をもう一つあげるとすれば、強い口調や感情的な叱責の言葉に

おびえることである。

例えば、普通の人は大きな声で怒鳴られても、腹の中でそんなに怒鳴らなくてもいいじゃないかとか、大きな声だしてバカめくらい思って反発する。しかし、この病気の人は、大きな声にまずおびえ、すくんでしまって反発の気持ちはなど全然湧いてこない。さらに「仕事のできないおまえなんか、死んでしまえ」と冗談めかしていったとしたら、普通の人は、「ああ死にますよ、死ねばいいんでしょ」くらいに思うし、相手が年上だったら、「そのうちお前の方が先に死ぬから心配しないでいいさ」という気持ちにもなる。

しかし、うつ病の人は「死んでしまえ」といわれれば「自分はもう必要じゃないんだ。死ぬしかない」というふうに考えてしまう。だから、強い口調や大きい声、冗談めかした言葉は絶対に使わないこと。そうしないと言葉のままに受け取ってしまうものだからである。

「そういえば、私たちもそんな病気が娘の下地にあるとは知らずに、思ったままを口に出して話をしていました。それがこの病気の発生原因にもなったのですね」「そうです。そこがこの病気のポイントで、普通の人に分かりにくいところなんです」というお話をした。

父親は「しばらく通って様子を見て、また先生の御指導を受けます」と挨拶し、その日は帰られた。

それから六ヵ月、娘さんに聞いてみると、頑固な肩凝りや気分の悪さが取れてきたこと、手足のしびれも今はないという返事だった。最初に来られたときは笑顔が全然なかったのに、私の顔を見て笑顔で話ができるまでに回復した。

最初見えられたとき、検査項目にとりあえず何が困るのかうかがったとき、「外出をするとき、道に迷うのではないかと思って非常に不安になり、外へ出られなくなります。よく知っている場所に行くときでも、途中で工事していると別の道を通らなければなりません。そんなとき、迷うのではないかと考えて、外へ出られないんです」と答えていた。しかし、「今はそのような不安感があつたことすら忘れていました」と快活に笑っておられる。

## 幻聴を聞く初期の精神分裂病

### ※ 独り言を言う小学生のS君

相談票には「軽いアトピー性皮膚炎があり、時々、中耳炎を起こす」とある。また、精神的には「何かこだわりがあって、それをすぐ口にしてしまう」「いわれたことが気になる」「すぐに拗<sup>す</sup>ねる」とある。これだけ見たのではなぜS君が学校に行けないのか、原因が分からない。

現在のところ、とりあえず学校には行っているのだが、行っても勉強に集中できない。以前、成績は良かったが、今ではほとんど〇点に近い点数ばかりで、本人も学校がいやになり、登校するのを渋っているという。

ご両親の話を総合してみると、こだわりは書き表せないほどいろいろとある。トイレや風呂に入ったるとき、何度もドアを開けたり締めたりする。つまりドアがきちっと閉まってい

るかどうか何度も確認するというのである。

この話を聞いたとき、数年前に相談にこられた三十六歳の男性を思い出した。その男性も、待合室の下駄箱を開けたり締めたりして、ゴソゴソと無意味な動作を繰り返していた。

とにかく、S君は自分は万引きをしたことはないが、もしやったら家を追い出されるのではないか、そうすると住む所がなくて困る。そういうことを親に何度も何度も話し、「僕は万引きなんかしないから、家を追い出さなくてくれよ」と一日に何回も哀願していたという。さらに、開けたり締めたりしているドアに向かって、「万引きや女の体はうそだ、万引きや女の体はうそだ」と、何回も何回も独り言をいうそうである。病院は小児神経科で、薬をもらって飲んでいた。

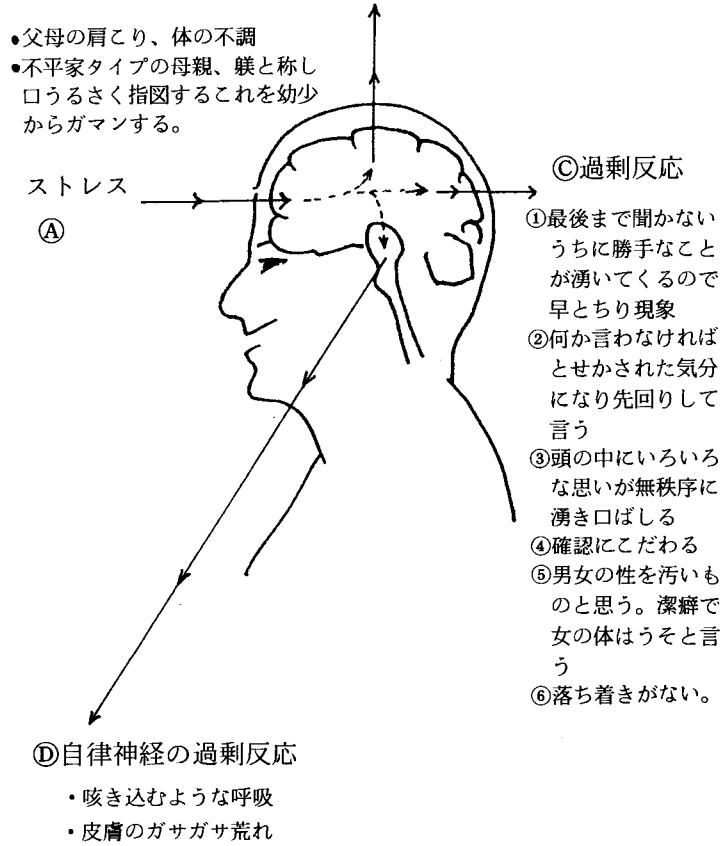
相談のとき、S君の様子を見ると、私の質問に答えようとする親御さんの先回りをして自分で答え、親御さんが答えた後もさらに説明をつけ加えようとする。ちょっと目には親の機嫌をとっている子、気が利いている子といった様子にしか見えない。

また、私がいろいろと質問をするだろうことを想定して、自分から「先生はこういうことを聞きたいんじゃないんですか?」「そう聞かれたときには、僕はこう答えようと思ってます」という。十一歳にしては大人びた感じがする。

# ひとりごとを言う小学生

⑧ いつもガマンして不快な人の声を聞いていると過労から過敏反応を起こすようになる。(神経症という) 更に脳が疲れると働かなくなり(うつ状態) となって無気力になる。

皮質



S君は全てのが気になるのだ。親御さんの言葉の一言一言、そして自分の答えはこれで良いのかどうか、あるいはまた、今自分は座っていて良いのだろうかといった具合である。

こうした症状は数年前、私が患者さんのご両親から預かった分裂病の女性のもと良く似ている。彼女は十八歳であったがS君はまだ十一歳である。S君の発病が早いのか、あるいは、預かった女性も十一歳の頃にはこういう症状が見られたのかどうか分からない。とにかく、十八歳の彼女は物を投げたり、親に罵声ばせいを浴びせたりと、惨澹さんたんたる状態で私の前に現れた。自分で自分の体のやり場に困ったのか、心の平衡が保てなくて暴れたのか、今のところ分からない。S君はお稽古けいこごともいろいろしていた。水泳、体操、そろばん、英語塾、いわゆる手当たり次第である。非常におしゃべりで、活発な子である。

親御さんはそれほどおしゃべりで神経質には見えないが、母親の方には何か不満があるように見える。父親はおっとり型で、特別変わった感じは受けない。母親の不満というのは、夫はあれもしてくれない、これもしてくれない、私は不幸だと思いきむ俗に言う「くれない族」のような感じで、しゃべり方にもどことなく反抗的な響きがある。世の中を敵視しているわけではないが、自分の中に面白くないことや、満たされないものがある場合にこうなりがちである。そうすると、自分の不満を子供に向け、躰と錯覚をしてガミガミと当たる。子供は母親の口



うるささから逃れたい一心で、お稽古ごとなどに時間を費やして、なるべく家にいる時間を少なくする。悪事をして親を困らせるとか、まったく家に寄りつかないといった行動は小学生には思いつかない。それは中学以降である。だから塾やお稽古ごとに逃避することになるのである。

### ※「我慢」の躰からの逃避

治療は週に一回。遠い距離を通ってこられることも考えてそう決めた。普通は週に一回というの間が開き過ぎる。平均四、五日に一回であるが、S君は小学生でもあり、仕方がない。だから補助的な治療を自宅でやってもらうようにしながら、一週間に一回治療した。

S君は四回目くらいからあまりドアを開け締めしなくなり、落ち着きが出てきたような気がした。呼吸もゆっくりしてきた。初対面のときは小刻みな、咳き込むような呼吸が多かったのを覚えている。それがゆっくりしてきたのは、大脳皮質のイライラや神経症の状態がだいぶ緩和してきたことの証明でもある。十回くらい通って来られたとき、アトピー性皮膚炎も鼻の周りを残り、肘、首筋とガサガサが大分良くなってきた。とりあえずは学校に出欠を取りに行く

だけ行き、勉強はしなくてよいことを指示した。

また、ご両親には親としての接し方、ものごとの考え方などをお話した。三十代になるS君のご両親が子供時代に受けた躾や教育は、まだまだ禁欲や我慢を基本とした精神主義的なものである。しかし、現代っ子のS君にそうした禁欲や我慢による生活管理を強制するとなるとギャップが生じてくる。三十年前の躾や教育は修正を加えなければ現状にそぐわなくなってきたことを直視し、意識して考え方を軌道修正していただくようお話した。

こうしたギャップは私の著書『日本人の正しい性生活と悩み治療』で十分説明した。

要約すると、日本や中国、東南アジアといった仏教国や儒教思想の流布した国々を支配している思想の一つに、禁欲や我慢が美德だと教えた道徳がある。こうした禁欲や我慢が常に時代の支配者に都合よく利用され、国民の権利や自己主張を規制する道具として使われてきた歴史がある。支配者は庶民から現世の喜びや楽しみを取り上げ、我慢することが美德であり、死後に幸せがあると説いた。

こうした思想の流れは、現代の日本人の心の中にもいまだ根強く残っていて、欧米のように、個人生活を大切にし、人生を楽しむ、そのために仕事をし、物資を消費し、権利を主張するといった人生観とはまだ一線を画している。

日本では「働き蜂」といわれるサラリーマンは長時間労働や単身赴任に耐え、過労死が問題になり、母子家庭のような家族が出現している。子供たちは将来の経済的安定を得るために、小さいときから入試地獄をかくぐってくる。さらに、外国人から見れば「うさぎ小屋」のようなマイホーム獲得のために、やむなくパートで働く母親も多い。人生を楽しむにはほど遠い環境である。そんな中で、ささやかな楽しみを実現しようとするにも、後ろめたさや遠慮がつきまってくる。経済大国日本の貧しい現実に、つくづく圧倒されてしまう。

そのために、子供たちはやりたいこともできず、型にはめられ矯正されてしまう。子供にも子供時代にしかできない遊びもあるし、子供にしか味わえない楽しみもある。親はそうした子供の希望をかなえてやることも悪いことをしているような後ろめたさを感じてしまうのである。従って、親は子供達の自由な考え方や行動を抑圧してしまう。自由に振る舞うことが、さも悪いことをしているように思い、躰と称して伸びる芽さえ押さえこんでしまう。それがこの病気を作り、親もまた、歪んだちぐはぐな発想から抜けられないのである。

ともあれ、S君にはご両親交替で付き添いに来ていただいたが、十五回目くらいではほぼ通常の行動ができるようになった。後は週二回、自宅で治療してもらおうよう、技術指導を行った。その際、ご両親の考え方も変えていただくようお願いした。母親の肩凝り、父親の胃炎といっ

た持病も、抑圧された生活が自律神経失調症を引き起こし、体調を崩していることが原因であること、何となくつまらない毎日を送っているという心の不満が体に現れることを納得してもらった。その上で、癲導医学が開発した治療器具を購入してもらい、ご両親も子供の治療を兼ねて、一週間に一度くらいは軽く治療するよう指導した。こうして再発を防ぎ、新たな生活習慣が身につくまで、月に一回、一年間通ってもらおうとお話した。

人は心にこだわりがあって、それを口に出さないと、つい独り言をいうようになる。心のこだわりという点、何だか宗教めいた表現になるが、分裂病の初期症状としては大脳皮質、つまり頭に勝手にいろいろな妄想が湧いてくる。そのほとんどが、自分が他人によって傷つけられるという被害妄想的なものである。

他人に話すというのは人間の本能の一つである。他人に話すことによって内にこもった想念のはげぐちをつくっているのである。このバランスがとれなくなると独り言をいうようになる。しかし、病状が重くなってくると、独り言をいわなくても、自分の耳にはその独り言が聞こえてくる。

分裂病者が事件を起こした場合、動機を聞くと「天からのお告げがあった」とか、「電波が命令した」、「宇宙が命令した」とか、わけの分からない供述をする。こうなると、常に他人の

声が聞こえてきていて、自分に命令を下すというのである。

つまり、心にこだわりをもつ分裂病の初期は、自分で妄想をつくり出すのではなく、勝手に妄想が湧いてくるのである。このことを理解し、自分の周囲の人にこうした徴候が認められた場合、いち早く治療することで患者を救い、家族や周囲の人たちの苦しみを未然に防ぐことが大切である。

## 受験戦争の中の青年期精神障害

### ※ 喜怒哀楽が感じられない

開業医の息子さんであるK君は、十八歳。施療の最初はご両親そろって付き添いで来られた。普通、開業医とか医療関係者の父親が付き添って来られることはない。母親が、それも職業をはっきりとおっしゃらないまま相談に見える場合が多いのである。

医療関係者に見れば、自分がたずさわる西洋医学では治療効果が上がらないことを認めざるを得ないことである。体面上避けたいと思うのは致し方ないかもしれない。私の所に見える患者さんの中では、とくに医師、弁護士といった気取りを必要とする職業の人は、家族にそうした病人がいることを隠したいという思いがあるだろうし、職業柄、周囲に与える影響も考慮する必要もあるだろう。

しかし、通常、職業を明らかにされない場合、やはりこちらの対応も違ってくるし、極端な場合はお引き受けしないこともある。なぜなら、親の職業、本人の職業、あるいは家族や親族など、本人を取り巻く環境がこの病気には大きな影響を与えるだけに、適確なご指導を申しあげるには、どうしても患者や家族を知らなければならぬ。それを隠される場合には、指導することができないということである。

この患者K君のご両親はそろっておいでになり、息子さんを治したい一心で真実をお話になった。これまでに父親の同級生や、知人の医師を介して精神病院に入院したり、効果があるといわれる薬を使って治療を試みたが、どうしても治らなとおっしゃるのである。

人間には謙虚さが必要である。勉強してある資格を勝ち取ったということは、選別されたことには違いないが、それは人間の本質とは関係ない。頭の良い人間が頭を使って働くことも、体の頑丈な人間が体を使って働くことも当たり前前で、それが社会の仕組みというものである。

ともあれ、兄弟二人のこのK君は、弟と共に医学部を目指して、一貫教育で知られる私立の進学校へ入学した。六年間の厳しい勉強に加え、中学校からは寮に入って徹底的に勉強させるいわゆる詰め込み教育で、K君は息つく間もない受験戦争の渦を経験することになった。

**自定**

姓名: [Redacted] 性别: [Redacted] 年龄: [Redacted]

职业: [Redacted]

住址: [Redacted]

电话: [Redacted]

病史: [Redacted]

检查: [Redacted]

诊断: [Redacted]

治疗: [Redacted]

预后: [Redacted]

随访: [Redacted]

其他: [Redacted]

**治療依類書**

姓名: [Redacted] 性别: [Redacted] 年龄: [Redacted]

职业: [Redacted]

住址: [Redacted]

电话: [Redacted]

病史: [Redacted]

检查: [Redacted]

诊断: [Redacted]

治疗: [Redacted]

预后: [Redacted]

随访: [Redacted]

其他: [Redacted]

1. [Redacted] 2. [Redacted] 3. [Redacted] 4. [Redacted] 5. [Redacted] 6. [Redacted] 7. [Redacted] 8. [Redacted] 9. [Redacted] 10. [Redacted]



① 關於... 關於... 關於...  
 ② 關於... 關於... 關於...  
 ③ 關於... 關於... 關於...  
 ④ 關於... 關於... 關於...  
 ⑤ 關於... 關於... 關於...  
 ⑥ 關於... 關於... 關於...  
 ⑦ 關於... 關於... 關於...  
 ⑧ 關於... 關於... 關於...  
 ⑨ 關於... 關於... 關於...  
 ⑩ 關於... 關於... 關於...  
 ⑪ 關於... 關於... 關於...  
 ⑫ 關於... 關於... 關於...  
 ⑬ 關於... 關於... 關於...  
 ⑭ 關於... 關於... 關於...  
 ⑮ 關於... 關於... 關於...  
 ⑯ 關於... 關於... 關於...  
 ⑰ 關於... 關於... 關於...  
 ⑱ 關於... 關於... 關於...  
 ⑲ 關於... 關於... 關於...  
 ⑳ 關於... 關於... 關於...  
 ㉑ 關於... 關於... 關於...  
 ㉒ 關於... 關於... 關於...  
 ㉓ 關於... 關於... 關於...  
 ㉔ 關於... 關於... 關於...  
 ㉕ 關於... 關於... 關於...  
 ㉖ 關於... 關於... 關於...  
 ㉗ 關於... 關於... 關於...  
 ㉘ 關於... 關於... 關於...  
 ㉙ 關於... 關於... 關於...  
 ㉚ 關於... 關於... 關於...  
 ㉛ 關於... 關於... 關於...  
 ㉜ 關於... 關於... 關於...  
 ㉝ 關於... 關於... 關於...  
 ㉞ 關於... 關於... 關於...  
 ㉟ 關於... 關於... 關於...  
 ㊱ 關於... 關於... 關於...  
 ㊲ 關於... 關於... 關於...  
 ㊳ 關於... 關於... 關於...  
 ㊴ 關於... 關於... 關於...  
 ㊵ 關於... 關於... 關於...  
 ㊶ 關於... 關於... 關於...  
 ㊷ 關於... 關於... 關於...  
 ㊸ 關於... 關於... 關於...  
 ㊹ 關於... 關於... 關於...  
 ㊺ 關於... 關於... 關於...  
 ㊻ 關於... 關於... 關於...  
 ㊼ 關於... 關於... 關於...  
 ㊽ 關於... 關於... 關於...  
 ㊾ 關於... 關於... 關於...  
 ㊿ 關於... 關於... 關於...

### 治療依頼書

患者氏名: [Redacted]  
 年齢: [Redacted] 性別: [Redacted]  
 住所: [Redacted]  
 職業: [Redacted]  
 主治医師: [Redacted]  
 依頼内容: [Redacted]  
 依頼期間: [Redacted]  
 依頼料: [Redacted]  
 備考: [Redacted]

項目	内容
1. 依頼理由	[Redacted]
2. 依頼内容	[Redacted]
3. 依頼期間	[Redacted]
4. 依頼料	[Redacted]
5. 備考	[Redacted]

そうなるに察では昔の軍隊と同じで、集団ヒステリー症状が起きてくる。イライラしたり、精神的に追い込まれると弱い者いじめに走ってうつぶん晴らしをする。社会生活を経験していない子供たちには、人間関係を上手に保持する技術を持っていない。また、苛酷な受験競争や知識の習得に耐えられる精神力にも限界があり、本人の努力をもってしても、到底及ばないこともある。

ついに、二年程前の十六歳頃からK君の成績が下降線をたどるようになった。それに付随して、人間的な感情が失われてきた。喜怒哀楽が湧いてこない、人と接しても楽しくない、何かちょっとやり始めると気分が沈んで、うつ状態になる。高校二年の頃からそうした症状が見られたので、一ヵ月半ほど休学して精神科の病院に入院した。

精神神経科の病院では、薬による治療に努力しているが、なかなか完治しないために新たな治療法が模索されている。同じ治療法でも、ある患者には有効であっても、別の患者にはまったく効果がないということもある。また、その病状には効果が認められても、新たに別の症状が発生してさらに病気が進むといった例もある。治療法というのは、同じ症状の全ての患者に有効と認められる場合に限られるもので、患者によって結果にバラツキが生じるとあっては、正しい治療法とはいえない。

いずれにしても、患者さんに何をどう治したいのか、本人の希望を聞いてみると、一応に怒哀楽を感じるようになりたいという。人と接したり遊んだりしたとき、楽しいと感じる感情、つまり、人間的な喜びが欲しいと訴える。

考えてみれば、喜びのない人生ほど味気ないものはない。生きる希望や目的を支えるのはこの喜びである。苦勞しても、最後に笑う楽しみや喜びがあるからこそ、人間、苦勞のしがいがあるというものである。そうした感情が失われてしまった人の苦しみは、想像を絶するものがある。

私の施療した経験からいえば、喜怒哀楽の感情が乏しい傾向が認められるのは、人を支配し、指図する職業に就いている人、そしてその伴侶、子供である。例えば、警察官、教師、銀行員、刑務官といった公務員的な仕事に従事する人やその家族の間で比較的多く見られる。

上から下への縦系列で命令や指示が行われ、管理される職業の人たちは、工作上、感情を殺す必要に迫られるのだろうが、そうした仕事が長くなると、それが性格にも現れてくるものがある。

そうした人はつきあっても面白くないものだが、それにもまして本人自身がつまらないだろうと想像するのだが、よくしたもので、こうした集団の中で生活していればそれが普通で、不

思議とも何とも感じないですむものである。

しかし、K君の場合、寮の中の学友は勉強が終われば友達同士でふざけたり、はしゃいだりしているが、それができないK君は一人取り残されてしまう。K君は現在も薬を飲んでいて、その数は四種類だという。

### ※三カ月で改善

K君の実家はお祖父さん代からずっと開業医である。父親も若い頃は自分のやりたいことがあった。しかし、お祖父さんとしては医者を継いでほしくて、お前は家を継ぐのだという無言のプレッシャーをかけてきた。そうした環境の中でいつの間にか父親も医者になった。しかし、日々何となく面白くないのだそうだ。こうしてみると、K君の父親も自分がやりたくないと思っていた職業をいつの間にか選んでいくことになる。

世間話を交えて父親とお話してみたが、率直な話、病気を治す医療マシーンといった感じの人である。とくに父親としての存在感が感じられず、本人も父親としての実感や行動がないと話される。こういう点は、専門職に就いている人に多く見られる。父親としての感情が湧い

てこない人、父親の感情を出さない人が多いものである。

K君の家は新幹線で五時間もかかる場所にあり、通いは当然無理だと判断した。しかし、とにかく何とかしたいとおっしゃるので、父親の役割、大人の役割、また父親としての感情の出し方、職業と私生活の区別など、三時間ほどお話をした。そうして十分自分の足りなかった点を認識していただき、息子さんの病気を治すための努力をしてみようこと、さらに本人自身の生き方、面白くない人生と思いつながり開業医を続けてきた今後をどうするかということをお話した。

治療は三日講習で行うことにした。基本的には三日間の講習を行うが、こちらに十日間泊まり込みをして治療方法を習得するとともに、通いの治療も兼ねて行うことになった。

しかし、この程度にまで症状が進むと、これが本人のもともとの性格ではないかと思慮うほどに固定されてしまっているし、そう早く治るものでもない。自律神経失調症の段階ならかなり改善が早く、通いでも十分に完治するが、心の病気、つまり精神的領域まで及ぶと決して早い回復は望めない。少しづつ、根気よく一年から二年かけて治していく。その間にはいろいろな変化が見られ、周囲もそれを認めることができる。しかし、本人はあまり変化の自覚はないものである。

治療は母親が基本的に行い、私の研究所で開発した器具を併用してもらった。そして最初の六ヶ月間は月に一度指導を受けに通ってもらったこと、自宅での治療は毎日行ってもらったこと、スタートした。

三ヶ月くらい経過したとき、少しずつ改善された点をまとめてもらった。以前より改善した症状として本人が書いていることは、「性格がかなり元に戻ったこと」「目に何か模様がかったものが見えていたのが、気分的に良い日が多くなり、不快感が少なくなってきたこと」「人と話すのに抵抗が少なくなってきたこと」「短気や我が儘まが少なくなってきたこと」などを挙げている。

また、新たに出てきた症状としては「立ち眩みができるようになったこと」「気分が不快のときは以前より長く続くようになったこと」を挙げていた。

体の症状として改善された点は「あまり夢を見なくなって熟睡するようになった」「いつも下痢ひんじょうっぽかったのが下痢をしなくなった」「頻尿ひんじょうの回数が以前より減った」ということである。

心の病気とは大脳皮質の障害で、自律神経失調とは自律神経の障害である。大脳皮質と自律神経の関係は、自律神経失調が治った後で大脳皮質が改善される。つまり、自律神経が正常に

回復すれば心の病気も治るといふ仕組みである。

K君の毎日の症状を記録してもらつた用紙には、「普通にしている限り、目に模様がかつたものが見えることは少なくなり、しかも色は以前のようにならなくなった。普通の状態では大部改善されたが、無理をすると目の横が黒くなる症状はあまり変わらない」とのことだ。少しずつ変化してきてはいる。

また、「夜寝たとき、これまでは三時か四時ごろ一旦目が覚めるとそれ以後は眠れなかったが、今は六時頃まで眠れるようになった」という。

その他の改善点としては、次のようなことが書かれてあった。

二月二十三日 夜中あまり目が覚めなくなってきた。体重は七十・二キロ。

四月十八日 外に出るようになってきたので、気持ちも前向きになり、性格も元気だった頃に近づいてきた。

五月十日 一ヵ月ほど前から以前ほど頻繁に夢を見なくなった。

三ヵ月講習の第一日目に、K君はこう書いている。「初日でイライラがほぼ消えた。性格が全体的に悪くなる前に近づいてきたと思う。人と話すのが嫌でなくなったし、感情がほんの少し出てきた。しかし、最近ほとんどなくなっていた理由のない不安に陥ることがたまにある。

前とは異なった欲求不満というか、イライラした感じがある」

### ※ 親のエゴが選択の道を閉ざす

心の病気に侵される大きな原因を探ってみると、親が喜怒哀楽の感情を十分に出せない環境で育った人が多いものである。無口でほとんど口をきかない親、礼節を重んじて本心を見せない親といったような環境では、子供の喜怒哀楽は抑圧され、心の解放ができなくなるのである。

ほんの少し前まで、日本の躰は感情を表に出さないことを善しとしてきた。様式や形として現される内に秘めた美しさを美徳として、外からはその人の感情を伺い知ることすらできなかった。血が通った生身の人間がどうか分からないが、礼節だけはしっかり守るといのが時代の生き方だった。

杉良太郎主演の映画に『丹下左膳』があるが、この映画の本筋は、「武士は食わねど高楊枝」である。忍従することの美徳が非常に強く描かれている。自分を押し殺して生きていくことが美徳になっている。これは個性を主張する現代の世の中にはそぐわない。

しかし今の基本的教育は時代に逆行して、個性の主張より社会の要請を中心としたカリキュ



ラムが組まれる傾向にある。しかし、本来の日本の教育は神道による自然への畏怖から発していたはずである。それが外来文化や思想の導入で徐々に変革されてきた。もちろん、当時の支配階級は人民を支配するに都合のいい道具としてこれらを利用してきたことでもある。しかし、時代は支配者と非支配者の縦の関係を否定し、横の連帯を強調する自由、平等、個性の時代である。

日本は島国のため、沖繩の地上戦を除けば直接の武力侵略を受けていない国民である。しかし、思想的には中国やアメリカの影響をモロに受けた国民でもある。とくに戦後はアメリカによる思想的、経済的影響は大きく、民主主義は時間をかけて育てる前に、天から降ってきたのである。精神主義を第一に掲げていた世界が突然民主主義に変わっても、人間の心の中まで浸透するには時間がかかるものである。そのために古い思想と新しい思想が混在し、世代によって考え方もバラバラといった混乱状態が今でも残っている。

K君のような心の病気の場合、自宅治療の指導は月一回直接会っての指導の他に、症状の変化を常に報告する手紙をどんどんもらい、基本的な感情の処理方法、ものの考え方、曖昧な判断の根拠を指摘するなど、手紙で指導している。K君の場合、ファックスなどで月に二回も三回も症状の報告があった。しかも、その内容は通常考えると、ばかばかしいことである。

例えば剣道をやるように勧めた。体力の増強のためである。そこで、最初の二週間は時々見

学に行くだけに止めるよう話した。しかし、K君は以前剣道をやっていたこともあって「二週間の見学は長すぎるから、すぐにでもやりたいかかなものであろうか」といった内容である。また、電話は三分以内に話すように指導してあるが「三分では話のまとまりがつかないで、四分話しても良いか」といった具合である。そうかと思うと、テレビはほどほどにという指導で、二十分くらいで打ち切ることという、「一つの番組は三十分単位で、コマーシャルを除いても二十三分になる。三分延長してもよいか」という具合である。それに辛抱強く私は答えていかなければならない。

もう一つ、親の指導の問題がある。開業医の家に生まれたからといって、開業医になる能力や資質があるとは限らない。基本的に親は家族を養い、生活する手段として職業を持つ。その職業が親にとって適性であったとしても子供にとって適性とは限らない。適性でない子供に強要するところに問題がある。親がルールを敷いて安全走行さすことだけが子供への愛情ではない。親もまた「可愛い子には旅をさせ」くらいの突き放した愛情が欲しいものである。

子供はまずのびのびと育て、その中から適性を見つけ、選択させるような余裕が必要だろう。そのうえでその職業に通用するだけの基本的能力を身につけさせることである。

それでもなお、選択を間違える場合もある。可能ならその時点で選択し直すだけの勇気も必要

である。転職、脱サラも今日では日常茶飯事で、永久就職といった概念は若者の間では皆無だろう。K君の場合、開業医という社会的評価のある職業を選択させたいという親のエゴが選択の道を閉ざしてしまったのである。

では、子供の立場としてはどうか。子供はのびのびと育てよう話したが、聞分けのない幼児の頃は、躰というより調教といっても良いかもしれない。やって良いことと、やってはいけないことを体で覚えさせていくのである。そうすれば物心つく頃になって特別な躰をしなくても、自然に社会のルールは備わってくる。男性・女性ホルモンが出てくる思春期にれば、他人の目を意識した行動もできるようになるだろう。従って、必要以上の躰を押しつけて子供をいじけさせる必要はない。自分で判断できる逞しい子供が育てば、自分を曲げてまで親のいいなりになるような過保護な子供はできない。

K君は治療を開始して一年半が経過している。ほぼ症状は改善して学校へ戻り、寮に入って勉強している。とりあえず高校を続けて卒業することが目標である。しかし、私はK君に開業医には不資格なので、他に職業を選択した方がいいと勧めた。母親もそれに賛成している。しかし、そうするかどうかは本人と家族の問題である。私ごとやかかいうことではないし、指図したり命令したりするのは私の本意ではないし、また役目でもない。

## 自閉症の母親を持った子

### ※男の子は口数が少ない

私が外で原稿を書いて戻ってくると、机の上に、さざえが一杯入った大きな籠がどーんと置いてあった。びっくりしたが、よく植木屋さんとか米屋さんといった行商の人達がビルの間を回って売りにくるから、気を利かせて私の好物を買っておいてくれたのだと思って中を見てみると、小ささまざまなさざえがゴロゴロしている。ところが職員から「今日相談においての方からいただいたものです」と聞かされて、二度びっくりした。

初めて相談に来られる方から戴き物をするなどということは珍しい。普通、少し治療効果認められて、本人も家族もそれを喜べるようになったとき、おみやげをいただいたりすることがある。

なぜなら、療導医学の本を読んで、もしかしたらこれで治るかもしれないと思っておいでに

なっても、最初は誰もが半信半疑どころか、信じてさえいないからだ。これがどこにでもある水疱瘡や麻疹のような病気なら安心して病院へ行くだろうし、病院で治ると信じている。しかし、その病気が大学病院を回っても、専門医の治療を受けても、あるいはまた、その道の權威の診断を受けてもちっとも改善されないということになれば、もうどこへも行きようがないと思うのだろう。

私が治療している癒導医学は、宮内庁や、大会社の社長や社員、医師やその子供さんも方も治療を受けに来られる。しかし、医療者は職業上秘密を守る義務があり、氏名は公表できない。いずれも俗にゆう西洋医学に見放された方々である。日本では西洋医学（薬物医学）至上主義で、ようやく無薬医学が見直しに入った段階である。だから、最初から治ると信じておいでになる方はいない。あきらめていた病気の症状が軽くなって、少しづつ治ってきたときによく癒導医学を信じ始めてもらえるのである。しかし、私はそれで良いと思っている。

ところが、この方は最初から「もうここしかないのです、どうか治してください」と、小学校四年生のお孫さんを連れて来られた。娘さんの子供だとのこと。

症状を聞いてみると、一日中ジーンと座っているか、ゴロゴロ横になっているだけなのだという。もちろん、学校にも行く気力もないようだとのことである。小学校へ入学する頃からこ



うした症状は見られたが、それでも入学当初は新しい友達ができるかもしれないし、学校はおもしろい所だと言い聞かせて送り出していた。本人もそうした希望があったて行き始めたのだが、二年生の初め頃からは学校には行かなくなり、ほとんど何もしなくなったのだと訴えられた。

付き添いのお祖母さんはこう言った。「原因はこの子の母親にあるんです。母親が自閉症で一日中じっとして、子供の面倒を見ないものだから、私がほとんどやってきました。だけど、親のせいで子供が学校へ行かなくなるといのは可愛そうだから、是非とも治してほしいんです。母親はもう長いことそういう状態で治らないかもしれないかもしれませんが、この子は跡取り息子ですし、これから長い人生があります。何としてでも治るものなら治してやりたいと思います」と訴えられた。

一般的に男の子は女の子よりも口数は少ないし、自分の要求をなかなか口にしないものである。だから世の母親は「女の子は黙っていても何とか育っていくし、お喋りだから何を考えているかすぐ分かる。でも、男の子は口数が少ないし、自分の欲しいものもはっきりいわないから私の方から聞いてやらねえとね」と、男の子の子育ての難しさを話す。男の子は表現が下手だから、いつも目を向けていないとどこかへ行ってしまうのではないかと不安になるらしい。男の子の本質は干渉されたくないだけのことなのである。だから口うるさくいわれると反発し、

反抗する。

こうした基本的なものは年が三十になろうが五十になろうが変わらないものである。なぜなら、帰宅した夫が話す言葉が「飯、風呂、寝る」の三つだけで夫婦の会話がないと嘆く妻たちがいかに多いかを考えていただければ分かるだろう。

### ※ 自宅治療は父親も参加して

話を本筋に戻す。このI君の体の状態を見ると背中とか肩、あるいは腰の辺り、臀部でんぶから足の方までを押すと非常に痛がる。これは神経が緊張して、筋肉をギュウギュウ締めつけているからである。しかし、日常生活で体を動かしても痛みは発生しない。

この状態を見て、とりあえず完治までに一年かかることを納得してもらった。その上で「学校へ行けるようになったり、いろんな欲望が出てくるまでには二、三ヵ月かかりますよ。千葉の方から通われるのは大変でしょうが、十回くらいでいろんなものに興味を示し始めますから、その後を上手に導いてやれば大丈夫ですから」とお話しして治療を開始した。

最初のうちは非常に痛がるので、神経を押すことができない。そのために、まず私がI君の



友達になって緊張をほぐしてやるように心がけた。それでも四、五回までの治療は、とりあえず体に触ったり、気持ちが良いと思わせるようなものだけで止め、無理をしなかった。治療をするような気持ちにさせるだけで、実際の治療はできなかった。付き添いのお祖母さんには「とにかく、こういう子供さんは一人ぼっちで寂しいのだから、癲導医学に行けば話相手になっ  
てくれるとか、面白い楽しいことがあるんだと思わせてから始めたい」ということを説明した。

最初は女子職員と一緒に遊ばせ、徐々にその女子職員が遊びながら治療していった。五、六回目のときに、I君の方から話しかけてくるようになった。家であったこと、電車で来る途中で知らない人に話しかけられたことなどをポツリポツリと話し始めた。こうなれば話しかけながら神経を治療していくことができる。十回目くらいになると、自分の家で良く遊ぶようになった。まだ学校へ行くとはいわないが、学校のことが気になる様子を見せてきた。

そこで、今度はお祖母さんに母親の対応についてのお話をした。どんな病気でも、母親は子供が可愛くないはずはないので、しゃべらなくてもいいから、子供が話しかけたら黙って目を見てもうなずいてくれるように指導をお願いした。さらに、母親の病気についてはごまかしたりしないで「お母さんは少し体の具合が悪いから、喋りたくないし、いろんなことができない。それをお婆さんが代わってやってあげるからね。お母さんは可愛そうだね」というように、I

君に良く説明してあげるようお願いした。

さらに三ヶ月経った頃、I君は学校へ行きたいといい出した。私は最初のうちはお祖母さんが一緒について行くように指導した。治療もほとんど普通に行えるようになり、痛みも半減していた。すると、I君はお祖母さんが学校へ付き添いでくるのをいやがるようになった。男の子は照れやだから、本当は一緒についてきて欲しくても、「離れて歩け」とか「他人のように装え」とか注文をつけてくる。これは脳の正常な働きである。特に思春期になると子離れできない母親がべったりくっついていたがるのを、子供は避けるようになる。子供の親離れである。このくらい回復すると、後は自宅治療の方法に切り替えて、三週間に一度通うようにしてもらった。子供は学校に行けるようになったが、授業の内容についていけないので、学校では三年生の授業を、さらに自宅では二年生の教科書でお祖母さんが教えてあげるようにして、学習意欲を持たせるように仕向けていった。

自宅治療の基本は器具を使ってやるが、I君の体が小さくて器具が使えないので、お祖母さんと父親が交互に体の部分を別けて、治療してあげるよう指導した。

I君の父親は妻がうつ病で家の中が面白くないとあって、朝早く出かけて行って夜は遅くならないと帰ってこない。I君のこともまるで構わない。しかし「子供には何も責任もないこと

ですし、親の都合で子供を邪険じやけんにするのは良くないことです。結婚に失敗したとしても、子供をちゃんと育てていこうじゃありませんか」と世間話を交えてお話した。父親にはI君の体に触ってあげること、一緒にお風呂に入ることが施療につながることを説明した。

こうして半年ほどが経ち、その間、時々電話で問い合わせに答えていた。日常生活のあれこれや施療内容が主なものだった。この電話もできるだけ本人からかけさせるように仕向けた。自分の言いたいこと、自分のしてほしいことを自分の口からはっきりという習慣をつけさせるためである。こうしてI君は快方に向かった。

### ※ 上手な親離れ子離れ

私が次に話したいのは親離れ、子離れの問題である。この問題を簡単に解明するとすれば、人間といえども本来的には動物であるということを考えていただければいいと思う。

動物は子孫を残すために、もともと雄と雌とが引き合うようにつくられている。親子、兄弟といった基本的な家族関係は子育ての間だけで、巣立ちすれば雄と雌の関係しかない。動物にとってより多くの子孫を残すことが使命なのである。

では、人間はどうか。人間は高度な精神生活をもち、親、兄弟、親戚といった血縁関係に守られて社会生活を送ることになる。それは人間が自然の脅威に対しての弱者であるということもある。子供は一年経たなければ歩くこともできないし、自分で食料を確保するまでに十年以上かかる。その間の生命維持のための相互扶助として意識的につくられたのが血縁関係である。しかし、動物の子供は生まれて数時間後に歩き出し、すぐに自分で食料を確保することのできるものも少なくない。巣立ち後の繁殖期になると子孫をつくるために雄と雌が引き合い、後世に種を残すのである。

人間もある年齢に達すると異性を意識し、魅かれるが、思春期の段階では種を残すには体が完成しきっていない。それよりも精神生活を向上させるための一手段として、誰でも通過するのが思春期である。こうして精神的にも肉体的にも性に対する欲望と子孫に対する責任が全うできた段階で結婚し、生殖によって子孫を残そうとする。こうした欲望は動物としてごく自然のことである。しかし、人間は種を残すために性行為をするわけでもないし、異性なら誰でもいいというわけでもない。〔日本人の正しい性生活と悩み治療』参照）

人間は巣立ちするまでは母親を慕い、母親の愛情に甘えて育つ。これは男児女児ともに同じである。しかし、女兒は同性である母親と自分を同化させ、自分の役割を知っていち早く巣立

ちしてしまう。そこへいくと男児はいつまでも母親の愛情に甘え、巣立ちできにくいようである。長じて結婚しても、自分の妻と母親を同一化して、妻に対しても母親と同じ甘えを要求しがちである。「靴下はどこだ」「飯はまだか」といった具合である。

精神的に母親から独立できないマザープレックスの男性は母親と一心同体で、自分の身の回りのこともできず、自分が結論を出さなければならない問題に対してすら母親を頼ろうとする。

そうかと思うと親離れした子供にうるさがられながら、なお子離れできない母親もいる。夫が愛情を注ぐ対象となりえない妻が、そのはげ口として子供を溺愛するからである。母親にとっても子供にとっても不幸なことである。

父親と娘の場合はこうした問題は起こりにくい。母親と娘は同性であり、娘は容易に母親に同化し、間もなく父親を自分の一番身近な異性として認識するようになる。そうなると父親に対して距離を置くようになり、自立心が芽生えてくる。こうしたチャンスに自立心を植えつける対応をしていけばきちんとした親離れ、子離れができ、独立心旺盛な大人として成長することがができる。

人によっては、こうした感情が湧いてこない人もいるし、その湧き方が薄い人もいる。大ま

かにいってほとんどの人が普通に湧いてくるが、全人口の二割や三割はそうした感情が湧いてこない人もいる。

男児も女兒も性ホルモンが出始める十歳くらいまでは母親の愛情だけで育つことができる。幼い子は母親を離れて外へ遊びに行っても、定期的に家に帰ってくる。そこで母親の顔を見て「お腹が空いた」「お水が飲みたい」といった甘えの言葉をいう。そこで母親がちょっと言葉をかけてやれば、また安心して外へ遊びに出る。これが心の安堵感あんどかんである。自分をいつも見ている、愛情を注いでくれる母親がいないと子供はいつも不安になる。こうした繰り返しで、徐々に子供の家に帰る時間が伸びてくる。幼いときにたっぷり愛情を注がれた子供は、親離れも早いものである。こうしたことは男女ともに同様である。

しかし、大人になっても人間は愛情を注ぎ、愛情を受ける対象が必要である。定期的に家に帰って来るのもそれである。家には自分にとって一番身近な愛情があり、愛を注ぎ、愛を受ける対象がいるからである。

親離れ、子離れは子供の自立、独立にとって大切なウィークポイントとなり、恋愛や結婚、将来の家庭生活においても大きく影響してくるものである。子供時代には溢れるばかりの愛情を与え、上手な親離れ、子離れをしてほしいものである。

## 精神の安定が図れない思春期精神病

### ※ そう状態とうつつ状態がくるくると交替

高校三年生、十八歳のM子さんは高校二年から学校へ行ったり行かなかったりしていて、今ではまったく登校できなくなってしまう。その症状を本人は「人の心を探ってしまう」「何か話したいが話せない」「自分の意思で動けない」「何に対しても興味が湧かない」「過去のことがばり考える」「学校の悩み」と書いている。

脳の働きが鈍くなってくると、まず猜疑心に駆られる。疑り深く、人が信じられなくなるのである。症状が進むと、周囲の人間に対して疑いを抱く。さらに進行すると全くの他人が自分に何か危害を加えるような気がしてくる。さらに食べ物に毒を入れられている、誰かがつけ回しているといったような猜疑心と被害妄想で入院してしまう。

患者が訴えた「人の心を探る」という症状は、脳の働きが鋭くなり過ぎていて、猜疑心に駆

られている状態である。

「何か話したいが話せない」という症状は、特に自分から話したい事柄があるというのに口を開こうとするとき全身が異状に緊張してしまいモゴモゴ口だけ動かすことが無意識のうちに起こっているに過ぎない。お腹が空いたときに何かを食べたいという欲求があるとき、それが自動的に言語中枢を刺激して回路を開いて言葉になる。こうした一連の動きは大脳皮質と自律神経の働きが連動して、ごく自然のうちに行われる。ところが、この連動がうまくいっていないと自動的に言葉が出てこない。こうなれば「自分の意思で動けない」「興味が湧かない」というのは当然のことである。

人間の欲求は大きく分けて六つある。『日本人の正しい性生活と悩み治療』に書いたように、食事、排泄、睡眠、生殖、性生活、会話の欲求がある。動物の欲求は最初の四大欲求であるが、人間の場合、大脳皮質が異常に発達しているため、性生活と会話の欲求が加わるのである。

また、「過去のことを考える」というのはどうか。大脳皮質の働きが低下したときに現れるのがうつ状態である。何に対しても興味が持てず、前向きな生き方ができなくなってしまう。そうなるその後ろ向きの過去のことばかり湧いてきてしまう。

普通、健全な大脳皮質の働きが維持されていれば過去にこだわることはない。なぜなら、毎



**位發放領電**

姓名: \_\_\_\_\_ 性別: \_\_\_\_\_ 年齡: \_\_\_\_\_

職業: \_\_\_\_\_

住址: \_\_\_\_\_

電話: \_\_\_\_\_

其他: \_\_\_\_\_

備註: \_\_\_\_\_

姓名	性別	年齡	職業	住址	電話	其他

4. 關於本會之宗旨、目的、組織、章程、業務、經費、及其他一切事項，均應遵守本會之規定。
- 1. 凡我會員，應遵守本會之宗旨、目的、組織、章程、業務、經費、及其他一切事項。
  - 2. 凡我會員，應遵守本會之宗旨、目的、組織、章程、業務、經費、及其他一切事項。
  - 3. 凡我會員，應遵守本會之宗旨、目的、組織、章程、業務、經費、及其他一切事項。
  - 4. 凡我會員，應遵守本會之宗旨、目的、組織、章程、業務、經費、及其他一切事項。
  - 5. 凡我會員，應遵守本會之宗旨、目的、組織、章程、業務、經費、及其他一切事項。
  - 6. 凡我會員，應遵守本會之宗旨、目的、組織、章程、業務、經費、及其他一切事項。
  - 7. 凡我會員，應遵守本會之宗旨、目的、組織、章程、業務、經費、及其他一切事項。
  - 8. 凡我會員，應遵守本會之宗旨、目的、組織、章程、業務、經費、及其他一切事項。
  - 9. 凡我會員，應遵守本會之宗旨、目的、組織、章程、業務、經費、及其他一切事項。
  - 10. 凡我會員，應遵守本會之宗旨、目的、組織、章程、業務、經費、及其他一切事項。

17 選舉日  
 18 選舉地點  
 19 選舉時間  
 20 選舉程序  
 21 選舉結果  
 22 選舉經費  
 23 選舉監督  
 24 選舉爭議  
 25 選舉效力  
 26 選舉效力  
 27 選舉效力  
 28 選舉效力  
 29 選舉效力  
 30 選舉效力  
 31 選舉效力  
 32 選舉效力  
 33 選舉效力  
 34 選舉效力  
 35 選舉效力  
 36 選舉效力  
 37 選舉效力  
 38 選舉效力  
 39 選舉效力  
 40 選舉效力  
 41 選舉效力  
 42 選舉效力  
 43 選舉效力  
 44 選舉效力  
 45 選舉效力  
 46 選舉效力  
 47 選舉效力  
 48 選舉效力  
 49 選舉效力  
 50 選舉效力  
 51 選舉效力  
 52 選舉效力  
 53 選舉效力  
 54 選舉效力  
 55 選舉效力  
 56 選舉效力  
 57 選舉效力  
 58 選舉效力  
 59 選舉效力  
 60 選舉效力  
 61 選舉效力  
 62 選舉效力  
 63 選舉效力  
 64 選舉效力  
 65 選舉效力  
 66 選舉效力  
 67 選舉效力  
 68 選舉效力  
 69 選舉效力  
 70 選舉效力  
 71 選舉效力  
 72 選舉效力  
 73 選舉效力  
 74 選舉效力  
 75 選舉效力  
 76 選舉效力  
 77 選舉效力  
 78 選舉效力  
 79 選舉效力  
 80 選舉效力  
 81 選舉效力  
 82 選舉效力  
 83 選舉效力  
 84 選舉效力  
 85 選舉效力  
 86 選舉效力  
 87 選舉效力  
 88 選舉效力  
 89 選舉效力  
 90 選舉效力  
 91 選舉效力  
 92 選舉效力  
 93 選舉效力  
 94 選舉效力  
 95 選舉效力  
 96 選舉效力  
 97 選舉效力  
 98 選舉效力  
 99 選舉效力  
 100 選舉效力

### 検査項目 (A)

項目	検査項目	検査結果	備考
1	RECORDS AN/114		
2	20170827MILITARY		
3	AN/114		
4	AN/114		
5	AN/114		
6	AN/114		
7	AN/114		
8	AN/114		
9	AN/114		
10	AN/114		

通過

世界中の時空を背景にして、子供たちの苦悩を描いた小説。

(発達障害の子供たち) (暴力、差別、虐待)

今日の日は、修学旅行の日

1/17 木曜日 1/18 金曜日

1/19 土曜日 1/20 日曜日

1/21 月曜日 1/22 火曜日

1/23 水曜日 1/24 木曜日

1/25 金曜日 1/26 土曜日

1/27 日曜日 1/28 月曜日

1/29 火曜日 1/30 水曜日

1/31 木曜日

2/1 金曜日

2/2 土曜日

2/3 日曜日

2/4 月曜日

2/5 火曜日

2/6 水曜日

2/7 木曜日

2/8 金曜日

2/9 土曜日

2/10 日曜日

2/11 月曜日

2/12 火曜日

2/13 水曜日

2/14 木曜日

2/15 金曜日

日繰返される睡眠によって、記憶の回路が少しずつ外れ、特に強い刺激を受けた印象深いこと以外は記憶の回路が薄れていくからである。ものごとの大枠や感動を受けた言葉、行為などの一部が記憶のフィルムに焼きつけられることはあるが、一部始終を記憶するなどということは不可能である。

しかし、大脳皮質の働きが正常でない場合、睡眠による忘却回路が働かなくなり、いつまでもそれが記憶に残る。

二十七、八歳の大人の患者さんであっても、悩みを聞くと、小学生の頃の記憶を今日あったことのようにとくとくと繰り返し羅列したりする。ちよつと見には非常に優れた記憶力の持主のように思われるが、これは病気の症状にすぎない。健全な大脳皮質の働きをしていれば、過去は忘れてしまうのが自然である。過去にこだわっていたのでは一歩も前に進めない。それよりも、明日、そして将来の目的に向かって思考をめぐらすのが普通の状態である。

ただ、大脳皮質の活動レベルが上がり過ぎてそう状態になった場合、今度は現実と夢想の境界線が分からなくなつて、大風呂敷を広げる夢想家や誇大妄想狂といったベテン師的な行動をとるようになる。

M子さんのような思春期精神病というのは、そう状態とうつ状態がくるくと交替して精神の安定が図れない。それに近い状態が幼児で、「今泣いたカラスがもう笑った」といわれるのはそのためである。一般的に大脳は二十六歳くらいで成熟する。そうなると精神的安定が得られて人間的にも安定してくるのが普通である。

### ※暗示にかかりやすいのが特徴

この十八歳のM子さんはご両親と一緒に相談に來られた。私の前に座っても、黙ってうつむいている。中学二年のときに登校拒否になったが、転校したらまた学校に行けるようになったという。原因は友達関係にあったと話した。非常に薬の嫌いな子だった。

一回目の登校拒否は転校によって逃れたが、今度の登校拒否は二回目で、高校を転校するわけにはいかないので、何とかしたいというのである。今回の原因は進路問題だというが、以前に家庭のことで悩んでいたそう。母親はメモを持参して來ていた。

四月頃、喉の渇き、不眠を覚え、学校を辞めたいと訴えたが、その当時のM子さんの行動を書いたメモである。

四月二十三日・家庭の悩みを訴える。

二十四日・学校帰りに遊びに行き、夜九時に帰宅するが、家に帰るのが怖かったという。二

十六日・担任から母親の職場に本人の様子がおかしいと電話があった。

二十七日・深夜の二時頃、置手紙をして家を出る。

二十八日・家出するしないで騒動があり、家を出るのならということ、父親の実家へ行く。

幻覚症状が起きている。

二十九日・本人を父親の実家に置いて夫婦で自宅へ戻る。

三十日・実家から病院へ救急車で運ばれたが、ほとんど眠らない。

五月二日・大学病院の精神科に入院する。

二十六日・この頃から一時間くらいずつ父親の実家から学校へ行き始める。

入院は二十四日間で、その後通院しながら少しずつ学校へ行く。

六月の二十一日・愛犬が死に、相当ショックを受ける。二十二日から数日間、恐怖心に相当に

苦しむ。

二十四日・貰った薬はあまり飲まない。病院へ行こうとすると「薬を飲まないのにどうして病

院に行くの」と聞かれる。不安で落ち着かない様子。

二十六日・日本癒導医学から本が送られてくる。そのときは非常に落ち着かず、心が張り裂けそうだと苦しむ。

二十七日、八日・不安をじっと耐えている。癒導医学の本の内容を話してやると、そのうち落ち着いてきた。

二十九日・本の内容を話した後、不安や落ち着きのなさが取れてきた様子。ほとんど「頭がボーッとする」といわなくなる。

三十日・ニコニコ顔をしている。

七月一日・体を横にすることが少なくなった。

癒導医学から本が送られてきて、その内容を話して聞かせるうちに不安顔や落ち着きのなさが取れ、ニコニコ顔になってきたというのは、私の研究所を訪れる患者さんの七割くらいの方がいわれる。それは、この病気に陥る人が非常に暗示にかかりやすいということと関係がある。この病気の特徴は『よくわかる心の病の治療』に記載した通りである。

こうした患者の不安と、暗示にかかりやすいという弱みにつけこんだ商売もある。「霊がついている」とか「この食物を食べれば良くなる」といった治療方法を用いるのだが、暗示にかかりやすい患者はそれで症状が取れ、数日間、気分的に楽になることがあるかもしれない。そ

それはそれで病気が完治したといえるかもしれない。

薬物治療でも基本的には同じような考え方をする。症状があれば薬を飲み続ければ良い。そうすれば症状が取れるという方法だ。お払いをしてもらって壺が取れ、食べ物で元気になれば病気が治ったことでもある。

しかし、薬や暗示療法をすることで一時的に症状が取れて楽になったかもしれないが、根本的な治療をしなければ完治したことはないと思っている。虫歯の患者が痛み止めで楽になっても、虫歯を根本的に治療しなければ完治したといえないのと同じである。

原因療法は病気の原因を取り除いて根本的に病気を治し、再発しないようにすることであるが、本来弱いものを持っている場合には、それを大事に使うことで無理をさせないようにすることも必要である。虫歯の人には正しい歯磨き方法を指導して再発を防ぐようにした上で、生まれつき歯の弱い人ならカルシウムの多い食べ物を食べるように指導したり、堅いものを噛んだりして無理な使い方をしないように注意することも大切である。

骨折の場合も同じである。骨折は骨が完全につながって肉が盛り上がってこなければ完治しないが、一度骨折した部分は他の部分と比較して弱いという弱点があるので、無理のないように大事に使うしかない。

しかし、肉体的な苦痛や痛みを伴った病氣の人に暗示をかけても苦痛からは逃れられないが、心の病氣なら上手に暗示をかければ、症状が取れて治ったと患者が思い込んだとしても不思議ではない。また、そう思い込むことによって回復に向かって行くともいえる。

癒導医学の予約日になると非常に体調が悪くなり、行こうかどうか迷って電話をしてくるといふ患者さんがかなりの確率でいる。「今日は、非常に具合が悪いのでどうしましょうか」と聞かれるので、「何でもいから電車に乗ってみなさい。具合が悪ければ降りて休憩しながらいらっしゃい」と私は答える。そうすると「何となくたどり着きました」「一駅ごとに気分が楽になり、癒導医学に着いたときはケロッとして何の悪いところもないような状態になってしまう。不思議ですね」といわれる。

私は患者の暗示にかかりやすいという特徴を上手に使ったまでである。これを悪用しようと思えば簡単である。さしずめ「癒導教」あるいは「癒導宗」といった宗教をつくりあげ、「お祈りや神通力で病氣も良くなる」と宣伝したら、それは私に特殊な能力があつてそうだったかのように信じられてしまうかもしれない。その方が便利なようだし、それもまた一つの解決方法だと思ふが、性格上、私は好まない。

私は電気技術が好きで、中学二年のときアマチュア無線技師の資格を独学で取った。原因と



結果が理論的に突き止められなければ納得できないし、面白くない。何となくモヤモヤしたものが残る。そういう感じがどうしてもぬぐえないから自分をごまかせない。だから宗教人にはなれない。

M子さんに話を戻すと、自律神経失調症でうつ病という患者さんには、潔癖症という病状もある。また、十八歳という年齢からくる神経症的な症状もある。そのせいかM子さんの持参したメモの七月三日の項に「人の営みが」「人の営みが」と数回口にすると記録されている。つまり、患者さんは自分が汚い、いやらしい人の営みによって生まれてきたことがどうしても忌まわしくて、自分自身が嫌いだといっているのである。これは潔癖神経症の症状で、性行為は動物的な、非人間的なことで、汚いことだと考えているのである。

### ※ 親の生き方が問われる病気

まず、患者さんが相談にこられた日から治療が始まり、通院することになった。三回目くらいするとき、自分で分からなかった肩の凝りや背中への引きつり感がなくなった。五回目くらいからは家事の手伝いができるようになってきたという。

こういう心の病気は体の状態が改善され、脳の働きが向上してきた段階、つまり自覚症状が改善されて他のものにも興味もてるようになったときから、自宅治療に切り替えてもらう。そうすることで通って来るよりも早く治っていくことが多いからである。

M子さんは八回目で通院を中止し、自宅治療に切り替えた。この時点では、これまで睡眠薬を飲んでも利かなかつたものが、薬なしでも十分眠れるようになっていた。「精神的につらいことがありますか？」と質問すると、「とくにつらいという事はありません」という答えだった。これは症状が一時的に取れ、改善に向かって自己治癒力が動き出した証拠である。以後は月に一回か二回癒導医学に来てもらうことにした。とりあえずは卒業することを目標に授業に出席し、考えごとは完全に病気が治った後でというように指導した。

まず、登校拒否の大きな原因となるのが家庭内の雰囲気は何となく面白くないということである。その原因が夫婦間の葛藤かつとうであったり、親の性格かたよ的な偏りであったりする。人間は感情の動物といわれるくらいで、いつも円満で、良い精神状態でいられるわけではない。一日のうちでも波があるものである。ただ、ここで問題なのは、その感情を全てさらけ出して良いということではない。人生は演出であり演技であるということを忘れてはいけない。大脳皮質の働きは本能の働きをコントロールして、精神活動を向上させ、演出できるところに究極の作用があ

る。ここを良く考えることである。

相手を思いやり、演出する気持ちを持ち続ければマンネリにはならない。特に、男女間の大人なら、満足した性生活がなされていけば大脳皮質の働きもスムーズにいく。家庭も円満で、自然に相手を喜ばそう、相手の気持ちはどうかということを頭に置いて考え、行動するようになるものである。性のインパクトでマンネリを解消し、生き生きした生活ができれば周囲の間を受け入れようとするゆとりも出てくる。

つまり、心の病気、登校拒否を生む子供の親は、見かけ上は隙のないお利口さんタイプで、感情を表に出さない。まして、子供の前で失敗事を見せることもないだろう。加えるに必要な物分かりが良いのも特徴である。さらには父親は父親の役割を、母親は母親の役割をなしていないこともある。特に父親が役割を果たしていないところに大きな問題がある。

メモによれば、M子さんは先に家庭の悩みがあって、その後進路問題で悩んできたという。家庭の悩みというのは、親がきちっと自分達の考えを説明しなかった点にある。家庭の悩みといても多少の悩みならどこの家庭にでもある。それを親が自分の言葉できちっと子供に伝えることが大切なのである。

私はM子さんにお母さんが好きか嫌いか尋ねた。はっきりと「きらいだ」という。「なぜ？」と聞くと「きらいなものはきらいなんだ」と、理由にもならない駄々っ子のようなことをいう。「じゃどうして一緒に住んでるの？ 大人になると好きな事はかりはできないよ。きらいな人とも一緒に住まなければならぬよ。それをきちっとやるのが大人だよ」と話をした。Mさんは「フーンそんなものか」と自分で思っているし、「なぜ、そうできるのだろう」とも思うだろう。そうした自分の意見を親に対してはっきりと話すことだ。こういうところ思われしなかなどと危惧することが一番危険なのである。

これは何も子供に限ったことではない。親にしても、自分たちの意見を遠慮なくはっきりいって、衝突したら子供と話し合うことが必要だろう。変に物分かりがいい親は、口先でごまかそうとするし、子供は子供で猜疑心を募らせることになる。

進路の悩みについても、私の家庭では長女によく話して聞かせていることがある。「お前は技術的に上手に勉強ができるわけではないから、大学の教授になることも、研究者のような仕事もできないよ。しかし、日本ではどんな仕事してもいい、どこに住んでもいいという職業選択の自由、居住の自由も認められている。だから自分の能力なりに、能力のある人と同じようにお金を稼げるし、幸せになることもできる。だから人とあまり競争するな。自分がどの程

度できるかをよく見極めて、自分なりに精一杯やっていけばそれで良い。自分のやりたい仕事もある程度決まっているだろうからその辺に絞って、今のところは自分に与えられた勉強の内容をよく理解していくことだ。大切なことは前の日の自分と競争することだ」と話す。

長女はそろばん塾へ行っても割り算ができなくて止めてしまった。しかし創造力は素晴らしいものを持っている。水泳学校、剣道、学習塾と行きたい所はいろいろあるようだが、私は長女には向かないと思い、ボーイスカウトを勧めた。今はそこで遊び、団体生活を学ぶよう仕向けている。

長女は学習塾へ行きたいと相当頑張ったが私はお金を出さない。「行きたいならお父さんの手伝いをしてお金を稼いで行きなさい」と突っぱねている。

親の考えをはっきり持っていないと、こうしたことはいえない。自分が今考えていることが子供にとって正しいことなのか正しくないことなのかは分からないが、父親の基本的な生き方が問われていると思う。私はこうして決めたことを徹底させることから始める。それが子供の悩みをいつまでも引きずらせないことだと思っている。

悩むということは脳を疲れさせる。「間違っ<sup>て</sup>いても良いからすぐに結論を出せ、そして決

断しろ、そして行動を起こすのだ。こうした決断や行動が間違っていることに気がついたら、すぐに次の決断と行動を起こせ」である。やたらと頭で考えるだけで、ぐじぐじしているということは非常に危険である。もし間違っていないかったら、さらに良い方向に導くための次の決断をする。こうしたアドバイスを父親にした。

研究所の私の机の上には植木鉢が一個置いてある。患者さんに戴いたカトレアの花である。もう一つは子供が私の誕生日にくれた喋ると踊る造花の植木鉢である。それを指差して「このカトレアがしぼんだり、花が咲かなかったり、枯れたりしたらカトレアが悪いんですか？ それとも管理する私が悪いんでしょうか？」と聞いた。そうすると半数くらいの人はウーンと考えるし、半数くらいの人は管理する方が悪いと答えられる。

そこで私は「子供は植木鉢の花と同じです。水が足りない、水が多すぎる、日を当てる、日を当て過ぎないといった管理は、花自身ができることではないんです。花はただ単に管理者の言う通りに黙って従っているだけなのです。そういうとき管理者は『お前は苗が悪い』『枯れるお前が悪い』と責めたとしたら、管理者の方が心の病気におかされているとしかいいようがありません。しかも、本人はそれが分かっているのです」と説明した。

**登校拒否や心の病気は、そうした管理する側の愛情がなかったり、多すぎたり、あるいは干**

渉を愛情と錯覚している場合に発生してくる。本当の愛情とは、ときには優しく、ときには厳しく、ときには突き放すものである。ところが、それを日本人の悪い癖で干渉する愛情がある。世話をしていると思ひ込みやすいのである。

M子さんの場合、ご両親揃って付き添って来られたということは、病気を治してあげたいという愛情の現れだと理解できる。従って、管理者、すなわち親が子供を正しく管理し、保護してやれるだけの知識を持てば、枯れかかっている草木や草花も甦らせることができる。草花が悪いのではない。草花が根腐れを起こしたり、多少枯れぎみの葉があっても、きちっと保護すれば生氣を取り戻すはずである。それが癩導医学の療法である。だからこの病気を治していく段階で、患者も親も十分にこの病気の本質を理解し、親の考え方や生活態度から改めていく必要がある。そのうえで保護すべき対象ときちっと向き合って、話合ふことがポイントになる。そのためにも、癩導医学に來られる度に父親には親の生き方が問われているんだということを話し、妻との性生活の円満を図り、安定した家庭生活の雰囲気づくりをするよう勧めた。

例えば海の魚を真水で飼ったり、小鳥の目の餌に粟粒を与えたりすれば病気になる。魚でも鳥でも飼うときには育て方、飼い方を勉強するはずである。同様に人間も自分の特性を知らなければ、この病気を根本から治すことはできないのである。

## 医者の卵の進路を変えさせた自律神経の機能低下

※せっかく国家試験をパスしたのに

Sさんは医療関係の学校を卒業して、国家試験に合格したばかりという人だった。しかし、その後の研修や医療現場での実習など、とても精神的、肉体的に耐えられそうにないと心配されて相談にいられた。父親が付き添っていたが、父親は医療関係者ではなく、一般の公務員だと名乗られた。

Sさんは学校に行っているときから自分の体の変調に気づき、周囲の医学関係の先生方に尋ねて薬も使用してみたが一向に良くなかったという。とにかく学校は卒業したし、国家試験にもパスしてこれからというときの变調で、あせっても、自分ではどうすることもできないという。父親も「せっかくここまで本人も家族も一生懸命やってきたのに、これでは何にもな



本報三年九月十八日  
 曾永修 倪先生  
 知至何但... 同至... 下... 各...  
 知至何但... 同至... 下... 各...  
 知至何但... 同至... 下... 各...

姓名	曾永修	倪先生
...	...	...

失 (知) 自 (知) 自 (知) 自 (知)  
 失 (知) 自 (知) 自 (知) 自 (知)  
 失 (知) 自 (知) 自 (知) 自 (知)

姓名	曾永修	倪先生
...	...	...

りません」とガックリ肩を落とされた。Sさんは家族皆の期待の星だったのだろう。

症状はというと、とにかく全身がだるくて、きつくてどうしようもないのだという。そのうえ胸が痛くなったり、下痢をしたりする。何とか本は読めても根気が続かない。この症状を取り除いてほしいという依頼である。これはサラリーマンが仕事ができなくなったときの症状で最も多いものである。自律神経の機能低下である。

自律神経の低下はじっと寝ていれば治るというものではない。ほどほどに活動し、ほどほどに休息しなければならぬが、その兼ね合いに個人差があって非常に難しい。また、病気の状態によってもその匙加減が難しいのである。毎日の運動量と休息量、例えばどの程度歩き、どの程度走り、どの程度横になれば良いのかは、専門的な知識と体験がないと分からないものである。

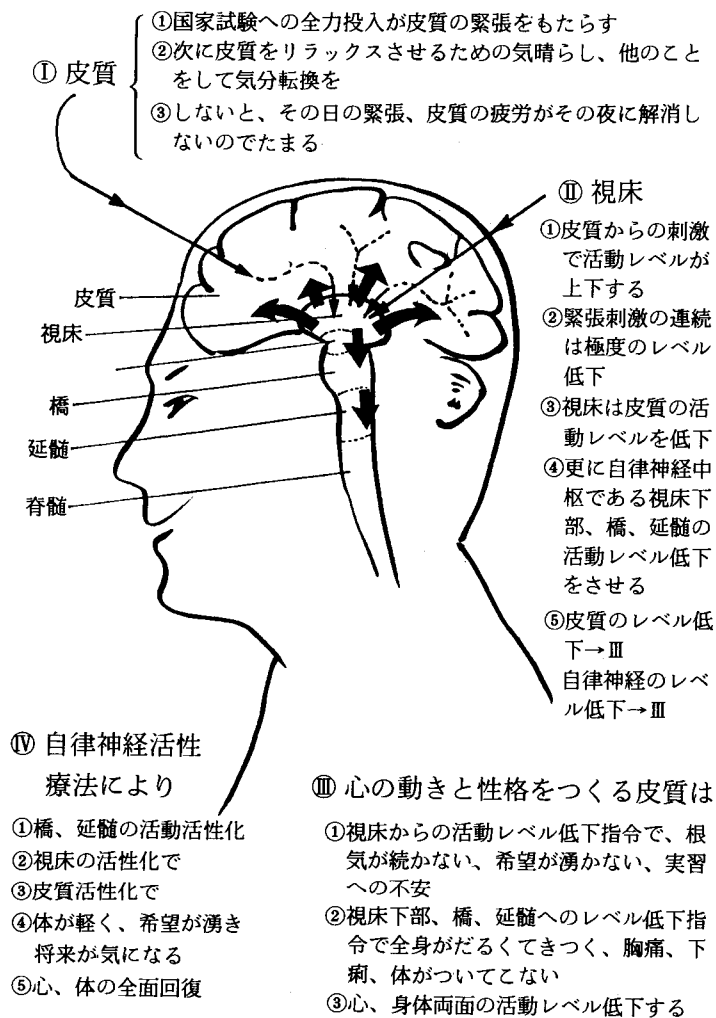
ともかく、Sさんは北陸方面から二時間半かかって通って来られるようになった。治療のために上京し、終わると一泊して翌日帰るという方法である。こうした通いでの方法は、あまり症状が悪化すると自分で自分を管理したり治療することが不可能になってくるので、集中的な治療である程度の症状の安定化を図るのである。父親も「早く治さないと勉強も継続できず、せっかくの資格も生かせないので早いうちに治していただけないでしょうか」と哀願された。年齢は二十六歳、国家試験には一回で通った。相当難しい試験なので、それだけでも大変だった

たと思う。とにかくSさんの努力に私もできるだけ協力することにした。

Sさんのように医療関係にたずさわる患者さんというのも決して珍しいことではない。Sさんの他にも、専門の医療関係の五年生の学生さんが通って来られていた。この人は体重が八十キロくらいで、達磨<sup>だま</sup>さんのように恰幅<sup>かっぷく</sup>がいい。しかし、五年生なので後一年、さらにその後の国家試験の準備が残っているのに、どうしても体がついてこないということで治療に見えた。治療は五日に一度で、十二、三回で体が軽くなってきたので自宅治療に切り替えていただくよう話した。若いことでもあり、体重が減っていないこともあって回復はほぼ順調である。この原稿を書き始めてから、はぼ一年になる。この方の症状が一段落したので自宅治療にきりかえてから半年後ヒョッコリ来られた。顔を見たが、だれだか判らない。カルテ添付の写真で確認すると、「これ私です。」「へエーほっそりなられましたネエー」「エエ、六kgになりました」「その後どうでしたか」「受験の追い込みで最近体調を崩し長引きますのでまた来てみました。会員証は有効でしょうか」「イヤー別の人が飛び入りで来られたのかと思ひまして……」「イヤ、お陰様で順調です。……」と。

Sさんのように自律神経の機能低下は、心の病気と違って考え方や判断基準が世間一般とずれることはないのです。体のだるいやきつささえ取れば、後は自分で治していくことができる

## せっかく国家試験をパスしたのに



ものである。しかし、心の病気の場合にも、体のだるさやきつさを取り除けば価値基準も治癒し、人並みに仕事や勉強ができると思って相談にみえられる方がありますが、それは無理な相談である。心の病気はだるさきつさを取った後、ものの考え方や判断の基準、また外界との交わり方などを訓練する必要がある。判断力、価値基準などの歪みを矯正しなければ一般社会からは必ず遊離してしまうし、人間関係の不調や破綻から再発するのは火を見るより明らかである。

この点においては、Sさんと世間話をしてみても正常であった。さて、施療八回目でSさんから何となく体が軽くなったし、今後に希望が湧いてきたこと、その分将来が気になるようになってきたというお話があった。これは患者さんが退屈してきたという証拠である。何の病気でも症状が悪化したときは今現在の苦痛以外には考えられないものだが、症状が軽くなるとあれこれ考えるようになり、退屈して一日が長く感じられてくる。こうなったときが治り始めである。これは入院している患者さんでも、自宅で養生している患者さんでも同じことである。

とくに、自律神経の失調症や心の病気の場合には退屈を感じ始めてから六ヵ月、一年というように、長期養生の必要性がある病気もある。その点では、昔の結核の療養と似ている。上手に時間を活用できる人なら、無理のない程度に勉強して資格を取るなり、人格鍛練の場として

「災い転じて福となす」ことを実践することも可能である。しかし、それでもなかなか時間を  
持て余し、持ちこたえられないのが人間である。

### ※生涯を通じた健康管理が必要

Sさんの症状が相当改善された時期に、新たな相談を持ちかけられた。「父親が糖尿病なんです  
ですが、これも何とか改善できないものでしょうか」とのことだ。尿に時々蛋白が出て、早朝  
空腹時の血糖値は二百八十ぐらいの状態だと話された。まだこれといって体のきつさは出てな  
い段階だとのことだ。父親には最初の相談のときにお会いしているので、大体の想像はついた。  
Sさんもちょうど自宅治療に切り替えても良い時期であったし、Sさんの治療に父親の力も借  
りる必要があったことから、両者の治療方法を指導することになった。Sさんには器具を使っ  
た自宅治療を、本人がやりにくい箇所については父親に治療してもらい、父親の治療方法も指  
導した。

それから約一ヶ月経過した頃、Sさんからの報告を聞いた。「父はどこも体は悪くない。た  
だ血糖値が高かっただけと聞いていましたが、血糖値が下がり、今では寝つきも良く、すっか

り体が軽くなって何だか別の人間に生まれ変わった感じがするといっています。父はどこがどう改善されたという意識はないようですが、やはり糖尿のせいで夕方頃になると疲れていたのを年のせいだと思い込んでいたのです。その疲れは病気だったんだと父もようやく理解したようです。

私自身も家で毎日父に治療してもらい、こういう方法があったのかと本当に信じられない気持ちです。自分が医療の勉強をされていて、それ以外にも良い方法があるのだと確信しました。癒導医学を知る前とはかく何でも良いから治ればと思いい、どうせ駄目でもともとと薬にでもすがる思いで先生を訪ねて来たんです。癒導医学の本を読んだとき、これは医療の一分野であり、まやかしとは違うと思いました」というお話があった。

その後も進路相談があった。体力的にも到底普通の勤務には耐えられないだろうから、どういふ方向に行ったらよいかというのである。そこで私は「国の国民の健康を保つ全国的な機関があります。そこへお勤めになったらいかがでしょうかとお話した。そうすれば医学の知識も生かせるし、責任者は実際に医療の現場に出ることはあまりなく、職員を指導し、規則通りにやれるかどうかを監督する職務でしょう」とお話した。

それから数ヶ月が経過した。私は相談を受けて私なりの回答をしたつもりだが、実際にSさ

んがどういう進路を取られたかは知らなかった。それが次の相談があったとき「ご指導通りにやっております。それでその責任者になるには規則などが非常に多くて、今度はそれを勉強するために少々無理をして、体の調子を悪くしてしまいました」という報告を受けた。

「それは国家試験と違って、一定期間に勉強しなければならぬという性質のものでもないと思います。そこが学校の勉強と社会に出てからの勉強の違いです。もっと臨機応変に、必要なきに必要なるものを覚えればよいことであって、勤務しながら勉強してもいいわけです。勤務する準備段階で完璧に覚えようという気持ちは大事ですが、体を壊すものになりますし、それ相当の体力の裏づけがなければできません。その点、公務員のお父さんの影響で、ものの考え方が固いんだと思います。その仕事は公務員ではありませんが、性質がちょっと違いますから、あなた自身少し変化をさせたらいかがでしょうか」とアドバイスした。

その後一年間は一カ月に一度研究所においでになった。最終的には就職もされ、立派に勤めていらっしやるという話で、父親からも年賀状を毎年いただいている。そこで最終的なアドバイスをした。「この病気は親から受け継いだ体質的なものが下地にあります。それをお忘れにならないように。無理をすると必ず再発します。ちょうど一度壊れた茶碗を接着剤で修理して大事に使っている状態ですから、手荒く扱おうと必ず壊れます。そのことを元氣になられても



十分自覚なさって、生涯を通じてご自分を管理していくことがこの病気と上手につき合っていく方法です。

とくに、あなたが欲しがっている健康に対しては間違った概念をもっていらっしやいます。長いこと病気持ちの人、とくに失調症の人は、元気でワイワイ騒いでいる人達を見るとうらやましく、あなりたいと思うことでしょう。しかし、その人達も毎日元気なわけでもなく、精神的にもいつもバランスがとれているというわけでもないのです。騒いだ後は必ず疲労感が生じて、休憩したり眠ったりして体力を回復しているはずですし、精神的に参っているときはストレス回復を図るための何らかの方法をとっているはずです。ところがこの病気の人、元気な人達は一年中何時でもパッと目覚めれば元気になると考えがちです。

健康だった人が三十歳、四十歳でこうした病気になった場合は、健康とはどんな状態であったかを知っています。しかし、二十六歳くらいまでに体調を崩した人は、本当の健康な状態というものを知りません。ただ理想や幻想を描いていることが多いものです。そこをお間違いにならないように。そしてその考え方を修正しなければ、いつも自分は不健康なのだと自分で自分を暗示にかけてしまいがちです」とお話した。

## スポーツのやり過ぎで自律神経の機能低下を

### ※目が座った少年

中学に行ったり、行かなかったりしているT君は身長百七十センチ、体重七十六キロで、誰が見ても本当に体の具合が悪いなどとは思わないだろう。親御さんも周囲の人も、学校の教師さえも怠け癖だと解釈していたとしても不思議ではない。ところがT君は「朝起きられない」「めまいがする」「一年中鼻水が出て鼻が詰まる」「気持ちが悪くて吐き気がする」「いつも疲労感があって頭痛がひどい」と訴える。こうした症状に悩まされて母親と一緒に研究所を訪ねて来られたのである。

相談のときT君は黙ってじっと動かない。とくに眼球の動きが少ない。普通、まばたきは一分間に十六回くらいで、生理的に眼球を潤すために行う。この瞬きの回数が非常に少ないので

ある。また、あれこれものを動かすとき、人間や動物は自然に目で動くものを追うという習性がある。これは獲物を取り、生命を維持するために備わった機能で、自分で努力しているわけではない。つまり、相談のときのこの二点を観察しただけで、自律神経の働きが非常に低下していることが分かる。俗にいう目が座った状態である。大人でも酒に酔って神経が麻痺してくと目が座る。こういう現象が丁君にも見られ、じっと相手を睨みつけるような症状を示した。これまでに薬を一年間飲んでみたが、特別にこれといった変化がないので、今は飲んでいないという。見た目が弱くてヒョロヒョロした体格なら同情心も集めようが、身長百七十センチ、体重七十六キロのがっしりとした体躯なら、誰も仮病や怠け癖としか思ってくれない。本人もやる気が出なくて困っているし、いくら体の調子が悪いと訴えても信じてもらえないもどかさもある。

少年の家は関東近県で、片道二時間くらいの距離なので、まず通いで治療することにした。最初は五、六回通ってもらい、丁君がやる気を起こし、頭痛が軽くなるのを見てから自宅治療に切り替えてもらうことにした。母親とすぐ協でこうした会話をしている、丁君の反応はまるでなかった。

一回目の治療のときは多少疲れた様子がうかがえたので、二回目に来られたとき、最初の施

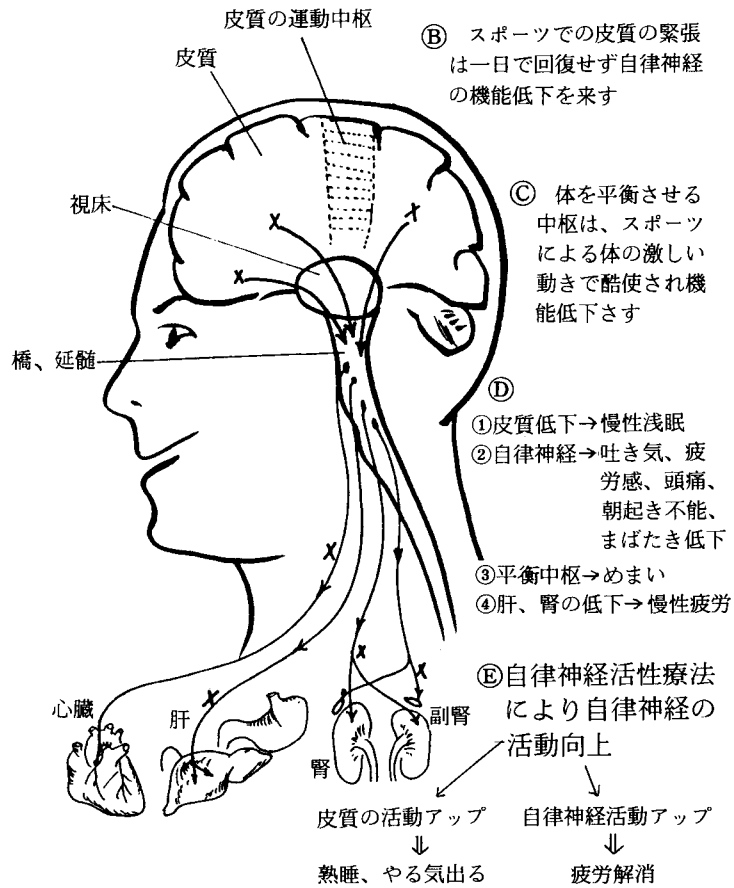
療の後の体調を聞いてみるた。すると、「よく眠れるようになった」という。最初の相談時に提出してもらった相談票には書かなかったが、眠りが浅くて非常に困っていたのだという。こうした症状は本人が意識していたわけではない。何となく一日中眠くてだるいので、とくに眠れなくて困ると言う自覚がないのである。しかし、治療後にちゃんと寝てみると、ああなるほど、自分は十分寝ていなかったんだと改めて分かっただけである。

丁君は何も喋らないので、本人に聞いてみても変化があるようには見受けられない。しかし、付き添いの母親に聞いてみると、いくらかずつ意思表示をしたり、喋るようになったという。さらに、鼻の通りが良くなったようで、いつものように鼻をかまなくなった。また、治療前は一日中ゴロゴロしてテレビを見ていたが、最近は自分から何かをやるうとする姿勢が見られるようになったという。治療四回目くらいのときから、テレビは自分で番組を決めて見るようになり、学校へ行ってみようと自分からいい出すようになったとか。

しかし、丁君にしてみれば何の変化も起こっていないと思っっている。このように脳の機能が低下している場合には、自分がどういう状態なのかを正しく認識することができないからだ。とくに十五歳くらいまでは、表現力や語彙ごいが少ないこともあって、自分に起こっている状態を的確に表現することが難しい。

## スポーツのやりすぎ

- ④ スポーツは手足を動かす中枢の酷使で同時に見る、集中する、聴くの目、耳、脳全体の酷使であり、また脳筋肉を支援する心臓、肝、腎を酷使することである。



お医者さんでも内科、とくに小児科などでは、患者が一、二歳といった場合には自分の状態を表現する言葉を持たないし、獣医さんも、ペット相手では喋ってくれない。神経や脳の病気の患者さんも同様で、手探りで治療していくが、それには長い間の経験がものをいうことになる。皮膚科など、目で見て分かる病気なら症例をたくさん診て覚え、写真と比較すればいいが、こと、神経や脳の病気では、治療しても完治するまでの患者の自覚がほとんどないことが治療を困難にしている。幸い、T君は体は健康だし、若さもあって六回目くらいでほとんど回復し、元気になった。

### ※ 筋肉を酷使すれば神経も…

T君は一年ほど学校に行かないだけで、友達関係も大部分が継続していたので、話す訓練などは必要としなかった。後は自宅治療に切り替えて、一日置きに治療するように指導した。

T君がこうした病気になった原因は、スポーツにあった。スポーツはほどほどにやれば肉体的精神の発達には非常に有益なものである。しかし、最近では才能があると見れば発育途中の小中学生や中学生でもお構いなしに極端な訓練を強いて、ジュニア大会や中学生の全国大会などで

記録をつくることに奮戦しているスポーツ関係者がいかに多いことか。

医学的知識や体の仕組みをよく知らない人たちが、子供の成長段階で鍛えれば鍛えるほど健康な体をつくり、立派な記録もつくれると誤って信じている節がある。ちょうど生えてくる筈を、他の竹よりも長く延ばそうとして、筈のてっぺんに紐をつけて上へ引っ張り上げたり、添え木をしてぐるぐると紐で縛り、横へ太る部分を上へ延ばそうとするようなものである。

確かに大人と違って、子供の疲労回復は非常に早い。神経の働きも機敏である。こうした能力は磨かなければ発揮できないだろうが、それも程度問題である。それに、子供はしょせん未完成品である。筈のように無理に手を加えたらどうなるであろうか。歪んだ竹になり、弊害が出てくるだろう。

人間は染色体によって体つき、手足は同じような形につくられていくが、大脳皮質の脳の回路の組み立てについては回路に良い方向づけをしてやらないと、良い回路ができない。従って、当然良い刺激を連続的に与えることは必要である。しかし、過激なスポーツでも筋肉を使うだけと思いがちだが、その筋肉を動かすために神経がいかに酷使されているかをはっきりと知っている人は少ない。

十人が十人とも体格が良いからといって、脳の働き、脳の大きさ、脳の強さが体格に比例し

て良いとは限らない。個人差が非常にあるものである。また、ストレスなどの神経の疲れを上手な気晴らしで発散させることができる人と、できにくい人がある。そうしたいいろいろな条件が重なり合って脳の働きの差が出てくる。才能が評価される人もいればされない人も出てくる。同じジュニアの野球チームにいても、レギュラーに登用される少年と、控えの少年とに別れていく。その分かれ目は実際は分かりにくいものである。

丁君は体格も良いし、運動能力も高かったから野球をやり、剣道も習いに行っていた。さらに勉強もしなければならぬ。つまり、やりすぎである。そこがいつもポイントになる。いくら良いことでもやり過ぎは悪である。やり過ぎで疲労が蓄積していても、本人が十分な意思表示ができず、「疲れたから今日は練習を止める」と一言いえない状況で、ただ黙々と練習に励んでしまったらどうだろう。丁君のように自律神経が働かなくなってしまうのである。



## 塾での詰め込み教育が分裂病の引きがねに

### ※ 出口なしの完全主義者

一年前から施療に来ていた大学一年生のK君は、四ヶ月ほどで何とか学校に行けるまでに回復した。その後しばらく顔を見せなかったので私も忘れていた。すると一年くらいたって、ひょこりと訪ねて来てくれた。K君は「やっと学校に行けるようになりました。しかし、勉強はまだまだあまりできません。先生のおっしゃった通り、一番ビリで卒業するつもりでやっております」と近況報告してくれた。

「とりあえず学歴をつけるということを考えれば、一番で卒業してもビリで卒業しても卒業したことは変わりはないわけですからね。今後は富永先生の言われるように、社会に出てからの問題ですが、これは自分の努力次第ですね。とにかく大学を出るといふパスポートを手に

いれば良いと考え方を変えましたし、親もそう考えております。

以前は負けん気が強く、何が何でも先へ出るように自分を追いまくり、学校の勉強も親からも一番をめぐせと、はっぱをかけられていました。でも、今では他人と競争するのではなく、自分自身と競争をするように考え方を変えました。お陰さまで何とかやっていけそうです。

ところで、僕の友達の〇君が大学に行けなくなってしまっているのがいるんです。小学校からずっと仲良しで、大学も似たような所へ入ったんですが、高校の三年くらいから自分とまったく同じ症状があり、本人も何かおかしいという自覚症状があつて、お互いに話し合っていたんです。ところが、大学に入ってしまったら、本を読んでも、講義を聞いてもまったく内容が頭に入ってこなくなり、体の方も具合が悪くて学校に行っていないんです。ひとつ診てやっていただけじゃないでしょうか」というお話であつた。

「いいですよ。でも、まずご本人を診ないとね。会つてお話してみないとどの程度のものか解りません。あなたの紹介ですから、お引き受けする前提でお話をしましょう。一般の場合には、お引き受けするかどうかはご本人を診たうえで決めるのですが、お友達ということなので、あなたも読んで『よくわかる心の病の治療』の本を読んでもらってください。理解できないな

らば、親御さんに話をして読んでもらってもいいですよ」と、本を手渡した。

数日して電話予約で〇君が見えた。ご両親と一緒にいる。何とか大学の二年まで通ったが、一年留年して三年に戻るかどうか迷っているとのことである。記入してもらった相談票を見ると、「とにかくいつも下痢っぽくて、トイレに行った後の壮快感を味わったことがない」と記載されていた。

付き添いの母親は「まずは勉強ができない、物事が理解できないというので、非常に困っております」と困惑した顔で話された。父親は大会社の工場の技術関係の仕事をしており、性格は几帳面<sup>きちょうめん</sup>。〇君も「性格は父親に似ている」と話してくれた。母親はごく普通の性格である。

こうした病気の場合、大抵は母親が強迫神経症や他の心の病気を患っていて、子供が小さいときから心のベルトをしっかりかけて解放しないということが原因になることが多いのである。母親が自分のうっぶん晴らしに子供を追いまくるのである。

しかし、〇君の場合は違う。下地として父親に似た性格を持っており、真面目で気が抜けないし、物事をはぐらかすことができない。完全主義者で自分に対して厳しい評価を下し、完璧<sup>かんぺき</sup>を求めてさらに自分を叱咤<sup>しつた</sup>激励する。逃げ道はなく、防衛本能もないので次第に自分を追い込

んで、病気になってしまうのである。(防衛本能||嫌なことや我慢することがあったとき1逃げる2憂さ晴らしに喋る、衝動買いする、酒パチンコ等する3好きな趣味をやる4スポーツをする等を自然にやること)

発症は高校一年である。大学進学のための進学塾へ通い出したのがきっかけになった。進学塾は、えてしてスパルタ教育で、強力な締めつけをやる。またそういう強制がなければ、なかなか勉強をしないから当然のことでもあろう。だが、こうしたきつい状況について行けるどうかは、本人の資質による。進学塾で抑圧された分、反発し、うっぶんを晴らすためのスポーツや趣味、小さな悪戯や喧嘩などに振り向ける資質があるかどうかである。

人間は追い詰められるだけでは逃場を狭めて、ついには出口なしの状態に陥ってしまう。常に逃場をつくっておかなければ精神的にもたない。ところが塾の教師は威圧的で、○君はいわれるがままに追い立てられて勉強した。そこに病気の直接の発症原因が潜んでいたのである。抑圧された心は逃げ場を求めて警鐘を鳴らしたわけだが、これが下痢である。それに加えて高校三年くらいになると、対人恐怖症が始まった。大学入学直後は一時的にそれを忘れて症状は出なかったが、下地は当然残っていたわけである。

## ※ビリで卒業するつもりで

○君は大学生になって恋愛をした。しかし、思いは届かずに失恋することになった。その失恋という、いわゆる極めて軽い逆境に耐えられなかったために、また対人恐怖症よちがえが甦り、誰かに見られているような気がしたり、襲われるような気がしたりするようになった。

体格は非常にがっちりとしているから、下痢以外の吐き気、その他の消化器系の異常はなかったし、熱が出たりするようこともあまりなかったようだ。こうした病気では大抵の場合、最初に体の異常が深刻化して心の病気が発見されることが多いのだが、○君はいきなり心の病気を起こしてしまった。ついには眠ることもできず、授業にも行けず、一年間を無為に過ごすことになったのである。

自分でも何が何だか解らないが、体の痛みが伴わないので病院にも行かなかったが、気が滅入って死にたくなり、自殺を図ろうとしたこともあったと話してくれた。ついには留年することになったが、幸いにしてアパートでの一人暮らしだったため、怠け者といった親の怒りをおかわずにすんだ。通常一人暮らしの場合、こういう症状があっても、子供は適当に学校に行っ

いるふりをして親に仕送りさせるだろうし、親はこうした状態を知っても、子供の遊び癖が出たという程度にしか理解しないだろう。

しかし、単なる遊び癖なら正常な大脳皮質を持っていれば飽きてくるものである。一年も遊べば十分で、少しは勉強でもしようかという気になってくるだろう。ところが、発症している場合はそうはいかない。

○君は本気で悩んでついに一年留年した。大学は自分に合わないのではないか、仕事ならどんな仕事ができるのかと思いつき、アルバイトに走り回ったらしい。しかし、この病気は根気が続かないし、自分の腑甲斐なさを責めるだけで、正当な評価ができない。そのうえ、威圧的だった塾の教師への憎しみ、失恋した相手の女性の仕打ちが頭から離れなくて、どうしようもなかったと告白してくれた。憎しみに凝り固まり、憎しみにとりつかれた状態というのは、人間の基本的な感情が憎しみの部分だけに偏り、増幅された結果である。正常な脳ならどんな感情の爆発があったにしても時間とともにその感情は薄らぎ、忘れていくものである。一日一日の睡眠がフィルター役となって沈殿した感情のおりを漉し取ってくれるものだが、この病気はフィルターに漉し取られずに沈殿したまま残ってしまうのだ。人によってはこの憎しみから逃れるには、相手を殺してしまわなければならないという自己暗示にかかってしまう場合もある。

る。これは病氣である。

そんな感情に翻弄ほんろうされているとき、O君はたまたま正月休みに実家へ帰ってK君と会った。二人は互いに近況報告をしたが、話の中でO君は悩みを打ち明けた。K君はそれを聞いて自分と同じような症状だと思ったという。そこでK君は自分も病氣だとは思わなかったが、実際は病氣で、癲導医学で完治したことをT君に話した。半信半疑で聞いていたO君も、K君の話にいちいち思い当たる節があるので、一度診てもらおうと、その気になったのだという。

O君の場合、自律神経失調症のK君よりもさらに症状は重い。分裂的傾向もみられる。心の病氣でも、うつ病や分裂病は相当治しにくいものである。

留年したO君の一年間は自分で何をして良いか分からなかったが、環境に甘えることもなく、自分の進むべき道を必死に捜した一年でもあった。それがO君を墮落から救った点である。しかし、私がお両親から預かったいる十八歳の女性の場合は、O君と同じように自分が分からなくなったとき、悲惨な状態に陥った。両親、学校、友達からもそっぽを向かれ、甘えん坊の性格もあって年上の男性と遊び歩き、シンナー、たばこ、大麻にまで手を出して暴力団の餌食になりつつあるところを救われた。父親が私の著書を目にして、急いで相談に來られたのである。

家族の中のきらわれ者、鼻つまみ者で、近隣にまで悪名がとどろいて町も歩けなかった。また、悪い仲間引つ張り込まれて元の生活に戻ってしまっただ変と、本人の希望と両親の判断から私が預かることになったケースである。

そこへいくと○君の場合は迷いをアルバイトという努力で乗り切ってきた。だが、根気がなくて長続きしない。それを自分の腑甲斐なさだと思つて悩んできたのだ。

施療は半年ほどきちつとやるように、最初にお話した。実家は横浜の近くなので、五日に一回通つてもらつた。十回ほど通つたとき、顔の赤みが取れてきたし、○君も「自分を取り戻して気分が楽になった」と話してくれた。

この段階で問題になるのが自分を上手に表現する方法を知ることと、上手な処世術や逆境での克服法を身をもって体得してもらうことである。○君の父親は大手企業の技術畑一筋に歩んできた人で、几帳面な性格である。営業と違つて技術畑の人はきんげんじつちやく謹厳実直、言葉は少ないし、柔軟な発想ができず、考え方が偏りがちである。子供に対しても社会に出てからの対応や生き方の教育はしていない。そんなことから○君に日記を書くように勧め、私がそれに基づいて考え方の方向づけをするようにした。

十回目の施療で症状も一段落したので、自宅施療の方法に切り替え、一日おき、または二日



おきに自宅で施療してもらった。そのうえで二週間に一度、症状の修正と、日記から私の指導する内容をつかむために通ってもらった。

こんなペースで約六ヶ月がたったとき、O君は「何となく本が読めるようになりました。それに、やる気も出てきました。僕もK君と同じようにビリで卒業するつもりでやります。もう一年留年してまずし、ここであせってもしょうがないので、後一年留年して病気を治してから再出発します」と話してくれた。

### ※ 横並びの価値観は変換が必要

O君がこうした結論を出すまでには幾多の迷いがあった。というのは、私が勧めたもう一年留年にO君は非常に抵抗した。そのとき私はこう説得した。「あなたの寿命は決まっているのです。幾つまで生きられるか分かりませんが、多分七十五くらいまでは生きるでしょう。あなたが四十五歳くらいになって会社で指導的立場に立ったとき、ストレートで大学を卒業してきた四十三歳の人とどれだけの差がありますか？ 場合によっては四十三歳で部長になる人もいます。もっと年上でも役職がつかない人もいます。七十五年という全人生か

ら見たら、今の二年間がどれほど出世の妨げになるでしょうか。大したことではないと思えます」と。○君もなるほど、病気を治すことが先決と納得して私の勧めに応じてくれた。

欧米の個人主義を手本に、日本人もようやく個人を尊重することの意味を了解しつつあるが、まだまだ社会の価値観は個人より団体という考え方をするのが日本人の習性である。「同期入社のあいつが出世したから」「お隣が何々を買ったから」と、会社や地域、学校などの仲間と比較して自分はどうかから……といった価値観で物事を判断しがちである。左右横並びで、そこからみ出すのを極端に恐れ、他人は他人と突き放した生き方ができないのである。

そのために、いざその並びからはみ出したとき、どうすればいいか分からなくなってしまったのである。自分が同期入社先の先頭を切って出世頭になったとき、あるいは落伍してしまったとき、つまり周囲と違う状況が生じたときにどうしていいか分からなくなるのである。学校でも友達と違う服装をしたり、違う持ち物を持っていたりするといじめの対象になりかねないのと同様である。大人も子供も集団意識ではなく、個人という意識をしっかりと持って他人は他人という適確な判断をしなければ、心の病はジワジワと個人を侵し、気がついたときは病根でかんにからめになってしまう。

○君のその後の治療は季節の変わり目ごとの年四回、二年間は通うように指導した。○君も

K君も時折施療にきたとき、「僕のバイト代で買ったハンカチです」「靴下です」と、細かな心遣いを見せてくれる。

○君もK君も実のところ、癒導医学で自分の病気が治るとは信じていなかったという。それは当然である。半信半疑とはいえ、自分が体験してみようやく信じることができるものである。たとえどんな高名な医者きしんの診察を受けても、大病院に行っても、「他の人は治ったが自分は違うのではないか」と疑心暗鬼あんきにかられるものである。「こうすればお金が儲かる」といわれても、実際にお金を手にしたとき、ようやくああこの人のいうことは本当だったと信じることができるのと同じである。

しかし、自分が体験するまではどんなに疑っても、その疑いを消していく客観的資料が大事なのではないだろうか。それは友人の言葉であり、施療を受けている患者さんの話である。実際に体験した人の話を聞けばそれが本物であるか、偽者であるか、一時的な気休めの症状を消すだけのものか想像できるだろう。私は○君にもいった。「疑っても良いんですよ。治れば良いんです。治れば信じてもらえるでしょう。あるいは、治っても信じたくなければそれでも良いんです。私はあなたの苦しさが解消されればそれで良いんですから…」と。私の仕事の本質はそれだけだからである。

## 父親に依存し過ぎた農家の跡継ぎ

### ※ 心に凶暴な感情が渦巻いて

園芸農家で、ナシとブドウを栽培するHさんは、父親が倒れたことで否応なくその直後から一家の大黒柱としての責任を果たさなければならなくなった。父親の下で働いていたときと比べて、仕事量も責任も格段に大きくなった。そんなことで仕事のやり過ぎと神経の使い過ぎで体調を崩し、逃げ出したくなってしまった。身長百七十三センチ、体重八十一キロという大柄な人だが、相談票に記載してもらった文字が非常に細かい。

文字と脳の働きの相関関係がある。ものごとに集中できないときは脳の働きがおおざっぱで、乱暴な文字を書く。逆に、視野が狭まったときは縮こまった小さな文字を書く。自信家は押さえ付けたような力強い文字を書くし、自信のない性格の人は筆圧が弱く、小さな文字を書く。

Hさんの身体的症状としては、左の胸が非常に痛むという。ちょっと押しただけでもズキズキするし、心臓もドキドキする。さらに首の後ろの痛みや、ときには立っていられないほどの眩暈、頭のふらつきもあるという。(眩暈＝げんうん・めまいのこと)

精神的には、人を突き飛ばしそうな感じがして一人で電車に乗れない、歩いてくる人に殴りかかるような気がして一人で出歩けないという。心の中はかなり凶暴な感情が渦巻いていることが分かる。こうした感情も自分でセーブできればどうということはないが、噴出したら犯罪者になってしまう。

相談のときの感触では、Hさんの親離れができていないところに問題がありそうだった。家族、とくに父親が脳硬塞<sup>のうこうそく</sup>で倒れからの看病の様子を聞いてみると、父親が心の支えであり、全てを支配していたことがうかがえる。四十五歳という年齢から見ても、あまりにも父親に依存し過ぎていて不自然である。いい年の大人にしては独立心がないのである。もちろん一人で研究所にこられてはいるのだが…。

農業という仕事柄、家族単位の労働で親と子が一緒に仕事をする時間が長く、父親が大黒柱で家族全体がうまく動いていたのだろう。家族単位の労働だし、休日もあつてないような状態では他人との接触もあまりなく、ましてや他人と一緒に仕事をやった経験もない。これでは親

8月26日  
出羽三山へバスで行って山を歩いてきた。今のところ止まるところはない。

9月22日  
X線の検査のために行く予定。

検査名	結果	備考
血球数	白血球 14,800 赤血球 4,600,000 血小板 220,000	全血球減少症
血清	血清蛋白質 7.6g/dl 総蛋白 7.6g/dl アルブミン 4.8g/dl 球蛋白 2.8g/dl CPT 1.9	血清蛋白異常
尿検査	尿蛋白 陰性 尿糖 陰性 尿潜血 陰性	尿検査異常なし
心電図	心電図異常なし	心電図正常
レントゲン	胸部レントゲン 異常なし	胸部レントゲン正常
大腸内視鏡	大腸内視鏡検査 異常なし	大腸内視鏡正常
骨髄検査	骨髄検査 異常なし	骨髄検査正常
その他		

血液検査の結果  
白血球は約 10,000/mm<sup>3</sup> 前後と減少。  
赤血球は約 400万/mm<sup>3</sup> 前後と減少。  
血小板は約 20万/mm<sup>3</sup> 前後と減少。  
血清蛋白は約 7.6g/dl 前後と増加。  
CPTは約 1.9 前後と増加。  
尿検査は異常なし。  
心電図は異常なし。  
レントゲンは異常なし。  
大腸内視鏡検査は異常なし。  
骨髄検査は異常なし。

11

姓名: [Redacted]

電話: [Redacted]

職業: [Redacted]

出生年月日: [Redacted]

性別: [Redacted]

學歷: [Redacted]

服務機關: [Redacted]

服務年資: [Redacted]

現任職務: [Redacted]

備註: [Redacted]

評核表

項目	評核	備註
政治		
業務		
紀律		
勤惰		
誠實		
禮貌		
合作		
進取		
責任		
忠實		
守時		
整潔		
健康		
其他		

姓名: [Redacted]

電話: [Redacted]

職業: [Redacted]

出生年月日: [Redacted]

性別: [Redacted]

學歷: [Redacted]

服務機關: [Redacted]

服務年資: [Redacted]

現任職務: [Redacted]

備註: [Redacted]

評核表

項目	評核	備註
政治		
業務		
紀律		
勤惰		
誠實		
禮貌		
合作		
進取		
責任		
忠實		
守時		
整潔		
健康		
其他		

の庇護<sup>ひご</sup>のもとで、独立心の芽生えを促す要素が何もない。

世間一般では母親と息子の子離れ、親離れができなくて、息子の結婚生活に支障をきたしたという話はよく聞く。しかし、父と息子の関係とは珍しいケースである。

Hさんこの研究所に来られるまでに長いこと数々の薬を飲んで来た。降圧剤、安定剤、筋力弛緩剤、睡眠薬、いろいろのビタミン剤、胃薬など、本人がずらりと私の机の前に並べて見せてくれた。だが、私は「薬のことは分かりません。薬のことを質問されてもお答えできませんし、お答えする気もありません」とお話しした。

こういうひどい症状になってしまっただけからでは、短期間では治りにくい。そこで治療前に必ず治療の目安をこんなふうにお話する。「体の苦しい症状が取れて、日常生活に支障のない程度にまで回復するのに十回くらい通っていただきます。その後は、自宅治療をお教えますので自宅で一年間行って下さい。その後の精神的な改善には月に一度十五、六回から二十五、六回通ってもらうことになります」と。

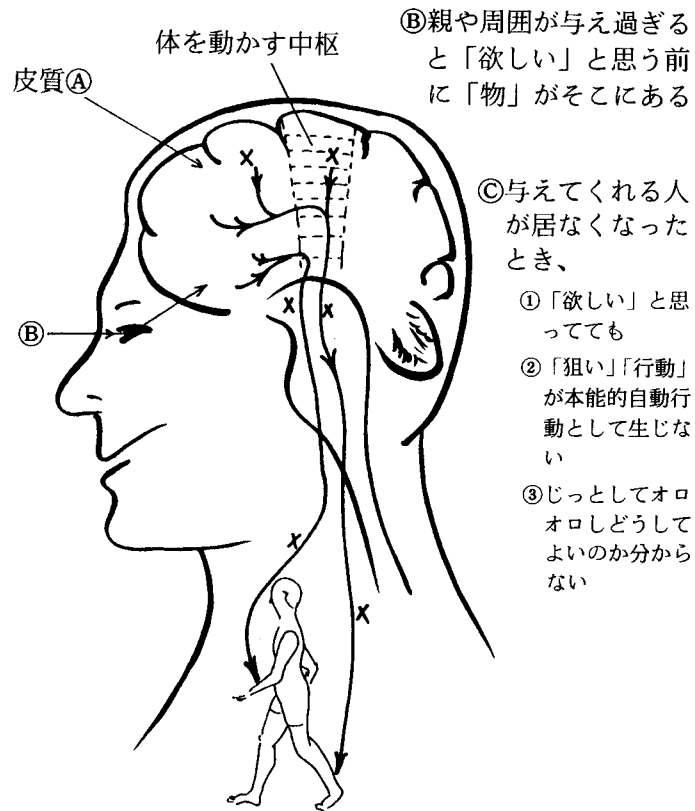
本人は三年から五年、あるいはそれ以前から何となく具合の悪さを自覚していたので、「そんなに早く治るんですか？」と不思議そうに聞かれた。

五日に一度来て十回で五十日、つまり二ヵ月足らず。十五回で三ヵ月ちょっとである。しか



## 父親に依存し過ぎ (獲得する訓練がされていない)

Ⓐ動物の本能行動の一つである「獲得する」能力、  
「欲しい」と思うことで「狙い」「行動」が生じる。



し、私としては性格上あまり仕事をしたくないので、もっと短縮できないものかと考えている。ダラダラと来てもらっては、趣味の黒鯛釣りにも行けないからである。

また、学生と違って大人は働きながら治療しなければならぬ。仕事をしながら病気を治していくという事はなかなか大変なことである。朝九時頃来院されたとしても、そのために自宅を七時頃出るのだから、午前中で治療が終わったとしても、帰宅するのは三時か四時、つまり丸一日つぶれることになるのだ。そのために仕事上の調整をしなければならぬだろう。そういう意味からも病気をすれば大変な損害になる。

Hさんも相談のときこういわれた。「農業は生きものを育てています。だから一日も気が抜けないし、必ず毎日見回りをしなければなりません。その生きものを育てている自分が病気になるということは、生きものも病気になるということなんです。一年放っておいても何とかナシやブドウの実はなるでしょう。しかし、次の年からは売り物にならないんです。もっと苦しいことは、果樹園は二十年、三十年かけてつくり上げるものです。一端駄目にしてしまうと、新たに苗木を植えたとしても、また十年、二十年も収穫を得られないままです」と悩みを話された。それはどんな仕事でも同じである。

「例えば、自動車メーカーでも不動産業でも、会社という一つの形態を作りあげ、ある程度

「自由に物が流れて行ったり、取り引きが成立するためには十年、二十年かけた信用が基本です。さらに独自の機械や設備を改善してニーズに合ったものが生き残っていくんです。それは農業も工業も同じですよ」とお話した。

一般の患者さんもちろんだが、一家の大黒柱の病気とあってはなおのこと、短期間で集中して治さなければならぬ。のんびんだらりと「まあやってみなさい、そのうち良くなりますよ」では、私自身も長いこと研究し、実証してきた癒導医学を放棄してしまうことになる。そうならないように、自分で仕事を持っておられる方、とくに創業者には一日も早い復帰が必要だと思っている。

「会社員なら休職しても仕事は誰かが分担してくれます。しかし、オーナーはそうはいきません。働く社員に対する責任も取らなくてはならないのです。だから、仕事が忙しいからと治療をいい加減にはいけません。短期間に治してください」と、お話した。

### ※再発防止のための癒導医学とおつき合い

Hさんは収穫が終り、農作業が一段落してから治療に通って来られるようになった。十回ほ

どの治療で「体がスッキリして、体調が良くなってきました。最近仕事をしたという欲求も出てきました」とのお話があった。

しかし私は「仕事はとりあえず止めてください。まずは今までの自分生き方を振り返って、いきづまった原因を考えてください。また親に対しての考え方、接し方も異常なほどべったりしていますから、自分の趣味を捜してそれを実行するようにしてください」と勧めた。そうしたら好きなのは山の散策だというお話なので、それを実行していただくようにした。

その間「症状記録用紙」を渡して、日記のように毎日一行か二行症状を記入してもらおうようにした。Hさんの当初の書き方は、通常なら三行で書けるような内容を、びっしりとアリが並んだように細かく書いていた。そこで大きな文字で要領良くまとめて書くように指導した。脳の働きの一つに抽象能力がある。ものごとをまとめるという高度な作業ができなくなると、一つ一つ克明に書くため文章が長くなり、そのうえ自信のなさを示すように、小さな文字を書き並べてしまう。

さらに四ヵ月たった八月頃、「山へ散歩に行きました。自分の体調も改善したと思います」と症状記録用紙に書かれてあった。書き方にも大きな変化があり、体調が向上するに伴って要領良く文章をまとめ、文字も大きくなっていった。

その後一年経った今でも、年に四回から五回くらい体の様子を診てもらおうということで見えになる。「もうおいでにならなくても良いんですよ」とお話ししても、「とんでもありません。もうあんな苦しい経験は二度としたくありませんから、素人の自分では分からないところを診てもらっていた方が安心できます。近くでもありますし、息抜きも兼ねて私が元気な間は  
癒導医学とおつき合いさせていただきますよ」と、笑っていらっしゃる。

## まったく喋らない子

### ※父親のストレスが子供に

小学校五年生のY君は、学校へ行っても何も喋らないため、クラスメイトに相手にしてもらえず、いつも一人でいた。私は相談のとき、Y君にいろいろと質問してみた。Y君は私の質問にうなずいて返事をするものの、決して喋ろうとしないのである。付き添いのご両親を別室に案内し、Y君と二人で話してみたが、それでもまったく声を出さない。しかし、質問に対しては紙に返事を書く。判断力や考え方はその年齢の子供として正常である。

親御さんの話では、学校のペーパーテストの成績は非常に良いとのこと。八十点とか九十点百点と親が満足する点数を取ってくる。それなのに、何故、喋らないのか不思議でしようがない。生活面でも正常で、学校にも行っている。両親の仕事は理髪師で、夫婦揃って一軒の店を

構えている。一階が店舗、二階が住居である。

親御さんとしては、こうなった原因に思い当たることはない。一人っ子で大事に育ててきたし、夫婦共稼ぎでも家での仕事なので、子供の面倒は十分見てきたつもりだと話される。父親は非常に神経質で、私の判断からすると理容師には不向きな性格のように思われた。この仕事に就いた動機も、親がやっていたからということだった。

職業選択についてよくご指導することがある。創業者である親の職業は、本人が自分の性格学力、適応性などを考えたうえで選択したものである。しかも、創業者はその職業を唯一選択してうまくいったケースは少ないだろうと思う。それまでにあれこれやってみて、最終的にその仕事を選択する場面が多いものである。この間の試練は大変なものである。しかし、親がやっていたからという安易な選択をした二代目は、そうした試練をかいくぐってきていない。いつてみれば自分をよく知っていないということである。一番簡単に安心できる職業、それは家業を継ぐことである。

今日では二代目が育たない、二代目がいないと嘆く声がしきりである。創業当時は魅力があった仕事でも、時代が変わって魅力や旨味がなくなることもあるだろうし、二代目にとって性格的に合わない職業もあるだろう。だが、子供にとって父親が楽しく仕事をしていて、ほどほ

どの収入でお金にも不自由しなければ、家業を継いでも良いかなと思うのではないだろうか。それが継ぎたくないというのは、よほど他にやりたい仕事があるか、あるいはまた、汚い、きつい、儲からないといった条件があるからではないかと思う。

この理髪師の父親は営業マンタイプで、家の中でコツコツと技術を磨き、生計を立てるタイプではない。自分では分かっていないが、無理をしているとどうしてもストレスが溜まっていく。そのストレスの捌け口として、周囲の者に小言をいうようになる。お客さんというわけにはいかないから、手近な子供や妻に当たる。妻は協力者であり、自分の仕事仲間でもあるので多少の遠慮はある。そうなると小言が、嫉という都合の良い言葉にすりかわって、子供に八つ当たりすることになるわけである。「勉強したか」「ちゃんと片付けたか」「きちっと食べたか」といった具合で、一から十まで干渉して、子供は常に気を抜く暇がない。

男は自分のことをいちいちうるさく干渉されるのをきらう。女は程々に指図されないと不安になり不信感を持つたりする。ある年齢に達すれば子供といえども同じである。女の子のようにベチャクチャ喋って自分をアピールしたり、年頃になっても父親を恋人のように、母親を友達のように見たりすることもない。男は自分なりに考え、じっくりと物事に当たるのを好む。独立独歩が男の心情である。それなのに、ベチャベチャと話しかけられ、怒られ、干渉される。



と、うるさくてしょうがない。

### ※ 施療が必要なのは父親

子供が親に反抗する手立ては、ご飯を食べない、学校へ行かない、返事をしない、喋らない、言われたことをやらない、いろいろあるが、怒られないですむ一番都合の良い反抗は、喋らないことである。だからY君も最初は反抗のために喋らないようにしていた。しかし、それが習慣になってしまって、もう一つとして言葉が口から出てこなくなってしまうたのである。

こうした私の推測は、Y君が施療に来ている間の二、三回の筆談で、妥当であることが裏づけされた。Y君の場合、子供に原因があるわけではないことを私は最初から見抜いていた。治療が必要なのは父親の方だったのである。

Y君には言葉を取り戻してやらなければならない。これは脳の働きを正常に戻してやれば良い。つまり、自分の殻に閉じこもらないよう、皮質を緊張から解放してやることだ。そのために、できるだけリラックスさせるように施療を進めていった。同時に、父親には別室で父親としての心構え、父親の役割、職業上の特殊性、また、父親本人の性格とそれに付随した仕事か

らくるストレスの解消法などを十分に指導した。その上で、Y君が言葉を取り戻して話すようになって、直接Y君に話かけないで、いいたいことは母親を通じて伝えるよう指導していった。

父親はY君の病気の原因が自分だということをはなかなか認めたがらなかった。しかし、Y君の病気を治したいのなら、経験も知識もある我々癩導医学の人間に任せ、黙ってお話したことを守るよう指導した。父親はシブシブながら承知し、いわれたことは守ると約束してくれた。

それ以降、付き添いの母親に約束は守られているかどうか時々聞いてみた。すると、富永先生の指導通り、父親は最近仕事が終わると外へ出かけて行って、なるべく外食をしているという。以前は三度、三度自分の家で食べていた食事も、一日二回は外食で済ますようになったとのことである。

Y君の方は治療十回目くらいのとき、うなずきながら「ハイ」とか「イエエ」とかいう声が出るようになった。それ以来、母親だけには家でもちよこちよこ喋るようになってきた。そこでまず一段階は大成功だった。

治療十五回目くらいになると、Y君は自分が考えていることを母親に話すようになった。ところが、父親はそれが寂しくてたまらない。そこで父親から「自分も話しかけて会話に入っ

「良いだろうか」という相談があった。「子供から話しかけてきたら、あなたが返事をしてやればいいんです。しかし、それも説教調にならないように」と、ご注意申し上げた。

それ以降は自宅治療の方法に切り替え、一ヶ月に二回、半年ほど通ってもらった。その結果、Y君は学校で友達に話しかけることができるようになり、元気になったという報告があった。これは父親が無意識のうちに自分のストレスを子供に向け、子供にストレスを溜めた結果だった。

幸い母親が正常なので治療はやりやすかったが、ご両親そろって神経症ということになれば、別の方法を考えなければならなかったろう。

こうしたストレスによる大脳皮質の抑制は、体全般に影響を及ぼす。悩み、不安、嫌悪の感情が生じてくると、大脳皮質が自律神経を圧迫し、その働きを静止させてしまうからである。そうなると自律神経の信号を受けて働く心臓、消化器などが影響を受けやすくなる。とくに消化器へのダメージは大きく。下痢、便秘、胃痛といった症状が生じ、心身症を誘因する場合もある。（『自律神経失調症とよくわかる治療』参照）

Y君も最初のうちは、下痢っぽいとか、学校に行く時間になると何となくだるいとか、そうした軽い症状があったが、体格が良いこともあってあまり体への影響は見られなかった。体へ

の影響が出るようになると、なかなか分かりにくいものである。ただ、頬から首にかけての皮膚がザラザラしていて、非常に赤味がかっていた程度だった。

Y君の目はやや吊り上がっていてパッチリしているので、なかなか可愛い子だった。外見は普通の子と少しも変わらず、病院での検査でも異常が発見されなくてほとほと困り果てていた。ご両親にとって、Y君の完治は本当にうれしかったに違いない。大いに感謝された。

登校拒否 ケース9

## 元気過ぎる子は親がチェックを

### ※ 交感神経を興奮させ続けると

中学一年生のN君は、入学すると同時に一年間学校へ行けなくて留年していた。母親と一緒に私の前に座ったときは極めておとなしく、ジツとして話もしない。ただ、聞かれたことにコックリとうなずくだけだった。母親の話によると、最初のうちは登校時間になると吐き気がしたり、気持ちが悪くなったりしていたというが、両親は怠け癖だと思い、先生も学校へくるよう強くはっぱをかけていたという。

一年前までのN君は非常に活発で、人の先回りをしてよく気をつく子だった。小学校の四年生頃からは自分で塾などの習いごとを二つも三つも選んできてソロバンや学習塾、水泳と、一週間のうち、ほとんど毎日習いごとに行く日々が続いた。

日本人の常として、子供が積極的に習いごとをしたいといえ、賞賛こそすれ誰も非難したりしない。親も「少しやり過ぎだよ」とか「他の子供と比べて元気が良すぎる」などといった心配もしない。N君の両親も「家の子は優秀なんだろう」くらいで、子供のいうなりに習いごとをさせていた。

子供の頃は何でも吸収し、知識の集積は驚くほどである。そのときの脳は、乱暴ないい方ですれば、ちょうど大人を精神病にした状態といっても良いだろう。脳の全ての回路が未発達で正しく働かないだけに、ブレイキも非常に甘い。その代わり、細胞の中には組織呼吸に関係する多種類酵素と、原形質内のエネルギー発生と言われるミトコンドリアが多数含まれていて、細胞膜透過性に優れた非常に若々しい細胞があり、例え疲労困憊ひろうこんぱいしたとしても、一晩寝ればほとんど回復する。細胞が若々しい二十歳の頃は疲労も一晩寝れば回復するが、三十歳、四十歳になると、一度体の中に疲労物質が溜まると、それが抜けるまでに三日、あるいは四日かかるようになるのは、その年になった人なら誰でも経験済みだと思う。

小学校六年生くらいの子供なら、疲労も一晩で回復する。しかし、その回復能力の限界を越えて勉強や習いごとのストレスを背負い込む、つまり神経や脳の疲れが連続してくると、神経が次第に働かなくなってくる。ところが、神経は十分、二十分の休憩で回復力が出てくるよう

にできているので、子供たちは驚異的な早さで知識を習得していく。こうしたストレスと回復力がバランスを保っているいちはいいが、それが一年、二年と続くと、あるとき突然バランスを崩してしまう。そのきっかけはいろいろで、ほんのささいなことがきっかけになる。

例えば、受験で夜遅くまで勉強していたとき、急に電気が消えたとする。それをきっかけに急に不安が込み上げてきて、それ以来神経がおかしくなった。あるいは、親と車で旅行に行く途中、おしっこを相当我慢した。それ以来おかしい。満員電車に乗ったときギュウギュウ押されて死にそうな思いをした。それをきっかけに、吐き気や頭痛が生じておかしくなってしまう、などさまざまである。こうしたことは、限界に近い状態で神経が張りつめていたとき、急激な衝撃や瞬間的に発生する疲労によってもたらされたものである。しかし、こうした現象はあくまでもきっかけであって、それが原因ではない。

N君もこうしたきっかけで急に神経が働かなくなってしまった。活発だったN君だがそれ以来まったく何に対しても興味を示さず、何ひとつやらなくなったのだから、周囲の大人から見れば怠け癖だと思っただとしても致し方ない。

しかし、以前のN君のように活発過ぎることがそもそもおかしいのである。交感神経がいつも興奮し続けていると、まったく疲れを感じなくて元気である。ちょうど覚醒剤中毒の状態と

同じである。神経は休まらず、眠りも浅い。短い時間ですぐ目が覚めても眠くない。こういう状態が続くのである。本人は風邪も引かないし、非常に元気だと思ひ込んでいる。これが危険信号である。

本来ならここでドクターストップがかかって、強制的に横にして神経を休めさせるところである。ところが、素人にはそれが分からなくて、元気そのものだと誤解してしまいがちである。N君のご両親もそうだった。

ところが、あんなに元気だったN君が急に学校へも行きたがらなくなった。ご両親はN君を叩き起こしてはっぱをかけるが、N君は体調が悪いと訴えるだけである。N君にはやる気そのものが湧いてこないのである。無理してやったにしても、自律神経の働きが弱いために継続することができない。根気や集中力がまったくないのである。N君自身も納得いかなかっただろうが、周囲の人も不思議がった。

### ＊ 言葉を取り戻すために

親御さんの話によると、学校の担任から毎日のように朝八時頃に電話がくる。しかし、N君



は動けない。この頃になると親御さんもN君と教師の板挟いたはさまみになって神経を磨り減らし、失調症や心の病気を背負い込んでしまっていた。母親は肥満体で真っ赤な顔をしており、背中から腰にかけていつも重苦しく、痛みがあると訴えた。

N君の体を診ると、皮下脂肪が普通より厚く、ブヨブヨしている。その下の筋肉はベニヤ板を張ったように硬く、カチンカチンである。体が軟らかいと思いがちだが、それは間違いである。

心の病気はとりあえず症状が取れても、脳を働かせるために継続的に神経を興奮させ、その神経の栄養を供給し続ける肝臓や胃腸、また、酸素を運ぶ赤血球の酸素保有能力を高めるなど、回復までに長い時間が必要である。さらには、神経が働いた結果、廃棄物、有毒物を外に出す腎臓など、内臓全般の働きが正常になったとき、ようやく持続力のある神経の働きが戻ってくるのである。

つまり、心の病気とはとりあえず脳が働くまでに回復するのに三、四ヵ月かかる。その段階で何とか学校へ行けるようになる。しかし、内臓全般の働きを回復させるまでには一年かかること、この間は意欲が湧いてもやりたいことの半分しかやってはならないこと、さらに副腎ホルモンが出る量が少なく、副腎機能低下がある場合には回復までに二年かかることなど、回復までの経過を十分お話しして、それでよかったですらお引き受けしましょうということになった。

N君は母親に連れられて東京から通ってきた。六ヶ月くらい経ったとき、私は一つの提案をした。東京の雑踏は正常な人間もイライラさせる。学校の友達も周囲の人々も皆イライラしているだろうから、家に帰ってもN君の心が休まらない。横浜へ引っ越して、近くで仕事を捜して通ってこられたらどうかとお話をしたところ、ご両親はそれを実行された。少年は横浜の学校へ転校することになった。最初のうちは出席日数を稼ぐために登校し、朝行ったらすぐ帰るようになった。その際、職員室に挨拶して帰ることから話す訓練を始めた。クラスメートの反応はというと、N君がまったく喋らないので興味深げに寄ってきてジッと見るのだという。ちょうど動物園の猿を見ているような感じである。N君はそれが非常につらくて、どうしたら良いか分からないと訴えた。

そこで私はN君に釣りを勧めた。時間はたっぷりあるし海も近い。N君が釣りに興味を持ってくれたら、話す訓練になると思ったのである。釣りの経験のないN君に、釣り場では近くに人によく釣り方を聞くように指導した。幸いN君は釣りに興味を持ってくれ、それをきっかけに多少日常会話ができるようになってきた。

こうなったら話す訓練、つまりリハビリである。喋れないというのは、どう喋って良いのか分からないということである。言葉は知っていても、それをつなぎ合せて会話にする技術に乏

しいのである。いわば台詞を自分でつくり出せないということである。

舞台俳優でも漫才士でも、いかにも自分が考えた台詞を喋っているように聞こえるが、本番前に台本を暗記して喋っているだけである。決して本人が考えた台詞ではない。それでも十分練習して感情移入して喋れば、観客にはあたかも本人が考えて喋っているかのように聞こえる。観客は舞台上で演じられているのは現実ではなく、芝居だと分かっているけれども、自分の経験や記憶を重ね合せて感情移入し、喜んだり、涙を流したりするのである。

このように、話すというのは技術である。突然、指名されて大勢の前でよどみなく話せるのは、特別に訓練された人以外にはできない。例えばセールスマンやアナウンサー、相当経験を積んだ芸人等なら大勢の人の前でも、テレビカメラの前でも状況に合わせて適切な言葉で即妙に話すことができるだろう。

しかし、一般の人はそうはいかない。それも中学生、高校生くらいでは話す技術はたかが知れている。それでも小さい頃から訓練されていけば、その年齢なりの話是可以する。こうした訓練は親の力に負うところが大きい。しかし、親が心の病気を患っていると、上手な人間関係がつかれないし、十分な訓練もできていない。例えば訓練ができていたとしても、本人が一時的にも脳の働きの停止したり停滞したりして、話すと言う習慣から遠ざかると、なかなか元

の習慣を取り戻すことは難しいものである。

習慣は積み重ねである。それをいったん止めてしまったとき、元に戻すには努力がいる。洗顔、髭剃り、化粧など、毎日の習慣を入院や退職で止めてしまったとしたら、また習慣に戻すのが面倒になってしまうだろう。喋ることも同じである。心の病気で学校に行けない、出社できない状態で二年、三年喋ることから遠のいていると、返事もうなずくだけだし、自分のしてほしいことを二言、三言喋るだけで済ませてしまうようになる。

戦争中、私の伯母は陸軍病院の婦長時代、入院して甘える将、兵を叱り飛ばし、手術の優秀なパートナーとして気丈夫に勤めた人であるが、定年後臨床検査を無言でやるようになってから一年ぐらいたったころ「何だかこの頃喋れなくなったよ、何時も喋っていないと駄目だね」と言っておられた。

### ＊言葉のリハビリ

日常生活で使われている単語は百くらいのもので、人によってはそれよりも少ない。これをその都度並べ変えているだけである。心の病気で一番問題なのは、日常生活の言葉の数が少な

いことである。毎日毎日顔を合せる隣人に、毎日毎日「おはようございます」だけでは言葉が足りないだろう。おはようございますと同じ意味の別の言葉、「今日はお早いですね」「今日は良い天気になりそうですね」「いつも元気で出かけですね」といったような言葉の言い換えが必要だろう。それが心の病気の人はできなかったり、言い換える言葉の数が少なかったりするのである。

さらに、もし相手から何か頼まれるようなことがあった場合に問題がある。人間関係では、相手から自分の気に入った言葉を投げかけられることはごくまれである。相手から嫌なことを依頼されたり要求されたりといった関係が多いものである。そんなとき、相手の感情を損なわないような言葉で断らなければ社会生活はスムーズにいかない。その言い換えも覚えなければならない。

例えば、学校や会社で先生や上司から居残りをしてやって欲しいことがあると頼まれたとき、都合が悪ければ断らなければならない。そうしたとき、心の病気がある人や言葉の訓練ができていない人は、「ちょっととまずいんです」とか「やりたくないんです」とか、そのもズバリの断り文句を使ってしまう。そうなると相手は感情を害してしまうだろう。そこで上手に嘘をつく訓練も必要になる。大人は上手な嘘をつく集団に住み、円満にやっているのだ。

断り方もいろいろである。「今日は母親の誕生日で、皆で夕食を食べに行くことになっていくもんですから…」とか、「前々からちょっと約束があって、申し訳ないんですけど…。明日で良いでしょうか」といった具合に柔らかく、相手を傷つけない断り方をしなければならぬ。そうした言葉が思いつかないときは「ハイいいですよ」といったん引き受けておいて、ころあを見計らって家族や友達に電話をかけて外から電話をしてみよう。そこで「急用ができましたので申しわけありません」と理由をつけて帰るなど、テクニクが必要である。こうした「嘘も方便」の使い方の子供は他人の家庭から学ぶことはできない。子供が学ぶのは親以外にはないのである。

学校の勉強が大切であることはもちろんだが、社会を上手に生きていくための知恵は親の日常生活から子供はそっくり学んでいるのである。親が柔軟性のない生き方をしていれば子供も同様である。こうした知恵は教えられなければ大人になって痛い思いをしてようやく体得するしかないのである。

従って、N君にも言葉のリハビリを開始した。例えば、「いやだ」という意味に代わる言葉を五つ表現せよとか、一つの意味を三つの言葉に表現せよといった具合である。こうした訓練を地道に続けて三ヶ月がたった。ある日、N君は学校で意識して言葉の言い換えをしたが、友

達は何の違和感もなく聞いてくれたと報告してくれた。N君はこれで良いんだという確信を持った。次はその言葉を笑顔で話すようにとの条件をつけた。友達がどんどん増えて、N君は学校に行くのが楽しくなってきた。友達は自分の病気についても同情してくれるようになった。こうして朝一時間だけしか授業を受けられなかったのに、六ヶ月後には、全部の授業を受けられるまでに回復した。

その後、自分で計画し、勇気を出して物事に対処する力も出てきた。高校受験には自分から能力の合った学校を選んで決め、進学相談も積極的にやってみ事合格した。その後、アルバイト先も自分で探してきて元気に出かけて行くようになった。

親御さんとしては目を見張るばかりの成長である。本人が生活の知恵を身につけ、生きていくための自信と意欲を持てば、後は特別に思い悩むこともなくなった。

## 支配的、自己中心的な性格で自律神経失調症に

### ※ 優越感では病人は救えない

夫と二人で開業医をしておられるN子さんは、ある日突然体調を崩してダウンし、それ以来一切仕事ができなくなってしまう。これでは夫婦二人で一生懸命に築いてきた病院経営がフイになるのではないかと心配し、必死で病院めぐりをしたし、医学関係の仕事に就いている友人を紹介して良い薬を紹介してもらっていたというが、容体は一向に良くならなかった。

N子さんが相談に見えたとき、気持ちの奥に私の所へ来ることが悔しくてたまらないという表情や雰囲気を読み取れた。それは医者でもない癒導医学で自分の病気がもし治ったとしたら、自分たちがやっていることは何なんだろうという不満らしい。私にいわせてもらえれば、医療には薬で治す方法と、薬以外で治す方法があるのに、医療は薬を飲むことと信じて他に目を向



姓名	田中 隆夫	性別	男
生年	昭和 20	職業	無職
住所	東京都千代田区千代田 1-2-1	電話番号	3-XXXX-XXXX
診察科	内科	受診回数	1回
初診	昭和 20	再診	昭和 20

患部: 胃、腹、腰痛、手足の麻痺、頭痛、眩暈、嘔吐、腹痛、食欲不振、体重減少、便秘、下痢、夜尿頻数、多汗、盗汗、手足の冷え、動悸、息切れ、めまい、耳鳴、視力低下、聴覚障害、嗅覚障害、味覚障害、言語障害、運動障害、知覚障害、精神障害、睡眠障害、過敏症、アレルギー疾患、免疫疾患、自己免疫疾患、感染症、寄生虫病、遺伝性疾患、先天性疾患、後天性疾患、薬物療法、手術療法、放射線療法、化学療法、免疫療法、再生医療、遺伝子治療、幹細胞治療、免疫細胞治療、再生医療、遺伝子治療、幹細胞治療、免疫細胞治療

検査項目	結果
血液検査	正常
尿検査	正常
胸部X線	正常
腹部超音波	正常
心電図	正常
脳波	正常
神経伝達速度	正常
筋電図	正常

医師: 田中 隆夫 (Seikaikai)  
 通院: 毎月 1 回  
 通院期間: 平成 25 年 1 月 2 日 まで

### 治療依頼書

患者様の病名: 胃腸炎、腰痛、手足の麻痺、頭痛、眩暈、嘔吐、食欲不振、体重減少、便秘、下痢、夜尿頻数、多汗、盗汗、手足の冷え、動悸、息切れ、めまい、耳鳴、視力低下、聴覚障害、嗅覚障害、味覚障害、言語障害、運動障害、知覚障害、精神障害、睡眠障害、過敏症、アレルギー疾患、免疫疾患、自己免疫疾患、感染症、寄生虫病、遺伝性疾患、先天性疾患、後天性疾患、薬物療法、手術療法、放射線療法、化学療法、免疫療法、再生医療、遺伝子治療、幹細胞治療、免疫細胞治療、再生医療、遺伝子治療、幹細胞治療、免疫細胞治療

1 検査 2 腰痛  
 3 胃痛、嘔吐、下痢 4 頭痛  
 5 食欲不振、体重減少 6 夜尿頻数

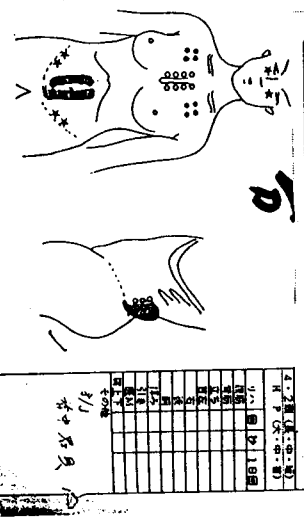
2 腰痛、夜尿頻数  
 2 腰痛、夜尿頻数

検査項目: 胃腸炎、腰痛、手足の麻痺、頭痛、眩暈、嘔吐、食欲不振、体重減少、便秘、下痢、夜尿頻数、多汗、盗汗、手足の冷え、動悸、息切れ、めまい、耳鳴、視力低下、聴覚障害、嗅覚障害、味覚障害、言語障害、運動障害、知覚障害、精神障害、睡眠障害、過敏症、アレルギー疾患、免疫疾患、自己免疫疾患、感染症、寄生虫病、遺伝性疾患、先天性疾患、後天性疾患、薬物療法、手術療法、放射線療法、化学療法、免疫療法、再生医療、遺伝子治療、幹細胞治療、免疫細胞治療、再生医療、遺伝子治療、幹細胞治療、免疫細胞治療

検査項目: 血液検査、尿検査、胸部X線、腹部超音波、心電図、脳波、神経伝達速度、筋電図

検査項目	結果
血液検査	正常
尿検査	正常
胸部X線	正常
腹部超音波	正常
心電図	正常
脳波	正常
神経伝達速度	正常
筋電図	正常

医師: 田中 隆夫 (Seikaikai)  
 通院: 毎月 1 回  
 通院期間: 平成 25 年 1 月 2 日 まで



けない人たちにも問題があるし、そうした既成概念を植えつけている環境にも問題がある。

こうした不満や悔しさがあがり、医療関係の仕事に就いているにもかかわらず、N子さんは私の前に座っても何も質問ができなかった。N子さんはこれまで病気は薬で治す方法しか信じてこなかったのである。これでは私に質問のしようがなかっただろう。誰でもそうだが、知らないことには質問事項すら思いつかないものである。とくに医療関係については門外漢にはまったく分からない。患者さんは何を質問して良いかわからないし、専門家はそんなことは常識なのだから分かって当然と思いがちである。

N子さんの病院は開業して八年、ご主人とは学生結婚である。相談のときの話し振りから三十二歳の今も、ご主人に優越感を持っているらしい。なぜなら、ご主人は大学に入るまでに一年浪人し、さらに国家試験に合格するまでに一年浪人しているからである。本人は全て現役でパスしてきたという誇りがそうさせているのである。

N子さんの父親は公務員だが、子供たちが少しばかり勉強ができたので、兄弟も医療関係の仕事に就いている。一方のご主人の実家は商店主である。こんなところにもご主人に対して優越感を持つ原因があるのかもしれない。

ところで、N子さんは気の毒なほどの肥満体である。肉体的には「首や肩が凝る」「だるい」

「眠れない」「立ってられないほど足の裏が痛む」「疲れやすい」といった症状を訴えている。精神的には「いつも将来に対する不安があってイライラする」「うつ状態でものごとに対するこだわりを持っている」「何をすることも無気力」「喜怒哀楽の感情がなくて何をやっても面白くない」「突然涙が出たり寂しくなったりする」という情緒不安定な面もある。

こうした症状を起こしたきっかけとなったのは、結婚以来の精神的悩みである。その悩みとは、ご主人の両親との折り合いの悪さである。それがお産をした二年前から徐々に発症してきたという。話しているうちにその原因が私にも分かった。というのは、公務員の子供は親の影響からか、常に支配的に物事を考え、しかも自己中心である。自分が最善だと思っているので、決して周囲の人と妥協しようとしないのである。そこに官僚的な匂いがプンプンとする。それこそ夫の両親がきらっている原因だと私には分かった。その折り合いの悪さが妻であるN子さんにとって常に精神的ストレスとなっていたのである。

さらに夫婦生活という点でも、まさしく公務員の発想をしていた。本来、精神的肉体的満足が得られる楽しい性生活とはおよそほど遠い内容だった。結婚を決意したときもお互いにいれば便利だし、協力し合って仕事がやっていると利己的な意味合いが非常に強かったのである。

このN子さんは関西の方だが、実家は横浜の近くだというので、当面はそこから通ってもらうことにした。

とにかくひどい症状で、一日に二回も三回も私は携帯電話で呼び出された。「きついんです」「どうしようもないんです」「寝ても起きても身の置き場がないんです」「苦しいんです」と訴える。そんなこともあって通常は五日に一回通ってもらうのだが、N子さんには一日おきに治療することにした。身長百六十二センチ、体重七十五キロの肥満体でもあり、体力があると踏んだからである。しかし、肥満は自律神経失調症で脂肪代謝異常の病状である

こうして一日おきに通ってきてもらっても、五、六回までは特別何の変化もなかった。本人は心配して「本当に治るんでしょうか」の連発であった。とくに、心の病気は変化の兆しが見えるまでに時間がかかる。とにかくN子さんは焦っているのである。私が騙だましているとかいうことを心配しているわけではないが、何の変化もないので心配だと訴えた。治療が始まる前に「十回ほど通ってもらっても特別な変化はないですよ、変化が出てくるのはそれ以降からです」と説明してはいたのだが、目の前の不安に矢も盾もたまらないといった状態だった。

## ※ 医療もサービス業

六回目くらいの治療を終えると、症状の改善が見られるようになった。まず腰痛と便秘が解消され、外出もできるようになった。それまでは、どこへ行くにも車の送り迎えが必要で、二年間はほとんど外へ出ることができず、家にこもっていたのだそうだ。それが外へ出てみたいという気分になってきた。

さらに十回目くらいで強い不安感が解消され、イライラもほとんどなくなってきた。まだ残っている症状といえば、外出するのがややおっくうなことで、眠れないので、深夜精神安定剤を飲むことである。薬を飲むと非常に空腹感に襲われるという。「これは自分の専門的な知識からいうと薬の副作用なんです」と話された。それに、自閉症的な傾向がまだ改善されていない。

さらに、十五回目くらいに首や肩の凝りがすっかり解消された。この頃になるとN子さんは家に残してきた子供のことが気になり出した。子供は夫の実家に預けているが、月に二回、定期的に関西に帰って子供に会うよう指導していた。最初の頃は子供の顔を見ても特別な感情は湧かなかつたのだが、ようやく子供を気遣うゆとりが出てきたし、世話をすることもできるよ

うになったという。それに不安感が減少して頭の中がスッキリしたし、以前のように意識しなくても自然に外出できるようになった。

治療に通って来られている間、夫婦とは何か、集団生活の暗黙のルールとは何かといったお話しをした。そうした話し合いの中で、N子さんは自分が社会のルールから外れていることに少しづつ気づいてくるようになった。子供の頃から親のいうなりにただ勉強ばかりに励み、暖かみのある人間関係や人の気持ちを感じやる心が全然育っていなかったのである。さらに、夫婦は肉体的な接触が重要なポイントであり、基本になるということが半信半疑ながらも理解しようという姿勢が見られるようになった。そこで私の著書『日本人の正しい性生活と悩み治療』を三回ほど繰り返し読んでもらった。

治療十八回目とき、突然N子さんは自分が実家の親と同様、他人に向かい合ったとき、相手を見下すような気持ちがあったことに気がついたと話してくれた。また、「体も精神もここ二、三日スッキリしていて、具合の悪さもまったく消えてしまったので、自分でもビックリしているんです。あの具合の悪さは何だったんだろう。信じられ気持ちです。こうなると、子供や主人のことが気になって、いても立ってもいられないんです。自宅治療の器具を持って主人のところへ帰りたいんですが、良いでしょうか？ 先生の言われたことを守って一からやり直

してみますので：」と頼まれたので、それではと、自宅施療の方法を急ぎ指導したが、N子さんはさっそくその日のうちに関西へ帰られた。

最後にN子さんはこう私に話してくれた。「この病気はつらかったんですが、結果としては非常に良かったような気がします。これまでは自分が最善で、それ以外はないと教え込まれてきました。まるで北朝鮮の爆弾テロリストの女性と同じですね。いわれたままを信じて突っ走り、ついに自分が行き詰まってこういう病気になったことが分かったのです。おかげで、この年齢になって誰も教えてくれなかった自分の間違いを指摘してもらいました。これから生き方を修正していきますが、まだ間に合うと思います。この病気に感謝しています」

社会の表舞台に立って活動している会社社長や商店主なども、こうした病気で私のところにお見えになる。こうした方々は完治したとき、この病気をして結果的に良かったといわれる人が半数くらいいらっしゃる。言葉に出していわれなくても、内心そう思っているのではないだろうか。

こうした方々は会社や商店の代表として、自分が信じた経営方針を貫かなければならない。状況は常に変化していても、その変化に気がつかなかったり、上手に対応できなかったり、状況を把握したつもりでも判断が甘かったりすると、精神的にも物質的にも行き詰まりを感じる。

こうした無理を重ねると自律神経失調症を生じ、心の病気になるやすいものである。

N子さんの自律神経失調症の発生原因は、自分に合わない生活をしたことにある。N子さんも「今後は我流でなく、少し方向転換をしたいと思います。自分の医院に通ってきてくれる患者さんたちにも、これまでのような命令口調は止めて、これからは優しく接するようにしたいと思います」と話された。

世の中、誰が偉いとか偉くないということではない。医者や弁護士と言えば一般の人は特権階級のように思い込みがちである。実際、医者や弁護士自身がそう思い込んでいる節もある。あるいはまた、大会社の管理職や組織のトップが偉いわけでもない。会社や組織のイメージアップのために貴族、華族を登用して、名前だけが一人歩きしている例さえある。そうした例は問題外として、文明文化が発展して自給自足から分業へと経済が変化すれば、その立場立場で責任を全うすることでは誰でもが平等である。

N子さんに申し上げたのは、自分がやりたいと思っていることをやれるのは大変幸運なことだが、それによって人間に格差があるということではない。また、自分がやっていることが常に正しいということではないということである。

経済が分業化し、より質の高い技術を求められるようになったとき、役割分担が生じ、その



道その道の専門家が誕生することになった。その専門家たちが互いのサービスを平等に交換するために貨幣が介入するのが本来のシステムである。

「井戸の水を飲むときは掘った人の苦労を考えよ」という昔の諺があるが、何ごとにも感謝の気持ちを忘れないようにということを何回も何回もお話した。自分の権利だけを主張したり、金で買ったから相手を見下すとかという問題ではない。貨幣を仲介にした対等のサービスが経済の基本である。

最初のうちは仕方なく聞いていたN子さんも、最終的には医療は患者さんに対するサービス業だと自覚されるようになった。医療に携わる人間が決して偉いわけではない。この辺はやはり勉強をした人は理解が早いと私は感心した。

## 過剰な期待が心身症をもたらした

### ※背伸びした二代目社長の受難

家庭用品のお店を経営されているTさんは二代目経営者で、見るからに苦勞知らずの「旦那さん」という印象を受けた。話してみても先代、つまり父親の自慢話がポンポン出てくる。「それに比べて、自分は二代目のせいかな、どうも経営がうまくなくて…」というのである。先代は偉かったという話ばかりで、商売に対する自信のなさがかえるのである。ちなみに、常識的なビジネス用語や内容について、さっぱり答えられないのである。こうした会話を通して病気の原因や、なぜ仕事ができなくなったかということが大体見えてくる。

Tさんは相談時に、これまで病院で受けた検査資料を持参された。全ての数値は正常に近い。

ただ肝臓の数値だけが六十単位くらいで、やや肝臓が弱いという感じがするだけで、あとは問題ない。肝臓も過去に慢性肝炎をやったということ、すっかり完治しているという。

私はこういうタイプを「自信喪失型特殊人」という分類に入れている。つまり、創業者なら才覚も才能もある。困難にぶつかっても直感や経験、あるいは生まれつきの勘で切り抜けるだけの力を持っている。こうした才覚や才能は小学校一年生くらいから徴候が見えてくるものだが、こういう人は二十六から三十歳くらいで自分で仕事を始める。そうした点からいって、創業者は学校の勉強ができるできないにかかわらず、特殊な能力を持っているということができ。だが、二代目はいくら血がながっているとはいえ、創業者とまったく同じ遺伝子をコピーされて生まれてくるわけではない。

母親に似ている場合もあるし、父親に似ている場合もある。父親に似た遺伝子を持っているなら、大体において創業者的感覚、発想を受け継いでいるものである。だが、Tさんのように、そうした遺伝子を受け継いでいないのに二代目を引き継いだ人は、才覚、才能、力量と、どれを取っても力不足でその器ではない。

親も後継者として仕込み、本人もまたその期待に答えようと必死に努力したのかも知れないが、同じ豆でも大豆と小豆と空豆くらいの違いがあって、しょせん似て非なるものである。そ

姓名: [Redacted] 性別: [Redacted] 年齢: [Redacted]

病歴: [Redacted]

検査結果:

項目	結果
1. 尿糖	陽性
2. 尿蛋白	陽性
3. 尿潜血	陽性
4. 尿沈渣	異常
5. 尿比重	1.020
6. 尿pH	5.0
7. 尿糖	陽性
8. 尿蛋白	陽性
9. 尿潜血	陽性
10. 尿沈渣	異常
11. 尿比重	1.020
12. 尿pH	5.0

検査者: [Redacted]

検査結果:

血糖値 (空腹): 119 mg/dL (正常)

血糖値 (随時): 163 mg/dL (異常)

尿糖: 陽性

尿蛋白: 陽性

尿潜血: 陽性

尿沈渣: 異常

尿比重: 1.020

尿pH: 5.0

検査者: [Redacted]

れなのに、不可能を可能にしようと苦闘するところに悩み、苦しみが生じてくることになる。こうなると常に大脳皮質に緊張をもたらし、自律神経系に影響を及ぼして心身症を引き起こしてしまうのである。

こうした例は枚挙にいとまがない。例えば、十年間も不眠症に悩まされ、骨と皮だけに痩せ細った五十歳くらいの方の所へ出張治療に行ったことがある。この方は家は金属や家庭用品、雑貨の卸商を営んでいた。父親が創業者で、母親共々元気で、拝見したところ七十代後半から八十歳くらいらしい。非常に気丈夫な母親で、父親もしっかりしておられた。しかし、稼業を受け継いだ創業者の長男は不眠症で、まったく仕事ができない状態だった。私がかがったときには店の全商品を処分した後で、「私の代で終わりですよ」と、趣味の庭いじりをしながら、父親は淋しい笑いを浮かべておられた。(六ヶ月後息子が治った時、父親は心の安堵から生きる目的を失い一ヶ月余で伏るようになり他界された。)

この例でも子供は過剰な期待をかけられ、しよせんできないことを父親に否応なく仕込まれ、ストレスから不眠症を引き起こしてしまったのである。

もう一つの例を紹介しよう。その人は食品工場の創業者の息子さんで、父親が亡くなった後二代目社長を勤めていた。工場には数人の従業員がいたが、なかには先代時代からの従業員

も残っていて、社長に向かって「あんたが股の下をくぐっていた頃からこの仕事してるんだよ」とか、「よく泣いてたのを、社長にいわれてお守りをしたり遊んであげたりしたものだよ」とかいわれるのが常だった。そのたびに社長は卑下されたような思いをさせられ、ついには従業員の誰もが嫌がってやらない窯の錆び落としとか、焦げついた機具の掃除とかを専門にやるようになってしまった。

創業者の妻は息子である社長が萎縮し、従業員が幅を効かせている現状を見兼ねて、夫が亡くなってから十数年頑張ってきた工場を閉鎖し、全員を解雇してしまった。自分が元気なうちに財産を食い潰されないようにとの配慮からである。(今は駐車場として跡地の管理がされている)

この相談者も創業者に一步でも近づこうと努力をしていたがなかなかうまくいかず、従業員とのじれんまに陥って、自律神経を狂わされてしまった例である。

ところで、Tさんの身体的症状は「胃の調子が悪くて吐き気がする」「だるい」「頭がボーッとする」「気力がない」という状態である。また、精神的症状は「心配事が常に頭から離れない」「イライラして仕事が手につかない」という。こうした症状は二年前から続いており、どうしようもなくなって私の所を訪ねて来られたのである。もちろん、病院での診察も受けてい

るが、肝肥大との診断で漢方薬、胃腸薬、精神安定剤を飲んでおられた。これで効果が出れば問題なかったわけだが、いくら薬を飲んでも症状が改善されなかったのである。

心身症とはこのように、慢性のストレスがいろんな形をとって体の病気を引き起こしてくるものである。皮膚疾患ならじんま疹や円形脱毛症、胃腸系なら胃潰瘍<sup>いはいよう</sup>、十二指腸潰瘍、心臓、血管系なら狭心症、高血圧といったように、あげれば切りがない。このように、一見肉体的な病気のように見えていても、実は精神的要因がいかにも肉体に苦痛をもたらすかがお分かりいただけるだろう。

### ※ 症状が消えただけでは完治ではない

心身症として問題になるのは自律神経系である。通常、一番大きな細胞の集団である迷走神経、つまり内臓全般を支配している消化器系の細胞集団へ影響を及ぼして機能低下させる場合が約八〇%くらい、残りがその他の臓器を支配する神経系へ影響して機能低下させるのである。Tさんの場合は肝臓を支配する交感神経の緊張が非常に強く、肝臓の働きが低下して脳へ継続的に送り込まれる栄養の不足と、脳全体の血液の循環をつかさどる脳内部の血管運動神経の

失調からこうした症状が引き起こされているのである。

肝臓については少し肥大していることと、数字が正常値の範囲である三十から四十単位を多少超えているだけで、そんなにひどい状態ではない。ただ、血液検査の数値だけでは図れない部分もあって、肝臓自体の働きが非常に悪くなっている場合もある。

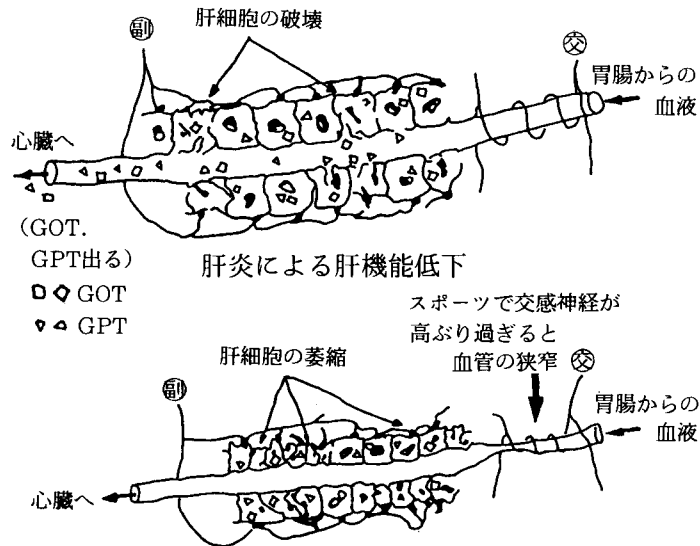
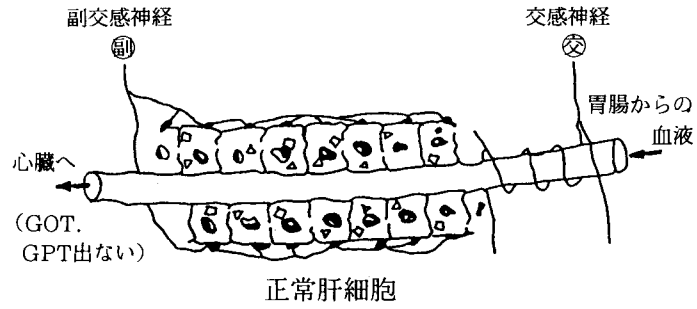
理由は、血液を肝臓に送り込む肝動脈と、肝臓から送り出される門脈は、交感神経が支配しており、血管をつくる筋肉の細胞は交感神経を緊張させるとその信号によって収縮し、血管を細くする。その結果血液の量が少なくなり、酸素と血液が供給されにくくなる。そうなると肝臓の細胞は破壊されなくても、働きが鈍くなり、ついには停止寸前までいく。

血液検査で数値が出る酵素、一般的にいうGOT・GPT（蛋白質を造り替える酵素）、ZTT（蛋白質含有量テスト）等がそれであるが、酵素は肝臓の細胞の中で栄養をつくり出した後、毒素を分解したりする物質で、これは肝臓の細胞が破壊されない限り、血管の中へ流れ出ることはない。多少破壊されている状態で、五十とか六十単位の数値が出る。それで血液検査の場合には、酵素の数値を肝臓の病気の目安としている。しかし、自律神経の失調によって肝臓の働きが低下した場合には、血液検査では分かりにくい。

別の言葉でいえば、やる気満々の飲食店で全て材料は整い、従業員も待機してさあいらっしゃ



## 肝機能低下の種類



自律神経失調（交感神経緊張） 性肝機能低下では  
 (GOT, GPT出ない) 検査正常となるが、実際は血管を  
 交感神経が締めつけ、血液が流れず肝は機能していない

いと待っている。しかしお客さんが来ない。出前の電話も鳴らない。こういう状態では従業員も働きようがないので、じっとしている。逆に、お客さんはどんどん来る。注文の電話も鳴る。しかし、水道の水がチョロチョロしか出ない、ガスの火も乏しいとなったときは働きようがない。従業員もその段階では何とかもちたえようと努力をするだろう。店を辞めて職安へ職探しに行くことはない。こういう状態が失調症からくる肝臓の機能低下である。

Tさんの症状がまさしくこの例の通りで、肝臓の働きが極めて低いのである。それを胃の調子が悪くて吐き気がする、気持ちが悪いと胃薬を飲んでも、症状は取れない。肝臓の働きが悪いとき、あたかも胃が悪いような症状が出る。胸がつまり、吐き気がする。これは門脈という胃及び腸から吸収した栄養を肝臓へ運ぶ通路の血液の流れが悪いとき、あるいはバイパスを通り肝臓を素通りしたときである。胃及び肝臓には心臓から出た血液が流れ込まないからである。

つまり、胃及び腸の血管は正常であっても、その後につながっている肝臓の血管がつまりきみであれば、胃腸の血液は心臓から十分来なく滞ってくる。そうなれば当然胃腸の血行も悪くなる。従って胃腸障害と似たような症状を引き起こすのである。

また、肝臓と似たような大きさをもつ脳は重さ一・四キロほどだが、体全体の筋肉約三十キ

rogramと同じほどの酸素量を消費している。情報処理をつかさどる器官だが、精神的な不安、イライラ、心配ごとがあったり、怒ったりしたとき、「頭に血が上った」という表現があるように、熱をもってくる。

この脳を働かせるためには、膨大なエネルギー源としての酸素と栄養を必要とする。それも継続的に供給されなければならない。ご飯を食べた後、血液中の蛋白質や糖分などが高まり、栄養価の高い血液となる。こうした栄養分は腸管から吸収され、門脈を通過して肝臓に入り、ブドウ糖をグリコーゲンとして、アミノ酸、脂肪酸などとともに蓄えられる。

しかし、昼ご飯を十二時に食べて夕ご飯を八時に食べたとなると、七時間から八時間は何も食べないで考え事したり、仕事をしたりすることになる。こうしたときには肝臓に蓄えられたグリコーゲンが必要に応じて肝臓で糖に作り替えられて血液中に放出され、栄養を供給することによって脳は働いているのである。つまり脳へ供給する栄養分が不足したり、肝臓で処理される解毒作用が行われていないと、その毒素が脳へ作用してイライラや不安、その他いろいろな精神的症状を発生させる。これを肝性脳症といい、肝臓性の脳症状、つまり精神病を引き起こすことになるのである。

肝臓の状態が悪いときの自覚症状は、通常肩や背中が凝ると教科書的には書いてあるが、T

さんの場合にはそういう症状はまったくない。病院では精神面に対して安定剤、吐き気など胃腸面に対して胃腸薬、肝臓の腫れに対して漢方薬を使っていた。つまり、自律神経失調症状の治療は何もやっていないのである。今現在、自律神経系に有効に作用する薬というのは特別な遮断剤しだんざい以外見つかっていないようである。従って、自律神経失調症の治療は、肝臓の血管を支配する自律神経系の緊張を解くことである。

Tさんの家は距離的に近いこともあって、十回ほど通って来てもらうようお話した。その後は自宅での治療に切り替えて、月二回通ってもらうようにした。

大体五、六回くらいで「胸のつかえが取れて、すっきりしました。何だか元気が出てくるような気がします」とおっしゃっていた。十回目くらいから時々「忙しいから」とか、「調子が良いから」とかという電話が入って治療をサボるようになった。そこで手紙を書いてご注意申し上げた。

「症状が消えたことと、病気が治ったこととは別です。症状を消すだけなら薬で押さえてそれを続けていけば良いのです。しかし病気を根本から治すには、これでは不十分です。神経や肝臓の働きがほぼ正常に戻ったときが完治したことなのです。それは症状が消えてから六ヵ月、一年たったときの状態です。もう一度最初のときの苦しみをよく考えて、治療の再開をお勧め

します」

以後もTさんからは何の連絡も入っていない。Tさんのように、体が楽になり、苦痛から解放されるとつい完治したかのように思いこんでしまう人もいる。しかし、この段階では症状が解消しただけで、病気の根は存在しているので、また近いうちに必ず同じ症状が現れてくるはずである。これではせっかくの治療もまた最初からやり直しということになる。しかし、それも致し方ないだろう。患者さんの自覚なしでは治療にも限界があるからである。

こういう患者さんは客観的に自分の病状を知ろうともしないし、他人の言葉に耳を貸そうともしない。もう一度自分が痛い思いをしなければ納得できないのだろう。苦労知らずの二代目社長さんらしいと私は苦笑している。

## 父性欠如が子供の精神障害をつくる

### ※ 人生の偏食

Yさんご夫妻は揃って子供さんの登校拒否の相談にお見えになった。そのとき、ご主人から「妻の具合も悪いので診ていただけませんか」というお話があった。奥さんは「お金もかかることですし、子供を先に診ていただきたいのです」とおっしゃるので、子供さんの治療を先に行うことにした。

十三歳のT君の相談票には、自分の症状をこんなふうに入記していた。「記憶力が良くない」「疲れる」「食欲がない」「文字がうまく書けない」「何もかもが恐ろしくて、どうしても学校に行けない」「眠れないので睡眠薬と精神安定剤を飲んでる」

登校拒否になったきっかけは特別に思い当たらないが、強いていえば小学校六年生頃、太り

気味なのでダイエットをしたこと、その他には親が私立の進学校に通わせたことで中学の受験勉強がきつかったこと、学校まであまりにも遠かったので非常に疲れていたことなどがあげられた。

中学入学当初は試験も九十点以上取っていたのだが、次第に勉強に身が入らなくなって六十点くらいになり、そのうち学校がいやになり、行きたくなくなってきた。今では何もかもがいやで、何かやろうと思っても怖くて手がつけられないと訴えた。

趣味を聞くと、写真だという。それも一流の一眼レフのカメラを持っていて、風景や汽車など最近流行の写真を撮っていると話してくれた。父親も誇らしげに「中学一年にしては非常に良い写真を撮るんですよ」とそばから口をはさんだ。T君はYさんご夫妻の一人息子である。

最初のご夫婦揃って来られたので、夫婦仲は良いのだろうと思った。ところが、雰囲気からしてそうでもなさそうだ。父親が一般の父親とちよつと違う。それに母親も自律神経失調気味だということが勘で分かったので、母親を別室に呼んでお話を聞いた。やはり夫婦仲はうまくいっていないかった。性生活も十年以上ない状態で、ただ同居しているだけの夫婦だという。(独り子の夫婦は計画出産以外、ほとんど不仲である)

T君は父親の性格を受け継いでいて、母親のいうことなどに全然耳を貸そうともしない。一

姓名: [Redacted] 氏名: [Redacted] 生年: [Redacted]  
 性別: [Redacted] 職業: [Redacted] 国籍: [Redacted]  
 住所: [Redacted] 電話: [Redacted]

1. 氏名	2. 性別	3. 年齢	4. 職業	5. 国籍	6. 住所	7. 電話

**自覚書**

\* 本電帳簿の記入は、右の事項を記載し、かつ、左の事項を記載する。

1. 氏名 (姓、名、フリガナ、カナ)

2. 性別 (男、女)

3. 年齢 (生年、月、日)

4. 職業 (業種、職種)

5. 国籍 (日本、外国)

6. 住所 (〒、都道府県、市町村、番地)

7. 電話 (市外、市内、住宅、事業用)

8. 印鑑 (実印、認印)

9. 本人確認 (本人確認済、本人確認未済)

10. 本人確認の方法 (本人確認済、本人確認未済)

11. 本人確認の時期 (本人確認済、本人確認未済)

12. 本人確認の場所 (本人確認済、本人確認未済)

13. 本人確認の回数 (本人確認済、本人確認未済)

14. 本人確認の結果 (本人確認済、本人確認未済)

15. 本人確認の理由 (本人確認済、本人確認未済)

16. 本人確認の担当者 (本人確認済、本人確認未済)

17. 本人確認の連絡先 (本人確認済、本人確認未済)

18. 本人確認の記録 (本人確認済、本人確認未済)

19. 本人確認の保存 (本人確認済、本人確認未済)

20. 本人確認の廃棄 (本人確認済、本人確認未済)





方の父親も、妻が子供の教育方針や指導方法について、さんざん意見をいっても、まったく受けなかったという。そんなことがあって次第に夫婦の気持ち離れ、今では日常会話もなく、食事をして別室で寝るだけという同居人になってしまった。そうした環境で育ったT君は、非常に寂しい思いをしていたことは想像に難くない。

T君は中学一年生としては非常に大人びている。質問しなくてもこぞという辺りに先回りして説明してくれたり、趣味の写真にしても非常に専門的な講釈をしてくれる。その辺に緊張症の症状が見られる。しかし、素人から見れば気が利いていて、ハキハキと答える良い息子さんに見えるだろう。その点は親御さんも分かっているらしい。父親は見栄っ張りのところが、子供が一流のカメラをぶら下げ、あちこちの写真展に応募してたまに入選することや、子供の成績がまあ良かったことなど、それが生きがいのような話し方をされていた。

思春期以降の子供というのは、思いついたままに行動し、周囲の大人を真似て大人の世界の疑似体験を積んでいく。もっと小さいときなら、ままごとに代表されるように、小さなキャラクターの箱をカメラに見立てて、「お母さん写真を撮ってあげるよ。ハイ、パチリ。お父さんも撮ってあげるよ。ハイ、笑ってパチリ」といった具合で、大人の真似をするだけで満足するだろう。しかし、思春期以降になるとキャラクターの箱では満足しなくなり、本物のカメラを欲し

がるようになる。こうなると自分の興味あるものだけにのめり込んで、他のことには目もくれない。いわばこの段階で、自分の人生の偏食をしてしまっているのである。

そんなとき、親は子供の偏食をたしなめなければならぬだろう。大人になれば好きなことだけやっていれば良いというわけにはいかない。いやでも一応何でもやらせるように指導し、社会への適応性を養っておく必要があるのである。

ところが、この父親のように見栄っ張りで、一流ブランド品を身につけた子供を他人に見せて自慢するだけでは到底教育はできない。父親のそうした姿勢が子供を甘えさせ、子供はそれが普通だと錯覚してしまうだろう。こうした考えがエスカレートすると、食べたいものだけを食べ、食べたくないものは箸もつけない、趣味の写真のはやるが、面白くない勉強などはやらない。子供は我が儘勝手に育っていく。

植木を育てる場合でも、調和のとれた植木にするためには必要な枝は伸ばし、いらぬ枝は切り、形を整えていく。ただ、自由に伸びようとする枝を親が勝手に切ってしまうと、こじんまりとした、いじけた人間になってしまう。逆に、子供の意見を尊重すると言う美名の裏に隠された親の責任や義務の放棄は、自由とおよそかけ離れた放任で、やたらと枝が伸びた始末に終えない植木になってしまう。これではまったく価値がない。

心の病気を持った子供さんを連れて来られる親御さんが一様に嘆かれるのは、「小さいときは非常に親のいいことを聞く良い子だったんですが、小学校五、六年頃から親のいいことを聞かなくなりました。親の自分としては、子供の意見を尊重してきたつもりなんですが……」である。尊重と親の責任や義務の放棄とはまったく別ものである。犬猫のように、ただ単に可愛いからと餌を与えているだけでは躾や教育はできない。

乱暴ない方だが、幼児は動物と同じで欲求のままに行動するが、人間としての人格を身につけるのは性ホルモンの分泌する思春期である。人間形成上一番大切な時期を向かえて、親の指導力が子供の人格に大きな影響を持つ時期である。このとき、男の子なら父親が、女の子なら母親がその役割を果たすときなのである。

ところが、世の父親は仕事にかまけて責任を母親一人に押しつけてしまっている。男の子は母親には相談できないこともある。子供は悩んだり迷ったりして自分を見失い、親への不信を芽生えさせてしまう。普通、子供たちはそうした悩みを相談する相手を持っていないし、人の意見を求めたり、本を読んで解決するという方法もほとんど取らない。頼りになるのは親なのである。その親が義務を放棄してしまつては、手本となるものがない。

女の子についても物心がつくと恥じらいや優しさ、女性としての考えを身につけてくる。こ

これは自分自身が分かること、つまり自我の目覚めである。このとき母親が女性として生きていくための知恵を授けてやる。服装、化粧、男性への接し方、あるいは料理など、生活全般にわたっての指導が必要になる。例えば料理は生きていくための基本であり、女性の役割分担であることも教えないと、やりたくなければ放っておくことになる。

男の子にしても、女の子にしても、こうした人格形成教育が成されていないと、社会からの刺激に対応できずにストレスを溜め込んで心の病気に浸蝕されてしまうのである。

### ※ 父親の教育のポイント

丁君には食欲がない、うまく字が書けない、疲れるといった症状があるが、「こうした症状は私が取ってあげることができません。しかし、その後は親が子供をペット化するのではなく、正しくガイドできるように勉強して自分の意見を持つようになしてください」とご夫妻にお話した。

字がうまく書けないのは、大脳皮質の働きが悪くて自由に指先が動かないからである。だから相談票にも金釘流かなくぎりゅうのゴツゴツした字が並んでいる。

食欲がなかったり、疲れたりするのは自律神経の働きが悪かったり、失調症のときに生じる症状である。あるいはまた、家の中が面白くないとか、親の存在が面白くない、自分にとって親は不必要な存在という無意識の働きが引き起こすこともある。

記憶力が良くないというのは、大脳皮質の働きが上向いてくれば回復してくる。

T君はそれ以降、三時間ほどかけて通って来るようになった。しかし、早く治療を終えて完治しないと学業が遅れて本人が自信を失うことにもなりかねない。私が勧めて集中的に治療することになった。

おおむね二ヵ月半くらい通ってこられた頃から、顔がしまってきた。挨拶もきちっとするようになった。ここで私は少しずつT君の心に立ち入った話をするようになった。まだ子供なのに、分不相応のカメラを持ち、カメラに凝るのは良いことではない。その年ならカメラの他にやることが一杯あるはずだと理論立てて話した。また、親の考え方の誤りを指摘してT君の考えも聞いた。T君はこれまでは自分の行動の善し悪しなど考えたこともなかったが、ようやく自分自身を振り返って考えるようになり、症状は徐々に回復していった。

「子供が悪い」と親は無意識のうちに話す。親は正しいと思って子供に対処しているのだが、その正しいと思う思いやりが子供の病気をつくってしまうのだ。こうした病気の子供を持つ親

は、何らかの形で心に歪みを持っているものである。子供が登校拒否になったとき、まず親に問題がないかどうか考えてみるのが大切である。

さらにこうした病気の子供に対しては命令や強制では効果がない。親が子供の年齢にまで戻り、一緒に考え、一緒に行動していくことが治療の大前提である。「子供のお前が悪い」という一方的な非難では、病気を治すことはできないのである。

「いくら治療しても、子供さんの我が儘勝手という部分は治りませんよ」と私は母親にお話した。「私もそうだと思います。父親が定職にも就かず、あきっぱく、見栄っ張りな性格ですから……」とおっしゃった。「癒導医学で治療しても、教育する親御さんの人格を越えるまでには治せません。我が儘勝手はどうしようもないですね」とお話した。T君の心の病気は自分が困らない程度にまでは治るだろうし、学校にも行けるようになる。後は自分次第で性格を修正していくしか方法はないのである。

心の病気が完治すれば人間は他の動物と違い、自分自身を訓練していくためのプログラムを自分で組み立てることができる。そして、それに従って自分を訓練していく能力を持っている。それをしない限り年をとっても精神年齢はストップしたままである。

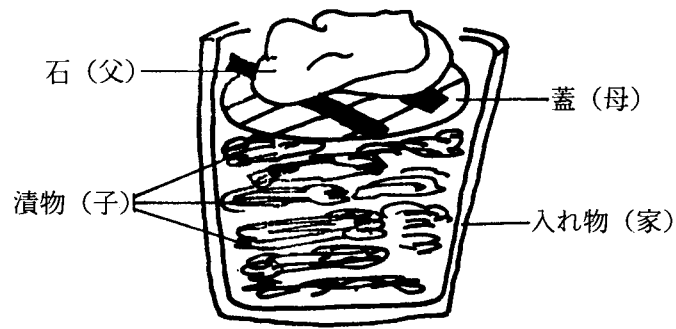
とくに女性にいえることは、一般的に子供を生んだ年齢で女性の精神的成長がストップする

ことである。家庭に閉じこもって育児に追われる生活では、なかなか外に向かって目を開くことができないからである。そうした状況を考え、夫は妻に対してきちっとしたもの考え方、世の中のあり方を教えていかなければならない。直接子供と接するのは母親であり、子供は母親の目を通して社会を知り、社会に参加していくことになるからである。こうした社会生活のルールを知らされない子供は、社会から疎外されて育つことになってしまう。

以上からも分かるように、登校拒否の大きな原因は父親にある。それはサラリーマン社会の弊害でもあり、日本人社会の弊害<sup>へいがい</sup>でもある。他人がこうするから我が家でもといった横並びの個性のない生き方、子供にいい顔をする物分かりのいい父親といった家庭に登校拒否を起こす子供が多いものである。あるいはまた、頑固な父親、酒乱の父親といった場合でも、また母親が精神病といった病気を持っている場合でも、父親が自分の生き方、考え方を身をもって教育していけば、子供の登校拒否は決して起こらないのである。



## 父性欠如が病気をつくる



- 漬物 (子供) は石 (父の圧力) が大きすぎるとつぶされ、いじけてしまう 軽すぎると良い漬物 (良い子) にならず、雑菌 (悪い考え、行動) がはびこる
- 蓋が大きすぎると石の圧力をまともに漬物に伝え、小さすぎると中心部分のみに圧力が行き、平均に伝わらない。  
(父の意見、圧力を、母の状態で加減し、子に伝え、子の状態を父に伝える。父の厳しさ、強さと母の優しさ、思いやりの調和が大切)

### まちがしやすい事

ワンマン	わがまま
自由	放任
きれい好き	潔癖症状
明朗	おしゃべり
活発	緊張症
物静か	うつ症状
慎重	怠惰、不安神経症
優しさ	優柔不断
すなお	指図され型人間

## 自律神経失調症の母親のもとでの教育

### ※ 若いときの自律神経失調症を放置すると

患者のA子さんは、息子さんであるT君の登校拒否で相談に見えたとき、ご主人から妻も具合も悪いので診てほしいといわれていた人である。A子さんの話を聞いてみると、T君が神経症で登校拒否になり、それが原因で自分も体調を崩してしまったというお話だった。しかし、私が相談のとき見た様子では、どうもそうではないように思えた。ともかく、T君の施療が一段落した後で、A子さんの施療を開始した。

A子さんは小さい頃からあまり健康ではなく、二十歳のときに腸閉塞をやっている。それ以来いろいろと苦勞を重ねて三十五歳で遅い結婚をした。東京生れで、代々の下町暮らしだそうである。

A子さんの夫は定職に就かないため、代わってA子さんが一家の大黒柱の役目も果たさなければならず、精密機械の技術者としてある工場に勤めていた。部下も何人か持っていて、部下の技術指導をしながら自分の仕事もこなしていた。しかし、いくら新人を養成しても、A子さんの担当している技術はA子さんにしかできなくて、結局はA子さんが全部やらざるを得ないというお話であった。仕事が忙しすぎて、ついには体調を崩し、ここ半年くらいは家で寝たり起きたりの生活だと嘆いておられた。

相談票には肉体的症状として「<sup>まがた</sup>瞼がへこむ」「お腹が張る」「だるい」「首が張る」「頭痛」「肩凝り」でどうしても元気が出ないと記入されていた。精神的には「イライラしたり、クヨクヨしたりして自分を責める」「子供の病気が気になったり不安になったりする」「遊び心がなくなり」と書かれていた。

相談票には書かれていないが、その他にはご主人と合わないという悩みがある。結婚が遅かったこともあって、お二人は見合い結婚だった。そうした出口のない八方塞がりの中で、さらにT君が神経症でA子さんと対立していた。暖かくなるべき家庭にあっても、孤立無援というのがA子さんの現実だということである。

<sup>ちようへいそく</sup>腸閉塞を患ったのは二十歳頃だが、その数年前からすでに自律神経失調の症状があったとA

子さんは話された。その点を説明すると、「思い当たることがあります。結婚前おつき合いしていた男性と一緒に旅行に行ったこともありましたが、乗り物に酔いやすかったり、楽しいことをやっているはずなのにあまり楽しめなかったりして、その男性から大分変わっているな」という目で見られたということだ。「なるほど、私の病気の歴史は長いんですね。ついには四十八歳でダウンということですね」とおっしゃった。

若い頃から自律神経失調症があると、本来その時期に吸収しなければならぬ社会のルール、基本的な考え方、判断基準といったものを身につける機会を失うことになる。つまり、大人になり切らないまま大人の社会に入ることになる。そうなると、当然のことながら子供と大人の価値基準は異なっているので、それがストレスとなり、自分では納得いかない不満が溜まってくる。それを我慢していると失調症に陥ってしまう。それをご説明して、病気が治って具合が良くなったら、ものの考え方、大人の世界と子供の世界の違いなどを勉強していただくようにお話しした。

また、症状が一段落したら自宅施療に切り替えて月に一回、一年間通っていたくようお話しした。月に一回通って来られるようになったら、そのときに三十分ほど勉強していただいたり、宿題に答えてもらうような方法で病気は治せるとお話しした。

十回程通ってこられた頃、仕事に行ってみたいという気持ちが非常に強くなり、「半日間会社に行っても良いですか」とのお話があった。とりあえずは機械の操作は怪我をするから止めるようにと注意しておいた。次回お見えになったとき様子をうかがうと、「会社では私の仕事は全部ストップしているものだから、困っていました。別の人間を養成しようにも養成のしようがなくて、注文を断っている」というお話であった。

それではということで徐々に仕事をしてもらい、自宅治療しながら一週間に一度通ってもらうようにした。これは急にあるレベルまで持ち上げなければならぬというせっぱつまった状況にあったからである。

約三ヶ月経過したとき、A子さんから部下の指導についての相談があった。私は部下を信用し、部下に任せることも大切なので、当面は失敗して損失が出ることを上司に覚悟してもらい、できることから訓練するようにお話した。さっそくA子さんは実行した。こうして部下を信頼し、任せてみると少しずつ技術を習得していくようになったという。その分、A子さんは気分的にも身体的にも以前よりずっと楽になったという話であった。

A子さんはこの仕事は自分にしかできないんだと勝手に思い込んでしまい、必要以上の責任感から部下にできる仕事まで取り上げてしまっていたことになる。「私以外の人もできるんで

すね」と、感慨深そうに話された。「例えば大きなビルが建ちます。それは実際は誰が造っているのでしょうか。日雇い人夫や季節労働者が主です。特別な勉強をしてなくても鉄筋鉄骨を組み、コンクリートを詰めてビルを建てていきます。現場で働くのは決して建築設計士でもなければ専門的な勉強をした人でもありません。そこをよく考えてみてください。特別な技術を持っていないくても、その部分の仕事は教えればできるものです。教え方も、あなたの技術を一度に覚えさせようとしても無理がありますから、少しずつ相手の能力に応じて教えていけばいいんです。音楽なら長い曲を教えようとするとき、最初から最後まで一遍に覚えさせようとしても覚えられないものはありません。そこで五小節ずつ区切って、完全に覚えさせてから次に進みます。それをつないでいけば、その曲は完全に覚えられるのです。

その方法ですが、それはあなた自身がどう教えたら覚えやすいか、相手の身になって考えることです。大人は子供の能力を考えて童話やおとぎ話を書きます。子供が興味をもつ内容、子供が理解できる分かりやすい言葉、飽きさせない短い文章と知恵を絞るわけです。大人と子供の違いは相手を見て方法を使い分けるといって、ここにあるんです」

こうした話をきっかけに、いろんなお話をした。

約六ヶ月経った頃、経過も良く、症状も安定してきたので、夫婦間の問題についてもお話し

た。ご自分の仕事と同じように、相手を認め、尊重することが何より大切であること、ささいな対立ならご主人に譲り、必要でないことは見ない、聞かないという寛容さを身につけることが夫婦間には必要であること、さらに、性生活については私の本を十分読んでいただくようにお話した。

また、失調症についても勉強していただき、T君に対する対処の方向づけもした。T君に対しては親の精神安定が何よりの治療であることをお話した。仕事や子育てで悩みやストレスが溜まるが、それを解消する気晴らしが体調の悪さや心の病気には何よりも必要である。カラオケでも映画でも音楽でもいい。とにかく気晴らしを知らなかったり、あるいは何か悪いことでもしているかのように感じて我慢したりしていると、どんどんストレスは蓄積して行って、子供に対したときに精神的ゆとりがなくなってしまう。

これでは、子供が親の愛情を必要としているときに親はそれに応えてやることができない。また、逆に子供が失調症であれば、親の愛情を受け止めることもできない。そうした愛情の行き違いが心の病気を引き起こしてしまうのである。

六ヶ月が経過し、A子さんはすっかり元気になられたので、後は自宅で私の作製した器具で一週間に一度きちっと施療を行えば良いことをお話して施療を終わりにした。

丁君の方は、最初のうち三ヵ月ほど母親と一緒に通って来ていたが、A子さんの治療が終わった後は一人で来るようになった。最初のきつい症状である何かやろうとすると緊張が強く、体が疎ん（すく）でしまうことがなくなったので一段落である。何をするのも恐い。恐いのでできないというのも薄らぎ我慢できるくらいになった。肉体的には疲れやすいだけで、他に異常はない。十六歳で体重六十二キロ、身長百七十センチと非常に体格は良い。素人が見た場合、なぜ何もできないのか分からないくらいだ。現在残っている症状は、食欲がない、疲れる、記憶力が良くない、文字がうまく書けないということで、未だ学校には行っていない。

### ※ 思春期精神病と両親との関わり

一般的に、登校拒否する以前の子供たちの様子を聞いてみると、ほとんどの子供が痩せたいと思つて絶食に近いダイエットを経験している。こうした行動は思春期において男女共に美しくなりたい、美しく見せたい、健康になりたい、という願望から発した思春期やせ症の症状である。こうした子供たちをターゲットに、青少年向けの雑誌の広告には、筋肉パワーアップの道具や、肌を美しくする食べ物や化粧品など、青少年の心をくすぐる商品を掲載して盛んに売り込



みをしている。

この時期は思春期精神病ともいわれ、女の子なら「お箸が転がってもおかしい」という一時的な精神障害の状態にある年頃であり、男の子なら正義感に燃える年頃である。こうした世代は世の中の常識に反抗し、大人が眉をしかめる恰好や振る舞いをしたりする。これが発展すると非行や家庭内暴力といった症状に発展する。

これは脳に急速に性ホルモンが作用して、脳の変化が生じるときに一時的に起こる症状である。大人も一時期経験してきたものだけに、多少のことは眉をしかめて許すだろう。しかし、そのとき親が適切な指導をしなければ、次第にエスカレートしていってしまう。脳に急激な変化が起きているこの大切な時期に、ダイエットで絶食に近い状態にしてしまうと、脳を破壊することになる。こうなると痩せたいというこだわりに取りつかれて拒食症になってしまう。登校できなくなった子供たちの八割くらいに、こうした症状が見られるのである。一種の心の病気だが、一見して病気と思いきいにくい。拒食症の他に、この年頃では過食、あるいは拒食と過食を繰り返す食欲異常が見られるのも特徴である。

少年期から青年期に移行し、子供とは違う社会的役割に対処しなければならぬ時期に、選択したり決断したりすることを避けて孤立化し、周囲への適応を拒否して周囲を憎み、社会か

ら否定される方向へ向かってしまうのである。

こうした若者は何らかの意味で仲間からの挫折感や屈辱感を味わっていて、性格的に欲求不満に耐えるだけの力を持っていない。そのうえ感じやすく、傷つきやすいものである。過保護、過干渉、過期待など、周囲の過剰対応や、はじめ、厳しさを教える家庭の父性欠如が問題になっているのである。

T君も小さいときから母親が自律神経失調気味で具合が悪いため、身の回りの世話をなかなかしてもらえなかったそうだ。どうして母親は冷たいんだろうと思っただけという。一方の父親とは世間話をしたが、遊び人といった感じの人で、コツコツと仕事をやったり、じつ々考えるタイプの人ではない。子供が欲しいといえば親の見栄もあって大人でも持たないような一眼レフのカメラを簡単に買い与えてしまう。父親はT君が小さいときは少々勉強できることが自慢だったし、現在は写真コンテストに入賞できることが自慢である。今大人になろうとしているT君にとって、はじめや厳しさを教える父親の存在が一番の問題になっているといいたいだろう。

両親とも精神的に大人になりきっていないために判断基準は甘く、早く大人の真似をさせれば実際に早く大人になり、世の中のリーダーとして金儲けができるだろうくらいに短絡的に考

えているようである。これは大変な間違いで、子供は十分子供の世界で遊び、楽しまなければ大人の社会を理解することはできないのである。

よく幼児教育のときから英語を習わせている親がいるが、こうしたことも間違いだ。日本語の正しい理解がなければ、例え英語が多少話せても中途半端になってしまう。正しい日本語が話せ、正しい日本文化を理解し、現実の日本をしっかり把握していなければ、他の国を理解することはできない。なぜなら、一つの基準がなければ、善し悪しの比較検討はできないからである。

それと同じように、やたらと大人の世界を早く教え込み、体験させたからといって早く大人になることはできない。それに、大人になったときの楽しみが見つけられなくて、大人になりたくないというピーターパン症候群が発生したりもする。その点も考えて、私は自分の子供たちには大人が出入りするような所には絶対に連れて行かない。「大人になったときに楽しみが無くなるではないか」と子供たちには話している。だから子供は子供と遊ぶように仕向け、子供は子供らしい洋服を着せている。私自身、年寄りの真似ごとはしない。年を取ったときに楽しみが無くなるからという考えを持っているからである。何ごとでもそうだが、年相応の人生を味わうところに年相応の喜びがあるものである。

T君のご両親にはそういう点もお話したし、T君ご本人にも先走りを慎み、病気を治してい

## 思春期精神病と脳の成熟

12才頃

自分の存在が分かり、親同胞を他人として意識できる。大人の真似をしはじめる。性の意識と区別

18才頃

第一次完成期、上手にウソをつく訓練期、ウソ（たてまえ）と今までの本音（純真、そぼく）の混在と迷い期で他人の嫌がることを平気でわざとやることで自分を表現、顕示、（思春期精神病）

22才頃

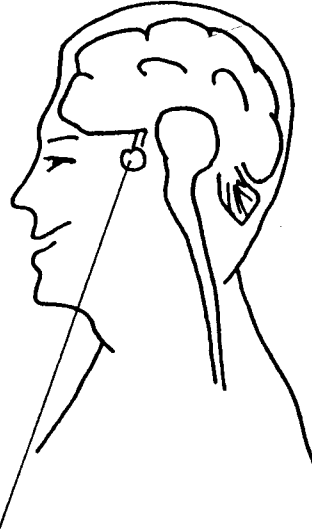
第二次完成期  
大人の習慣、言い回し行動をすんなりとできるようになり、他人の考え行動自己のそれとの混合により生きる。

7才頃

親、家から離れて行動ができるようになる。  
集中現象が脳に生じ始める。

3才頃

動物的な生存、自然現象として生きている。



下垂体

成長ホルモン、性ホルモンを分泌、12才頃から急に大量に分泌され、皮質に作用することによって脳の成熟をさせる

26才頃

- ・脳の成熟完了
- ・自分の行動、考え  
方習慣が固定する

35才頃

多くの自己経験と想像経験（読書、他）により創造、指導ができるようになる。

くと同時に、年相応の生活をしないと孤立するということを少しずつ説明した。

三ヶ月くらい経った頃からT君も何となく落ち着いてきた。「気が楽になった、恐ろしいという感覚が薄れてきた」とそのときの気持ちを表現していた。また相談票の書き方が非常に乱雑で荒っぽいかったので、小さくきちっと書くように指導をした。文字の書き方はその人の脳の働きを反映している。脳の働きを修正するには、文字の書き方を修正すれば多少治まっていく。

学校へは最初のうち午前中だけ登校して体を馴らし、さらに午前中だけ授業を受けるようにして徐々に頭を訓練するようにした。最終的には一年後、T君は回復して学校に行けるようになった。

この病気の治療に「戸塚ヨットスクール」のようにヨットに乗せてスパルタ訓練をし、体罰で生徒を死亡させたり、「風の子学園」のように規則違反者を炎天下のトレーラーに閉じ込めて死亡させたりといったような、社会の目耳をそばだたせるような事件を起こしているが、こうした荒療治では心の病気は治らない。原因となっている脳の働きを正常に戻してやれば本人の意思と関係なく良い方向に向くのである。ちょっと乱暴ないい方に聞こえるかもしれないが、真理である。

例えば、風邪という病気は心の病気と体の病気の両面がある。咳や熱、だるさ、頭痛などは

体の病気、つまり自律神経系の病気。同時にやる気がない、面倒くさい、根気が続かない、イライラする、これが心の病気、つまり皮質に影響したときの病気である。風邪引いたときにくら努力しても、細かい計算や読解力はない。

しかし、脳が回復して正常に戻れば、つまり風邪が治れば、特別なことをしなくても以前のよように性格は明るくなり、細かい仕事もこなし、疲れも少なく、頭が冴えてくるものである。だから、大脳皮質の働きを正常に戻してやるのが本人を苦しませることなく、自然に元に戻る最善の方法なのである。

今のところ、風邪そのものに利く薬はない。なぜなら、自律神経失調を良くする薬がないからである。喉の痛みや炎症を消す薬はあるし、熱を下げる解熱剤げねつざいもある。しかし総合的に風邪を治す薬は今のところない。

同様に、心の病気に効く薬はないのである。イライラするのを鎮める薬はある。頭痛を鎮める薬もある。しかし、やる気を起こさせる薬はない。昔からの精力剤であるまむし酒、またたび酒は少しは有効もあろう。だが、これは脳細胞が正常で一時的に機能低下したとき、例えば風邪っぽいとか、疲れを感じたときに頑張らなければならぬ人にくら効果があるというだけのことである。しかし、これにしても体質と時間帯によるのである。

## 自己治癒能力もない心の病

※ 目に見える変化がないだけに…

Kさんは三十二歳、医療専門学校を卒業して国家試験を受験したがうまくいかなかった。難しい国家試験で合格率も高くないので、まあストレートに合格しなくても普通のことでもある。そこで今度は国家試験を受けるための予備校へ通い出した。

そうしているうちに、三年前くらいから、何だか落ち着きがなくなってきた。集中力がなくて、教室にじっと座っていることもできないのである。また、休みの日もとにかく体を動かしていないと落ち着かないし、こんなことはする必要がないと思いついながらも、ついついやらないでもないことまで手を出してしまう。自分で自分の抑制が利かない状態だった。机に向かって本を読むこともできず、授業中も五分ともたなかった。それでついに七年間も浪人をする事

になった。

体の状態は特別に悪いということはない。やや風邪気味かなと感じる程度である。しかし、不眠症の苦しみ、落ち着きのなさ、集中力のなさが病気ではないかとK君を不安にさせたし、そうかと思うと病気ではないかもしれないと否定してみたりで、心は揺れ動いていた。ただ、自分の体に疑問は持っておられた。

とにかく、熱もなければ咳も出ない。だるくもない。これなら病気だと思いきい。病院で診てもらっても相手にされないし、自分がどうなったのか、その推測さえもつきにくい。病院では血液検査からCTスキャン、胃腸の検査まで受けたが異常はない。そうなると本人も分からなくなってくる。しかし、医療の知識があるので、どうも病気らしいということになり、癩導医学を知っていらっしやったので一度診てもらおうと訪ねて来られたのである。

日本の社会は証拠主義である。犯罪を犯しても証拠がなければ罰しられない。犯罪捜査はまず容疑者のアリバイを調査から入り、もしアリバイがなければ事実を証明する証拠を調べる。信号無視という犯罪は証拠が残らないものだが、その場合でも、まったく利害関係のない目撃者二人が証言しなければ証拠にはならない。

こうした証拠主義が病気の認定にも使われているように私には思える。いくら患者が具合が



悪いといっても、検査で「これだけ数値がずれています」「病巣がレントゲン写真に写っていません」といった客観的事実がなければ病気とは認めない。だから内視鏡、超音波、心電図といったように、検査機器が多数動員されて証拠を集めるのである。

こうなると、長い時間をかけて習得した専門知識による診断が、証明能力が低いように思われてしまいがちである。古い土器や絵画の鑑定では証拠がない。そうしたものに對してはその道の専門家がいくら認めても、証拠がないものは科学的でない、現代的でないと排除される。確かに、そうした鑑定は主観によって左右されるかもしれない。だからデータや裏づけが必ず要なのはいうまでもない。この点においては心の病気や神経痛、リウマチについても似ている。リウマチを例にとると、最近では血液検査でその抗体が証明されるようになったが、神経痛は痛みだけで何の異常も発見されない。本人が痛いということだけが事実である。従って、例えば仮病を使っても、痛いといわれれば裏づけの取りようがない。

Kさんの症状のように「集中力がない」「落ち着きがない」「眠れない」と訴えられても、体はどこも悪くない。目はパッチリと開いてハキハキと喋るし、きちっとした医療専門の大学を出ている大人が嘘をついたりしないと周りは思う。しかし、検査では何も異常は出てこない。そうなる、もうやる気がなくなって、物事を捨てているようにしか思われないのである。そ

れがKさんの困惑である。すっかり周囲の人の信用をなくしているのだ。母親と相談に来られたのだが、母親ですら「何だか病気だといえば病気だし、怠けだといえば怠けだし、長い間こういう状態が続いているから…」と半信半疑なのである。

こういうとき、私は引き受けるかどうか非常に迷う。状態が良くなったときでも目に見えないだけに周囲からは「何の変化もない」といわれてしまうからだ。本人が「集中できるようになった、落ち着きが出てきて勉強ができるようになった」といっても、「それは本人のやり方の違いかもしれない」「一時的に回復したのかもしれない」「療導医学の治療を受けなくても半年したら回復したかもしれない」などと周囲からいわれると私も非常に困るし、しゃくにさわ

る。

前の私の著書にも書いたが、以前十八歳の青年が毎日夜は八時頃に寝て、翌日の十一時頃にならないと起きないという相談を受けたことがある。起きてもボーとして何もしない。ただウロウロしているだけだった。それを心配したご両親が説得して連れてこられた。三ヵ月後には朝八時頃自分から起きるようになり、昼間は自分が好きな趣味を捜してきてやるようになった。

六ヵ月後、これ以上の精神的な訓練や規律に基づく指導は一般家庭ではできないし、また集

団生活に慣れさせる意味もあって自衛隊に入れようとして両親と話し合い、本人の了解も得て、本人自らが願書を取り寄せて入隊した。

それから三ヵ月後、見習い期間が終わるとご両親が本人を連れて挨拶に見えられた。ご両親は「ここまでになりました。本当に助かりました」と治療効果を認めてくれたのだが、本人は「昔からこういうことはできたんだ。まだ治っていない」といい張り、ご両親が涙を流して謝られたことがある。

しかし、そういう明瞭な行動の変化が出る場合はいいが、行動の変化ではなく、集中力が戻ったとか、頭が冴えてきたといった目に見えない変化の場合には、本人が逆のことを主張しようと思えばお手上げである。

だから私は、心の病気の治療を引き受けるときは家庭環境、職業、本人の性格、卒業校、医療に対する知識はどうかなどを判断して引き受けるどうかを決める。その点、Kさんは医療関係の知識が非常に深いので、お引き受けすることにした。

## ※心の病気が治りにくいわけ

通うには遠いので三日間の自宅治療の後、三日間ホテルに泊まってもらって治療した。自宅へお帰りになって治療を続けながら、最初は二週間に一度横浜まで出てきてもらった。三ヶ月がたったが、特別な変化がないという報告だった。

私は「変化がないので気分的に面白くないでしょう。この病気は体に症状が出ない人ほど長くかかりますよ。しかし六ヶ月か一年で相当変化が出てきます」とお話した。付け加えて「もし癒導医学で駄目だとお考えでしたら、これで打ち切りにして、お金は精算してお返しします。どういたしますか」と聞いた。さすがに医療関係の人である。「結果が出るかどうかは、もう少し経ってみないと分からないと思います。それに、いろいろとやってみたが駄目だったのでお願いしているのです。他にやることはありません。結果が出なくて困るのは私ですから、結果が出るまで続けます」との返事をいただいた。私も新しい治療の指示を出し、それに沿ってしばらく続けてもらうことにした。

こうして五ヶ月目を迎えた頃、「集中力が大分出てきて、気分的に楽になりました」という報告を受けた。顔は大分白くなってきている。心の病気の人は非常にどす黒い顔色をしている。さらに記録票には「落ち着きが出てきた」「集中力が出てきた」「眠れるようになった」という記述が見られるようになった。そうしたゆるやかな変化が、精神的な症状だけが現れる病人の

治り方である。

六ヵ月ほどした頃、午前中だけでも学校へ行けるようになり、八ヵ月後にはほぼ普通の生活を送れるようになった。「自分でもこれで大分良くなってきたと思えるようになりました」といわれた。そこで生活指導を行い、若さに任せて無理をしてきたこれまでの生活を改めるように提案した。

人間には個人差があり、他の人には良くても、自分には合わないこともあると、具体的に話した。とくに親御さんが公務員であり、良いと思うことならあれもこれも奨励する風潮のある環境に育っている。こうしたことが体や心に無理を強いることになるので、そうした点を改めるようにお話した。

例えば、体の小さい人は、他人ができて自分にはできないこともある。体が大きければプロレスラーにもなれる。しかし、小さい人はなれてもおおよそ勝ち目はない。体を使った競争には不向きなのである。頭脳を使った競争でも、ただ他人と競争しても始まらない。自分の能力と戦うことが本当の姿ではないだろうか。

その一年後、Kさんは年四回は通って来られるのだが、自覚症状の改善だけで目に見える症状の改善はまったくなく、これは非常にやりにくい。

こうした症状を風邪の例をあげて説明したい。ある友人宅を訪問したとしよう。応対に出た友人が咳をしたり熱っぽい顔をしていたら、たとえ不機嫌だったりイライラした対応をしたとしても、ああ風邪だからイライラしているな、面白くないがまたにしようと思えるだろう。

この風邪は咳や熱を出す自律神経失調の症状とともに、イライラさせたり、やる気をなくしたり、面倒くさがったりという精神症状も引き起こす。このとき、客観的材料である赤い顔や咳、痰、倦怠感があったりする。こうした目に見える症状が伴うからイライラしたり、面倒くさがったり、邪険な返事をしたとしても理解できるのである。

しかし、こうした体の症状がまったく見られず、表に現れない精神症状だけだったらどうだろうか。訪ねてきた友人は理解ができなくて、二人の仲は破綻はたんしてしまうだろう。これが心の病気の特徴でもある。

風邪を引くとき、自律神経失調の症状が出るが、同じ風邪でも本人が気づく前に症状が出る場合と、症状が出てから風邪だと気づく場合とがある。

何だか最近眠れない、イライラする、いやに人の言葉が耳障りで反抗的な気分になると自覚する。それが二、三日続いた後で咳や熱が出てくる。ああ風邪だったんだ、風邪であんな症状が出たんだと分かる。逆に、何だか今朝から熱っぽい、だるくて寒気がするると自覚すれば、あ

あ風邪だとすぐ分かる。時間がたつと今度は集中力が無い、面倒くさいといった精神症状が出てくる。

心の病気というのは、大脳皮質の働きが鈍ったとき発症するもので、別名、精神病という。大脳皮質を動かす自律神経の中枢、視床や視床下部、これらは同時に体全体の内臓から眼球、皮膚感覚までをつかさどっている。風邪の病原体（ビールスやばい菌）が体に入ってきて、自律神経のどこに作用するかというと、まず扁桃や鼻、喉といった空気の通り道に発生して、そこから全身に回る。それが自律神経中枢に作用したとき、自律神経失調症状として、熱や咳、だるさが発生するのである。

さらに大脳皮質を動かしている視床部分へ作用して、皮質レベルの低下をもたらしたり、異常な興奮をさせたりするのである。そして意識中枢や睡眠中枢、食欲中枢等と変化をさせて食欲がない、集中力が無い、面倒くさいという精神症状を発生させる。

しかし、同じ自律神経失調症であっても、私の所で治療している心の病気や自律神経失調症には風邪のような病原体は無い。自分の体の中で自家中毒的に発生したものである。風邪は十日から二週間もすればすっかり治癒するが、これは風邪の病原体を以前免疫系で排除したことがあると体が覚えていて、その病原体を食べてしまう白血球が増殖し風邪は終息に向かう。ま

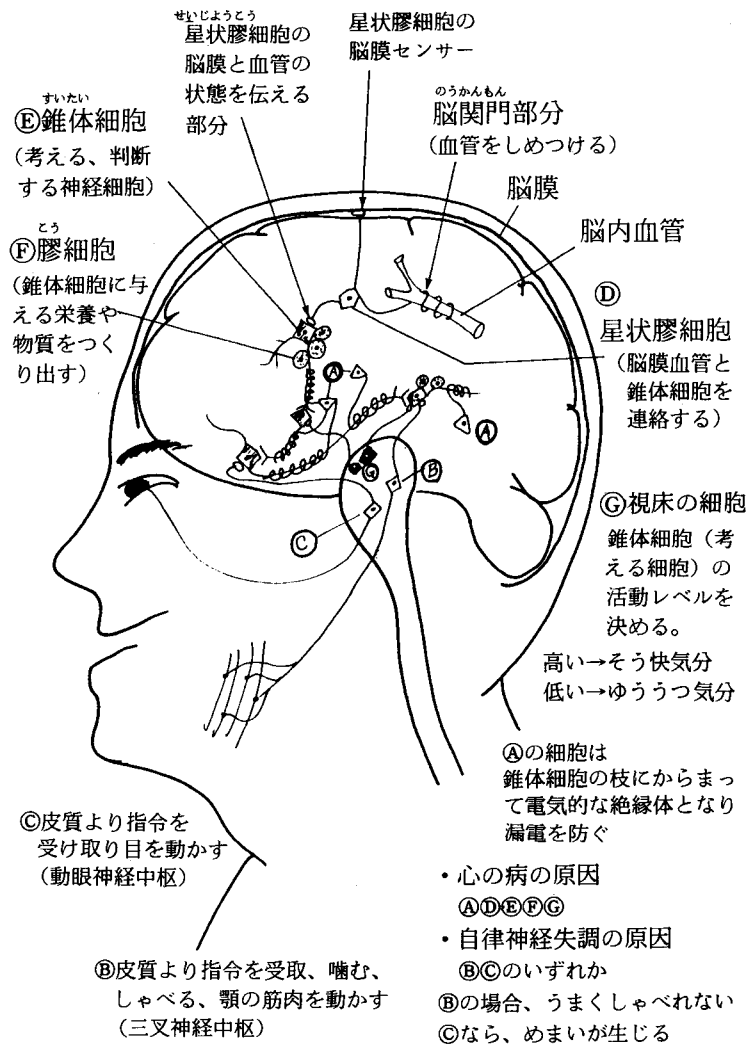
た病原体が体の中で細胞分裂して繁殖しているうちに突然変異を起こし、別の菌にすり変わって無毒化してしまうからである。

けれど、心の病気にはこの菌がない。そのうえ自己治癒能力さえも作用しない。これでは治りにくいわけである。

結局、Kさんは家族や親戚に、いろいろ言われて辛いところであるが、「黙って治さねば…」と努力され、今では健康であった学生時代の80パーセントまで回復、勉強できるところまでこぎつけておられる。



# 心の病は治すのに時間かかる



出社拒否 ケース3

## 手指は頭脳に接続された優秀な治療機器

### ※ 一筋縄ではいかない心の病

小学校の教師をしているM子さんは、非常に子供好きである。それも通り一片のものではなく、心の底から好きで好きでたまらないといった様子の人である。

施療するたびに「仕事を少し控えて、病気が治るまで子供たちとも授業時間以外は離れるように」とアドバイスするのだが、「つつい子供たちと話し込んでしまっんです」という非常に優しい子供好きの先生である。教師には珍しいタイプである。一般的に言えば、教師は子供につくり笑いをし、愛想良さそうな話し方をしているが、本心は非常にきつくて、優しそうな表情をしている、目はまったく笑っていないものだ。

心の病気や自律神経失調症になった子供さんを治療に連れてこられる親御さんの職業が教師

検査項目の表

検査項目	検査方法	検査結果	検査日	検査者
1. 100ml	1. 検体採取	1. 検体採取	1. 検体採取	1. 検体採取
2. 検体採取	2. 検体採取	2. 検体採取	2. 検体採取	2. 検体採取
3. 検体採取	3. 検体採取	3. 検体採取	3. 検体採取	3. 検体採取
4. 検体採取	4. 検体採取	4. 検体採取	4. 検体採取	4. 検体採取
5. 検体採取	5. 検体採取	5. 検体採取	5. 検体採取	5. 検体採取
6. 検体採取	6. 検体採取	6. 検体採取	6. 検体採取	6. 検体採取
7. 検体採取	7. 検体採取	7. 検体採取	7. 検体採取	7. 検体採取
8. 検体採取	8. 検体採取	8. 検体採取	8. 検体採取	8. 検体採取
9. 検体採取	9. 検体採取	9. 検体採取	9. 検体採取	9. 検体採取
10. 検体採取	10. 検体採取	10. 検体採取	10. 検体採取	10. 検体採取

検査

体重 50 尿尿糖

検査項目	検査方法	検査結果	検査日	検査者
1. 100ml	1. 検体採取	1. 検体採取	1. 検体採取	1. 検体採取
2. 検体採取	2. 検体採取	2. 検体採取	2. 検体採取	2. 検体採取
3. 検体採取	3. 検体採取	3. 検体採取	3. 検体採取	3. 検体採取
4. 検体採取	4. 検体採取	4. 検体採取	4. 検体採取	4. 検体採取
5. 検体採取	5. 検体採取	5. 検体採取	5. 検体採取	5. 検体採取
6. 検体採取	6. 検体採取	6. 検体採取	6. 検体採取	6. 検体採取
7. 検体採取	7. 検体採取	7. 検体採取	7. 検体採取	7. 検体採取
8. 検体採取	8. 検体採取	8. 検体採取	8. 検体採取	8. 検体採取
9. 検体採取	9. 検体採取	9. 検体採取	9. 検体採取	9. 検体採取
10. 検体採取	10. 検体採取	10. 検体採取	10. 検体採取	10. 検体採取

という方は非常に多い。それは相談のとき顔を見ただけで見当がつく。身のこなし方でも分かる。それくらい特異なものを持っている。しかし、M子さんは三十八歳にもかかわらず職業による独特の慣れが感じられず、常に明るくて好印象を受けた。

症状は「めまい」「難聴」「耳鳴り」「疲労感」である。病院ではメニエール氏病と診断された。仕事に行けなくなった原因は過労である。毎日の学校の仕事だけでも大変なのに、町内の役員を重複してやり、さらに運動会や遠足などの学校行事の準備は自分から進んで引き受けるという性格の人である。

M子さんのように体に著しい症状が現れる場合には、原因も良く分かるので結果として仕事に行けない理由も分かる。M子さんは病院で治療を受け、何とか治そうと努力したが結局は職場に戻れなかった。

治療に来られたときは、私がちょっと大きめの声で話すと「集中して聞くと分かる」程度の難聴だった。治療に通うには距離的に遠いので、三日間治療を希望されたが、早く治したいこと、大事な時期であまり休むと子供たちに影響があるとおっしゃるので、多少お金がかっても、十回ほど一泊二日で治療し、一週間に一度通って来られるように勧めた。もちろん、初歩的な自宅治療をやりながらである。M子さんは非常に苦しい状態なので、自宅治療の方法は付き添

いのご主人に指導した。

その症状は毎日の記録にある通りである。

八月二十九日 体重五十キロ、初めて施療を受ける。施療後は快感。

八月三十日 朝あまり疲れを感じない。施療中痛みがきつく、施療後も肩辺りが触ると痛い。

八月三十一日 横浜の三日目、ほとんど疲れがない。昼食ビフテキを食べる。

九月一日 主人に施療してもらう。やはり肩が痛い。

九月二日 体育館で話す校長先生の言葉が案外はつきりと聞こえた。

九月三日 右耳でも電話の音が聞き取れるようになった。嬉しい。

九月四日 通院日。聴力を測定、左右とも前より聴力を回復していた。

九月五日 昨日までの聴力が今朝になって再び落ちた感じ。一日でもこう違うものか。

九月六日 体育祭練習四日目。疲れは以外と感じない。体が軽く感じられる。

九月七日 右肩が凝っている。朝と晩一部施療を行った。

九月八日 体育会で午後になると多少頭痛を覚えたが、夕方回復。台所の後始末までできた。

夜はぐっすり眠る。

九月九日 右肩がすごく凝る。

九月十日 やはり右肩が凝る。通院日。再び聴力測定。やはり左右の耳とも聴力が落ちていた。  
九月十一日 何となく体の調子が悪い。とくに午後は具合が悪くなり、少し早めに帰宅して寝る。ひどいめまいにはならなかった。治療なし。

九月十二日 今日はあまり調子が出ないが、無事一日勤めることができた。治療はなし。

この段階でM子さんから電話をもらった。「どうも最近具合が悪くて、また元に戻ったような感じがするのです」とおっしゃる。このように、患者さんはちよつと症状が取れるとすぐ治ったと思われる。癲導医学の治療を受けた人のほとんどがそうである。そこがこの自律神経失調症や心の病気、つまり、脳及び神経の機能低下、機能障害からくる病気が他の病気とまったく違う点である。これをまったく理解されていないのである。

そこで、「最近、働き過ぎとかはありませんか」とうかがったところ、「そういえば、少し調子がいいもので、今まで出来なかった体育祭やその関連行事で非常に忙しくしています」という返事であった。そこで私は少し声を荒げた。患者さんは皆そういうことでぶり返して、「治らない、治らない」と苦情めいたことをいうからである。

「初回治療の前にご注意申し上げたように、症状が取れたという段階では全体の二〇％が治ったに過ぎないのです。後は肝臓や腎臓、神経細胞の充実度を増してスタミナをつけなければ、

失調症の回復をバックアップすることはできないんです。つまり神経細胞や脳が必要とする栄養を継続的に供給したり、不要な毒素を消し去ったりできなければ本当に治ったことにはならないのです」とお話しした。

人間の体というものは、日本経済の仕組みと全く同じである。例えば、コンピューター用品の非常に重要な部品であるLSIなどをつくるには、設計技術から製造技術まで網羅しなければならぬ。

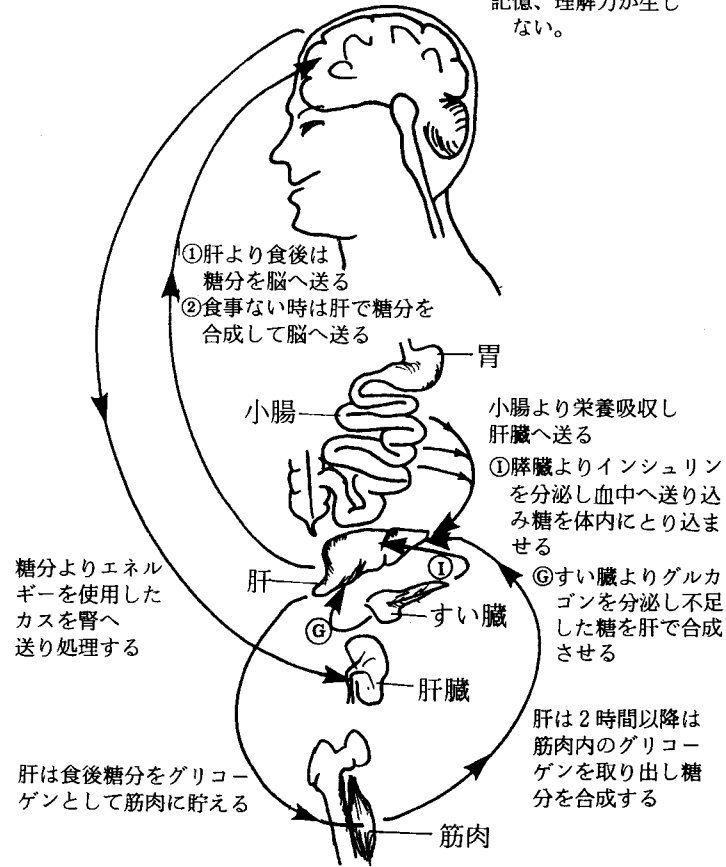
そのチップを例えば発展途上国へ輸出したとする。チップを生産するための材料は手元にあるし、チップを分解すれば設計技術も習得できるだろう。だが、その部品の完成度を高めるには、塵や埃を取り去るための設備の技術、チップを縮小して図面を書く写真技術、働く人たちの労務管理の技術、鉄鋼石や金の鉱石の純度を高めて精練し、最終的工程までもっていく機械設備の製造技術、その機械設備に使う優れた鉄を製造する溶鉱炉の技術、こういう裾野の広がりや相当充実して、継続的に整然と秩序正しく働いたときに、とぎれることなくコンピューターチップが製造されるわけである。その流れの中でどれ一つ滞ったとしても、最終的なLSIの製造にはならない。

もっと分かりやくいとうと、定食屋があるとす。毎日お客さんが来ても、米屋が米を持って

# 脳は肝、腎の支援で持続的に活動する

(肝、腎など内臓回復までは完全回復しない)

肝、腎、すい臓、小腸の連携が無ければ脳は持続して集中力、記憶、理解力が生じない。





こない、農家が米屋へ米を納入しない、農家が米を生産しない、水道局が一生懸命働いてもダムの管理人がサボって水を流さない、水道のパイプが詰まる、下水処理ができない、ゴミ出しでも集めにこない、ガス会社が品不足でガスを閉めるといふようなことになったら、どれ一つとってもその定食屋は材料を仕入れて煮炊きし、継続的に定食をお客さんに提供することはできない。このように、人間の体も有機的につながっているのである。

脳や自律神経が働くためには、その働きを助ける肝臓、腎臓、さらに栄養分を吸収する胃や腸、それに消化液を出す消化器の分泌量、ひいては糞便の排出能力、こうした一連の働きが全てスムーズにいかなければ、病気が治ったとはいわないのである。他の病気の場合は、例えば腸が悪ければ腸の疾病が改善されればそれで全快する。つまり定食屋の皿が割れたのと同じで、お皿を買ってきて補充すれば良いことである。

しかし、自律神経及び脳の機能低下はそういうわけにはいかない。だから症状が取れただけでは治ったとはいわないことを繰返お話した。M子さんもそれを十分理解されて、「一年半は仮病を使ってでも無理をしないようにします」と納得されて再び養生を始められた。その結果、二週間後には耳が良く聞こえるようになった。そういうふうには、心の病気は他の病気とは違う特徴を持っていて、一筋縄ではいかない。

### ※ 癒導医学は原因を徹底的に取る原因療法

今の現代医療とされている基本は、悪い症状が出なければそれで良いという考え方である。痛みが止まればそれで良いし、吐き気が止まればそれで良いのだ。例えば痛みを生じる原因、吐き気を生じる原因があったとしても、それを止める薬を飲み続ければ収まるのだから、それで良いではないかという理論である。こうした理論を聞いていると、今の四十代、五十代の人たちが小学校の頃、ハエや、ネズミの尻尾を学校へ持って行くと保健所が買い上げてくれた制度があったことを思い出す。こうして国民がこぞって根本退治したおかげで、都市周辺には蚊やハエがほとんどいなくなった。田舎でも人畜に有害な動物は少なくなっている。

つまり、現代の医学の考え方はこうだ。蚊が刺せばかゆい。だが、かゆみ止めの薬をつければかゆみは止まる。だから、蚊がたくさん湧いても、刺される度に薬をつければ良いではないかという論理である。ここには蚊の発生源である溝掃除をしようという発想はない。下水を整備しないのも、かゆみ止めの薬という対症療法があるからという考え方なのである。蚊が減るまではかゆみ止めの薬も必要だが、同時に原因を取り去る原因療法で溝掃除をし、下水を整備

し、下水の流れを良くし、さらには下水の処理能力を高める。こういう地道な努力が根本的にかゆみを止める方法なのである。

癒導医学の考え方はそこにある。だから薬で治らない病気も癒導医学では治るのである。しかし、決して薬を否定するものではない。薬のお陰で感染症は減り、かつては毎年十万人もの結核病患者が亡くなっていたのが、今では数千人と激減し、結核という病気そのものが沈静化した。過去にはこうした薬による輝かしい効果をあげたこともあるが、全ての病気を薬で治そうとするのは、非常に無駄なことである。

確かに薬は一定の作用を発揮するものであるが、薬を飲むことは体にとってはあくまでも異物を受け入れることであり、場合によっては体に負担を与え、副作用という別の面が出てくることもある。病気を治すのは体自身であって、薬は補助的な役割を果たしているに過ぎないのである。

日本で理学療法といえば、薬を使わない療法である。病院で行われている理学療法とは、優秀な機械による治療方法で、放射線照射、超音波などを使った治療を指している。癒導医学もまさにこれで、人間の手先による体への刺激という感覚はないかもしれないが、私は人間の手は訓練されることによって、どのような機械よりも、頭脳という最高のコンピュータ

ーターに接続された優秀な治療機械であると考えている。

ちなみに、私は三十年間、朝六時半から駆け足を続けている。最近時間が足りなくなっていて、平坦地を走るよりもっと効率良く運動効果が得られないかと考えて、テトラポットの上を走ることにした。こうすると時間が三分の一で、効果は同じように得られる。

走りながらいつも考えることがある。テトラポットの凸凹の上を走ることのできる機械をつくるというのは、不可能に近いのではないかと。それはキャタピラーのような機械なら不可能ではないかもしれないが、二本足で上手にバランスを取りながら走る機械ができたら、すばらしいと考える。訓練すればそのような優秀な道具になるのが手や指だと思う。体の一部を使うなどという馬鹿にしがちであるが、訓練次第では機械に負けない立派な治療器具になる。

最終的にM子さんは、自宅治療しながら月に一回ほど通って来られたが、「耳も良く聞こえるようになりましたし、疲れもほとんど感じません」と、その喜びを語ってくれた。そこで私はもう一度ご指導申し上げた。

「家庭の主婦もおられるし、学校の先生もおられる。二役もこなしていらっしゃるんです。家庭の主婦というのは、家族より早く起きてご飯の支度をしなければならぬし、夜は夜で後片づけまでしなければなりません。それに掃除、洗濯、買い物と休む暇もありません。

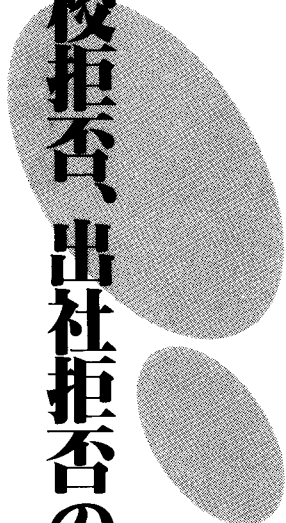
あなたのように勤めを持った人は、昼間の休憩時間もありません。そこでも目一杯働いている。そこをよく考えてくださいよ。そのうえ世話好きで、町内会の役員も引き受けて一生懸命やっている。これでは人の三倍も働いていることになります。そういうことはお止めください。忙しい生活からできるだけ方向転換するようにすれば、こうした病気は発生しにくいんです」

M子さんも「なるほど、そういえばやりすぎですね。役員も他の人に譲り、家事も便利な調理器具を入れて体を休めるようにします」と、これまでの生活を修正することを約束された。M子さんは今でも定期的に通って来られるが、大好きな子供たちとの接触で一層笑顔が輝きを増している。

---

## 第二章

# 登校拒否、出社拒否の背景と原因



## 夫婦の軋轢あつれきが子供に向けられて

「登校拒否」というと、一般的には「登校不能」と「登校拒否」を引っくりかえりて使われているが、これははっきりと区別しなければならない。

「登校拒否」とは、自分の意思によって学校へ行くことを拒否することであり、「登校不能」とは、学校へ行く意思があっても体が動かない病気を指しているのである。その違いを混同させてはならない。しかし、「登校拒否」という言葉が社会に定着し、認知されていることからあえて「登校拒否」という言葉を使用しているが、内容は「登校不能」を指していることをお断りしておきたい。

この登校拒否の原因を探してみると、親に起因する場合がほとんどであるが、ときとして、子供に直接起因することがある。子供に起因するケースはごく少数だが、その辺から見えていくことにしよう。



### ※ 子供に起因する場合

まずB君の場合、三人兄弟の真ん中と仮定しよう。両親はごくごく普通の人間で、A、B、Cの兄弟三人への接し方も普通で、どこと違って変わったところはない。

三人兄弟の性格や素質だが、いくら同じ両親から生まれたといっても同じではない。なぜなら、子供の遺伝子は両親の遺伝子を半々に受け継いでいるというわけではないからである。

何代も前の親のそのまた親、その親戚、あるいはずっとはるか百年も前の血筋の人たちの遺伝子が混じり合って生まれてくる。ただ、直接自分を生んでくれた親の遺伝子を持つ割合は多いはずである。

性格や素質というとすぐに両親の遺伝と考えがちであるが、今述べたように、遺伝といっても何代にも遡った遺伝子を受け継ぎ、その割合も違ってくれば、兄弟の持っている性格や素質も一律ではない。こうした遺伝子の構成の違いが、子供に起因する登校拒否が少ない要因である。遺伝子の構成がまったく同じならば、兄弟の一人が登校不能を起せば他の兄弟もそうなる。不思議ではないからである。

なかには両親にはほとんど似ていないが、従姉妹に似ている子供とか、曾祖父や曾祖母に似ている子供が結構いる。これは先祖を遡った遺伝子を受け継いでいるということを表づけている。このB君の場合、親はA、B、Cの三人にほとんど同じように接し、話し方、可愛がり友ものの買いとえ方など、ほとんど平等にしていた。

両親はともに活発な性格でA君、C君は両親の気質を受け継いだ活発な性格である。しかし、B君だけは曾祖母に似て無口で非常におとなしく、感じやすく、傷つきやすい繊細な感覚を持っていた。両親はあくまで同じように三人に接する。しかし、同じことをいっても、A君、C君にとってはごく普通のいい方にしか聞こえないが、B君にだけは親の言葉が強すぎることもある。ここがなかなか難しい。これは学校の教師が生徒に接するときの態度と似ている。同じ小学校に入学してきた子供でも、性格は様々である。しかし、教師の接し方はまるで同じである。

例えば、一クラス三十人子供がいたら、教師は一人一人心がけて接することはあっても、その子供だけに合うような接し方をするとは不可能である。従って、平均的な方法に多少個人差を考えた話し方をしたり、勉強の教え方を変えたりする。それが通常限度である。親もこれと同じようなもので、繊細な子供とかおとなしい子供だと分かっているが、その子にだけ特別

な接し方をするのではない。

それに対して、受け取る子供の方の反応は違う。同じように叱られても反発する気持ちにならない子もいれば、ちょっとした強い言葉に怯<sup>おび</sup>える子、猛烈に反発する子など、個体の反応に問題が生じてくる。しかも、その子が非常に特殊な感情や性格を持っていた場合には、心の病気や自律神経失調症を発症させて、登校拒否を生じることがある。

これまで登校拒否で困り果てた親御さんに連れられて私のところへおいでになった多くの子供さんを診てきて、分析的に考えるとこのような答えが出てくる。こうした原因を親御さんにお話するときはずでに登校拒否を起こした後で、「そうでしたか…」と言う過去形の言葉でしか語れない。ここに教育の難しさがある。

例えば、田んぼに苗を植えて刈り取るまでに半年かかる。農作物の収穫は六ヵ月から長くて一年、果樹の栽培などは五年くらいかかる。人間の場合、幼児から親や周囲の人間がその子に合わない間違った教育をしたとしたら、結果が出るのは十七年、十八年かかった頃で、多くは二十歳を過ぎた頃にちょっと変わった人間ができてしまう。

こうしたことは映画の『ブラックレイン』に登場する日本人のやくざの親分が嘆くセリフにもある。この映画を見た人や年配者は、現在の青年達が昔の青年達と異なることに驚きを覚え、

また残念がるかもしれない。こうした教育の誤りは、ほとんどの場合は親が原因である。

つまり、子供は植木鉢に植えられた苗木と同じで、管理する人間が植木鉢をどこに置くのか、水は多くやるのか少なくてやるのか、肥料はどの程度やるのかを決めてしまう。苗木は自分からは何も要求できない。なされるがままである。子供もまったくこれと同じで、苗木がしおれるのか、枯れるのか、伸び伸びと育つのか、あるいは形よく育つのか、逆に伸び過ぎて手に負えないようなでたらめな枝を出してはびこるのか、それは管理する人間の問題であって、苗木の問題ではない。子供が社会に出て、一人立ちするとき、どんな大人になるかは育てる親の問題である。

### ※ 親に起因する場合

親に登校拒否の直接の原因があるとき、その原因について親はほとんど気がつかないことが多い。つまり、人間は自分が正しいと思っているし、またそう思わなければ自信をなくして生きていけないからである。客観的立場は別として、自分がやっていることが一番良いと大部分の人が思っている。そのとき、独善的な言動をとったり、押しつけがましかったり、かと思えば

まったく無関心でかまわなかったりでは、子供に不満を残すことになる。従って、過保護、過干渉、過期待といった過剰な対応はもちろんのこと、無関心、放任、あるいは子供に挫折感を持たせるような環境（離婚や浮気等）も、親と子供の信頼関係を損ねることになる。そうした不満に耐えるだけのけじめや、厳しさがなかったら、親が登校拒否の原因をつくり出していることになる。そうした不満はどんな形で現れてくるかといえ、まず弱い立場にある人間が、強い立場の人間に対して反発する。その反発の仕方もおよそ想像がつくと思う。サラリーマンなら気に入らない上司に対してどんな行動を取るか。また、嫁は面白くない舅、姑といった強い立場の人間と同居しているとき、どういう行動を取るか。子供もまた、面白くない親に対して反抗するときどうした行動を取るかである。

まず、最初は明らかに反発していると分からない程度の反発が始まりである。何かいわれなくても返事をしない、曖昧な返事をする、聞こえないふりをするといった消極的な行動である。次の段階でも積極的な行動はしないが、できるだけ何もやらないようにする。さらに次の段階ではものを食べないという行動に出る。ステップを追ってみると、子供は返事をしない、行動しない、食べないという態度を見せる。こうなると学校へ行く時間になると、登校拒否という一見消極的に見えるようだが積極的な行動に出る。

では、大人である親がなぜ原因をつくっているのか。それは大きく分けて夫婦の場合、まず性生活の不一致がほとんどである。「性」の文字は、左側は「心」の変型である立心偏で、右側に「生きる」という字を書いて造られている。くどいようだが、左側の立心偏はもともとが「心」という文字で、右側の「生きる」という文字が合体してつくられた文字である。従って「心で生きる」のが性である。つまり、性生活とは「心で生きる生活」のことであって、日本人が興味本位に解釈しているセックスとはおよそかけ離れた意味を持っている言葉である。セックスという言葉には、交尾と同じような無味乾燥な、潤いうるおのない作業としての男女の肉体的交わりを指す嫌らしい響きがある。しかし、性生活のない生活とは、心がない生活ということ、猫や犬と同じように家の中で食べ、排泄し、眠るだけの生活に等しい。(日本人の正しい性生活と悩み治療を参照)

この心のない生活をもたらすものは、潤いや人間味のない、殺伐とした人間関係である。夫婦関係では男と女、家族関係では父親と母親の間に心の亀裂が生じ、何となくイライラして、持って行き場のない不満となって鬱積うっせきしてくる。こうした不安定な精神状態ではちょっとしたきっかけで不満が噴き出してしまう。ちょうど圧力釜やボイラーと同じように、内部に一定の圧力がかかると、必ず一気に噴き出したり爆発したりする。そうならないように、ある圧力が

かかると自動的にバネの力を押上て蒸気が抜けるように安全弁がついている。

人間も心の中の鬱憤を定期的に抜く安全弁を持たなくてはならない。それには手っ取り早く、しかも非常に有効な手段となるのが性生活なのである。しかし、これだけでは完全な安全弁にはならない。人によっては高速道路を吹っ飛ばすことで気分爽快になったり、徹夜麻雀で体力を消耗させる、ジョギングで汗を流すなど、自分に合った方法で気晴らしをしている。さらには無茶食い、大酒を飲む、衝動買いと、その方法はさまざまである。しかし、人によってはこうした快楽や娯楽を悪と感ずてしまう人もいる。真面目で遊び心のない人間は、快楽や娯楽を許しがたい不謹慎なことで決めてつけて、自分はそうしたものは一切関わろうとしない。そうになると、溜まりに溜まった鬱憤は身近な弱いものに対して牙を剥くことになる。

親は子供に対して実に都合のいい口実がある。それは嫉であり教育である。つまり嫉や教育を隠れ蓑にした大儀名文のもとに、自分の鬱憤を晴らすのである。有無をいわせず子供を叱り飛ばしたり、際限のない小言で八つ当たりしたりして溜飲を下げる。本来的には夫と妻の間に向けられるべき鬱憤が、弱い子供に向けられる結果になる。これでは子供が親に対して反発するのも無理からぬことである。こうしたパターンによって登校拒否の原因がつけられていく場合が九九%にも及んでいる。

縦社会の中でもとくに上下関係のはっきりした社会で、本音より建前が重視される仕事をしている親を持った子供は、心の病気になるやすい傾向にある。相談に見える方の七〇%が公務員の子供さんである。教師、警察官、さらに職業を隠して曖昧あいまいに答えるのが弁護士とか大学教授などである。いくら隠しても大体は勘で分かるものである。その他には地方公共団体やその外郭団体に勤める親を持った子供たちも時々訪ねてくる。

ほとんど見られないのが上場企業に勤める親を持った子供たちである。職場の健康管理が精神面にまで行き届いているからだろう。

そういう点では、公務員の職場は権威主義的であり、その中では締めつけもきついだろうことは容易に想像がつく。悪い噂があつては出世に関わるし、家庭不和も出世の妨げになる。家庭内離婚をしても同居を強要されたり、性生活のない無味乾燥な生活でも、気軽にストレス発散とはいかないのだろう。こうした夫婦の軋轢の中で、心の病をわずらった登校拒否の子供たちが生み出されてくるのである。



## 「特殊人」の躰と教育

※ ピーターパン症候群をつくる躰（西洋の童話ピーターパンは大人にならない）

脳の表面は皮質と呼ばれているが、ここには神経の細胞がたくさん集まっている。この大脳皮質は自律神経の反射的運動を押さえ込む役割を果たしている。脱糞放尿したいと思っても、その場でする人はない。トイレまで我慢する。これは自律神経の反射運動を大脳皮質が押さえ込んでいる現象で、これを人は「我慢している」という。

私が前に出版した『日本人の正しい性生活と悩み治療』の中で、動物の本能的欲求は四大欲求であるが、人間の本能的欲求は、六大欲求であることを述べた。

六大欲求とは、動物と同様の食欲、睡眠、生殖、排泄の四大欲求の他に、他人と話したいという欲求と性欲がそれにプラスされる。四大欲求は自律神経の反射が起こす欲求であるが、他

人と話したいという欲求と性欲は大脳皮質の欲求である。間違っではいけないのは性欲で、生殖欲（発情）とはまるで違う。詳しくは前述の本に記述した。

簡単に述べると、交尾は自律神経の反射的行動であつて、発情期になると、鼠でも兎でも、雌の形の似た道具に雌の匂いをつけておけば雄はそこで交尾行動をとる。つまり、雌の匂いに反応する反射行動を行うのである。しかし、人間の性欲は大脳皮質で行うもので、演出に反応する面が強く動物のような反射運動ではない。だからこそ、前述したように性生活は「心の生活」なのである。大脳皮質で行うもう一つの欲求である人と話したいという欲求も同様である。その大脳皮質の欲求を十分に満足させなければ、皮質は正常に働かない。

つまり、人間が人間らしい行動をとるということは、大脳皮質がバランスのとれた平静さを保ち、常にレベルアップを目指した前向きの行動にあるということである。そうした状態が健全な状態である。逆に不健全な状態とは、大脳皮質がアンバランスになって、精神生活のレベルダウンが起こり、昔のことばかり考えたり、人のいやがることをしたり、やる気をなくして気分が落ち込んだりといった後ろ向きの状態を指している。

面白いことに、大脳皮質の神経は直接生殖器の神経につながっている。大脳皮質から遙かに遠い生殖器に関係する部分の神経を刺激することで、大脳皮質は活性化されてくる。

こうしたことから、思春期以降の性ホルモンが正常に分泌される成熟した男女には、定期的な大脳皮質への刺激が必要になる。それが正しい性生活であり、ストレス発散のための憂さ晴らしである。大脳皮質の刺激が上手に行われなければ、精神生活全般が狂い、体調まで崩してしまうのである。

大脳皮質はそれ自身で周囲の環境に適応し、コントロールする力を持っている。状況判断をしながら行動や話し方を変えることもできる。こうした適応がスムーズにいくかどうか、それが大脳皮質のストレスの有無が関係してくるのである。つまり、正しい性生活ができていないとストレスが溜まって正しい判断ができないということである。従って、その人の体質に合った性生活が行われなくて、過剰だったり不足だったり、一方が満足しても一方に不満を残したりすることが、心の病気の大きな原因の一つになるのである。

最近性は性的解放的考え方も進み、性に関する情報も多数家庭に入るようになった。しかし、若者たちには抵抗なく受け入れられている性の情報も、まだまだ年代や育った環境によっては性を隠すものと考え、性情報の氾濫を苦々しく思っている人も多いことだろう。夫婦間の性の快楽が閉鎖的であったり、快楽を悪と見るようでは、二人の間はほとんどうまくいかない。

こうして見ると、長いこと培われてきた日本人の道徳観念は、一朝一夕では拭い去るところは

できないものである。時代が変わって自由社会、男女平等が謳われ、経済的にも世界に肩を並べるまでになった日本だが、個人の精神世界はまだまだ「我慢」という昔からの道徳、倫理に支配され、自由になりきっていないのである。

日本のように儒教、仏教が支配者による国民統治に使われてきた国では、いまだに道徳、倫理が重視され、「我慢」が美德という精神世界が残っている。今日では世界の窓が開かれ、文明文化はもちろんのこと、経済も地球規模で連動している時代である。日本が経済的發展を上げることができたのは、日本人の勤勉さや平均的資質といった国民性もあるだろうが、島国でほとんど単一民族という条件も幸いした。

しかし、いまだに労働とは額に汗して働くものだとう観念から、ものを右から左に動かして利益を得る流通や、お金やものを貸して利益を得るサービス業など、一部の職種に偏見が残っていることも事実である。

こうした偏見が家庭内でも対立を起こしている。子供たちを取り巻く環境はヨーロッパ的なものの考え方をしているが、子供たちを支配し、教育をしている親は昔の倫理、道徳で対処しようとする。そこに世代間のギャップが生じてくる。

また、横並びの発想も日本人の悪い癖である。「お隣りが…したから家でも」という右へな

らしい競争意識がある。自分の家で本当に必要かどうかを考えもせず、子供ににせがまれば簡単なものを与えてしまう。また、子供が出入りする必要のない場所にも子供同伴で出入りする親もいる。高級寿司店でトロを食べる子、フランス料理店でフルコースを食べる子、ブティックで洋服を選ぶ子、美容院で髪をカットする子、果ては酒場やパチンコ店に出入りする子など、首を傾げたくなくなるような風景が見られる。これでは大人にならなければ味わえない楽しみを、子供のときに全部知ってしまう。この子達たち大人になっても何の楽しみもないだろうし、大人になる必要もないだろう。

若い人たちに見られるピーターパン症候群は少年少女のままでもいい、大人になりたくないという病的症状だが、これではもっともなことである。過保護な親のもとでは、子供の独立心も育たず、親離れできない子になっても致し方ない。

子供は子供でなければできない遊びや勉強を十分味わい、一つ一つ卒業して大人に世界に足を踏み入れてこそ大人の楽しみも十分に楽しめるのである。それがなければ、早く大人になって大人の楽しみを味わってやろうなどは考えないだろう。親は子供の楽しみを残しておいてやろうという考え方で子供を導いていく必要がある。

五十代、六十代の人たちなら経験があると思うのだが、長髪が許されたのは高校を卒業する

直前で、進学コースは丸刈りであった。さらに小学校時代は半ズボンで、長ズボンを履くのは大人というように、ある意味では子供の世界と大人の世界がはっきりと区別されていた。その敷居が取り払われて、今では自由である。

こうした社会的風潮は自由だが、そうした精神を家庭内にうまく取り入れて管理することは可能である。

私の家では、子供たちは小学校一年生になったら机が買ってもらえる、四年生になったらタンスが買ってもらえる、中学になったら毎月決まったお小使いが貰えると、そのときを楽しみにしている。小学校に上がるまではタンスの引き出し一つを与え、自分のものを入れて自分で管理するようにしている。子供たちは早く大きくなって机やタンスを買ってもらいたい一心で、楽しみに待つようになる。こうした楽しみを一挙に与えてしまったら、欲しいものは何も残らないだろう。親が貧乏であるか金持ちであるかなど、子供には関係ないことである。あまりにも自由な世界にいる人は自由であることの本当の喜びを知らないものだ。

## ※ 「特殊人」がつくる登校拒否

次に登校拒否をつくる親のタイプを表にまとめてみた。私はこれを「特殊人」と呼んでいる。こうした人たちは特別変わった顔をしているわけでも、特別目立った行動をとるわけでもない。ただ、ちょっと変わったタイプであることは確かだ。従って、日常生活の中ではなかなか見つけにくいのだが、身の周りにいるものだ。自分の伴侶であるかもしれないし、お隣に住んでいるかもしれない、それどころか自分自身がそうかもしれないのである。

人間は多くの可能性と能力を持って生まれてくる。その可能性や能力を生かすも殺すも親の指導次第である。「子供は親の背を見て育つ」というが、日常生活の中では親の行動やもの見方、考え方、喜怒哀楽の感情やその表現など、子供は知らず知らず身につけ、学んでいくものである。従って「子供は親の鏡」で、子供を見れば親の人間性も透けて見えてくる。この時期に親が精神的に不安定で子供の手本となれない場合は、子供は可能性や能力を学ぶ機会を失って、人格的な歪みが見られるようになる。

私が「特殊人」と呼ぶ人たちは、一般的に協調行動が苦手である。家族、友人で何かしよう

と相談がまとまっても、常に傍観者である。まったく協調性がなくて、自分なりの勝手な行動をとる傾向がある。さらに生活のリズムが普通ではない。時間の観念が欠落しているので、昼間の活動は緩慢だが、夜になると活動的で夜更かしも平気な夜型人間である。予定を立てて行動することが苦手で、せっぱつまらなければ何ごともやらない。あわてて失敗することは珍しくない。こうした行動パターンはやはり社会生活をする上では普通とはいえない。良い言葉でいえば個性的だが、悪い言葉でいえば変人、つまり特殊な人である。

こうした「特殊人」が社会人にどんな影響を与えるかといえば、例えば、「特殊人」はガラス瓶に入ったママシのような存在だと思う。ママシは瓶の中にいるので人間に危害を加えることはない。にもかかわらず、それがいつも身近かにあるというだけで食欲が減退したり、気分が冴えないといった体に変調を起こさせる。

「特殊人」とはこのママシ的存在で、何もしなくても周囲の人に悪い影響を与え、自律神経を狂わせてくるのである。こうした「特殊人」を親に持った子供が自律神経失調症を起こしたり、心の病気を発症させても不思議ではない。遺伝的素因としては子供も遺伝子を持って生まれてくるが、たとえ遺伝子を持っていたにしても、子供の可能性や能力を上手に導くことによって解消されていく。



「特殊人」のもう一つの特徴は自分本位で、相手の気持ちを分かってほしいことである。口うるさくて、常にイライラと苛立<sup>いらだ</sup>っている。そうかと思うと、自分に直接関係ないことは無関心で、たとえ子供のことであっても関心を示そうとしない。程度の差はあるが、親の義務を放棄してしまっているのである。

他に登校拒否の原因となるのは、親がうつ病、分裂病といった神経系の病気を患っている場合である。症状が重ければ周囲も対処の仕方があるが、症状が軽いうちは病気が発見されなくて、子供を精神的に追い込んでいくことになる。こうした親の病気が早期に発見できれば、隔離して上手に育てていくという方法もある。

また、人間には相性というものがある。いくら親子であっても、遺伝子は両親のみならず、何代もさかのぼった遺伝子を受け継いで生まれたものである。だから、親子であれば必ず相性が良いとは限らない。そればかりか、年齢差によるギャップで考え方も違うのが当然だし、教育する側とされる側では立場も違う。相性が悪くて当然である。逆にいえば、その相性の悪さが子供に独立心を植えつけさせるきっかけにもなる。

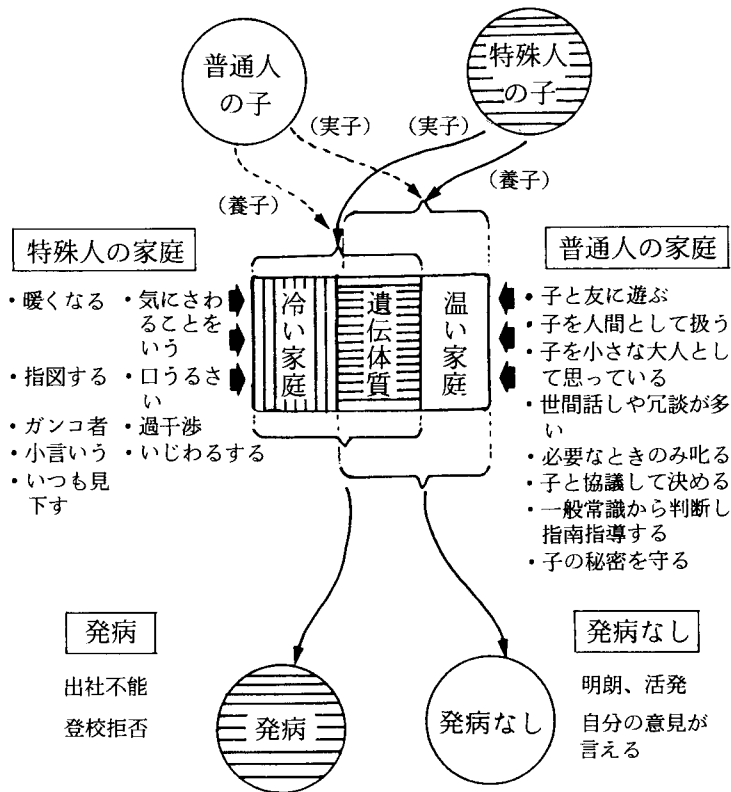
しかし、これも程度問題で、あまり相性が悪いと親子の情愛がまったく育たない。親が「特殊人」の場合は幼児から相性の悪さがはっきりと現れてくる。よく問題になる幼児虐待がそれ

である。ほとんどの場合「特殊人」は自分の異常を認識していない。それどころか、異常なのは周囲の人間だと思い込んでいるので、いくらいってもまったく聞く耳を持たない。そのために、自分の感情のままを弱い幼児に向けたり、伴侶に向けてくる。そうなると周囲の人間が心の病気になったり自律神経失調症を起こしてしまうのである。

# 登校拒否の発生

病気遺伝素因なし

病気遺伝素因あり



- 遺伝素因なくても特殊人の家庭で育てられると発病
- 遺伝素因あっても普通人の家庭では健康となる

## 「特殊人」とは

これまでは肉体的な疾患が原因だと思われてきた病気の中に、実は精神的ストレスが主要な原因だと考えられる病気が多数ある。さらにまた、肉体的な病気にしても、その多くが精神的要因で自律神経が狂わされ、病気を誘発していることも分かってきた。肉体的な病気といっても、心の問題がからまないことはないものである。従って、現代では「病気」を治すと同時に「病人」も治さなければ病気は完治したことにはならない。

なかでも、心の病気は自律神経を狂わされた大脳の病気ともいえるが、大脳に障害があるわけではない。肉体的な症状が出てくるものの、肉体的な病気とは根本的な違いがある。心の病気は目に見えてこないのである。しかし、社会生活に対応できない心の病気を持った「特殊人」は、確実に周囲の親しい人間を侵食し、新たな「特殊人」を増産しているのである。

こうした「特殊人」というとすぐに遺伝を考えがちだが、純粋な遺伝はそう多くはない。それよりもあなたが毎日顔を会わせている隣人かもしれないし、あなたの夫や妻かもしれない。あるいはあなた自身かもしれないのである。ストレス社会では誰が「特殊人」なってもおかし

くない。そうした心の病を持つ「特殊人」を私なりにまとめてみた。

### ※ 全般的特性

- 1、幼少の頃から変わったところが目立つ。
- 2、動物的本能部分の行動に異常がある（性欲、食欲、排泄、睡眠）。
- 3、感情や人格的発育に異常が見られる（言葉、喜怒哀楽）。
- 4、自己抑制がきかないので、好きなことは人一倍やるが、嫌いなこと、面倒なことは一切やらない。
- 5、妥協性、協調性に欠ける。
- 6、学校、社会、家庭、友人との約束や規則が守れない。他人への思いやりや周囲への配慮ができない。
- 7、「くしてくれない」と不平、不満を周囲に人のせいにする。自分の行動が非難されていても素直に謝ることができず、自分を正当化する点では抜群の能力を発揮するために、未成年者の場合は相当ワルに見える。
- 8、自分は正常だと思っているので、常識とかけ離れた意見や行動も悪びれることなく堂々と

している。

9、浪費、夜遊び、語り、盗み、暴力沙汰などが日常茶飯事で、激昂すると放火、殺人など刑事事件に発展する。

このように、一口に「特殊人」といっても、A、人とのコミュニケーションがとれないで悩むタイプ、B、人の嫌がることを平気でいったりして周囲を悩ますタイプ、C、緊張による精神の異常高揚などで体調を崩して悩むタイプなどいろいろである。しかし、単独の症状が現れるということはなく、複合し、混在しているのが普通である。

### \* 特殊人のタイプ

▼ ゆううつ型（うつタイプ）

気分がふさいで気力が減退する。猜疑心が強くて自己中心的。気むずかしく、不機嫌で、不満ばかり口にする。症状が軽い場合は収まれば元の人格に戻るし、正常な人の気分の落ち込み程度で病的とはいえないように見える。しかし、症状が重くなると生きる気力に乏しくなり、人生がつまらなく感じられる。ハイハイと気軽に人に従わない。必ず何か不満を言いつつやる。

付き合っても面白くない。事務、経理向き。

▼そう型（軽薄陽気）

気分爽快で良く動き、良く喋る。しかし、首尾一貫した行動がとれないし、物事を楽天的に考え、理想や空想に走りやすいのでトラブルが絶えない。ゆううつタイプと裏表一体をなして、症状は不規則に交代して起こる。営業、外交に向く。

▼狂信型

物事の見方が独善的で、自分の信じる正義や信条を実現するために周囲を支配しようとする（ヒットラー）。安定を好まず、常に闘争態勢に自分を置き、革命闘争にのめり込んだりする。生まれ変わりを主張したり、予言者になったりと、オカルト的な部分もある。些細なことでも筋を通そうとする傾向があって訴訟好き。善きリーダーなら人々を幸せにし逆は不幸にする。

▼自信喪失型

やることなすことに自信が持てなくて、やる前から失敗したときのことを考え、その責任が全て自分にあると思ひ込んでしまう。恋愛についてはとくに厳格で、筋の通らない恋愛を自分に許さない。自信のなさから予防策に必死で、過度の親切心を出してみたりする。また、自分でもばかばかしいと思っても不安が首をもたげてくると、すぐ確認しないと不安でいてもたっ

てもいられなくなる（強迫神経症）。自殺に注意。

▼無気力型

感情が過敏になって、不安や憂うつにとりつかれた状態である。自分の健康や能力を過少評価していて、ちょっとした風邪や失敗が引きがねになって体調を崩してしまう。頭が働かないし、行動ものろい。友人をつくれなこともあって孤独感が強い。文学者型。

▼ヒステリー見栄っ張り型

常に人に良く見られたいという欲求を持っていて、自尊心を傷つけられたときに身体的症状が出る。子供っぽくて現実性に乏しく、人格は未熟。目立ちたがり屋で積極的に行動するが、いつも直感で判断して失敗。自慢話が多く、嘘も平気でつく。虚栄心を満足させるために平気で他人を利用したり、詐欺、万引きなどに走ることもある。経営者もどきサギ師に多い。

▼激噴型

別称「瞬間湯沸かし器」といわれるタイプ。普段は普通の人と変わらず平静だが、突然、興奮して人が変わったような過激な行動に出る。自分で自分を抑さえられない激情家で、子供っぽい。癇癪かんしゃくを起こす原因は、当人の人生観によって異なる。職人に多い。

▼意思薄弱型



意思が弱くて、人に何かいわれるといいなりになってしまう。本来は従順でお人良し、いやといえないタイプなので、悪い仲間に入ると仲間につられて反社会的な行動に出やすいが、良い仲間恵まれば善良な人間である。他人にそのかさやすいし、決心も長続きしないので、周囲は翻弄<sup>ほんろう</sup>され、本人は信用を失う。一人では精神的に不安定なので、適切なアドバイザーが必要である。人の面倒は見れない。相手に自分の行動が変わる。人は騙すものと思いやすい。

▼冷血無情型

人間的感情が薄い、あるいはまったく異常人格である。愛情、感謝、恥じ、道徳といった感情がマヒしている。冷酷、陰険、不平、不満で誰にでも反抗する。また、動物に対しても残虐である。このタイプを親に持つ子はほとんどが情緒障害を起こす。教員、公務員に多い。部下の成績を自分の手柄とする。学科合格面接不合格タイプ。

▼移り気型

感情を自分でコントロールできない極端なお天気屋のタイプである。気分が良いときは人におごったり、大言壮語するなど浮かれるが、そうかと思うと不機嫌に黙りこくったりする。自称親分タイプ。

## 「特殊人」をつくる不満の構造

人間には欲望がある。欲望は際限がなくて、一つの欲望が満たされれば、さらに新たな欲望が頭をもたげてくる。しかし、欲望が満たされるのは欲望のなかでもほんのささいな部分にし過ぎない。欲望の大部分は満たされないまま欲望と表裏一体を成す不満をかこっているのが現実である。従って、人間は常に人それぞれ不満を持って生きているといってもいい。しかし、不満はマイナス面ばかりではない。不満を欲望のエネルギーに変えて向上していくステップともなるからである。家を建て替えるのも、橋を架け替えるのも不満があるからである。だから不満を持つということは非常に大切なことで、社会の発展も不満なくしては語れない。

不満の対象は何もこうした目に見えるものだけではない。人間は行政、司法、立法の三権を始め、数々の社会制度や組織をつくって自由、平等、博愛の実現に一步でも近づこうとしてきたが、それでも不満が生じ、より良くしたいという欲求から改正案が提出されている。

もっと身近に目を向ければ、家庭内の人間関係にも不満は多いし、住宅、洋服、食べ物など、数え上げたらきりが無い。しかし、人間は不満があっても、とりあえず衣食住が確保されれば

与えられたもので満足する。自分の給料、親から買ってもらった洋服と、いろいろ不満はあっても、それはそれとして現状の生活で満足し、楽しむことができる。しかし、その生活に飽きるとより良い生活への欲求が生まれ、次なる努力をしようとする。この現状に満足していたら世の中の発展はないし、向上心もない。

### ※ 不満は社会の原動力

地球上を見てみると、極寒地に住む人間は寒さへの不満と何とか暖かくしたいという欲求から数々の創意工夫を重ねて独特の文化をつくりあげてきた。それに比較して、温暖地に住む人間は自然の恵み豊かで衣食住にも困らず、創意工夫しなくても特別な不満を感じなくても生活できるため、今でも原始のままのような生き方をしている少数民族すらいる。世界経済を見ても、寒冷地に住む民族が温暖な地に住む民族を支配している構造が浮かんてくる。南北問題とは、まさにこうした支配態勢のことである。

このように、現状への不満が新たな欲求をつくり出す様子を見てきたが、では、「特殊人」の場合は不満が、どんな形をとっていくのだろうか。一般には不満が欲求という前向きな姿勢を

とるわけだが、「特殊人」は不満を他人に向けていくところに特徴がある。他人を傷つけたり、あるいは内にこもって他人との接触をさけるようになる。少し前に「くれない族」という言葉が流行ったが、「くしてくれない」というように、自分からは相手に関わろうとする姿勢がまったくないのに、相手が自分に「くしてくれない」と不平不満をもらすのである。

### ※ 生れつきの不満

不満はどこから生まれるのか、不満の生じる原因を見てみると、まず生まれた環境があげられる。サラリーマンの家に生まれたか、資産家の家に生まれたかによって、その人の環境から人生までも変えてしまう。資産家の子供がサラリーマンの子供の仲間に入ったとしても、あるいは逆にサラリーマンの子供が資産家の子供の仲間に入ったとしても、気持ちがいっしょにいかなくて、ズレを感じるだろう。そのズレが不満をつくり出すのである。

また、生まれつきの不満としては性別や体格の差などがある。生まれてくる子供は性別を選べないし、大柄か小柄かという選択もできない。顔形は千差万別で、丸顔や長い顔、角張った顔などがあり、色が黒いか白いか、果てまた髪の毛の色まで一人一人違いがある。それが平均

的なものからずれたとき、不満が生じ、何か差別的な考え方を持つようになったりする。

次に体の特徴を話すと、角張った骨格の人や角張った頭蓋骨の形をしている人は理屈っぽい脳の働きをするのが特徴である。また、小柄な人というのはチヨコマカと動いて、大局的な見方や、腰を据えて根本からじっくり見据えることが出来にくい脳の働きをする。さらに性ホルモンの働きによって、女性なら丸みを帯びた体つきになり、羞恥心がブレーキをかけて控目な行動をとらせる。一方、男性は筋骨逞しい体つきになり、開拓魂で考えるより先に行動を起こしてしまう。

こうした性差が職場においてどのような影響を及ぼすのか。現代では工事現場にも女性が進出し、看護婦や保母の世界にも看護師や保父が進出している。男女の職場は接近し、交錯してきている。従って、これまでのように男性は男性の職場、女性は女性の職場といった区別ではなく、性格に合った職場の選択をしないと、ズレや不満を生じてくる。

皮膚の色も差別や不満をつくり出す原因になる。白人優位の差別化があるように、肌の色によって、知らないうちに考え方や行動が規制されていることもある。

自我の目覚めは十二歳前後である。しかし、十二歳前後という暦の上での年齢は均一であっても、脳の発育程度には非常なばらつきがある。知能が他の人より抜きん出ている場合には、

周りとのズレを生じてしまう。この点、国よっては能力に応じて進級させる「飛び級」という制度がある。こうした制度は以前日本にもあったが、競争意識を打破するという考え方から排除された。そのために、能力のある子供は授業がつまらないし、能力のない子供は授業についていけなく不満がある。

### ＊年齢による不満

最近は一子が多いのであまり問題にならないが、例えば二人兄弟がいたとする。上の子が生まれたときは父親の仕事も順調にいき、経済的にも恵まれていたが、五、六年して下の子が生まれたとき、仕事に失敗して貧困のどん底にあったとする。当然その二人の子供の生育環境は極端に変化し、性格形成上の違いも出てくる。

さらに、人間は年を取ると共に脳細胞が円熟して男性ホルモンの分泌が少なくなる。また、肝臓の機能も低下して、女性ホルモンの分解機能が低下する。すると、男っぽい考え方や行動は丸みを帯びて女性っぽくなる。とくに六十歳以上になるとその傾向が著しく、我が子よりも孫が可愛いという意識がそれである。しかし、こうした年齢による意識の変化も、他人と違っ

たりすると不満が生じたりする。

### ※ 職業による不満

職業的にはその業界がもつ独特の雰囲気というものがある。その職業を選択した人たちが持つ性格がつくり出すものだが、その業界に合わない人は脱落していくので、本来もっている雰囲気はますます助長され、偏っていくことになる。

例えば民間企業の社員と公務員を分けた場合、民間企業は自由競争を基本とした資本主義的活動をする。人、もの、金の世界である。しかし、公務員は予算を基本とした社会主義的活動をする。階級や権力がより強く働く保守的な世界である。

民間企業の社員と公務員が結婚して子供が生まれる。生まれた当時はどちらの性格にもまだ組みしていないが、育児、躾、教育期間を経て、次第に持って生まれた性格と教育の成果によって性格が形づくられていく。そのとき、両親の両極端なものの考え方が子供に影響すると、うまくいかなくなる。

公務員と一口にいても、一般的な行政に携わる公務員と教職員、警察官などとは性格が違っ

てくる。職業に就いた途端に権限や権力を行使できるのは教員や警察官である。民間にあっては入社した途端に権限や権力を与えられることはない。長い年月をかけて協調性を養われ、技術や商売のコツを習得して徐々に人間性も鍛えられていく。そうした大きな違いがある。

他にも製造業と販売業の違いがある。製造業はそのものズバリでものをつくり出す職業である。消費者の欲しがるものをつくらせている場合は強い。しかし、製造業者が消費者に直接販売するわけではないので、消費者との橋渡し役が販売業である。

二つの職業の間には決定的な違いがある。製造業の中でも第一次産業にたずさわる農業や林業に従事する人は自然が相手だけに、仕事中は話をすることを必要としない。しかし、第三次産業の販売業やサービス業は言葉を仲介にしなければ商売にはならない。もともと話をするのが好きな人もいるだろうし、手足を動かしている仕事が好きなのもある。持っとうまれた特質が職種が分かれることによって、さらに拡大助長されるのである。

こうした傾向は職種をさらに細かく分けることによって、大きく違ってくるはずである。同じ商人といっても問屋と小売によって違うだろうし、八百屋、魚屋、肉屋、飲食店、酒販店、風俗営業、興行など、その業界独特の雰囲気があるものである。

同じサービス業でも、専門知識を持った医師、弁護士、会計士、税理士などは消費者に専門



知識を提供している。消費者は病気になれば医師を、法律問題が起これば弁護士をというように、必要なときに必要なサービスを提供してもらおうのである。

ただ、こうした人たちはサービス業であることを忘れがちなのは問題である。その分野に限れば専門知識を勉強してきただけに博識であるのは当然のことである。また、サービスを依頼する人間は困難に直面しているので、それを解決してくれる専門家を丁重に扱う。それを社会的評価と勘違いして、消費者の上に立つ優位な人間だと錯覚してしまう。本人がそうなら、家族も「虎の威を借る狐」で、実態のない評価を自分に与えてしまいがちである。

## ※ 国内の南北問題

土地柄というものがある。その土地の気候や風土がつくり出す独特の性格である。性格は先天的因子を持った遺伝子が大きな影響を持つが、後天的な環境も大きい。

幕末から明治維新にかけては薩摩、長州、土佐の三藩が歴史の表舞台で活躍するが、いずれも中央から離れた地で、中央への強いコンプレックスや不満が噴出した結果であろう。感情的で、思索するよりすぐカッと行って行動に移す土地柄である。それに反して、北国や雪国では

冬場は家にこもって読書するので思索的ではあるが、不満があっても慎重過ぎて決断力に欠けるともいわれている。辛抱強いが革新的な行動はとれない。

華やかなスポットライトを浴びる政治家や芸能人は南国地方出身者が圧倒的に多い。逆に、辛抱強い修業が必要な相撲などは雪国や東北出身者が多い傾向にある。こういう地域差は性格形成に非常に大きく影響するのである。

### ※ 夫婦間の不満

家族の基本的な単位は夫婦である。夫婦の関係がうまくいかないと、本人たちはもちろんのこと、同居家族にとっても精神的抑圧は想像を越えている。こうした状況では家族がいくら努力しても、家族関係はしょせんうまくいくものではない。そこに無理が生じ、不満が芽生えてくる。円満な夫婦関係は家庭の要でもある。

性生活が満たされていないと、大脳皮質の働きにゆがみを生じ、自律神経も失調症を起こしてくる。こうなると家の中に不穏な空気が漂うようになる。いわゆる「特殊人」の出現である。「特殊人」が家の要であった場合には、家族全員に不満が生じてくる。しかし、その不満

は氣候風土と違って外へ向かって発散できず、内にこもって周囲の人間の神経を逆撫でし、陰湿な雰囲気をつくり出す。性生活がうまくいっているときのような発展的な何ものもなく、後退する一方である。

「我慢が美德」とされた時代の発想が、我慢がそぐわない豊かな物質文明の時代になっても生き残り、人間を苦しめているのである。進歩的な人でも、なかなか心の奥底にある「我慢は美德」「辛抱は美德」を払拭できないものである。従って、頭では分かっている、素直に我慢を捨て去ることができない。常に罪悪感に縛られ、後ろめたさを感じて動けないのである。これでは不満が溜まってしょうがない。こうなると、自分の不満の持っていき場がなくて、自由に生きている若い人に向かって、文句の一つもいいなくなる。しかし、いつてみたところで自分の不満は解消しようがない。

こうした人たちは大脳皮質が正常に働いていれば、たとえ嫌なことがあったにしても、睡眠という記憶のフィルターに濾されて忘れていく。つまり、記憶の回路が外れるようになるのである。「苦しみは時間が解決してくれる」が、あまりに強烈なできごととは鮮明に脳に焼きつけ、記憶に止めるが、ほどほどのことなら一晩二晩寝れば忘れていく。楽しかったこと、嬉しかったことも同様である。

大脳皮質は常に新しいことを受け入れるだけの準備をしているのである。それが睡眠である。また、酒を飲んだり、気晴らしに何処かに出掛けたりするのも、その手助けとなる。こうして毎日毎日新しい自分がつくられ、再出発しているのである。とはいえ、一日の睡眠で昨日までの記憶を一切なくすわけではないが、前日のこまごましたものまでは記憶に残ってはいない。それが十日経ち、一ヵ月経ちして記憶を薄れさせていくのである。

ところが「特殊人」になると正常な状態では何げなく忘れ去ってしまうものまで恨みつらみとして記憶に残ってしまい、正常な行動ができなくなってくる。

ここで、私のところへ訪ねてくる患者さんと、九州に見られる特殊な場合を紹介しておこう。九州辺りでも、非常に色の白い物静かなタイプの人達がいる。九州というと肌は浅黒く、すぐカッとなりがちな血の多い気質を持った人たちが多いのだが、日焼けすることもなく、いつも冷静である。こうした人たちは学校でも職場でもちよっと異質な感じを受ける。なぜそういう人たちがいるかと言うと、これをさかのぼると源氏と平氏の合戦のおり、負けた平家の兵士が追っ手を逃れて落ち延びることによる。平家、つまり平泉を中心とする東北地方の人々は、残党狩りを逃れて九州の山間部や離島に住むようになったことによる。

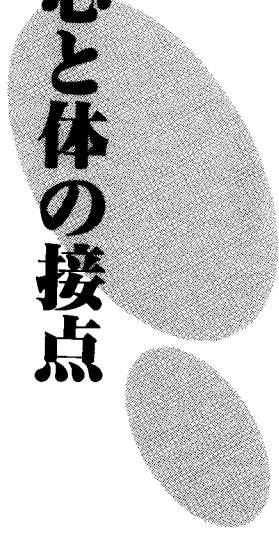
そうしたことで、今でも心の病気になる人がかなり私のところを訪れる。そうした人は九州

に根を張って何百年にもなるが、本来九州の土地柄の人間ではないということも考えてみる必要がある。身元を隠して百姓や漁師として生活してきた先祖は、九州や瀬戸内といった地に分散居住し、その土地本来の気質と合入れないために心の病気を生じたり、引っ込み思案でつまらない人生を送ったりしているのかもしれないと私は考えている。

---

## 第三章

# 心と体の接点



## 心と体のバランスのために

### ※健康は自律神経の働き

心とは、その人のしゃべり方、行動、考え方など、大脳皮質の指令で行われるあらゆる要素の集合体であり、その一つ一つがどのように表現されるかということである。つまり、大脳皮質の働き方を心という。さらに、大脳皮質の働きをどのように導くか、その方向づけや働き方の速度などを決め、相手と協調しながらやっていけるような基本的な導き方がなされるようにすることを、心の在り方という。このレベルは自律神経の活発さで決まる。

心のあり方があるのなら、体のあり方があるのも良い。健康な体は自由に動かすことができる。自分が手足を動かそうとしたとき、大脳皮質の指令通りにスムーズに動いてくれれば不自由はしない。しかし、手足が重かったり、しびれたり、痛かったりしたら不自由である。



健康とは、一般的に手足が自由に動かさず、内臓の具合も良ければ健康であるという。言い換えれば、自律神経系の働きが正常であることを健康といい、そうでない場合を不健康とか病気といっている。が、正しくは、大脳皮質が正常に働き心が正常であり肉体が正常であるとき健康と言っているのである。

健康な生活とは具体的にいうと、次ようになる。

まず、動物的欲求のうちの消化器系の排泄について説明すると、健康であれば快くお小水が出て残尿感がない。排便もすっきりと定期的であり、堅さや色も十分であり、特別気がかりなことが生じない状態である。また、食欲については、食べたくない、吐き気がする、口が開かない、飲み込めないといった症状がなく、適度な食欲があることを健康といっている。

性に関しては、成熟した女性なら毎月一定の周期で月経が始まり、三、四日でぴたりと止まって、その間は腹痛や頭痛もない。他に月経時に体の異常を感じることがない。月のうち数回は性生活をしたい、欲望が込み上げてくるのが健康な状態である。

男性は女性の数倍、性生活の欲望が込み上げ、親しい女性とベットに入ったとき十分に勃起力があり、射精も正常に行われる。さらに、勃起や射精して困るような仕事などには射精したりすることがないというのが正常で健康な状態である。

また、睡眠についても床に入っただけでしばらくするといつの間にか寝入ってしまい、一度五時頃に目がさめても、またウトウトして、六時半か七時ごろ目が覚める。昼間は眠くて仕方がないということもない。睡眠についての病気といえ、睡眠が浅くて夢を見る、途中でトイレに起きると眠れなくなるといった状態が不健康なのである。

こうした動物面の四大欲求については、一般的に目に見えることであったり、自覚症状もあるので、具合が悪いと思えば自分で病気を疑ってみることもできる。また、他人に症状を説明して病気がどうかを聞く場合でも説明しやすい。聞かれた方でも「ああ、私もそういうことがあるよ」とか、「自分にはそんなことはないから病気じゃないか」とか答えることができる。

### ※ 大脳皮質は直接の自己表現

そこへいくと、人間の六大欲求のうちの残り二つの、他人と話をしたいという欲求と、性生活をしたという欲求に関しては、問題があったとしても診断が難しい。

大脳皮質の発達している人類は言葉を持ち、他人とコミュニケーションしたいという欲求を持つ。自己表現である。自己表現の手段は広く考えれば、言葉も文字も通信もある。一般的に言えば、

言葉は相手を前にした直接的な手段として用いられるが、文字や信号は相手と離れているときの間接的な手段である。しかし、人間のコミュニケーションしたいという欲求は言葉を使って話したいということである。もう一つの大脳皮質の欲求に性生活をしたいという欲求がある。人間の性生活を犬猫の交尾行動と同じようにとらえている人が多いが、大きな間違いである。交尾行動は動物の授精行動を見て分かるように、自律神経反射行動で行っているもので、人間のように大脳皮質が行っているのではない。なぜなら、大脳皮質がほとんどない蝶々やトンボ、カエルなども交尾をするというのは、動物の交尾は自律神経の反射運動だからである。(反射|| 感覚的刺激が無意識下で行動を引き起こすこと)

性生活とは、異性と仲良くしたい、一緒にいたい、ともに何かをつくりあげたいという異性に対する欲求である。その一部に性交が加えられるにすぎない。しかし、性生活の中の一部とはいえ、性交は非常に高いウェイトを占める部分である。

### ※ 社会のルールづくりをする大脳皮質

大脳皮質の二大欲求である喋りたい、性生活をしたいということは、自律神経に非常に影響

するということをまず知っておいていただきたい。

人間らしさとは、本能行動を抑制して一定のルールのもとに、快適な社会生活を送る手段である。例えば、食えること一つ取っても、落ちているものを拾って食べたり、空腹だからといって、ときと場所を選ばず食えるようにはしない。食べる場所は基本的に食堂であり、公衆の面前では食えるようなことはしない。こういう共通のルールによっても、どこでも腹が減ったら食えるという自律神経の本能行動を抑制しているのである。睡眠も同じで、どこでも寝ればよいというわけではない。自分の家で、布団に入って寝るのが基本で、道路端や海岸べり、あるいは大勢の前で寝転んだりすることはルール違反である。こうした慎みが自律神経を抑制し、社会生活をするうえで他人に嫌な思いをさせないようにというルールになっている。

排泄もまた、匂いや恥部を人前にさらさないようなルールづくりがされている。この場合、伝染病の発生という衛生上の問題もあり、一定の場所で、一定の方法で排泄をするように決められている。

次に、性生活のルールについてはどうだろうか。交尾に近い行為を、人間は性生活という精神活動を加味した形に変化をさせている。しかし、精神活動の持つ意味をあまり学習していな

いし、本能のままの行動をとろうとする人もいる。しかし、本能的性欲行動であっても、人前やどこでもという方法はとらない。人目のない場所で、外敵に襲われない安全な場所で行うものである。

猫犬でも、食べるときや交尾をするときは物陰に隠れる。こうしたときに敵に襲われやすいからである。神経を集中させるためにはできるだけ安全な場所へ移動し、短時間で済ませるのが敵に襲われない最良の方法なのだ。しかし、性生活や性交はたっぷり時間をかけて信頼関係を築き、確かめ合うものである。この点が交尾と性交の違いである。

人間の脳皮質は非常に大きく発達しており、自律神経の中枢である脳幹部の延髄、橋よりも体積は何十倍も大きい。大きいということは脳皮質に神経細胞が集中していることで、たくさん神経細胞が発するパルスによって、自律神経の細胞集団は電氣的に弱い立場に押さえ込まれてしまう。だから人間が人間らしい行動をしようとするとき、皮質が本能行動をしたがる自律神経を抑制し、一定のルールによって時、所、場合を使い分けることができるのである。それを人間らしさという。しかし、日本人は古くからおしゃべりや性生活を徳とは考えなかった。それどころか、寡黙は徳であり、禁欲は徳だった。その証拠に、戦後も食事中のおしゃべりは御法度だったし、未亡人の再婚に対しても周囲は冷たい目を向けたものである。最近では

「食事は楽しくおしゃべりをしながら」などというキャッチフレーズがごく当たり前のよう  
に  
いわれるし、再婚に対しても興味本位の目を向けることはなくなつた。

### ※ 大脳皮質の働きが低下したとき

大脳皮質は心をつくる大切な部分であり、自律神経中枢の延髄や橋にある神経核は、体の健  
康維持にとって大切な部分である。この橋の上部に存在する神経核は視床で、大脳皮質の働き  
の活発不活発レベルを決定する。

その橋の周辺にある細胞の集団が視床である。この視床から伸びた神経の線維は、大脳皮質  
の神経核の細胞をコントロールする。また視床から伸びたもう一本の神経の線維は、自律神経  
の神経核の部分とも接続して、大脳皮質と自律神経の神経核の双方の働きを受けてバランスを  
調節し、うまく体と心が働くように工夫されている。

つまり、両方の橋渡しをする視床が、心である皮質と体である橋、延髄の接点であり、心と  
体の接点でもある。例えば、嫌なものを見た、あるいは恐怖を感じたとする。その信号が視床  
を通過して大脳皮質に働き、胃腸の神経核に信号を送ったり、血管の太さを変化させる神経核に

信号を送ったりする。そうすることによって胃腸の働きがおかしくなると下痢や嘔吐おうとをしたり、冷や汗をかいたりする。しかし、日本においては大脳皮質の働きそのものが健全であるかどうかということ、あまり問題にされていない。極端に悪い場合なら精神病と診断され、他人にもはっきりと区別ができる。問題は、精神病の前段階である。はっきりとした診断が出る前は「気のせいだ」とか、人によっては「霊がついた」「方角が悪い」などといわれてしまう。それが心、つまり大脳皮質の働きが分かりにくいところである。

慢性的なストレスで視床の働きがにぶり、大脳皮質全体の働きが低下したときを「うつ状態」といい、逆に高ぶったときを「そう状態」という。そう状態のときには、アイデアもどんどん湧いてくるし、明るい未来の展望が開けてきたように思える。逆に、うつ状態になると過去の悲観的なことばかりが思い出されてくる。そうした脳の働きをコントロールし、体の状態がなるべく大脳皮質に影響を及ぼさないように、クッションとなり、あるいはコントローラーとして働いているのが視床で、この働きが不十分になったとき、心と体の両方の病気になる、心身症などの病気になる。

つまり心のありようが体に影響するわけだ。逆の場合は、体にちょっと怪我をしたとすると、心にまで痛みがある。それが心の状態を低下させるうつ病的方向をたどることもある。これが

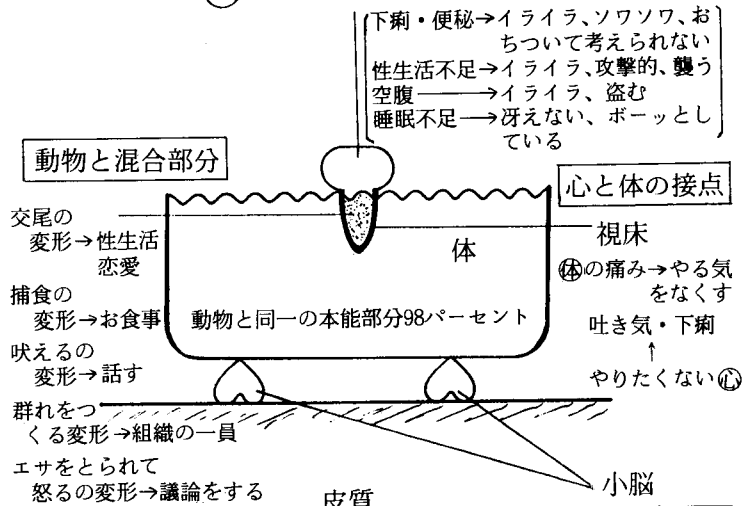
心身症で、ちょっとしたことでやる気をなくすような気の弱い人間をつくっていくのである。



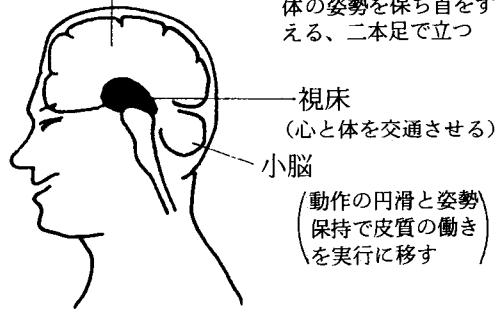
# 心と体のバランス (肉体が正常で心が働く)

皮質 (心) ・考え方を創り出す。道具を作るための道具を作る。  
 ・まとめる ・神を創り信じる。 ・喜怒哀楽

① 人間的部分 体の状態でうまく働かない



正しい動作と準備  
 体の姿勢を保ち首をすえる、二本足で立つ



# 癒導医学とは

## ※ 自律神経失調症のメカニズム

私達は病気や怪我をしたとき、健康は何にも勝る幸福であることに初めて気づく。健康なときは内臓の変調もなければ手足も自分の意思通りに動く。若いうちは健康についての興味もなければ、体のことなど忘れていても不思議ではない。しかし、いざ発熱したり、痛みがあったりしたら、嫌でも自分の体を意識せざるにはいられないだろう。

それに、健康は単に体に異常がないというだけではなく、精神的にも充実していて、生き生きと意欲に燃えて日々生活できることである。

こうした健康維持のための肉体的調節は自律神経系、ないぶんびけい内分泌系、免疫系といった自律系に支配されていて、簡単に病気にかからないようなシステムになっている。しかし、いざ病気にな

ったとき、それが体外から持ち込まれたバクテリアや病原体であれば、体の生命維持装置である自律神経が、侵入してきた異物の増殖を阻止し、排除する役割を果たしてくれるようになっている。しかし、もし自律神経の働きが低下したらどうだろう。侵入してきた異物の増殖を許し、発病してしまうだろう。しかし、たとえ病気になっても、抵抗力をつけて自律神経の機能を活発化させれば、それに連れて人間に備わった自然治癒力で回復していく。

病気といえば一般的に内臓や身体臓器といわれる骨、筋肉、目、耳、鼻、皮膚、血液などに障害が起こった状態を指す。しかし、忘れられがちなのは神経組織も臓器であるということである。神経組織は脳、延髄、脊髄に密接な関係を持った臓器であり、この臓器が精神的な健康に大きな関連を持っている。

神経は体の中を通っている神経の線維で、神経細胞から出た細いパイプのような細胞体でつながり、体の末端まで伸びている。さらに、無数の神経細胞の一つ一つは細い突起を持っていて、ここから受けた刺激を中枢（脳及び脊髄）に伝え、そこから身体各部の筋や腺に指令を伝える役目をしている。こうして神経細胞は一定の回路を構成していて、体中にネットワークを張りめぐらせているのである。（電話電灯の回線）

なかでも自律神経系の細胞の集団は主として脊髄の内側に交感神経、内臓の上を走るように

腹、胸の部分に副交感神経が通っている。これら自律神経の基幹は、脳の中心部にある自律神経の中枢部である視床下部に接続されている。

交感神経は心臓や血管の緊張をつかさどり、副交感神経は肺や胃腸をつかさどっている。この二つの自律神経は一方が活動すると一方が抑制するというように、互いに均衡をとり合って調節している。

例えば、昼間は交感神経が活発で、夜間は副交感神経が活発化するというように、個人の意思とは関係なしに、内臓の働きを自動的に調節して生命維持装置の役割を果たしているのである。

例えば、寝ているときと起きているときでは心臓の鼓動や呼吸、体温も違ってくる。急におどかされたり、緊張したりすると交感神経が働いて瞳は開き、顔面蒼白、冷や汗、喉の渇き、食欲減退、消化不良などを起こす。このように交感神経が過度に緊張した後、今度は反動として副交感神経が働いて血圧を低下させ、心臓の鼓動をゆっくりさせて疲労回復のための睡眠を用意する。いわば副交感神経は内臓から栄養を取り込んで細胞を充実させる役割で、交感神経は充実したエネルギーを消費する役割ともいえる。

このように、昼夜のリズムや個人のリズムによって交感神経と副交感神経のリズムがつくら

れ、一方にのみ負担がかからないような仕組みになっている。こうした均衡を保つために全ての臓器を支配しているのが自律神経なのである。

しかし、このリズムも体調を崩したり、病気におかされたりすると体の中の恒常性（こじょうせい）（体の内部の濃度や状態を常に一定に保とうとする調節の幅）が失われて自律神経のリズムが狂わされてしまう。つまり、これが自律神経失調症である。

### ＊自律神経強化のために

自律神経失調症といえ、（けんたいかん）倦怠感、疲労、頭痛、不眠、あるいは心臓がドキドキする、胃が重い、集中力が無いといった不定愁訴が主なものである。痛い、苦しいといったはっきりした症状ではないものの、本人にしてみれば気分が晴れず、やる気も出ない。これではとても健康体とはいえないだろう。

健康ならば自律神経中枢の視床下部が全ての臓器に正確な指令を出して調整しているはずである。しかし、正確な指令としての電気が届いていないからこそ、こうした不定愁訴が現れてくるのである。（日本全国のTVステレオ洗濯機は独自で動いておらず各地の発電所の電気

動いている。発電所は神経核)

痛い、苦しいという臓器自身の疾患なら病院の検査で容易に見え、病名もはっきりする。だが、視床下部や内臓に指令を発する神経核が悪い場合は内臓に、はっきりとした影響が現れてこない。そのために、病院で検査を受けてもどこにも異常なしといわれることになる。これは内臓全体を動かす指令がちぐなぐになってバランスを崩している状態である。

さらにまた、自律神経失調症になると大脳皮質に集まっている神経細胞の働きも低下して、大脳の働きも鈍くなる。大脳皮質の働きは見る・聞く・考える・我慢するといった行為に関連しており、機能低下をもたらすと自律神経系の働きを抑制することになる。こうした大脳皮質の働きが自律神経失調症によって短時間のうちに変化してしまうところに不定愁訴が発症してくるのである。

こうした不定愁訴は肉体的な疾患が認められないことから病院では患者としての対象にならず、「自律神経失調症」という病名をもらうのがせいぜいである。医師からは「気の持ちようだから、気分を楽にしていればいい」といわれるが、患者にしてみれば実際に体調が悪いのである。病院の患者は病名のはっきりした内臓疾患で、投薬による治療ができる患者でなければなかなか受け入れて貰えない。こうした人たちは慢性病、難病として病院では敬遠しがちであ

る。薬で治らない病気は西洋医学の対象にならないということなのだ。もともと西洋医学は明治時代に導入され、当時恐れられていた法定伝染病の日本脳炎、コレラ、腸チフス、赤痢、ペストなどの多くの難病を薬によって克服してきた。しかし、まだまだ薬による克服も完全ではなく、現在でも癌や薬物中毒、エイズなどの難病の薬剤研究がさかんに行われている。

これに対して自律神経失調症による心の病気、あるいは代謝異常による糖尿病や痛風といった病気は、現在でも難病として取り残されている。これらは病原体が肉体に侵入して害を及ぼすのではなく、機能低下や体内でつくり出された物質によって引き起こされる病気である。

とくに、自律神経失調症は病原菌を体外に排出して病気の駆除をする性質のものではない。人間の体は細胞組織がつくり出す良い物質も悪い物質もあるが、正常に自律神経が働いていれば、悪い物質は排出され蓄積残留しない。自然治癒能力によって健康を保つことができるようになっていく。しかし、自律神経の働きが低下してくると、この自然治癒能力が十分に働かなくなると自律神経失調症を起し、同時に肉体的ないろいろな症状を併発することになる。こうした病気には薬による根本治癒は難しいと考えられている。そこで、自然治癒能力を高め、抵抗力をつけて自律神経を強化する治療法が必要になってくるのである。

### ※ 自然治癒能力を引き出す癒導医学

癒導医学は自律神経を活性化し、基本的に非細菌性の疾患を自然治癒力で治していく治療法である。細菌性の疾病でも免疫力を高めることによって完治できる疾病ならば治すことができる。例えば水虫、慢性の虫垂炎、膀胱炎、口内炎、ヘルペス、扁桃腺炎、皮膚病の一部には有効である。

この癒導医学は故・今村喜太郎先生（慶応義塾卒、講道館柔道八段）が開発した治療法である。開発の動機となったのは明治の元勲、高官たちの随員として西洋視察に同行したことである。当時の西洋医学は理学療法と薬物治療法が実施されていた。しかし、明治時代に日本に導入された西洋医学は薬物療法のみで、理学療法は副次的にしか扱われなかった。当時、伝染病が猛威を奮っていた日本の現状から見れば、それも致し方なかったと思う。しかし、今村先生は合理的な理学療法に注目し、それを学んで帰国した。帰国後は理学療法を主として研究し、独自の治療法を確立していくことになった。



理学療法とは一切の薬を使用しないで肉体が備えている自然治癒力を高度に活発化し、これを最大限に利用することによって病気を治してゆく治療法である。今村喜太郎先生は西洋視察から帰って癒導医学を修めると品川に柔道場と診療所を開設し、患者の治療と弟子の養成に力を尽くした。

この癒導医学を確立し、体系づけるきっかけになったのは、関東大震災である。大震災で柔道場も診療所も全焼してしまったが、そのさい運び込まれてきた創傷、骨折、心身症といったおびただしい患者に、先生は無料で治療を施した。

この治療を通じて、震災による恐怖や肉親の死、混乱時のストレスが自律神経に重大な影響を及ぼし、病気の引きがねになることが明確に観察、記録された。このときの多数の症例が臨床として裏づけられ、一挙に癒導術（自律神経活性化療法）は完成をみることになった。

自律神経の機能障害は内臓だけでなく、脳の働きも低下させ、抵抗力をなくして病原体に侵入されやすくなることも先生は実証された。これを防止するために、自律神経を刺激して機能を高め、治癒に導くというのが「癒導術」である。

当時の記録によると、震災による軽い心身症の患者さんには生活指導を行ったが、特別な治療を施すだけのゆとりはなかったという。しかし、追跡調査してみると、こうした病気に知

識のなかった患者さんは指導された方法を日常生活にどう取り入れていいのか分からず、不定愁訴に生涯苦しめられたといわれる。こうした患者さんを救うためにはどうしても専門家による具体的な生活指導が必要で、手間と時間のかかる病気であることを痛感したと記されている。自律神経の機能低下はストレス、過労、人間関係の不調、家庭内問題といった精神的軋轢あつれきによって発症し、薬物治療では完治することが困難であることが今日でははっきりと認識されている。

自律神経の機能低下の初期段階ではめまい、凝り、痛み、しびれ、吐き気などの諸症状が現れ、気分が優れない。

次の段階では気分がイライラし、攻撃的な話し方をしたり、音に対して極度に敏感になったり、病的なほどの潔癖症になったりといった神経症の症状を示すようになる。こうなると歩行困難や外出不能といった身体的な症状が伴う。

さらに症状が進むと精神障害を起こして、初期段階では登校拒否、出社拒否、対人恐怖症、不感症、冷感症、勃起不全、あるいは被害妄想的な症状が現れてくる。これらの症状がひどくなってくるとかんしゃく、自閉、被害妄想、分裂病と特定の病名のつく重い病気になる。

「癒導術」は心身両面の偏りから生じる自律神経の機能低下や障害、筋肉の拘縮こうしゆく、骨のゆが

み、ホルモンや消化液の分泌の異常、脳の活性化を促して自己能力を回復させる施療法である。すなわち自己治癒力を高めて、病氣回復力を充実させるのだ。そのためには病める人の身体的治療はもちろんのこと、その原因となるストレスや疲労、人間関係も含めた人間関係や職場環境の整備も含めた総合的な指導と治療を行うことが基本的な考え方である。そのために、治療を行う側は施療法と同時に、幅広い見識と考察力が要求される。いってみれば、病氣を治すことはもちろんだが、病んだ人間を治すのが癒導術の本分である。

こうしてみると、癒導医学はまことに今日的な治療法といえる。薬物治療法を用いなければ完治しない病氣はともかく、薬物を使用しなくても完治する病氣なら、あえて薬という異物を体内に入れる必要もない。自分で治ろうとする力に癒導術の後押しをしてもらえばいいわけである。

それにしても、最先端の医療として導入された薬物治療法全盛の時代に、薬も使わず、人間の持つ生きる力を最大限に引き出す先進的な治療法に目を向けた今村喜太郎先生の炯眼けいがんには敬服する。

---

カルテより

---

## ※ 園芸農家を経営する四十八歳の男性

町の園芸店にある鉢植えの観葉植物や、お正月を飾るシクラメンなど、神奈川県で栽培をしている。

症状は止めどなく不安が込み上げ、音が煩く響いてどうしようもない。神経がビクビクして取り越し苦労をする。胃が悪いということは二十才くらいから苦しみがある。三人使用人があり、妻も一緒に仕事をしている。夫婦で来られたとき私はピンときた。つまり奥さんの態度である。非常に仕事をしてバリバリやるタイプで、赤ら顔、大柄、つまり肝っ玉母さんのような感じではあっても、非常に支配的な指図的な喋り方で、つかかってくるように話しをする。

患者である本人は気が弱くおとなしそうな二代目的雰囲気の人。そこで仕事上のストレスが妻の存在で取り去ることができない。つまり家庭で十分リラックスできていないということがその時すでに分かった。

自営業は、特に農業はだれも忠告助言してくれない。商業なら近所の人、あるいは同業者、そうゆう付き合いが言葉を紹介して非常にあるから、働き過ぎとか休んだらとかさうゆうお互いに注意をしゃったりすること多い。

しかし、農業や林業等の第一次産業には少ない。そこでいつの間にか神経を使い果たし、神経の疲労、肉体の過労からさうゆう状態になってしまう。

治療としては仕事をやめることができないために当然長く掛かる。しかし、温室の三分の一を駄目にしたとしても、このまま仕事し続ければ体が駄目になるから、仕事を手抜きしてやってゆき、

六ヶ月くらいきちつと養生をできるか、そこいらを聞いてみた。

そうすると相当迷われた。施療三回目くらいお話をしたときに、あなたが仕事を現状のまま続けていると治療は続けられない。だから断るといってお話をしたところ、次の日また改めて来られて、自分もよく考えたし、妻ともよく話をした。妻に多少負担が掛かるが、それは仕方がない。

その時、妻も具合が悪いと言っているとお話があったが、そのまま治療が始まった。かれこれ八月ほどお出でになり、ほぼ良くなる頃、月に二回くらい宅急便で花が届けられた。

その年のお正月は私がホテルで正月を過ごしたこともあって、水盤に植え混んだ松竹梅の盆栽、また、お正月に彩を添えるシクラメンやポインセチア、ランの花をたくさん届けて頂き快適な例年にないお正月を過ごすことができたことを覚えてる。

また、奥さんの郷里がりんごの産地ということで、りんごも毎日五個ずつ食べても余るほど贈っていた。よくよく聞いてみると親の二代目で、あるいは三代目で仕事をしているが、奥さんも遠因の農家の出身で幼馴染みを感じてた。それで奥さんのほうには、農業が好きなおことで懸命に仕事をする反面、何の遠慮もなく、自分の性格を丸出し。生まれっぱなしのまま訓練されることもなく、しゃべくりまくり生活をしていたのである。

そこで別室で奥さんにも話をしたが、あまり真剣に聞かないし、『自分は仕事が亭主のぶんまで忙しい』というような態度であった。さらにいろいろな作業に仕方についても改善点を話したが、『今までこれでやっている』というような口振りで全く効果がなかった。

しかしそれはそれで仕方がないことだと思ふ。くだらないことを言わないでくれということであればそれはそれで良いのだ。





※ うつ病と言われ薬を飲んでる三十五歳の主婦

三十五才の主婦、子供三人と共に相談及び治療に來られた。母親は畜産農家である。

うつ病と言われ、薬を飲んでる。状態は体がだるい、朝起きられない、何もする気がない、一日中ボーとすることが多くて、何となく作業をやっているに過ぎない。テキパキと家事や仕事をやることができなく、どもりがあるのでそれも治したいという相談である。自営業だから何となく家において、ブラブラしながら仕事をしているが、他人の体で何かやっているような気がして、まったくおもしろくない。

当然子供の世話もできなくなってしまっている。

体の状態は足がむくみ、唇が黒ずんでいる。脈は息を吸うときに非常に早くなり、吐く時に極端に遅くなる。呼吸する度に心臓の機能が変わるのは、多少正常な人にもあるが、極端な場合には、自律神経が非常に弱っている証拠である。当然薬は飲んでる。しかし、思わしくないので來られた。

北陸地方の遠いところから子供三人とお出でになっているので、三日間の自宅治療講習を受けお帰りになった。

三日間のうちにスッキリした感じ、頭がサッパリしているという状態になり、端で見ていて、お出でになったときは、子供に対して何の反応もなかったが、三日目には、いろいろと気使いを見せたり、ボタン掛けを治してやったり、無意識のうちにしているのが見受けられた。

自分も気が付いて、「以前はなかなかこうゆう気使いができなくて、ぼんやりと見ているのだけ

れども、見ていないのとおんなじで自分でも多少分かります」とお話しになった。自営業というのは、農家あるいは製造業も含め、全ての人に言える事は、働き過ぎの神経の使い過ぎからこうなる。特に家庭の主婦は、働いている場合、仕事が終わった後、炊事、洗濯、後片付け、主人や子供の面倒を見る、朝は朝食のしたく、子供のお世話がある。そこでいつの間にか神経を使い過ぎてしまうことになる。

鬱病というのは、大脳皮質がまったく働かず何もやる気がしない状態になってしまうが、この方は、『子供達も何だかおかしい』と一緒に連れて来られ、自分も治さなければという気持ちで湧く、これは鬱状態に近いが鬱病とは言わない。この時期に治すと早く回復をする。

お帰りになってから、一度自分だけ状況をお話しに來られたが、まったく健康になり、働き過ぎないような、段取りの仕方をお話した。

この方の子供さんについても、相談を受け体の状態を診て見たが、まず五才の子供、歯茎が真っ黒である。それから血管運動反射のテストで血管が拡張しない。保育園に行っている。ただ子供さんのこの状態は、朝起きられない、いつまでもぐずぐずと寝ている。それで保育園に行こうにも行けない。『何かおかしい』と連れて來られた。

この子供さんの状態も一年くらいかかって、きちっと親と一緒に治療をしていけば回復すると言ったことをお話しをした。

五才くらいの子供で非常にストレスが溜って副腎の働きが悪くなり、歯茎が真っ黒という例は、本人も家族も気がつかないが、結構見受けられる。それは子供を連れて相談にお出でになったとき、子供さんもついでに見てあげると、そうゆうことが発見できる。もう一人の子供さんは十才、男の子。学校から帰ってくると家の中に閉じ籠って、ぐったりした感じでテレビを眺めている。見て

いる感じではない。

指しゃぶりをしているのも、もう少し元気にしたいというお話し。本人もなぜかそうゆうふうになつてしまつて言っている。

体の検査してみると、やはり血管運動神経の反射がほとんどゼロに近い。これは五才の子供と同じく、交感神経の異状緊張状態である。歯茎は少し黒い。このことは体格が少し大きいので、ストレスに対抗できていると思われる。

治療方法も同じように指導をして、自宅で行うように教えておいた。

もう一人の子供さん、これは九才、どもりが酷くて治らない。ニコニコして非常に愛想は良いがどうしても喋るときにどもる。体の検査で血管運動反射が同じくほとんどない。これも緊張状態を示す。

人間の体は九十八パーセントくらい反射で動いている。音がしたほうに振り向く。物を落としたときに足をさつと引く。また、蚊が差したら赤く腫れ上がって血液を集めそこを修復しようとする。これらはなにも考えてしているのでは無い。そういう反射で自動的に体を保護し、またそういう下地があつて、人間として意思を働かせて他の動物と違うことができる。

しかし、生命維持装置である下準備をさせる自律神経が正常に働かなければ、人間が思つて、考へて、さらに計画をして何かをやらうとするとき、それがまったくできない。このことが、この三人の子供さん及び主婦と同様に症状としてでてる。

つまり動物的に生きていくだけになる。いろいろとお話しを聞いて見ると、嫁いできたときから、当然、集団的家族制度の中で作業をやっていくため、主人の両親があり、主人は両親が居るために自主性に多少乏しく両親が采配を振る。

そうすると嫁に来た自分には、かばってくれる人もなく、ただ隠れ場所のない金魚ばちに活けられていた金魚と同様、いつも見られているために、息を抜く時がない。だから動きっぱなしになる。よく考えてみると、子供と一緒にじっくりと腰を据えて、同じ目の高さで話しをするようなことがなかったという。

母親及び父親との、じっくりした時間を取った交流がなければ、子供は忙しくして両親の後ろ姿を見て話し掛ける事もできず、また、話し掛けたり、じゃれついたりしたら悪いという気持ちから、じっと黙って我慢をする。その寂しさやこらえる状態がストレスとなり、自律神経機能低下をきたす。母親に抱っこされたり、父親におんぶされたりすることがないために、緊張がほぐれないで交感神経緊張症状が続く。そうして副腎機能低下状態になっていく。

子供も無言のうちに親に思いやりを寄せ、また邪魔にならないようにと考えているものである。ただ立場上弱いからお金もないし、自分名義の家もない。当然怒られれば黙っているしか抵抗の方法がない。そうゆう弱い立場の人間の場合には、強い人の機嫌を取り、じっとしているものである。そこを大人及び職場でも強い立場にある人は、思っただけの気持ちを示す必要がある。

これを放っておくと、このケースのようにうつ状態、あるいは緊張からどもる、また、体が澁刺と働かないために、いつもごろんとして自主性がなく、食べて寝るだけの怠け症のようになってしまふ。

ご主人にも手紙を書き、また、私の本を読んでもらうようにして自宅養生を続けるようにご指導をして終りにした。

心 検査項目 自宅 心

氏名 [redacted] 男 67才 生年月日 [redacted]

現在の悪い状態を書いて下さい

<p>現在の苦痛は何ですか 朝起きたり夜寝た時胸が苦しい ともしよどましい</p> <p>どのような事を感じたいと思えますか 旧中水とお子等が... それはいつ頃から感じましたか 1年くらい前</p> <p>生じたきっかけがありますか 転倒と別にならぬ</p> <p>体の部分で具合の悪いところ(痛み、しびれ、けいれんなど)ありますか なし</p> <p>持病(慢性病)がありますか、その発生年令</p> <p>血圧(朝・同様)にリウマチ、糖尿病、高血圧、痛風、肩こり、痛みなど病気がありますか なし</p> <p>血脈で造影剤がある時、その死亡原因は何でしたか</p> <p>現在の職業と作業内容、年数をくわしく 養老老隊 10年</p> <p>過去の主な職業と作業内容、年数をくわしく</p> <p>現在、過去において非常に寝れる事がありましたか(多量、失肥、肉量の死、暴死)</p> <p>住居(現在と過去)住居、鉄筋ビル(○増住い) ① 専ら、社宅、アパート、公団等</p>	<p>体の具合</p> <p>1 体がかるい 2 _____</p> <p>3 呼吸が浅い 4 _____</p> <p>5 何も打撃の感 6 _____</p> <p>7 _____ 8 _____</p> <p>9 _____ 10 _____</p> <p>心の状態</p> <p>1 うつ病 2 _____</p> <p>3 _____ 4 _____</p> <p>5 _____ 6 _____</p> <p>7 _____ 8 _____</p> <p>9 _____ 10 _____</p>
---	--

身長	体重	血圧	握力	常用薬	タバコ	アルコール	公団	済み
167	60	110/70	10	なし	なし	なし	なし	なし

身長	5-10	50	250	ml
心拍数	10	50	250	

検査項目

検査名 [redacted] 検査結果 [redacted]

検査項目 [redacted] 検査結果 [redacted]

検査項目 [redacted] 検査結果 [redacted]

検査項目

検査名 [redacted] 検査結果 [redacted]

検査項目 [redacted] 検査結果 [redacted]

次回 3月 [redacted]

検査項目

自筆

氏名 [redacted] (男・女) 年齢 [redacted] 生年月日 [redacted]

住歴 [redacted]

手術 行 歴 経 過 疾 患

現在の苦痛は何ですか  
じりり

どのような事をどう治したいと思えますか

それはいつ頃から生じましたか  
2ヶ月前

生じたきっかけがありますか  
仕事から帰って来た時

体の部分で具合の悪いところ(痛み、しびれ、けいれんなど)ありますか  
なし

痔瘻(痔・痔瘻)がありますか、その発生年齢  
なし

血腫(腫・肉腫)にリウマチ、糖尿病、高血圧、高脂、肩こり、痛みなど病気がありますか  
なし

血腫で発育障害がある時、その死亡原因は何でしたか

現在の職業と作業内容、年数をくわしく

過去の主な職業と作業内容、年数をくわしく

現在、過去において非常に疲れる事がありましたか(多忙、失態、肉腫の死、事故)

住居(現在と過去) [redacted] 鉄筋ビル(○階住い)  
(自宅、借家、社宅、アパート、公団等)

フコロン	-	1	4	8	12	
ビリルビン	-	+	++	+++		
糖 血	-	5-10	50	250		/ml
ヘモグロビン		10	50	250		
血 糖 質	+	++	+++			
血 糖	+	++	+++			
血 糖	+	++	+++			

現在の悪い状態を書いて下さい

・体の具合

20回  
3日 [redacted]

平成 [redacted]

患者名 [redacted] 良くなった症状  
おしりあがり

出てきた症状

聞き取り

平成 [redacted]

患者名 [redacted] 良くなった症状

出てきた症状

聞き取り  
おしりあがり

**失** 検査項目 **自宅**

氏名 [redacted] 男 5才 生年月日 [redacted] 初診日

手術	打	検	経	通	疾	患	職	業	生	活	様	式
嗜好	公	普	常	用	薬	奇	形	発育状況(肉・骨)				
分	機	月	種	流	産							

主訴 夜泣き、嘔吐、血便、腹痛  
 全身

場所

尿 検		便 検	
pH	5 6 7 8 9	糖	蛋白質
ブドウ糖	0 100 300 1000	潜血	ビリルビン
ケトン	- 5-40 100	粘液	ヘモグロビン
アロニン	- 1 4 8 12	膿	細菌
ビリルビン	- + ++ +++	卵	真菌
潜血	- 5-10 50 250	虫	寄生虫
ヘモグロビン	- 10 50 250		
細菌	+ ++ +++ ++++		
真菌	- ++ +++ ++++		
寄生虫	- ++ +++ ++++		
	- ++ +++ ++++		
	- ++ +++ ++++		
	- ++ +++ ++++		
	- ++ +++ ++++		
	- ++ +++ ++++		

便 量	腸 痛	腹 拍	血 圧
排便回数	腸 音	呼吸音	
腸 痛	腸 音	呼吸音	
突眼	舌	まぶ	

朝、起れない。

平成 元年 3月 30日  
 患者名 [redacted] 良くなった様状 [redacted]  
 出てきた様状  
 聞き取り

**失** 検査項目

**失**

氏名 [redacted] 性別 女 / 才 生年月日 [redacted]

検査の目的・状態を書いて下さい

住歴  
 手 術 打 撲 経 過 疾 患

体の具合  
 初回  
 3月 [redacted]

現在の苦痛は何ですか  
 自覚がない 行儀の時、てからも喉にどろも。

どのような事をどう治したいと思えますか  
 もう少し元気になりたい 指の3の2を直したい。

それはいつ頃から生じましたか

生じたきっかけがありますか

体の部分で具合の悪いところ(痛み、しびれ、けいれんなど)ありますか  
 無し

持病(慢性病)がありますか、その発生年令  
 無し

血腫(腫・発熱)にリウマチ、糖尿病、高血圧、癌腫、胃がん、痛みなど病気がありますか  
 無し

血腫で検出者がある時、その死亡原因は何でしたか  
 無し

現在の職業と作業内容、年数をくわしく

過去の主な職業と作業内容、年数をくわしく

現在、過去において非常に驚れる事がありましたか(多忙、失恋、肉親の死、事故)

住居(現在と過去(木造、鉄筋ビル(○階住い))  
 ① 戸建、借家、社宅、アパート、公団等

半成 [redacted]  
 患者名 [redacted] 長くなった症状  
 元気があらず

出てきた症状

聞き取り

半成 [redacted]  
 患者名 [redacted] 長くなった症状  
 元気があらず

出てきた症状

聞き取り

クニシク	-	+	++	+++	16
ビリルビン	-	+	++	+++	
赤血球	-	5-10	50	250	/ml
ヘモグロビン	-	10	50	250	
尿潜血	+	++	+++		



### ※ 十四歳の娘さん

体の具合は頭痛、腕、ふくらはぎの痛み、心臓がドキドキ、疲れる、下半身が特に肥満である（と本人が思い込んでいる）胃が痛い、便秘、首凝り、姿勢が前屈み、しみが增える。心の状態は、登校できない、ときどき死にたい、対人緊張、落ち着かない、意欲が出ない、集中できない、外出できない、生きているのが辛い、イライラする、淋しい。

体重は三十八キロであったのが、四十八キロでこの体重は標準であるが、急に十キロ増えたので重くて苦しい（この年齢で急な体重増加があるのは普通、本人の容姿からして正常）

この十四才の娘さんは、相談にお出でになったとき、その服装と身長、体重から中学生と思わなかった。髪の毛の形、着ているもの全て、それは二十三位の女性の姿で、身長百五十五体重四十八キロであった。

中学生と言われて私はビックリした。生じたきっかけは小学校五年の時転校したこと、お稽古ごと、兄弟の仲違い、いろいろとある。総合して考えると、母親が非常にお節介やきで見栄っ張り体質の特殊人である。

見たところ教員タイプだなと思ったので、尋ねて見ると独身のとき中学校の教師であった。案の定、公式通り子供が病気になるっている。

母親が全部書いた相談票は、母親の性格として真面目で堅く、柔軟性がない。考え方、視野が狭い、優しいところはあると思うが、疲れるとアルコール依存症になり、セーブしているということ。欄外に子供が書いた字で、子供たちに意地悪をする。父親は大学の教授である。

三才から中学校まで勉強は良くできていたので、学級委員や代表委員をやり、運動でもリレーの選手になり、四年生の時に親の都合で転校した。親の都合というのは、転勤等ではなく、仕事の都合でもなく、母親が進学校に入れたいとか、将来こうゆうことをさせよう勝手にきめ、無理やり転校をさせたという。

これも母親の我が儘、身勝手以外何もない。父親の性格は内気で温和、無気力、真面目、アルコール依存症がある。これは母親から見た言葉であって、それが本人からすると、母親が完璧主義で女らしさがなかったために、父親は嫌気がさし、酒を飲んであばれたり、あるいは面白くないことがあると、酒を飲んだりするものと推測される。

娘さんの中学ごろ母親がイライラした時期があったらしい。(母に聞く理由は分からない)それと本人の過剰な負担。親が勝手に転校させ友人が無くなった。母が塾に三つもやって追い捲くた為神経が疲労困憊して、中学一年の初めから学校へ行けなくなってしまっている。父親に似た本人と父親が、母の独善支配によっておかしくなってしまった。

私の持論として、特殊人は結婚してはいけない。本人相手ともおかしくなるのは避けられない。本人は父親の性格に似ており、何事にも真面目で一生懸命取り組んだそうだ。

相談のとき母親ばかりが喋って本人が喋らないのでどうして喋らないのか聞いてみた。そうすると母親があまり喋らないですと言う。本人は一言も喋らない。

治療三回までは何も喋らないで黙っていたのでそのまま治療をした。四回目るとき少し喋ったので、自宅での養生の方法を話そうと思ひ、母親と仲違いしているのが分かったので、別室で話をした。心の病になると着ているものが奇妙になる。この人も、たいそう大人びているのと、色合い模様も奇妙な白と黒であるから、この病気に良い、治る方向にいく色、あるいは、着るものをいろ

いろと指導をしていると、一言一言に反発をする口調で文句を言うような聞き方をする。

最初は私も我慢をしていたが、ついにムカムカしてきた。それで母親と交替させ、いろいろと話をしてみると、「昨日から喋るようになりまし。それまでは一言も喋らなかつたんです」という。私が指導の話をするとき本人が、『何だか反発ばかりしている』ことを話すと、「母親は喋るようになつたんです。喋るようになったからこれで良いんです」と言つてそそくさと連れて帰つた。私はあきれて、何のことだとよく考えてみると、見栄っ張りで中学教師の母親は、相談の時から私の所にくるのを非常に面白くなく思つていたような雰囲気があつた。

つまり、大学の教授でも無いヤツのところ、来たくないところに仕方無く来た。そうして全然喋らないことが少しでも治つてきたので、後は自分がやるということと連れて帰つたわけだ。(世間話から大学教授と結婚したのであり男に仕えるつもりは無いようだ) 十四才の本人にしてみれば、大嫌いな母親がとにかくいろいろ指図をするので面白くない。だから喋らないようにしているうちに本当に喋れなくなつてしまつたようだ。

似たようなことがある。小学校の教員の母親を持つ十八才の女性を両親から預かつたことがある。通いで治療に来ていたとき、毎日死にたいと、カミソリをいつも手首に当てロープを首に巻き付けて何回も死のうとする。それで全く目が離せないという相談があつたので、私が預かることにした。本人によると家に住んでいるのが嫌、また母の話しか方から追い込まれてしまつて自分ではなにをどうしたら良いか分からなくなつてしまつた。

女性全般言えることは、見栄っ張りで気取りやであるということは、仕方がないことであつてもそれが病的に昂じると、自分の身の回りの親しい人、離れて生活することができない子供達、それを全く駄目にしてしまう。

よく昔から言っている。女は学問する必要がない。つまりこのことがずばり当て嵌まるのが教員タイプの母親である。

家庭の主婦というと耳障りが良いが、飯炊き女、掃除婦、洗濯女、セックスの相手、雑用係りの叔母さん、これ以外の何者でもない。それが九十パーセントの作業である。そこには特別に大学を出ていろいろ考えることも必要としない。古代の昔からそれはいろいろな教育制度がなくても世の中はうまくいってきた。(母親と世話やきおばさん、父親と給料持参男は違う)

しかし、世の中一般の人々の意識として、学問すると自分も何かしたいという意欲が湧いてくるのは当然である。しかし、そこで少し物知りになったからといって知識を振り回してしまふのは、女性の全体的を見る能力の特性的不足からくるものである。(駅から自宅までの地図を書かせるとすぐ分かる)。

男でも皆無では無い。しかし全体的には生まれつきの性別の特性としては少ない。だから神代の昔から男が世の中を創造している。それが逆であるならば神代の昔から女が世の中を形作っている。(しかし女は男を産み仕事をさせ楽しんで生活している)

この人の症状で急に体重が増えたとか、あるいは、下半身が太いかいいうのは、青春期にある思はずごし、美貌に対する過剰な意識で特別な変化ではない。

急に体重が増えたのは成長期でもあり、また、下半身が太いというのは、当然女性の体形として、お尻周りが大きくなってきただけのことである。

このことは生まれて初めて知ること、誰かに相談して先輩達、親達が自分もそうであった、あるいはそうゆうことで悩んだということを気軽に話をし、また子供も気軽に話して疑問を即座に聞いてしまう。そうすることが本人を悩ませるといふことから解放する。

しかし母親に反発して生きてきた、また、父親に女のことを聞いても分からない。当然友達と話しをしても分かりにくい。大人から見るとくだらないと思える悩みを持つ。

私の子供も自分の体を見て、お父さんのと違う、あるいは、友達と違うということをいろいろ聞いてくる。その聞いてくるというのは、親子関係が気安く聞ける雰囲気にある。

私は自分が知らないことはすぐ一緒に辞書、あるいは本を持ってきて読む。しかし正確に知っていることについては即座に答える。それで子供は悩みを解き、澆刺として次の日の学習遊びへと頭が切り替わるのである。

1. 姓名 (Name) 2. 性別 (Sex) 3. 年齢 (Age) 4. 職業 (Occupation) 5. 入院理由 (Reason for admission)  
 6. 既往歴 (Past history) 7. 現病歴 (Present illness) 8. 検査結果 (Examination results) 9. 治療 (Treatment) 10. 経過 (Course)  
 11. 退院 (Discharge) 12. 備考 (Remarks)

項目	内容
1	姓名 (Name)
2	性別 (Sex)
3	年齢 (Age)
4	職業 (Occupation)
5	入院理由 (Reason for admission)
6	既往歴 (Past history)
7	現病歴 (Present illness)
8	検査結果 (Examination results)
9	治療 (Treatment)
10	経過 (Course)
11	退院 (Discharge)
12	備考 (Remarks)

1. 姓名 (Name) 2. 性別 (Sex) 3. 年齢 (Age) 4. 職業 (Occupation) 5. 入院理由 (Reason for admission)  
 6. 既往歴 (Past history) 7. 現病歴 (Present illness) 8. 検査結果 (Examination results) 9. 治療 (Treatment) 10. 経過 (Course)  
 11. 退院 (Discharge) 12. 備考 (Remarks)

1. 姓名 (Name) 2. 性別 (Sex) 3. 年齢 (Age) 4. 職業 (Occupation) 5. 入院理由 (Reason for admission)  
 6. 既往歴 (Past history) 7. 現病歴 (Present illness) 8. 検査結果 (Examination results) 9. 治療 (Treatment) 10. 経過 (Course)  
 11. 退院 (Discharge) 12. 備考 (Remarks)

### ※ 大きな会社のエンジンを開発している三十二歳の男性

三十二才で大きな会社のエンジンの開発をしている。研究職の人で、会社に行けなくなった理由に、仕事に興味がもてなくなった、無意味さを感じる等で治療に来られる方は非常に多い。

症状は、人とすらすら話ができない、考えが纏まらない、緊張する、目がくらくらする、以前うつ病になり病院に掛り、その後交通事故を起こしている。

うつ病は会社の上役との対人関係で発生をしたと言ひ、交通事故でむちうちが生じた。対人関係からの心の病気は、特殊人の中に属する人達が周りの人とうまく係わることができないことよって発生をする。

その基本的なものは、小さなことを譲れないということ。また、自分の立場を考えないで相手の、不愉快なことを考えたり喋ったりすること。例えば会社の中でどのような仕事、重要な地位を与えられていても、所詮雇われている労働者であるということを忘れてしまい、自己主張をしすぎで対立をする。これが一番、人間関係が会社でうまくいかない、左遷される最大のことである。

学校の場合でも、教師が自分より上の人間から指図されたり、注意されたりすることがないために、家族や同僚から指図される、いろいろな言われる、そういうことが非常に頭にカチンとくる特殊人である。

私の小学生の頃、小学校の教員で学校を出て赴任したばかりの教師が、今は校長をしているときいてビックリした。この人物も非常に癖があり、生徒が発言をして、いろいろいってもいちいち難癖をつけたものだ。友人から校長になっているということを聞いて人材不足であると同時に嘆かわ

しい思いがした。

うつ病の人間が自動車を運転したり、また、機械操作をすると、当然閃きや咄嗟の判断が反射的にできないため、事故を起こす。

追突される、こすったりする。また運転中に他車とトラブルを起こす。こうゆうことは失調気味神経症、あるいは神経が働きにくい人達に非常に多く、そうゆう集団は事故を特別に起こさない集団に比べ反覆して継続して起こしている。

追突されるのも、前の車が走りかたがおかしいと後ろの車をイライラさせる。車はイライラして追突をしたりする。また、後ろの車に注意を促す合図をしない。こうゆうことで追突をされてしまう。

薬は精神安定剤を飲んでいる。心の状態はイライラ、忘れっぽい、不満を持つ、集中力、注意力が散漫、落ち込みやすい、すらすら話せない、考えがまとまらない、言葉が思い付かない、人間嫌いだである、攻撃的な考えを持つ。

体の状態は顔をそむけるほど口臭が強い。しかし本人は意識はしていない。(匂いを感じない)頭がしびれると言う、唇や歯茎が真っ黒、半月は左右ともでている。

しかし、脈拍は五十六で非常に少ない。このことから長い間のストレスから副腎機能低下が生じ、そうして自律神経の機能低下から、心臓を動かす心臓中枢の電気の発生の速度が非常に遅いために脈拍が五十六である。五十六で呼吸をするたびに脈拍が変動をする。

これでは体中に酸素と栄養が回らないために、脳も当然働きの悪くなる。

親の性格として母親がヒステリー気味で義理堅い。自分のことよりも人に尽くすタイプ。自分達のことよりも人目に付くことをよくする。自分の過ちを絶対に認めない。言い訳をする。また自分



の考えがないと書いてある。母親がこうである反面、父親が几帳面で温厚である。

高校のとき本人が自殺未遂をしている。それは小学校のときから肥満児であり、非常に体の悩みが強かったらしい。肥満児でも自殺する人は少ない。これは物の考え方の偏りで、親が考え方の指南をしないときに発生しやすい。

指南するとは、物事の考え方を導いて、その人に方向づけをしてやることで、細かく指図することではない。

母親の体質を受け継ぎ、母親からのストレスあるところで育てられた場合、家ではリラックスしていることが少ない。こういう状態では小さいときから失調症になり、自律神経の円滑な働きが少ない。

治療五回くらいで目がくらくらしていたのが取れてきた。その後、六回目、七回目くらいで首が凝らなくなり、新聞や雑誌が読めるようになり、やる気が少し出てきた。

こういう副腎機能低下からきているやる気の無さ、体の不調は副腎が回復するのに二年かかる。約十数回くらいで治る方向に転じてきた時、本人がどうすれば良いか迷っている、とのご相談があった。治療以前は会社を退職するはめになり、家族も駄目になり人生が絶望という状態であったが、治す方向づけと一応の目安ができたために、希望を取り戻し自宅治療ができるようになった。一年間は休職をしてあと一年は残業なしで仕事をしながら養生をしていく条件で自宅治療に切り替えた。

2  
 病歴  
 出生地 東京都  
 出身 東京都  
 職業 会社員  
 学歴 大学卒業  
 家族 妻 1人、子 2人  
 嗜好 喫煙、酒  
 既往歴 糖尿病、高血圧、脂質異常症  
 手術歴 ない  
 現在病状 糖尿病、高血圧、脂質異常症  
 検査結果 血糖値、血圧、脂質異常  
 治療 糖尿病薬、降圧薬、降脂薬  
 経過 糖尿病、高血圧、脂質異常症の経過観察中  
 予後 良好  
 医師 内科 〇〇〇

検査項目  
 血糖値 180 mg/dL  
 血圧 160/100 mmHg  
 脂質異常 総コレステロール 250 mg/dL  
 糖尿病 あり  
 高血圧 あり  
 脂質異常 あり  
 医師 内科 〇〇〇



## \* 日本料理店の二代目、二十六歳の青年

日本料理店の二代目、二十六才の青年。父親は創業者で計画的、行動的。自分にも厳しく他人にも厳しい、妥協をあまりしない。

物静かにして優しい母親。自分も一、二年、外で仕事をしたが、今では家を継ぐ前提で家の手伝いをしてる。

しかし、このところ腰が痛く、咳をすると響く。手の震えと肩凝り、眠れない、背中の右半分が硬直して堅い。ビール五本飲んでも酔わないですぐに冷めてしまう。以前は酒飲んで眠れた。目を閉じると頭がぐるぐると回っているのが自分でも分かる。体がだるい、現在非常にきついのは音がうるさく響いて外に出られない。その音というのは自分の鼻のすすり音や咳、自分の足音、または他人の足音、これがガンガン頭の芯に響いてくる。だからうるさくて外に出られない。家の仕事は夕方から夜にかけて受付けや仕込みなど多少手伝う。それ以外は何もできない。父親は糖尿病と自律神経失調と言われ、皮膚病が酷くてどの病院へ行っても分からず、薬を付けても治らず、いろいろな薬を飲んで体の骨がすべてポロポロと本人が相談票に書いている。

こうゆう失調症の体質は本人が親から受け継いでいると思ってる。さらに性格的には父親とまったく反対の、物静かで、自分の意見を言えないタイプ。これは母親の性格を受け継いでいると思ってる。

つまり、大脳皮質の働きは母親、自律神経の部分は父親という具合である。生じたきっかけは、高校を卒業したとき、家の仕事は嫌だから外へ働きに出たいと親に言ったが、受け入れてもらえず、

そのままずっと家にいる。板前にも言ったが受け入れてもらえず、現在にいたり、その前後から何か体がおかしくて今の状態になっている。

この酷いケースは三、四年前の患者さんが非常に記憶に新しい。老舗の中華料理店の二代目さん。どうしても家業をやっていけない。父親が他界したとき、本人が一人前になるまでということ。父さんが、それまで勤めていた会社を退職し、家業の段取りをしていたが、そのうち、跡取りの一人息子が自律神経失調症になり、とうとう店に出てくるだけになってしまう状態になってしまった。

それで母親と叔父さんと一緒に来られ、また、本人も何とか治さなければということでお出でになった。約一年間くらいで元気になり、叔父さんは元の会社に、復職して、以前からいた、古狸的従業員を全部解雇し、自分の采配でやるようにまで元気が出てきた例を鮮明に思い出す。

その例を話して希望をもたせ治療をすることにした。通ってきて十回目くらいで腰の痛みはほとんどなくなり、首や肩凝りもなくなった。当然眠りや音の響きはすでに取れてしまっている。

そこで両親に手紙を書き、家の中の生活状態や親の接し方、また住む場所等すべてに付いて最善の方法と、それに準じるやかたを努力するように指導をし、また、本人についても物事の考え方やいろいろな点について、十回の治療の間、ご指導をした。

それによって今まで、モヤモヤしていた物事の考え方がはっきりして、さらに自分自身の頭の中も生理的にすっきりしたため、元気が出てきたとこのことで通いの治療を終了し自宅治療に切り替えて続けていただく事で終了とした。

氏名: [Redacted]  
 性別: [Redacted]  
 年齢: [Redacted]  
 生年月日: [Redacted]  
 住所: [Redacted]  
 職業: [Redacted]  
 入院理由: [Redacted]  
 入院日: [Redacted]  
 退院日: [Redacted]

3日目

項目	1日目	2日目	3日目
体温	37.5	37.8	38.0
脈拍	70	75	80
血圧	110/70	115/75	120/80
呼吸	18	19	20
SpO2	98	97	96
意識	清	清	清
瞳孔	等大	等大	等大
頸動脈	強	強	強
心音	正常	正常	正常
呼吸音	正常	正常	正常
腸音	正常	正常	正常
尿量	200ml	250ml	300ml
排便	なし	なし	なし
その他			

健康状態良好 (3日目)

項目	1日目	2日目	3日目
体温	37.5	37.8	38.0
脈拍	70	75	80
血圧	110/70	115/75	120/80
呼吸	18	19	20
SpO2	98	97	96
意識	清	清	清
瞳孔	等大	等大	等大
頸動脈	強	強	強
心音	正常	正常	正常
呼吸音	正常	正常	正常
腸音	正常	正常	正常
尿量	200ml	250ml	300ml
排便	なし	なし	なし
その他			

経過観察中  
 症状改善傾向あり  
 食事摂取良好  
 水分摂取良好  
 排便良好  
 その他特記事項なし

1/5  
 検査結果  
 血液検査  
 尿検査  
 胸部X線検査  
 心電図検査  
 超音波検査  
 脳波検査  
 造影剤検査  
 生検検査  
 その他検査

項目	結果
体温	37.5
脈拍	70
血圧	110/70
呼吸	18
SpO2	98
意識	清
瞳孔	等大
頸動脈	強
心音	正常
呼吸音	正常
腸音	正常
尿量	200ml
排便	なし
その他	

### ＊店員を二年程でやめた二十六歳の女性

二十六才の女性で店員を二年程やっていたが、どうも勤めができなくて現在は家にいる。いろいろ聞いて見ると両親が特殊人である。本人に言わせると父は不良であって、正常な父親ではない。自家営業をやっているために、多少いろいろな人が出たり入ったりするが、仕事をきちっとしないらしい。性格的には融通が利かなく、頑固で真面目。外に出るとおとなしい。家ではよく喋る。外顔ばかりが良いタイプでどうしようもない。

母親は人のためにいろいろやるのが苦にならないタイプで単純でおちよこちよいだが裏表がなく腹黒いところがない。思い込みが激しいところもあるが、自分でいろいろなことを決めてしまうこともある。近所付き合いは下手ではなく気弱なところもある。取り越し苦労をする。

母は特別な状態ではない。本人の症状は疲れやすい、肩が凝る、喋るとつばが溜まって飲み込むのに一苦労をする。夜寝てから寝つくまで時間が掛かってよく夢を見る。アトピー皮膚炎で指が腫れている。すぐ風邪を引く、便秘気味で昼間もごろごろとよく寝ている。心の状態は、何をしていたか分からずウロウロする。父親を恨む、父親とどう付き合っていけば良いか分からない。将来に對する不安があつて無気力である。

小学校四年頃から父親と折り合いが悪く、男の人に対しての不信も重なってか、男の子とのトラブルが多かった。

今非常に困っているのは、周りが気になって落ち着かなく、そうして無気力である。体がすぐに疲れて、口の中に唾が溜まりどうしようもない。

体格は大柄で百六十四センチの体重五十二キロ、体の検査で血管運動の反射がない。これは非常に落ち着かず神経が緊張している状態を示す。さらに舌は大きくなっており、唇が上下とも黒い。

この方は新幹線で三時間ほどかかるところから来ておられ、症状が酷いので五回ほど通いで治療をし、六回目に自宅治療に切り替えて一年程治療をしてもらうようにした。

体の状態はつばが溜まるとか、寝付きが悪い、肩凝り、アトピーの指がかさかさなっている。これは五回目くらいでほとんど解消をした。多少元気がでてきたくらいで、心の状態はまだはっきりと改善はしない。

唇が黒い場合は、歯茎が黒いのと同じく二年くらいかかる。これは副腎の機能が完全に回復するまでにそのくらい掛る。副腎機能低下の時のうつ症状には、薬がどうしても効かない。自律神経の活性化では、薬では何とも変化がないというこの心の状態が、自然に改善をしてくる。

最初のうちは一人で電車に乗れず、付き添いさんと来ていたが、四回め五回目は一人でこられるようになった。また、手を良く洗わないと気が済まないという潔癖神経症もあまり気にならなくなったと言っている。







うつろいながらも、  
この病気を、  
今更には、  
この病気を、  
気がした、  
心の中

3才	うつろいながらも、 この病気を、 今更には、 この病気を、 気がした、 心の中
小学	うつろいながらも、 この病気を、 今更には、 この病気を、 気がした、 心の中
中学	うつろいながらも、 この病気を、 今更には、 この病気を、 気がした、 心の中
高校	うつろいながらも、 この病気を、 今更には、 この病気を、 気がした、 心の中
大学	うつろいながらも、 この病気を、 今更には、 この病気を、 気がした、 心の中

父  
母  
兄弟  
姉妹  
その他

職業 (Oを付け下さい)	人種 (漢・和)	居住状況
父 公務員 警務官 銀行員 ( ) 農林 営業 設計 経理 ( ) 自治 医業 弁護士 会計士 ( ) 医師 ファッション関係 ( )	患者との人間関係の良否 かまわぬ ( ) かまわぬ ( ) かまわぬ ( )	自居の人に同種疾患の有無 有り 無し
母 公務員 警務官 銀行員 ( ) 農林 営業 設計 経理 ( ) 自治 医業 弁護士 会計士 ( ) 医師 ファッション関係 ( )	患者との人間関係の良否 かまわぬ ( ) かまわぬ ( ) かまわぬ ( )	自居の人に同種疾患の有無 有り 無し

父の性格 陽気な、  
母の性格 陽気な、

母の性格 陽気な、  
父の性格 陽気な、

※ 役所に勤める二十九歳の男性

役所に勤めるこの方は、体の症状として立ちくらみ、頭痛、手の震え、心臓ドキドキ、肩凝り、どもり、会話正常でない、顔がひきつる、人前に出ると体が硬直する、唇が渇く、心の状態で将来への不安、暗い感じ、うつ気味ということで相談にお出でになった。

色白でひ弱さそうなおとなしい感じの二十九才の男性は、調査をするので相手の会社に入り、役所の権限でいろいろ帳簿や伝票を見たり、会社の内容をチェックすることをやっている。

一目見た感じ、この人に向く仕事ではない。つまり人に嫌われる作業であるから気を確かに持つてきちっとやっつけていかなければならない。当然そこには相手の嫌な顔付きや不平不満、その他がボンボン耳に飛び込んでくるはずである。これと同じ職業の方で、今まで数人来ておられる。

私のところに調べにきた二人組の片方も、見るからに失調症という感じで、弱々そうな質問の仕方、また態度であったことを思い出す。

最初は高校の頃から発生し、社会人となっていっそう悪化した。相談票に書いてある父親の性格は、二重人格的などころがあって、兄弟を比較する、常に自分を小馬鹿にした言葉や態度をとっていた。外ではおとなしく猫かぶっているが、家の中ではうるさい。そうゆう外顔のいい内弁慶のタイプである。

中学のときから静かなのでいじめられ、人間不信、また、学校嫌いになったが、我慢して高校までゆき高校でそれが酷くなったとのこと。

色白でヒステリータイプの体質は、非常に我慢強くて自分を表現しない。特に東北北陸の雪国に

多いタイプである。それが口うるさい父親、母親の家庭の中で、ぐちぐち言われて育つと、その一言、また人の言葉そのものに怯えていじけてしまう。逆にその言葉そのものに反発して内容をよく聞こうとしない。もう人間の言葉が聞こえただけで萎縮してしまう。そうゆう状態になってしまう。それが社会人になって軋轢、ノルマ、等がプレッシャーとなって、ついに、いじけてしまいどうすることもできなくなって来所された。当然そうゆう場合には明るい感じはなく、うつ気味、暗い感じになる。

三年前は八十キログラムの体重で身長が百八十センチ、しかし痩せたいと思ったので今は六十一キロ、この痩せたい願望というのが心の病気の取り付かれ症状で、病状と思えないことが多い。治療は通える距離でもあり、最初の五、六回通って来られた。

まず体の症状(自律神経症状)が先に消える。次に少しずつ気にならないような感じで心の症状が消えていく。二回目に取りれたのが肩凝り、頭痛、それから立ち眩みである。

次に五、六回目で心臓ドキドキと顔の引きつりが少し取れてきた。

交感神経緊張症状で、唇が渇く、あるいは手の震えというのは、特徴ある症状で、この緊張が取れて来ると唇が渇くことや頭痛も取れてくる。

脳の働きがゆったりリラックスしていないため、副交感神経を常に交感神経が押さえ込むと、大脳皮質を働かせる視床を興奮状態にしてしまい、視床が制御する大脳皮質の働きも緊張させてしまう。そうするとからの緊張が生じて人前で緊張してしまう状態を作り出す。活発であるということとは、明るく振る舞うと言う事で緊張することとは別。逆に動きが悪いと沈むことになり、うつ気味ということになる。

七回目で自宅治療に切り替え、二ヶ月に一度お出でになるように指導した。

Medical record page containing multiple forms and handwritten text. The forms include patient information, medical history, and examination findings. The text is written in Japanese.

**個人名**

氏名	山田 太郎
性別	男
年齢	45
生年月日	1945.10.10
住所	東京都千代田区千代田 1-1-1
職業	会社員
既往歴	なし
家族歴	なし
アレルギー	なし
現在病状	不明
検査結果	なし
処方	なし
経過	なし
医師	山田 太郎

山田太郎 (Yamada Taro) - 45 years old, male. Medical history: none. Examination findings: none. Prescription: none. Progress: none. Doctor: Yamada Taro.

## ※ 二十六歳の男性

二十六才男性、頭に血が上る、顔がほてる、目が霞む、これをいつも薬を飲んで押さえている。そして血圧が高い。体を見ると背中に吹き出物がたくさん出ている。これは十二才頃から始まったそうである。仕事は三交替二十四時間でテレビ画面の検査を流れ作業でしている。俗にいう工場の流れ作業である。

精神安定剤、血圧降下剤を六十三年以来飲んでいる。以前の職業はガソリンスタンドの店員、食品の仕分け作業などをやってすべて現場作業である。

百六十九センチ、体重七十七キロで非常にながしりとした大柄な体格で、特別に病気にような感じではない。治療は七回ほどお出でになり、四回目でも多少すべての症状が軽くなったと記録にある。五回目くらいで症状が長引かない。あるいはゴルフに行ったが、特に症状は出なかった。ゴルフの途中具合が悪くなり、頭痛もしてきて頭痛薬で押さえた。

ここで最初治療が始まるときに、症状が一段落したら自宅で言う治療に切り替えて、二年きちつとやっってくださいと話している。

すべての人にお話をすることの人は守らなかった。つまり、予約をしないで八回目には来なかった。そこでこちらが手紙を出し、自宅治療に切り替えて実行するように勧めたが、何の連絡もなかった。

そうして二年ほど経った時、消費者相談センターから相談があった。千葉県である。「こうゆう人から電話があって、何か苦情めいた事を言っているんですが、実際のところをお話し聞かせてく

ださい」と言う女性の係りの話し。

そこで私がカルテや記録を引っ張り出して説明をすると、「なるほどそうゆうことでしたか、精神病、あるいは神経症というのはちょっとおかしい面があると、以前からは分かっていたんですが、どうも喋り方がおかしいとは思っていません。それも二年もたつてからいろいろと言ってくるのは、ちょっと変だと思っていたんですが、本人にもよくお話をしておきます」ということであつた。

本人から電話が来たが「その症状が出なくなったので良いと思つた。」とのこと。頭がボーとしているということ、人が言う事をきちつと聞いていない。

つまりこの病氣は付き添う人が必ず必要なのである。しかし、両親が協力しない事もあつて、だれも付き添いがなかった。最初この事をお話して、付き添いがいない限り引き受けられない事を話したが、『大丈夫ですから』ということ、こちらも信用して行つたが、所詮病人に話した事で通じていない。

それ以降は、自分だけきて『付き添い無しで治療をお願いします』という人がいても、絶対受け付けないことにした。それは私のほうをかたくなな考え方にさせる患者さん側に責任がある。

この人の背中の吹き出物は、自律神経失調からくる肝臓機能低下で、どの本にでも説明をしている血液検査でGOTやGPTは出てこない。

交感神経の慢性的緊張からくる肝臓の働きが低下する状態で、肝臓の解毒作用が十分でなく、また、肝臓の合成機能、代謝機能の低下によって、栄養のバランスが悪くなり、吹き出物として出てきたりする。

慢性的血圧が高いというのは、交感神経緊張症で、全身の毛細血管が締め付けられ血液の通りが悪くなつて、血圧が上がっているのである。また頭に血が上がってボーとする、顔がほてる、これも

交感神経が緊張すると、通常頭の血が引いたり、また顔が蒼白になったりする、逆に脳及び顔の血管だけに、非常に血が集まってきてカッカしたりボーとしたりする。つまり、全身的自律神経失調症から発生しているもので、自律神経を正常にする以外方法はない。薬は飲んでいてまだ効果がある段階であるから、神経が相当正常に反応をしている。この段階では癒導医学でも治りが早いのである。

出勤不能ということではないが、いつもミスをしそうで、事故を起こしそうで、そのために神経を異常に使うって疲れ果てる。いずれは仕事ができなくなりそうだという本人の話である。最初の症状にあった顔がほてる、遠い所へ行くと不安である。下痢便秘の交替がある。この症状が酷かったが、来なくなる頃、それは二重丸であったのが、一重丸になり、ほぼ全般的に楽になって落ち着いたと記録にある。



病名  
上肢、右腕、肘関節、肩関節、痛症、神経痛。

予病  
なし。

既往歴  
なし。

家族歴  
なし。

上記の通り診断します。手術方針は、

術後経過観察。

**検査項目**

検査項目  
検査結果  
検査日

検査項目  
検査結果  
検査日

検査項目  
検査結果  
検査日

検査項目  
検査結果  
検査日

父  
都合

**治療計画書**

1. 患部を安静に保つこと。  
2. 患部の腫れを軽減させること。  
3. 患部の痛みを軽減させること。  
4. 患部の機能を回復させること。

経過観察

経過観察

経過観察

経過観察

経過観察

## ※ 建設機械のオペレーターをやっている三十四歳の男性

建設機械のオペレーターをやっている三十四才、今困っていることは楽天的になれなくていろいろな事に対して明るく見ることができない。つまりすべての事が不愉快、あるいは悲観的に思える。これは心の病気である。

本人の希望として精神面を強くしたいということである。体の具合として咳ばらいをする、目の充血がある、背骨が痛い、のぼせる。心の状態では飽きっぽい、不安、傷心、積極的考え方がない、楽天的でない、明るい見通しができない。また、対人関係やちょっとしたトラブルとも言えないささいな事でも精神的なストレスとなるということ。

自分の家は建設機械のリースや販売修理などをしていて、いずれはそれを自分も経営をしたい。そうゆう考え方から、現場作業を勉強するためダンプのフリーの運転手をやって、さらに建設機械のオペレーターもやっている。そうゆう前向きできちっとした物の考え方の青年である。

ところが前向きな考え方になれないで、自分は駄目なんだという感じになり、ついには仕事も放棄して家でブラブラするようになってしまった。

身長、体重とも大きく並以上の体格でガッチリとしている。しかし、爪を見ても左、右とも半月がまったくない。これは体の新陳代謝速度が遅く、一晩で疲れを取り去ることが出来ない事を示している。

舌は少々肥大気味で張りが少ない。健全な場合、全身の筋肉はほどよい緊張を保つため、自律神経が常に信号を出し、筋肉を引き締めている。だから筋肉だけでできている舌は皮膚がその形を整

えているのではないので形を正常にて持てない。舌は、断面が円盤上に見えるが、この方は周辺が太く、また、舌そのものが全体的に太い。

これは神経の発生する電気が弱い事を示している。つまり、自律神経機能の低下である。何故こうなるか、大脳皮質が非常に緊張をしようとして、自律神経全般を押さえ込む。こうゆうことになる。そうして小心で積極的な考えが出ない。これは大脳皮質の働きが非常に悪くおおらかでないことを示す。

自分自身、「以前はこうゆうことはなく、常に前向きで希望があったはずだが、何時の間にかこうなってしまった」とおっしゃる。

今まで、大きな建設会社のオーナー、また、海外にプラント建設をしているその責任者となっている大きな会社の社員さん。電力会社の設計を担当する人、こうゆう人達がほぼ似たような症状でお出でになる。

これは仕事だけで気晴らしや息抜きをしない人達のグループで、大体行き着く果ては浮浪者となる。

相談の時にお話しになったことは、別人が話しをしているような、自分で喋っているようでない感じがする。取り越し苦労をする。非常に疲れやすい、音がうるさく響く、光がまぶしい、背中に痛い部分があって、後ろへ反りたい気分がいつもある。めまいがして時として自分が自分でない気がして、俺はだれだろうと思う。理由がなく急に不安が込み上げてくる。また、じっとしておれなくていつも何かしていないと気が済まない。

こちらから質問をして、自分ではっきりと症状の変化を認識できる状態が、治療八回目くらいで出てきた。仕事も朝から快適であるが、午後二時頃になると以前の症状になる。つまり、午前中だ

けでも普通に持つようになり、考え方も前向きになってきた。

ここで一段落である。関西からお出でになっていることもあって、自宅で行う方法を指導しそれを行ってもらったことにした。二カ月に一度くらいお出でになり、体の状態、及び、治療の方法を指導してもらってお帰りになる。

遠いので通ってこれないというお話しで、三日間の自宅治療を希望しておられたが、建設機械の仕事、オペレーターというのは、クレーンで十階建てビルの上の方へ鉄骨を持ち上げたり、また、くい打ち機械を操作したりする。

また下には人がいてちょっと間違ふと物を落としたり、人を怪我させたり、死亡させたりする危険性が非常にある。このことをお話しして一週間に一度の割りで良いから、まずは通ってきて早く治すようにお勧めしたところ、そのように実行された。

六ヶ月くらいで健全さが一日持つようになり、時々偏頭痛がある程度。偏頭痛は神経が疲れたときに発生をする。このことをよくお話しをして、自宅での養生、及び偏頭痛の治療をお話しをした。

患者の氏名 [redacted] 年齢 [redacted] 性別 [redacted]

出生年月日 [redacted] 出生地 [redacted]

職業 [redacted]

婚姻状況 [redacted]

家族構成 [redacted]

既往歴 [redacted]

アレルギー [redacted]

服薬歴 [redacted]

手術歴 [redacted]

検査結果 [redacted]

治療経過 [redacted]

医師の診断 [redacted]

看護士の記録 [redacted]

薬剤師の処方 [redacted]

理学療法の記録 [redacted]

言語療法の記録 [redacted]

作業療法の記録 [redacted]

その他の記録 [redacted]

3ヶ月間の経過観察の結果

項目	経過
体温	正常
脈拍	正常
血圧	正常
呼吸	正常
消化	正常
排泄	正常
神経	正常
皮膚	正常
その他	正常

経過観察の結果、患者は健康で、症状は改善している。

検査結果

検査項目	結果
体温	36.5℃
脈拍	72回/分
血圧	110/70mmHg
呼吸	16回/分
消化	正常
排泄	正常
神経	正常
皮膚	正常
その他	正常

検査結果、正常範囲内。

## \* 不規則な交通関係の乗務員をしている男性

交通関係の乗務員。五年來学校出てから勤務をしている。その間仕事が不規則であったためにこのようになったと本人は言っている。

しかし、飛行機から電車、あるいはバス、タクシーに至るまで、交通サービス業は土、日関係なく交替で出る。そうして、忙しい時期だけ多少多い勤務となる。それを本人は不規則な勤務状態と言っている。このような事情は他の業種と変わらない。そういう制度が悪ければほとんどの社員が体の具合悪くなるはずである。

しかし、この人だけどうして会社にいけなくなったのであろうか。体の具合は、眠れない、動悸がする、乗り物酔い、肩凝り、頭痛、下痢、寝汗をかく、ふらつきがある、吐き気がある、めまい感がある。これだけあれば当然会社にはいけない。

心の状態では集中力がない、落ち着かない、じっとしておれない、病気が気になって仕方がない、神経質である、つまらないことが気にかかる。

お酒は飲まなかったのに一年前、肝臓病に罹り一年間入院した。それは慢性肝炎であった。

二十二才のときに十二指腸潰瘍、二十一才の時に過敏性大腸炎、父親が十二指腸潰瘍、心不全、肝不全で他界している。

身長は百六十九センチ、六十二キロである。特別神経質そうな顔をしているわけではないし、性格はおっとりしている。

体の状態は、胸、背中に吹き出物が少しある。爪の半月は右左ともない。歯茎の下側が黒く、唇

は白く脱色をしている。脈拍は九十六、腹筋の反射、及び腹壁の反射は出てこない。病院ではメニエールと言われその治療もしている。

過去の病気の状態は、中学二年の頃から胃が悪くなり、しばしば病院に行くが急性胃炎ということであった。

高校のとき少し食べ過ぎると下痢をして、内臓が少し弱かったそうである。当然病院にも行っており、神経科の薬、肝臓病の薬、潰瘍の薬を併せて飲んでる。

こいう体質はもとも自律神経が非常に弱く生まれついている。そのために学校での勉強、友達関係とうまくやっていたため少々のストレス、これも自律神経失調症状を引き起こしてしまう。父親が非常に厳格で昔風であるということ、母親も同じく、特別怒るようなことでないのに異常に怒ったりする。この両親の元で、くつろげる雰囲気であったかどうかは、さだかでない。

神経の方はともかくとして、外観上の体付きは大人になったために仕事にも出る。高校に入ると人並みに野球もした。人並みにしていても自分だけが自律神経の緊張が極度に高ぶる体質であった。それがこの人の場合には、迷走神経の系統の働きを先に悪くしてしまった。交感神経緊張が極度な緊張状態になってしまった結果十二指腸、大腸、肝臓の血管を締め付けたために、潰瘍ができ肝炎となり内臓全般が悪くなってしまった。唇が脱色し歯茎が黒いというのは、長い間のストレスがあったことを示す。

胸、及び背中の吹き出物というのは、神経が高ぶる状態で、肝臓の解毒作用が不十分であることを示す。

半月がないということは、体の全体的新陳代謝の速度が低く、一晩で疲労回復できない。腹筋及び腹壁反射がないのは、交感神経の高まりが酷いために、引っ掻き傷をみみずばれにする自律神

経のうち副交感神経の働きがない。

電車で一駅くらいの所でもあり、会社も休職中であるから、三日に一度通ってこられた。

最初のうちは非常に眩暈が酷く、吐き気もあり、本人も居ても立っても寝ても起きてもとにかく具合悪いということ、頻繁に治療をすることにした。一月ほどで症状はほとんどなくなり、「だいたいぶん元気になりました」と言う話であったが、しかし、二ヶ月くらいたったとき、通いの治療を続けながら、自宅治療も併用して行ってもらっていたが、急に吐き気がしてきたので、どうしたのかと相談があった。

さっそく病院で検査をしてくるようにお話をしたところ、急性肝炎だと診断された。その間何か特別な仕事をしたり、また、何か遊びにいったりしたかどうか尋ねてみたが、本人は特別なことはないと言う。

夜更かしをして遊びをして歩いたかそれらはさだかではない。

普通の状態で急性肝炎になることは基本的にはない。そこで三ヶ月くらいしたとき、肝炎の治療もしていたが、とうとうまた元の状態になって、ふらつきや吐き気などが生じてどうしようもなくなった。そこで通ってくるのを一時中断して、本人に入院してもらおうようにした。

その後退院したらまた治療を再開するという約束で、その後連絡がない。こちらから連絡をしたが、本人は仕事の都合で転居されたということで、連絡は取れていない。こうゆうケースは今まてかなりある。少し良くなって来ると暇であり遊び歩いてもとの症状になってしまふ。

人生では十八才から二十四、五才までが最高に元気があり、体もスタミナも最もある。この時期にこうゆう神経からくる内臓の病気を煩い、うまく働いたり遊んだりできない場合には、非常につまらない人生になってしまう。



つまり、この方が学校を出て就職したその仕事は、普通の仕事であるが、その人が特別な体質であったために、普通の人がボクシングやプロレスをやるような状態だったことである。こうゆうことがあることをしらなければ就職でも進学でも体をおかしくしてしまう。

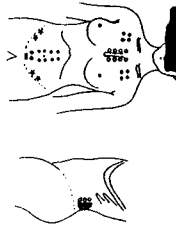
**助産**

患者名: [redacted] 奥さん  
 出生年月日: [redacted]  
 出生地: [redacted]  
 職業: [redacted]  
 住所: [redacted]  
 電話: [redacted]

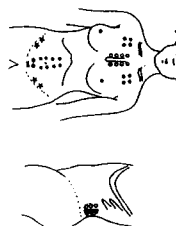
検査項目: [redacted]

検査結果: [redacted]

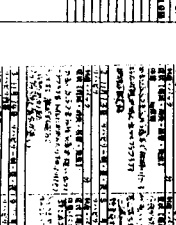
検査者: [redacted]



シ



シ



**検査結果**

検査項目: [redacted]

検査結果: [redacted]

検査者: [redacted]

## \* 北陸地方のある県庁に勤める男性

北陸地方のある県庁に勤める。そして給与計算等の事務を行っているこの方は、何とか出勤はしているが、実際の仕事は別の人に変わってもらい、ただ出勤しているだけの状態になってしまった。これも朝出勤するころになると、どうも具合が悪くて行く気になれないが、体に鞭を打って行っている状態だとお話しされた。

本を読んで手紙でいろいろと聞いて来られたが、所詮手紙は病気を治す方法ではない。そのことを書いて送り、『まず相談にお出でになり、治す気持ちなら一ヶ月程休暇を取り、横浜で一段落するまで養生をして、あとは自宅での方法に切り替えるのが最善である』とご指導申し上げたところ、そのように実行され、ほとんど一ヶ月で元気になって郷里へ帰られた例である。

父親は歯医者で早くして亡くなられ、その後は母親と二人で現在に至っている。昔は女性が勤めにいくということがなかなかできなかったために、母親も仕立物や、家でやれる仕事をとってきて苦労している後ろ姿を本人が見て、自分が手伝えない悔しさを感じたそうである。

症状は眩暈、動悸、不眠。心の状態は不安、あがり、アルコール依存になる。うつ状態、そうして特に酷いのは、対人恐怖、視線恐怖、うつ状態で無気力になる。

子供三人居て奥さんは非常に協力的な感じがある。母親が子供を見ているということで、奥さんは時々郷里へ帰り、本人は横浜で養生をすることになった。

過去の記録を書いてもらい、見てみると三才の頃、人見知りが非常に酷かった。中学では女性に對して人見知りが激しく喋れない。高校は学校生活が楽しくなく、友達もそうなかった。職場に入っ

て人前で喋る事で失敗が多く、アルコールで紛らわしているうちに依存症になってしまった。

病院では対人恐怖、視線恐怖、うつ病と言われ、神経科に通っている。職場の配置転換で治るかもしれないと思いい、希望をして、人と喋ることの少ない現在の経理へ移ったが、ほとんど変化がない。

今では会社へ行っているが、それも回りの人がうさんくさい顔を始めるので、できるだけ行きたくない。

うつに近いこうゆう状態では、本人の治療をしなければならぬという気持ちはあっても、現実により方が覚えられないし、実行に移せない。だから本人は黙って横になっているだけにして、奥さんに十分指導をした。小柄な女性で力がないので、足で押す方法を教え、それを実行してもらった。

心の病気は、体の症状が回復した後で回復をしていくことはいつもお話しをしている。一カ月で、心の状態は何となく希望が持てやる気がでてきた。その程度であるが、とりあえず苦しかった眠れないということは、ほとんど解消し、眩暈や動悸も忘れていたときが多くなった。

一ヶ月でまだ不十分であるが、子供達との事もあり、一度自宅へ帰ってもらうことになった。その後はお出でにならない。しかし、手紙は来る。そうして半年くらいたったときほぼ全ての症状が消えたそうだ。

お出でになったとき、まず目に付いたのが、ほほに蜘蛛の巣模様の細い血管の浮きがあるということ。これは肝臓の働きが非常に悪くなっていることを示し、また、アルコールを大量に飲んでいれることを示す。体がきついでアルコールで忘れようとする。つまりアルコール依存症は皮質の病気であると同時に、体の病気も発生をしている。

体が楽になり希望が持てるようになったとき、酒を欲しくなくなってきた。本人も「不思議ですね」と言っていた。

体重八十二キロ、身長百七十の非常に大型のこの人は、やはり体力が病気を治すという私の持論どおり、相当酷い状態と思われていても回復が早かった。

1. 呼吸器系 (Respiratory System)  
 2. 循環器系 (Circulatory System)  
 3. 消化器系 (Digestive System)  
 4. 泌尿器系 (Urinary System)  
 5. 生殖器系 (Genital System)  
 6. 皮膚系 (Skin System)  
 7. 感覚器系 (Sensory System)  
 8. 運動器系 (Musculoskeletal System)  
 9. 内分泌系 (Endocrine System)  
 10. 免疫系 (Immune System)

呼吸器系 (Respiratory System)  
 循環器系 (Circulatory System)  
 消化器系 (Digestive System)  
 泌尿器系 (Urinary System)  
 生殖器系 (Genital System)  
 皮膚系 (Skin System)  
 感覚器系 (Sensory System)  
 運動器系 (Musculoskeletal System)  
 内分泌系 (Endocrine System)  
 免疫系 (Immune System)

呼吸器系 (Respiratory System)  
 循環器系 (Circulatory System)  
 消化器系 (Digestive System)  
 泌尿器系 (Urinary System)  
 生殖器系 (Genital System)  
 皮膚系 (Skin System)  
 感覚器系 (Sensory System)  
 運動器系 (Musculoskeletal System)  
 内分泌系 (Endocrine System)  
 免疫系 (Immune System)

呼吸器系 (Respiratory System)  
 循環器系 (Circulatory System)  
 消化器系 (Digestive System)  
 泌尿器系 (Urinary System)  
 生殖器系 (Genital System)  
 皮膚系 (Skin System)  
 感覚器系 (Sensory System)  
 運動器系 (Musculoskeletal System)  
 内分泌系 (Endocrine System)  
 免疫系 (Immune System)

### ※命あるかぎり付き人をやりたい

宮内庁での付き人をしている特別国家公務員の女性は、高齢であるが年齢を十五才若くしてもおかしくないほどしっかりしておられる。

お困りになっていることは、体がなんとなく不調で、『お上』がお出掛けになる時、同行するがとて最近辛い。「日常勤務でもしびれ、こり、だるさ、手首が痛い。それでもなんとかやっているがいつ倒れるか心配で、『お上』にもご迷惑が掛かるといけないので元氣になりたい。」とおっしゃる。

何十年も前からしているお仕事なので、信頼されてもいるし交替することは考えていない。「是非治したいんです」と、強くお話になる。自分が元氣な限り、側にいたいし、『お上』も強く望んでおられるので。

お若く見えるが高齢でもあり、仕事しながら治したいとの希望から普通の強さで治療ができず、かれこれ四ヶ月通ってこられた。持ち前の頑張りと指示を忠実にお守りになって、ふっくらとした体型になり本人も「マールうそのように治ってしまっ」と驚いておられた。

「何とかの式典でいただいたので記念にどうぞ」と御紋のはいっただお菓子を持参され「体調が良くなるって気分爽快な毎日ですよ」と娘さんのようにはしゃいでおられた。

## 治療依頼書

氏名: [redacted] 年齢: [redacted] 性別: [redacted]

1. 主訴: [redacted] 長くなった症状

2. 既往歴: [redacted] 飲食味気味減退、嘔吐、腹痛

3. 現病歴: [redacted] 出てきた症状: [redacted] 嘔吐、腹痛、食欲不振、体重減少

4. 検査: [redacted] 胃腸造影検査: [redacted] 異常なし

5. 診断: [redacted] 胃癌

6. 治療方針: [redacted] 手術

7. 手術日: [redacted] 11月10日

8. 手術場所: [redacted] 消化器科

9. 手術内容: [redacted] 胃切除術

11月26日	12月10日	12月24日
<p>リハビリ</p> <p>状態 (痛、悪化、嘔吐、発熱)</p> <p>体重: 45kg</p> <p>食事: 少量</p>	<p>リハビリ</p> <p>状態 (痛、悪化、嘔吐、発熱)</p> <p>体重: 45kg</p> <p>食事: 少量</p>	<p>リハビリ</p> <p>状態 (痛、悪化、嘔吐、発熱)</p> <p>体重: 45kg</p> <p>食事: 少量</p>
<p>リハビリ</p> <p>状態 (痛、悪化、嘔吐、発熱)</p> <p>体重: 45kg</p> <p>食事: 少量</p>	<p>リハビリ</p> <p>状態 (痛、悪化、嘔吐、発熱)</p> <p>体重: 45kg</p> <p>食事: 少量</p>	<p>リハビリ</p> <p>状態 (痛、悪化、嘔吐、発熱)</p> <p>体重: 45kg</p> <p>食事: 少量</p>
<p>リハビリ</p> <p>状態 (痛、悪化、嘔吐、発熱)</p> <p>体重: 45kg</p> <p>食事: 少量</p>	<p>リハビリ</p> <p>状態 (痛、悪化、嘔吐、発熱)</p> <p>体重: 45kg</p> <p>食事: 少量</p>	<p>リハビリ</p> <p>状態 (痛、悪化、嘔吐、発熱)</p> <p>体重: 45kg</p> <p>食事: 少量</p>



検査 通り

生年月日 7

経過の悪い状態を書いて下さい

通り

性別  男  女

年齢  1  2  3  4  5  6  7  8  9  10

最近の苦痛は何ですか  
左足の(左)肩(首)痛

どのような事をどう感じたいと思われていますか  
それはいつ頃から感じましたか / 1974年2月 左足の(左)肩(首)痛  
2. 1974年11月 左足の(左)肩(首)痛

それ以外の病から感じましたか / 1974年2月 左足の(左)肩(首)痛  
2. 1974年11月 左足の(左)肩(首)痛

病状(特徴)がありますか、その発生年  
2. 1974年

病状(原因・病態)はどのようなものか、原因、病態、部位、病状、病名など  
母、弟に糖尿病

病状で治療がある時、その原因は何ですか  
父、母、弟(兄) 糖尿病

現在の職業と作業内容、労働をくわしく現在の職業と作業内容を記述  
公務員(事務)

過去の主な職業と作業内容、労働をくわしく  
公務員

病状、検査において異常に感じられる事がありましたか(多岐、失神、昏倒、嘔吐、発汗)  
1974年11月3日(父)

経歴(家族歴、嗜好、服薬、喫煙、飲酒)  
母、父、弟、タバコ、酒、公認

身体	精神	視力	聴力	言語	知能	行動	社会	その他
○	○	○	○	○	○	○	○	○

1. 1974年2月  
2. 1974年11月  
3. 1974年11月  
4. 1974年11月  
5. 1974年11月  
6. 1974年11月  
7. 1974年11月  
8. 1974年11月  
9. 1974年11月  
10. 1974年11月



---

## 著者略歴

富永修侃(とみながしゅうかん)

昭和18年福岡県久留米市生れ、<sup>ゆどう</sup>癒導術(自律神経活性价法)の創始者故今村喜太郎先生の孫、幼少より癒導医学に接し直接癒導医学理論と治療技術、臨床技術を伝授される。

現在、施療院「日本癒導医学研究所」所長。施療と執筆、講習会、研修生養成と多忙

著書『自律神経活性价法』

『自律神経活性价法入門』

『漢方リハビリの実際』

『癒導医学・自宅治療の実際(癒導術)』

『日本人の正しい性生活と悩み治療』

『よくわかる心の病気と自律神経失調症』

『めまい・吐き気・不眠(マニュアル)の治療』

『自律神経失調症とよくわかる治療』

『バクバク食べて糖尿病の治療』

『よくわかる心の病(<sup>自律神経失調症</sup>・<sup>うつ病</sup>・<sup>パニック障害</sup>)の治療』他

〒235-0036 横浜市磯子区中原1-3-41 千代田ビル2F

日本癒導医学研究所

電話 横浜(045)771-8521

FAX (045)771-7855

※「自律神経活性价法」「<sup>ゆどう</sup>癒導術」は商標登録済

## 「登校拒否・出勤不能」

検印略

1992年11月30日第1刷発行

定価 1,200円

1996年2月29日第2刷発行

(税別)

1999年2月10日第3刷発行

著者 富永修侃

発行者 関修一

発行所 日本癒導医学研究所

〒235-0036 横浜市磯子区中原1-3-41 千代田ビル2F

電話 (045)771-8521

FAX (045)771-7855

振替 横浜1-14199

印刷 八紘社印刷

乱丁・落丁のものはお取り換えます



